

博士学位請求論文 表紙

※簡易な体裁(バインダーで綴じられた仕様)に貼付のこと

[題名]

明代中国資料による室町時代の音韻についての研究

— 『日本国考略』を中心に —

[提出者氏名]

馬 之濤

早稲田大学大学院文学研究科

明代中国資料による室町時代の音韻についての研究
— 『日本国考略』を中心に—

馬 之濤

目次

序章	1
第1章 中国資料による日本語音韻の研究	5
第1節 中国資料について	5
第2節 研究史	12
第2章 『日本国考略』について	19
第1節 『日本国考略』の成立	19
第2節 諸本	25
第3章 寄語の解説	35
第1節 『日本国考略』の所拠言語	35
第2節 寄語の解説	42
第4章 寧波方言の音韻	94
第1節 寧波方言の音韻体系	94
第2節 『書史会要』と『日本国考略』に観察される呉方言の後部歯茎音	105
第3節 寧波方言の子音推移について	115
第5章 室町時代における日本語の音韻	123
第1節 濁音の鼻音的要素	123
第2節 ハ行音の音価	135
第3節 ツ・ヅの破擦音化と/u/の異音	147
第4節 オ段長音の開合の音価と統合	160
第5節 『日本国考略』に見られる寄語のアクセント	179
終章	195
【参考文献】	200
【資料文献】	207
【本論文と既発表論文との関係】	210
【資料】	211
〔仮名と音注漢字の対照〕	211
〔寄語解説と諸本の対照〕	219

序章

1. 日本語を写音する外国資料

中世から近世にかけて、外交、宗教、貿易ないし防衛など様々な理由により、外国人がその母語を用いて日本語を記述したり、写音したりした多くの書物が編纂された。いわゆる外国資料である。言うまでもなく外国資料は日本語音韻史の研究にとって貴重なものである。

外国資料による音韻史的研究は、こうした外国語で書かれた資料を利用し、日本語史上の音韻に関わる問題を解明し、また音韻体系を把握することである。外国資料は記述性の資料と写音性の資料とに分けることができる。記述性の資料は、すなわち外国人が当時耳にした日本語の発音を母語で説明するものである。このような資料は大きな価値を有しているが、欠点を言えば、一定の写音上の基準がなく、主観的な描写が多いため、それによる音声的分析には限界がある。例えば、ロドリゲス『日本大文典』に「D・Dz・Gの前のあらゆる母音は、常に半分の鼻音かソンソネーテかを伴ってゐるやうに発音される。即ち、鼻の中で作られて幾分か鼻音の性質を持ってゐる発音なのである」（土井忠生訳註 1955）という日本語の濁音に関する記述がある。それにより、当時の濁音には鼻音的要素があることは分かるが、音声的にどのように実現されたかについては不明である。この点において日本人の書いた仮名資料も同様な性質を持っている。例えば、謡曲伝書や仮名遣い書に「呑む」「つめる」「すぼる」「わる」などの用語がよく現れるが、一体どのような音声を示したかについてはこの記述だけでは分かりにくい。他の資料との対照研究が必要である。

写音性の資料は外国語音により日本語を写音するものである。このような資料は、外国語の音韻体系の下に、外国人の音声認識によって記録されたものであり、記述性の資料に比べ、一定の写音上の基準に拠っていると特徴がある。ただし、そこにも欠点または研究上の難点がある。それは、外国語の音韻体系またはその音韻史の変遷を正確に把握することが往々にして困難だということである。

本論文で扱う中国資料は中国人が中国語音で日本語を写音したもので、基本的にこの写音性の資料である。そのため、ここでは写音性の資料の特徴および本論文における研究方法について少し述べておこう。

同じ母語の人であれば、外国語を写音するのに同じ写し方に従うはずである。これは記述性の資料との違いである。例えば、Beckham というサッカー選手の苗字が、日本語では「ベッカム」[bekkamu]、中国語の北京方言では「貝克漢姆」[pei.kʰ.xan.mu]¹、粵方言では「碧咸」[pik.ha'm]と訳されている。日本語と北京方言の音韻体系には m で終わる音節がないために、Beckham の m を写すと、母音 u を挿入し、mu の一音節をなす。日本語話者または北京方言話者であれば、大体同じような写し方をするであろう。北京方言はさらに ck を写すのに母音 ʰ を挿入している。その音韻体系に k で終わる音節がないからである。日本語はここでカ行の前の促音を利用している。粵方言では m、k で終わる音節が備わっているために、二音節で原音を写すことが可能である。粵方言話者はおそらく皆同じ写し方をするはずで、三音節以上で写す人はいないであろう。これは写音の経済を考慮した写し方ではなく、母語の音韻体系内の音声認識で、聴覚的に Beckham が[pik.ha'm]のよ

うに聞こえるわけである。

一方、Beckham の有声音 **b** を正しく写せるは日本語だけである。日本語は有声音を持つ言語であり、北京方言と粵方言は有声音を持たない言語だからである。北京方言話者と粵方言話者は有声音に対する音声認識がないために、**b** を無声音の **p** に聞くのである。つまり北京方言話者と粵方言話者にとっては、**b** と **p** の違いが感じられないということである。

このように、写音する人はその母語の音韻体系にある一定の写音法則に従う。しかも写音するときには過度な配慮は払われない。写音する人は聞いたままの外国語の音声に母語にあるもっとも適切な音節で当てることができる²。このようなことは当然であり、特筆する必要がないと思われるかもしれないが、これを写音における一つの重要な特徴だと考える。中国資料による音韻分析を行う先行研究の中には、問題のある箇所に対して、写音する中国人が日本語の音声を正確に識別できなかったとか、十分に把握できなかったという推測がよく見られる。しかし、本論文の考察によれば、中国資料の写音は日本語の音声特徴を忠実に反映していることが明らかになる。例えば『日本国考略』では誤刻による解読できない箇所は多くあるものの、解読された箇所には、日本語の音声における些細な特徴まで記録されている。それは工夫して写されたものでなく、実際に耳にした音声をそれに近い漢字音で記録したものと思われる。これらの資料に対する評価を改めて見直す必要がある。

また、上に述べたように、外国資料による日本語の研究の難しい点は、外国語の音韻体系、ないしその音韻史の変遷を正確に把握しなければならないところにある。

人間は同じ発声器官を持っているため、言語音には共通する生理的調音特徴がある。系統がかなり離れている言語同士の間にも、同じ音韻変化が起こるのは珍しいことではない。例えば、口蓋化や、鼻音化、母音融合などは多くの言語にも観察される、いわゆる一般的变化であろう。それゆえ、日本語音韻史上の問題は、外国語音韻史上においても同じように問題になる可能性がある。例えば、日本語のチ・ヂが口蓋化 ($ti > tci$) を起こしたことに対して、中国語でも上古から中古かけて章母 $tji > tci$ が起こっていた。日本語のアウ連母音が母音融合（長音化）を起こし、才段長音になったことに対して、呉方言においても効撰に $au > ɔ$ が起こっている。それゆえ、本論文は中国資料の所拠言語³およびその音韻体系や音韻変化を把握することを日本語の音韻研究の前提とする。

2. 本論文の目的、方法

次には目的、方法および構成について述べる。

本論文の目的は主に中国資料に基づき、室町時代の日本語における音韻についての問題を明らかにしようとするところにある。研究の対象として『日本国考略』1523 を中心的に取り上げることには次の三つの理由がある。一つは『日本国考略』の成立時期が早いということである。16世紀の中国資料には『日本風土記』『日本一鑑』『日本図纂』『日本館訳語』が挙げられるが、その成立時期をはっきり確認できるものの中で最も早いのが『日本国考略』である。

次には所拠言語の特定ができるということである。詳細は第3章に譲るが、考察を通して、『日本国考略』の所拠言語が寧波方言であることが分かった。それにより、寧波方言の音韻体系を把握すれば、寄語として掲載された日本語についても細部にわたる音声分析

ができるはずである。

三つ目の理由は、日本語を写音した人は日本語に対する知識のない中国人であったということである。音注漢字が不統一で、一つの仮名を多くの漢字で写していることからそれが分かる。写された日本語音声は表記上の規範意識にとらわれず、実際に中国人の耳に聞かれた音声に基づくものである。同時期の中国資料を見ると、『日本一鑑』では『下学集』、『節用集』などを参考に、一つの仮名を一つの漢字で写している。『日本風土記』では漢字に平仮名が並列されており、日本語に対してある程度の知識を持つ人によって記されたことが分かる。『日本館訳語』では一つの仮名に対して複数の漢字を使っているが、漢字の数は『日本国考略』ほど多くない。一つの仮名を一つの漢字で写す傾向があるとも言われている。従って、『日本国考略』は同時期の資料に比べ、音韻資料として価値の高いことが言えるのである。

以上の理由を以て、本論文は『日本国考略』を中心的な考察対象とする。

研究方法については、まず『日本国考略』を総合的に研究した大友信一 1963 を参照しなければならない。大友の研究は諸本の研究、寄語の解説・校訂、「国語音声」の研究の三部分に分かれている。諸本の研究と寄語の解説・校訂は必要不可欠な基礎的研究であるため、本論文でもその成果を踏まえ、寧波方言の特徴に基づいて改めて考察する。

また大友による「国語音声」の研究は、『日本国考略』を通して、日本語の音韻を全般的に論じるものである。その中で、特にタ・ダ行の破擦音化と四つ仮名の混同についての論考が優れている。それに対して本論文では、日本語音韻体系を全般的に論じることにより、音韻史上の問題点を掘り起こすことに焦点を絞る。所拠言語の音韻の考察にあたって、本論文は 19 世紀の西洋人が残した幾つかのローマ字資料などの中国語の方言資料を照らし合わせて 19 世紀寧波方言の音韻体系の再構を試みた。資料の欠如などの理由で 16 世紀寧波方言の音韻体系をすべて明らかにすることはできないが、現存の方言資料により、少しでもその時代の音韻状態に近づくことを目指す。さらに朝鮮資料やキリシタン資料についても検討して、多角的な視点から、日本語における音韻史的問題を解決しようとする。また、これらの問題に対して音韻的な捉え方をするだけにとどまらず、音声学の解釈や一般言語学的検討により、音韻変化の音声的理由を探ることにする。

3. 論文の構成

まず第 1 章第 1 節では中国資料と他の外国資料との違いについて述べる。同じ中国資料とはいえ、それぞれの所拠言語は異なることが多い。ここでは、中世から近代までの中国資料の音韻的特徴から、それぞれの所拠言語を中国七大方言という基準で分類する。そして第 2 節では各資料の先行研究についてまとめる。

第 2 章第 1 節では本論文の主要な研究対象『日本国考略』について、著者やその成立、編纂目的を紹介する。第 2 節は寄語の校訂のために『日本国考略』の諸本、転載書、叢書など十数冊のものの継承関係を明らかにする。

第 3 章は音韻研究のために重要な一章である。第 1 節は『日本国考略』の所拠言語を特定するものである。本書の編纂事情や、音注漢字に見られる幾つかの音韻特徴から、所拠言語が寧波方言であることを明らかにする。第 2 節では諸本の対照・校訂をもとに、寄語の解説を行う。

以上の結論を受け、所拠言語である寧波方言に対する、音韻史的考察を第4章で行う。まず第1節では近世の寧波西洋人資料を通して、当時の音韻体系を再構し、幾つかの音韻的問題について述べる。第2節では『書史会要』と『日本国考略』の写音に対する考察により、中世の呉方言に後部歯茎音という類の子音が存在していたことを論じる。第3節では近世における寧波方言の子音変化に関して考察する。

第5章は日本語音韻史上の幾つかの問題を総合的に検討するものである。第1節は『日本国考略』に見られる中世の濁音の入り渡り鼻音を考察し、濁音の鼻音的要素を軟口蓋の入り渡り鼻音であることを確認する。第2節では中国資料や朝鮮資料に見られるハ行子音の移行を改めて考察する。中国資料と朝鮮資料の写音に共通点があることを見出し、ハ行子音の変化が当時まだ起こっていなかったことを論じる。第3節では現代日本語にも見られる/w/の異音の音声的実態を把握することにより、母音の無声化や中世におけるタ・ダ行音の破擦音化について解釈する。それにより、中国語音声音韻学の記号[ɰ]の承認を提議する。第4節は『日本国考略』および『日本館訳語』におけるオ段長音の写音について、オ段長音開合の混同過程を推測し、開合の別を音声的なものと見なすべきことを提唱する。また、アクセントに対する研究は第5節で行う。19世紀寧波方言の連読変調に対する考察により、寄語に見られる日本語のアクセントが京阪式アクセントを反映する可能性を提示する。

終章においては以上各章で論じた内容を総括して、室町時代の音韻体系に中国資料を位置付けてみたい。

なお、末尾に参考文献や、各節のもとになった論文を「本論文と既発表論文との関係」の中に挙げ、また「仮名と音注漢字の対照」「寄語解読と諸本の対照」を資料としてつける。

【注】

¹ 本論文では便宜上、中国語の声調を考察する箇所以外に声調表記を省略する。

² もちろん、適切な音節がなく、それに近い複数の音節がある場合には、写し方も複数となる。

³ 本論文でいう所拠言語とは、外国資料において、日本語を写音するのに用いられた言語のことである。中国資料の場合、漢字を用いて日本語を写音するが、漢字の音はそれぞれの方言に属するものであり、同じ漢字を使っても所拠言語(または所拠方言)によって、写す音も異なるのである。

第1章 中国資料による日本語音韻の研究

第1節 中国資料について

1. 音韻史研究のための外国資料

日本語学における外国資料とは外国人の手によりそれぞれの母語で日本語が写音されている資料のことを指し、従来、中国資料も、朝鮮資料やキリシタン資料などと共に外国資料と言われてきた。外国資料は本論文の研究テーマである室町時代の音韻研究にとって、極めて重要なものである。

その写音法から言えば、外国語音に基づく写音は日本語音の聴覚的な描写である。つまり外国人の耳に日本語音がどう聞かれたかというところが肝心であると思われる。それに対して、日本人の手による記録、例えば謡曲伝書や仮名遣書などは、日本人の自らの発音に対する調音的な内省である。言い換えれば、外国資料は客観的特徴、日本資料は主観的特徴を持つということである。

もちろん、どちらの資料にもそれぞれの長所と欠点があることは言うまでもない。日本資料は日本人の内省によるもので、母語の調音に対する著者の認識や、日本語による記述に束縛される面がある。謡曲伝書に「呑む」、「鼻にかかる」、「ひろがる」、「すばる」のような記述、韻書に「開」、「合」、「内」、「外」のような術語があるが、必ずしも専門家の間に共通の解釈が得られているとは言えない。また、他の日本資料においては、仮名遣いの乱れから実際の音韻事情、例えばア行、ワ行、ハ行の混同や、開合の混同などを窺うことはできるが、音節文字である仮名で書かれる文書である以上、音節という枠を超える写音は難しい。さらに正書法に従おうとする意識をいつも持っているため、著者たちは実際の音変化があっても、それを訛りや誤りと思って写そうともしないことが多かったであろう。

一方、外国資料は外国語の音韻体系に基づく描写であり、日本語音との間の差異のために、その写音には必ず不適合なところがある。例えば、16~17世紀の日本語のハ行音を写音するのに、キリシタン資料や中国資料では唇歯摩擦音、朝鮮資料では両唇破裂音や喉頭摩擦音を用いている。いずれの所拠言語も両唇摩擦音を持たないため、ハ行子音を正確に写すことは難しいわけである。このようなことがあるから、浜田敦 1962 の言う通りに、日本資料と外国資料とはそれぞれに補い合っただけで史的 연구に利用されるべきものである¹⁾。

外国資料の多くは宣教、外交、貿易、防衛などのために、日本語を扱っている。各々の編纂事情もあったであろうし、外国資料の写音法や編纂方針はそれぞれに異なる。写音法を一定にしようとするもの、例えば『日葡辞書』のようなものもあれば、一定の写音法を持たないもの、例えば『日本国考略』などもある。一定の写音法に則ったものは、学習者にとって法則の通りに日本語が覚えられるので、使用上便利である。こうした資料を研究対象とした場合、分りやすい面も確かにある。しかし一定の写音法に従わないものを研究対象とすると研究分析の手間は増えるが、資料の不規則な記述によって、得られる情報は実のところ多くなるのである。例えば、室町時代のハ行子音は法則性の強いキリシタン資料では F で写している。それだけでは、ハ行子音が [f] であるか、[ϕ] であるか、簡単に判断することはできない。中国資料では、それを [p] または [f] の音注漢字で写している。法

則性がないから、違う音注漢字を使うのであるが、そこから分かることは、ハ行子音は[p]でも[f]でもない、しかしそれらに近い音であるということになる。日本資料の記述をも照らし合わせると、ハ行子音が[ɸ]であったことが言えるのである。

一定の法則に則る資料は、編集者、あるいは記録者のある程度の日本語知識が要求される。そのため、伝統的日本語学からの先入観が形成されやすくなってしまいうという欠点がある。外国人が五十音図を先に学ぶとしたら、日本語音に対する認識が五十音図という枠に囚われやすくなり、さらに仮名文書も読めるようになると、実際の音声聴取によって本を編纂するよりも、既存の日本書から抜粋したり、あるいはそのまま日本書を翻訳したり編纂したほうが効率もよいと思うであろう。そうすると、実際の音声状態を見逃してしまうことも多い。逆に、もしも日本語に対する認識が皆無の、または仮名の読めない外国人による編纂の場合は、それこそ日本人のインフォーマントへの音声聴取に頼るしかない。こうした資料は実際の音声状態を記録する可能性も高くなるのである。

以上、外国資料と日本資料は、それぞれの性格、所拠言語の音韻構造に相違があるものの、音韻史の研究にとっては、いずれも重要な資料となる。研究する際には、どれかに偏ることなく、それぞれの資料の性格、編纂事情、所拠言語の音韻構造をできる限り把握することを前提として、慎重に扱う必要がある。

2. 中国資料

2.1. 中国資料の性格

中国資料について浜田 1967 が「常識的に、シナ語を母語とし、漢字をその表記手段とする、シナ人によって、うけとられ、記録された日本語であり、それが、シナの典籍に記載されているものを指すと考えてよいであろう」と定義しているが、一方で万葉仮名も一種の中国資料と見なされている。万葉仮名が中国資料に属するかどうかはまだ検討の余地があるように思われるが、本研究における方法論としては中世の中国資料の所拠言語²を特定することを前提に、その写音法則を見出し、日本語音韻史における問題を分析するところにある。それゆえ、本論文では中国人の手によるものだけを研究対象にし、それを中国資料と呼ぶことにする。

ところで、同じ外国資料とはいえ、漢字を利用する中国資料と、表音文字を利用する朝鮮資料やキリシタン資料との性格は一樣ではない。中国資料の場合、外国語による日本語の写音に際して、朝鮮資料やキリシタン資料のように音素文字を以て、本来編纂者の母語にない音節を作ることはできない。中国資料は中国語の既存の音節に基づき、漢字の一字を一音節として写音する形を取っており、本来の音韻体系に頼る性格が強い。それゆえ、所拠言語の漢字の中国音を明らかにすることは他の外国資料に比べ、より重要である。

漢字の表音性は、表音文字ほど直接的なものではなく、その発音も時代につれて変化する。だが、漢字の形はほとんど変わりが無い。また地域によって、すなわち方言音の間の差異はかなり激しい。現代中国語には北方方言、吳方言、閩方言、粵方言、贛方言、湘方言、客家方言の七大方言があるとされている。例えば、中古音でいう入声音を完全に失った北方方言もあれば、それをほぼ完全に残している粵方言もある。日本の漢音にも反映される、唐代から起こった全濁字の清音化が、吳方言においては今に至るまで起こってい

ない。七大方言を細分化すれば、その下位単位で「次方言」と呼ばれるものがさらに多数存在しており、そこには音韻的多様性がさらに見られる。こうして同じ漢字でも地方によってその方言音は相当異なるものである。また時代を遡ると、諸方言における音韻体系は現在のそれとは異なっていることも当然予想される。だからこそ漢字の中国語音における地域性と時代性を特定することは、決して容易なことではないが、中国資料を扱う研究においてきわめて重要なのである。

2.2. 諸中国資料の所拠言語

一方、方言音の間に存在する激しい差異は、中国資料の所拠言語を特定する上に役立つのである。これまでの研究により、諸中国資料は、おおむね呉方言によるものと、北方方言によるものとに分けられる。すでに先行研究で指摘されている通り、この両方言の大きな特徴として、呉方言では全濁声母の保持、蟹摂二等韻尾の脱落、匣母の弱化、日母と疑母の混同など、北方方言では全濁と入声の消失³、微母の半母音化、疑母と影母の合流などが挙げられる。これによって、中国資料の所拠言語の大きな地域性が分かってくる。ここでは、中世から近世までの諸中国資料を取り上げ、各資料に反映した所拠言語の共通特徴を示す。

北方方言資料	北方方言の反映
『日本館訳語』 1492~1549年、編者未詳、会同館（北京）の通事によるか ⁴	微母の半母音化： 文（ウ）、万（ワン） 疑母と影母の合流 ⁵ ： 吾＝倭（オ）、敖＝倭（ワウ）、 濁音の清音化： 傑＝急（ゲ）、読＝都（ツ） 入声の消失： 約＝容（ヨ）、各＝稿（カウ）
『遊歴日本図経』 1889年、傅雲龍（浙江德清（原籍）、四川生まれ）	
呉方言資料	呉方言の反映
『書史会要』 1376年、陶宗儀（浙江黄巖）	蟹摂二等 i 韻尾の脱落 措（カ）、挨（ア） 匣母の弱化 河（オ）、下（ヨウ）
『日本国考略』 1523年、薛俊（浙江寧波）	假摂の母音がオ段にも読まれる 麻（モ）、沙（ソ）
『日本図纂』 1561年、鄭若曾（江蘇昆山）	日母、疑母と泥母の混同 尔＝宜＝尼（ニ） 全濁の保持
『日本風土記』 1592年刊、編者未詳	大（ド）、助（ヅ） ⁶

『吾妻鏡補』 1815 年、翁広平（江蘇呉江）	
『東語簡要』 1884 年、玉燕（出身未詳）	
『東語入門』 1895 年、陳天騏（浙江海塩）	

その他『鶴林玉露』や『国花合記集』という早い時期の資料もよく知られているが、安田章 1993 はそれらの漢字音注について、日本人の手によって加えられた可能性が高く、「日本側の文芸上の必要性の産物である」と指摘している。そうであれば、このような資料は中国資料と見なすことができるとしても、それを基に考察することは難しい。漢字音注を加えた日本人がどの地域の中国語音を利用したか、また中国語の理解がどのレベルに達しているかという問題が生じてしまうからである。このような理由から、これらの資料は考察対象から外さなければならない。

2.2.1. 補記：『日本一鑑』の所拠言語について

2.2.1.1. 著者の出身地

一覧表には含めなかったが、『日本一鑑』1565~1566 という資料は中国資料のなかでも収録語彙数が最も多いものとして知られている。掲載した日本語は『節用集』『下学集』『聚分韻略』など当時の辞書から蒐集されたと言われており、語彙的研究もこれまでに多数行われてきた。しかし音韻的研究は、写音法則が厳しく守られており、限られた音注漢字の使用が徹底しているために、同時期の他の中国資料に比べ、資料的価値が低いと思われる。そうは言うものの、本書はやはりその時代の日本語音を反映しており、他資料と比較考察する必要がある。

しかし、先行研究には著者の出身地、及び本書の所拠言語について誤解しているものがあり、ここでは補足的に私見を述べたい。

『日本一鑑』の著者の出身地に関しては、第三巻、第四巻、第九巻の巻頭に「奉使宣諭日本国新安郡人鄭舜功」と記されていることから、大友 1962、李俊生 1979 では新安を広東の新安県としている。さらに李は『日本一鑑』の所拠言語に粤方言の特徴があるという。神戸輝夫 2000、丁鋒 2008 では新安郡を安徽の徽州府と解する。

明代において、「新安」と名付けられた県は、保定府、淮安府、河南府、広州府の四か所に見られる。したがって本書の新安は必ずしも広州府の新安であるとは限らない。しかも広州府の新安は県であり、「郡」という行政単位は明代において使用されなかったため、新安県を新安郡と言うのは適切でない。

ところで、西晋に新安郡が設置され、これは明代の徽州府に当たるから、新安は徽州の別称としてよく使われていた。また、明清においては「府」を「郡」と呼ぶ風習が文人の間にあつたらしい。これらを合わせて考えると、鄭舜功が自分の故郷である徽州を新安郡と呼ぶのは、なんの不審もないことである。神戸、丁の指摘が正確である。

2.2.1.2. 所抛言語の特徴

そうであれば、『日本一鑑』の所抛言語を考えるには、鄭舜功の母方言の可能性を見逃してはならない。李は日本語の写音に粵方言の特徴が見出されるというが、大友の研究によれば、粵方言、呉方言、北方方言の中、呉方言の特徴が見出されるという。

恐らく鄭舜功が日本語語彙を日本の辞書から抜粋して、そのまま漢字に転写したため、『日本一鑑』の写音は一つの仮名と一定の漢字との対応が徹底していると言われている。ここでは煩を厭わず、その音注漢字を下に挙げ、音注の特徴を分析する。

ア押	イ易	ウ為	エ耶	オ塙
カ佳	キ気	ク固故	ケ杰	コ課
サ腮	シ世	ス自	セ射	ソ梭
タ太	チ致	ツ茲	テ迭	ト大舵
ナ奈	ニ乂	ヌ怒	ネ業	ノ懦
ハ法	ヒ沸	フ付	ヘ穴	ホ荷賀
マ邁	ミ密	ム慕	メ蔑	モ目
ヤ耀		ユ右		ヨ欲
ラ刺辣	リ利	ル路	レ列	ロ六
ワ歪	ヰ異		エ瑯	ヲ阿窩 ⁷

以上から見れば、まず李の言う粵方言の特徴があるとはなかなか言えないのではないかと思われる。粵方言においては入声の体系が中古音のそれとほぼ対応している。しかし、鄭舜功では ([]は現代粵方言の音価)、

押[ɑt] (ア)、六[lok] (ロ)、法[fɑt] (ハ)、業[irp] (ネ)

などのように入声字をかまわず使っていることが不審である。もし粵方言であれば、それらの入声字より、

亞[a] (ア)、羅[lo] (ロ)、花[fa] (ハ)、尼[nei]/[ni] (ネ)

のような舒声字のほうが使われるはずであろう。また疑母の「業」をネに当てることも粵方言らしくないところである。粵方言における疑母細音⁸は零声母となり、「業」[irp]はむしろイあるいはエのほうに近い音である。これは疑母細音が泥母と混同する(つまり「業」をネと読める)のは一応呉方言の特徴であると言えよう。

粵方言では蟹摂一二等字の i 韻尾が脱落しない。しかし、ア段に当てられる音注はほぼ蟹摂一二等字である。

佳[kai] (カ)、腮[sɔi] (サ)、太[t'ai] (タ)、奈[nɔi] (ナ)、邁[mai] (マ)

粵方言であれば、蟹摂一二等字より、假摂字のほうがア段に相応しいのではないか。例えば次の字である。

家[ka] (カ)、砂[sɑ] (サ)、打[tɑ]⁹ (タ)、那[na] (ナ)、馬[ma] (マ)

蟹摂一二等字の i 韻母の脱落は上に挙げた呉方言の特徴と言える。そのほかに中古音において「大」は蟹摂及び果摂に現れ、二つの読み方があったと思われる。現在、多くの方

言は蟹摂の読みを取り、例えば北方方言、粵方言でも韻母が[ai]である。「大」が果摂的に[o]に読まれる地域と云えば、やはり呉方言のことが思い出されよう。

以上、新安郡という地域や、音注の特徴を考えた結果、『日本一鑑』の所拠方言が粵方言である可能性は排除できるのではないか。音注には一応呉方言の特徴を見出すことができる。それについては、大友もすでに指摘している。しかし、鄭舜功の出身地が徽州であることを考えると、筆者は所拠方言が徽州方言である可能性が高いと思う。

徽州方言は徽語とも呼ばれる。上に述べた七大方言の分類によると、呉方言の下位方言に位置しているが、一方、いわゆる十大方言の分類によれば、徽州方言は呉方言から独立し、一大方言として見なされている。このように、徽州方言と呉方言との間には差異があるわけである。最大の違いと云えば、呉方言にある全濁字が、徽州方言ではすべて清音になっているということであろう。上の仮名の音注に使われている漢字では「杰」、「自」、「射」、「迭」、「大」、「舵」、「沸」、「荷」、「賀」が全濁字であり、清濁の別がないように見える。特に呉方言における匣母の「沸」、「荷」、「賀」は有声声門摩擦音[ɦ]が弱化しており、零声母に近い子音である。他の呉方言資料では、ア行、ヤ行、ワ行に当てられることも多い。例えば次のようである。

『日本国考略』 黄 (アウ)、何 (オ)、下 (ヤウ)、華 (ワ)、環 (ワ)

『日本風土記』 話 (アオ)、湖 (ウ)、和 (オ)、

『吾妻鏡補』『東語簡要』 華 (ワウ)、河 (ウ)、和 (オ)、

しかし、『日本一鑑』ではア行、ヤ行、ワ行には影母、喻母の字を使い、匣母の字はハ行に使っている。この点は他の呉方言資料と相違する。これは徽州方言の全濁字の清音化によって、匣母は無声軟口蓋摩擦音[x]となっているため¹⁰、子音の弱化がなく、ア行、ヤ行、ワ行に近似する音ではなかったからであろう。

蟹摂一二等の i 韻尾の脱落や疑母細音と泥母との混同（「業」がネに当てられること）、「大」を果摂的に読まれること（トに当てられること）については、これらの呉方言の特徴がすべて徽州方言にも見られる。

徽州方言を呉方言の下位方言と見なすかどうかという問題はあるが、以上の分析によれば、『日本一鑑』の所拠方言は徽州方言である可能性は高いと言えよう。

【注】

¹ 浜田敦 1962 では「国内資料」、「仮名資料」という語を使っているが、ここでは「日本資料」とする。

² 本論文でいう所拠言語とは外国資料において、日本語を写音するのに用いた言語のことである。中国資料の場合、漢字を用いて日本語を写音するが、漢字の音はそれぞれの方に属するものであり、同じ漢字を使っても所拠言語（または所拠方言）によって写す音も異なるのである。

³ 『中原音韻』においても、入声は完全に消失しておらず、声門閉鎖音[ʔ]が残っていたという説もある。

⁴ 大友信一 1962、また同 2007（『日本語学研究事典』「日本館訳語」）。

⁵ 疑母と影母との合流とは、必ずしも疑母の音が影母の音になったとは限らない。疑母と影母がその区別を無くして、一つの声母になったが、その声母は現代粵方言のように零声母と[ŋ]との自由異音を持つ可能性が高い（粵方言：「我」[ŋo]=[o]）。例えば、『日本館訳語』には「秋 阿急（アキ）」と「栞 吾阿也（オガメ）」、「河 嗑哇（カワ）」と「九月 谷哇的（クグッチ）」、「硫黄 魚敖（ユワウ）」と「五十 鷺柔（ゴジウ）」などの例がある。

⁶ 呉方言の全濁字と日本語の濁音との対応の比率は北方方言の資料より高いとは言えるが、すべて対応しているわけではない。中世日本語の濁音は入り渡り鼻音を伴うため、有声子音が濁音の唯一の弁別的素性ではないからである。

⁷ その他に、ザウを「喪」、ズイを「遂」、ピンを「平」で当てるところもある。

⁸ 細音：洪音に対して、主母音または介音が[i][y]である音節をいう。

⁹ 「打」は梗撰に属するが、多くの方言で假撰的な対応を示す。

¹⁰ 平田昌司 1998 参考。

第2節 研究史

この節では中国資料に関する言語学的研究の歩みを振り返る¹。本研究の目的が室町時代の日本語音韻の研究であるため、主として中国資料を中心にした音韻的な論著をまとめることにする。中国資料の中には、琉球語を写音したものも数多く存在するが、それについても、本論文の研究対象から外すことにする。まずは本論文の研究対象である『日本国考略』に関する研究、次に他の中国資料に関する研究について述べる。

1. 『日本国考略』

『日本国考略』に関心が寄せられたのは早い時期からであった。序章で紹介したように、『日本国考略』「寄語」には音注漢字の不統一という特徴が見られることから、編纂者は日本語の知識を持たない人物であったことが推測される。一見しただけでは容易に分からない、なぞのようなどころの多い寄語が一体どんな日本語を記録しているか——いわゆる寄語の解説は、この書を手に入れた、後の人にとって、興味が引かれるところであろう。『日本国考略』の諸本を見れば、誰かの手によって、仮名が振られているものも少なくない。これらは一応解説されていると見ても差し支えない。ただ仮名を振っているだけで、厳密に研究と言えるかどうかは問題かもしれない。本論文において寄語の解説は考察の重要な部分を占めるものであり、諸先行研究の中にも寄語の解説をめぐって論じるものが少なくない。本論文とこれらの研究との間には寄語を明らかにしようとするところに共通点があると言える。したがって、『日本国考略』「寄語」に関する研究は、早く17世紀にすでに見られるのである。通時的に分類すれば、17世紀以前、19世紀頃、20世紀以降の三段階に大別することができる。

1.1. 17世紀以前の研究

明萬曆年間の『皇明馭倭録』という書がある。後にも紹介するように、1596年以降に成立したものである。本書は『日本国考略』の寄語の部分と『籌海図編』のそれを抜き出して並列し、その異同を指摘している。当時においてすでに寄語の校訂が行われていることが伺えよう。

また明天啓元年(1621)に『武備志』という書があった。本書は茅元儀が編纂した大型類書であり、当時の軍事関係書を集成したものである。その中に記載されている「日本訳語」は「地理」の部分に次いで「島名」の部分にも見られ、その配列は後述の『籌海図編』と非常に似ている。恐らく『籌海図編』を転載したものと考えられる。注意が引かれるのは、天啓元年初刻版と言われるこの版本には寄語に片仮名の振られた所が多く見られることである²。1621年以前、『籌海図編』を転載した書物は他にも幾冊か刊行されていたが、寄語に片仮名が振られたものは他には見られない。もしこの片仮名が編纂者である茅元儀が版刻時につけたものであれば、茅元儀は初めて寄語を解説しようとした人物となり、寄語の研究史においても天啓元年版『武備志』を最初の研究文献に数えることができよう。

『武備志』が刊行された後、しばらくして日本でもその和刻本が現われた。それは江戸

時代前期の儒学者である鶴飼石斎が訓をつけ、寛文四年（1664）に刊行したものである。天啓元年版『武備志』と同じように寄語の一部に対して片仮名を振っている。その解説した寄語の数は天啓元年版『武備志』より多く、寄語の解説が一步進んだと言えよう。

この時期、寄語に訓を加えたものにはまた『異称日本伝』³がある。元禄六年（1693）刊行されたこの書は、江戸の儒医であり国学者でもある松下見林の手により、日本に関連する中国と朝鮮の典籍を選出し、意見や解説をも加えて編纂されたものである。『説郭続』と『武備志』に記載された寄語を転載し、それに訓も加えたが、『説郭続』と『武備志』に掲載された寄語が全く同じもののため、松下見林は『説郭続』の寄語の数語のみを記して他のすべてを省略した。寄語の解説案は寛文四年和刻版『武備志』と多少異なるが、解明した寄語の数は『武備志』のそれとほぼ同数である。

17 世紀におけるこれらの文献は「日本寄語」の早い時期の研究であり、寄語の解説に貢献したものである。

1.2. 19 世紀の研究

『武備志』以降約 2 世紀を経て、1882 年、漢学家とも言われるイギリス人宣教師のジョセフ・エドキンスが日本アジア協会の機関誌『Transactions of the Asiatic Society of Japan』に、「A Chinese and Japanese Vocabulary of the Fifteenth Century」という論文を載せた。論文は叢書『説郭続』⁴に収められた「日本寄語」を底本に、そこに掲載された 359 語の多くを解説し、さらに解説も行なっている。言及していない寄語の数も 80 余りあるが、日本語の問題、例えば、寄語に見られるタ・ダ行の破擦音化や、オ段合音がウ段で現れる長崎方言の特徴などのことについて、すでに指摘していた。エドキンスは中国語学に大きな貢献をした人物として知られているが、日本語学にも及ぶその見識は驚嘆に値する。この論文は寄語の研究における最初の本格的研究と言ってよい。

同年同誌、エドキンス論文の次に載せられたのは駐日英国公使と駐清英国公使を務めていたイギリス外交官のアーネスト・サトウによる「Notes on Dr. Edkins' Paper "A Chinese-Japanese Vocabulary of the Fifteenth Century."」である。エドキンスの要請を受け、エドキンス論文の解説に対して補足や、意見を述べた論文である。寄語の音注漢字の不統一について、サトウはインフォーマントが複数いた可能性や、寄語の収集も異なる時期に渡っている可能性があるとして指摘した。タ・ダ行の破擦音化についてもエドキンスと異なる意見を述べている。

1.3. 20 世紀以降の研究

20 世紀に入り、外国資料による日本語研究が盛んになると、その一部として中国資料も注目を浴びることとなる。成立時期の早い『日本国考略』に関する研究が続出したのも当然であった。

1.3.1. 資料紹介、書誌学的研究

まず最初に現れたのは日本人研究者による中国資料の紹介や、書誌的研究である。

中でも早い時期のものとしては秋山謙蔵 1933 「明代に於ける支那人の日本語研究」がある。秋山謙蔵 1933 は主に明代資料の『日本館訳語』の成立経緯、歴史的背景、編纂目

的など、『日本館訳語』を主な対象とする研究であるが、『日本国考略』を含む幾冊かの明代資料も紹介している。『日本館訳語』所載の寄語に「日本寄語」⁵『籌海図編』『八紘訳史』『篇海類編』のそれを対照して表にした。解説や音韻分析にまでは及んでいないが、諸本についての考察は後の研究にとって有益かつ不可欠である。

その後、浜田敦 1940「国語を記載せる明代支那文献」では明代に限らず、元代から清代に至る『書史会要』『日本国考略』『日本図纂』などの日本語を記載した資料、さらに琉球語を記載した資料の『使琉球録』『琉球入学見聞録』などをも網羅的に紹介する。『日本国考略』の寄語については諸本が紹介され、書誌的研究が行われた。『説郛続』所収の「日本寄語」は、浙江定海の薛俊の出身を河北定州と誤り、それを底本としたエドキンスや、伊波普猷 1932、秋山謙蔵 1933 の誤解を招いたことが指摘された。また浜田は寄語が「必ずしもこの時代のものに非ずとも断言し難く、その成立はそれ程遠く遡るものでもないであろう」と述べ、所掲言語については、「広東あたりの方音としなければならないが、反対に南方音とすれば都合の悪いものも多いのであるから、しばらく断定を差し控えるに越したことはない」のように、断定するまでには至らず、慎重な研究態度を見せた。

この時期、『日本国考略』の「寄語」を転載した『籌海図編』『籌海重編』も研究者の注目を引いた。田中健夫 1953「籌海図編の成立」、金子和正 1958「籌海重編の紹介」が見られる。田中は『籌海図編』の実の著者の問題や、『日本図纂』との継承関係を論じ、その後その影響をうけた書物も紹介した。金子和正 1958 は『籌海図編』と『籌海重編』の継承関係を指摘し、その版本の異同の考察を行った。両論文とも諸本間の関係の解明に貢献している。

またその後には、田中の成果を踏まえた大友信一 1959「『日本図纂』『籌海図編』の諸本とその成立事情」がある。『日本図纂』と『籌海図編』の諸本について精細な考察を加え、その成立の経緯を検討した。

以上に紹介した研究は言語学的な分野には及んでいないが、言語学的研究のためにもこういった書誌的研究は先行研究として必要不可欠なものである。

1.3.2. 寄語の解説及び音韻的研究

寄語の解説に関しては、今西春秋 1936-1938「日本図纂中の日本寄語」がある。これは『東洋史研究』に「日本図纂」の寄語解説の試みとして12回連載したものである。しかし解説された語数は「日本図纂」の寄語全体の半分ぐらいにとどまる。底本についての記述がなく、解説についての説明もないというのが残念である。

その後、書誌的研究の成果に基づき、『日本国考略』における寄語の解説に関する研究は更なる進展を見せた。そのみならず、解説を通して日本語及び中国語に関する音韻的な研究も多く行われた。その中にはまず浜田敦 1951「日本寄語解説試案」がある。当論文は主に現代呉語と対照して、363語すべての寄語に対して解説を行い、新たな成果を収めた。

次に福島邦道 1959「『日本寄語』語解」は、趙元任やカールグレンによる中国語方言の研究に目を向け、考察を行った。寄語の解説については未解明の項目二十余りに対して新たな解説を試みた。ただし一方、寄語から見た日本語のオ段長音開合の問題や鼻濁音の問題について浜田敦 1951 と異なる意見を持ち、『日本国考略』の資料性について不信感を示

している。

『日本国考略』の初版が散逸し、重刊本を含む諸本では寄語の誤刻、誤写、脱字が多いため、諸本の対照研究は基礎研究として、語彙の音注を正確に解読するうえに重大な意味を持っている。中国資料の版本の問題を重視し、厳格な書誌的考察を行ったものの中で、特に注目すべきは大友信一 1963『室町時代の国語音声の研究：中国資料による』である。本書は『書史会要』『日本国考略』『日本館訳語』『日本図纂』『日本一鑑』『日本風土記』六冊の中国資料を研究対象として、室町時代の日本語音韻の全体像を描いた、権威ある論著である。章ごとに各中国資料について、それぞれの資料の成立、及びその諸本の解説から、寄語の解読を行い、最後は室町時代の日本語音声構造の解明にまで論を展開する。資料性の面では各資料の諸本を照らし合わせて諸本間の関係を論じ、特に『日本国考略』の章では日本に現存する『日本国考略』の写本や類書などの十冊を基にして寄語の校訂を行った。さらに本書は大友による朝鮮資料の研究成果⁶も踏まえ、キリシタン資料や『下学集』『節用集』などの古辞書、中国語学資料の『中原音韻』『中国音韻学研究』『現代呉語的研究』など、多様な資料を利用して、当時の日本語音韻の状態を多角的に論じている。また、大友による『四つ仮名』混同の音声事情」という論文は、タ・ダ行の破擦音化の時期や「四つ仮名」の混同の問題を明らかにし、音韻史研究への貢献が最も大きい。

一方、中国資料に基づく中国語の音韻学的研究も進んだ。まず、中野美代子 1960「日本寄語による十六世紀定海音系の推定」がある。中野は『日本国考略』の所拠言語を薛俊の故郷である定海の方音と推定し、呉語、閩語などの中国の方音との比較を通して、中国語方言音韻の問題を論じた。『日本国考略』の所拠言語が呉方言であることは確かである。しかし、所拠言語の推定が結論的に正しいとしても、言語学的な考察によって何らかの論拠を提示してほしいと思わせるところもある。木津祐子 1994「『日本寄語』所反映的明代呉語聲調」では、16世紀のキリシタン資料によって再現された日本語音韻により中国語の音韻体系を検討した。論文の後半では京都アクセントに基づき、中国語の声調に対する分析を行ない、16世紀寧波方言の声調を再構するとともに、連続変調が存在した可能性を指摘した。続いて、丁鋒 2004「『日本考略・寄語略』反映的十六世紀呉語音韻」は所拠言語を寧波方言と見て、16世紀の音韻の問題を分析した内容であった。丁は主に蟹撰洪音の韻尾、牙音開口二等韻、全濁声母、入声、梗撰開口二等と宕撰江撰の合併などの特徴について分析を行なった。ただし、寧波方言音の判定については中野と同じような問題を抱えている。

同時期、『日本国考略』『日本図纂』から寄語を転載した『日本風土記』に関する研究も少なくない。渡邊三男 1943『訳注日本考』⁷は『日本風土記』の版本について詳説し、その解読も行った早期の研究であり、1985年には新修版『新修譯註日本考』も刊行された。同 1974「篠崎東海とその校定本日本風土記」は『日本風土記』の江戸時代の一写本を紹介している。音韻的研究としては早く浜田敦 1956「日本風土記山歌註解」がある。『日本風土記』の「山歌」という部分及びその音注を解釈し、日本語の濁音、サ行音、ハ行音における問題などについての論述である。ただし、所拠言語の特定にまで進まなかった点は残念である。一方、中国語声調と日本語アクセントの対応を検討した長田夏樹 1965「『日本風土記』における日本語のアクセント表記について」があり、新しい研究法を試みている。ただし、声調の推定調値を導く論証過程がなく、現代寧波方言に見られる複雑な変調

についての検討をこなしていないというのがその問題点であると指摘されている⁸。福島 1979「音韻資料としての日本風土記」では、才段長音の開合、合拗音、「四つ仮名」、「わる音」などについて考察したが、現代蘇州方言を以て解読するところはやはり不十分に思われる。赤松祐子 1988『『日本風土記』の基礎音系』では中国語学の立場から『日本風土記』の所拠言語は呉方言であると判断している。松本丁俊・丁鋒 1998『『日本風土記・語音』中日対音考釈』ではさらにその所拠言語を寧波方言と推定した。「江 密乃多（ミナト）」という項目に「河」と「港」の意味の混同が見られ、その混同は寧波に河と港があるからと解釈し、これを所拠言語の特定の有力な手掛かりとしている。しかし、「江」と「港」とも江撰見母に属し、異なるのは声調だけである。意味上でなく、音声上の混乱の可能性もあるのではないかと思われる。

また、蔣垂東 2001『『皇明馭倭録』の「寄語畧」について』、同 2002「日本語を記載する『倭情考略』『籌海重編』」、同 2010『『国朝典故』本『日本国考略』について：音訳日本語「寄語訳」の校異を中心に』など一連の論文では、『日本国考略』の寄語を収めた『皇明馭倭録』『倭情考略』『国朝典故』などを紹介し、版本の比較研究に貢献している。

1.3.3. 中国資料の影印及び索引

資料の複写、索引類も出版されている。京都大学文学部国語学国文学研究室編 1965『日本寄語の研究』では浜田敦の「日本寄語解読試案」と福島邦道の「日本考略・日本図纂解題」を収め、『重刊日本考略』『日本図纂』『籌海図編』などを影印している。また同 1961『日本風土記：全浙兵制考』は明刊本の影印、索引を作成しており、解題は安田章によるものである。渡辺三男ほか 1984『日本風土記 本文と索引』では、索引のほかに翻字も行っている。また、坂井健一 1971『明代日本語資料集成』、坂井健一・木村晟 1975『日本風土記・日本寄語・日本館訳語・琉球館訳語・朝鮮館訳語・日本一鑑 寄語対照手冊』という小冊の対照表がある。前者は琉球語関係の資料や『日本国考略』『日本館訳語』の対照表で、後者は『日本国考略』『日本館訳語』『日本一鑑』などの対照表である。研究するに便利な資料であるが、『日本国考略』の底本は最善の重刊本ではなく『説郛続』本である。

2. その他の中国資料

前節で述べたものの中には『日本国考略』及びその継承性があるもの以外の中国資料、すなわち『書史会要』『日本館訳語』『日本一鑑』などがある。大友 1963 がそれらの資料に対して総合的に研究を行ったことについてはすでに述べた。ここでは、その他の研究について、特に版本や音韻関係の論著を取り上げることにする。

2.1. 先行研究

まず『書史会要』の研究には、小川環樹 1947「書史会要に見える『いろは』の漢字対音について」と有坂秀世 1950「書史会要の「いろは」の音注について」がある。「いろは」の音注は著者の母方言である呉方言によるものと両氏が指摘された。そこに反映した 14 世紀日本語の音韻状態は有坂の精密な考察によりほぼ解明されている。丁鋒 2000『『書史会要』所記日語仮名歌対音反映的十四世紀呉語音韻』では所拠言語を呉語の下位方言であ

る松江方言と判断し、中国方言学の音韻の問題を論じた。最近では、蔣垂東 2010『南村輟耕録』所載「射字法」から見た『書史会要』の「いろは」音注」もある。

『日本館訳語』は早く伊波普猷 1932『『日本館訳語』を紹介す』により紹介された。また浅井恵倫 1940「校本日本訳語」や渡邊三男 1960「華夷訳語および日本館訳語について」、同 1961「華夷訳語および日本館訳語について（承前）」により、版本の対照や校訂が行なわれた。福島 1993『日本館訳語攷』は著者が発表した中国資料関係の論文を再録したものであり、解題、版本の比較、音韻分析という手順を踏んで着実に論を展開している。松本丁俊・丁鋒 1997『『日本館譯語』中日対音考釈』は日本語と音注を整理し、それぞれ『日葡辞書』と中国語の資料『西儒耳目資』とによりローマ字を用いて対照表を作成した。また、蔣垂東の以下の一連の論考が、所拠言語を北方方言と判断し、明代におけるその音韻特徴から音注漢字の問題を解釈してしていることが注目される。蔣 1994『『日本館訳語』の「漢製和語」について」、1996『『日本館訳語』の基礎音系：疑母、微母とゼロ声母の関係を中心に』、1996「ロンドン大学本『日本館訳語』の識語をめぐって」、1997『『日本館訳語』の「エ」をめぐって」、1998「ロンドン大学本『日本館訳語』に見る独自の用字法をめぐって」、1999『『日本館訳語』と近世北方音：声類篇」、2000『『日本館訳語』と近世北方音：韻類篇』。一方、林慶勳 1992「試論『日本館訳語』的韻母対音」、同 1993「試論『日本館訳語』的韻母対音」、同 1996『『日本館訳語』的柳崖音注」、また丁鋒 2007『日漢琉球対音與明清官話音研究』では、中国語学の立場から『日本館訳語』『遊歴日本図経』に見られる官話の特徴を論じている。

『日本一鑑』は資料が一つの仮名一音注漢字という写音法則を徹底している⁹ため、音韻研究への寄与は他の資料に比べ、やや劣る資料である。そのためか音韻的研究は他の資料より少ない。坂井健一 1968「日本館訳語と日本一鑑にみられる近世方音の研究」、李俊生 1979「日本一鑑寄語語音考」。

『吾妻鏡補』は、渡邊三男 1962「吾妻鏡補所引の日本語彙：校本『海外奇談国語解』により校訂、解説されている。また、高山倫明 1998-2001「翁広平『吾妻鏡補』所載日本語史資料試解」1-4があり、所記日本語の解説を施したものの未完成のままである。

『東語入門』については、木村晟・李俊生 1973『『東語入門』略注』があり、これは大友信一・木村晟編『東語入門 本文と索引』に対する補注でもある。ほかに丁鋒 1998「百年前的海塩音和東京音：『東語入門』中日対音考釈』があり、所拠言語を特定したものである。

『遊歴日本図経』については、大友 1979『『遊歴日本図経』の『日本文表』』がある。下に挙げる渡邊他編『遊歴日本図経 本文と索引』には巻二十上「文学一」の「日本文表」の平仮名四十八字を掲載しておらず、大友論文はこの部分を補うという意味をもつものである。また、丁 2005『『遊歴日本図経・方言』の日漢対音に見える呉、四川、北京三方言の音声』は、著者である傅雲龍の経歴を精査し、所拠方言を特定したものである。この論文は前述丁の著書『日漢琉球対音與明清官話音研究』に再録されている。

2.2. 資料の影印、索引

以上の中国資料の影印及び索引資料を次に挙げる。

京都大学文学部国語学国文学研究室 1968『纂輯日本訳語』、大友信一・木村晟 1968『日

本館譯語 本文と索引』、同 1972『東語入門 本文と索引』、同 1974『日本一鑑 本文と索引』、同 1982『日本一鑑〔名彙〕 本文と索引』、同 1982『吾妻鏡補所載 海外奇談国語解 本文と索引』（『東語簡要』を含む）、渡辺三男他 1975『遊歴日本図経 本文と索引』。

『東語入門』『吾妻鏡補』『東語簡要』については原文の影印はされていないが、それらはすでに前掲『纂輯日本訳語』に見える。

【注】

¹ 言語学的な研究のほかに、中国資料、特に『日本国考略』、『日本図纂』、『籌海図編』などに関する、歴史的、地理的な分野においても多くの研究が行われている。中国資料の成立の背景を把握するには、そういった分野の研究を視野に入れる必要がある。研究の主旨が異なるので、ここではとくに挙げることはしない。

² 原本は未見であるが、『続修四庫全書』及び『中国兵書集成』に収められた天啓初刻本影印本は一致しており、同じ版本であることが分かる。

³ 『国史大辞典』によると、刊行されたのは元禄六年（1693）であるが、元禄元年（1688）の松下見林の自序があるので、松下見林が完成させたのは元禄元年と考えられている。

⁴ エドキンスによると、この本が後に再版されて『説郛』に収録されたという。実は清の陶珽によって編纂された順治四年（1647）の『説郛続』（『続説郛』とも）である。

⁵ 秋山謙蔵 1930 は『説郛続』によっている。

⁶ 大友信一 1957。

⁷ 『日本風土記』は版本によって『日本考』とも称される。

⁸ 遠藤光暁 2011。

⁹ 例外はわずかである。

第2章 『日本国考略』について

第1節 『日本国考略』の成立

1. 成立背景

嘉靖年間、中国人が日本に対する関心を寄せるようになり、日本事情を記録する書物が続々と現われた。本論文の主な考察対象である、嘉靖二年（1523）定海の人である薛俊によって編纂された『日本国考略』もその中の一冊である。これらの書物の出版の背景には、いわゆる倭寇による沿海地域の被害や、また日明間の貿易や外交など、日本人との接触機会の増加ということがある。

まず海上防衛の面から言えば、元代から明代にかけて倭寇が沿岸地域で騒ぎを起こしていた。特に明政府は「北虜南倭」の危機に陥り、それに対応するのに全力を挙げなければならない緊迫状態にあった。それまで関心を持たなかった日本に対して、まずはそれに関する知識をもたざるを得ない事態になっていたのである。

ところで、倭寇というのは最初、日本人の海賊団に対する称呼であった¹が、14世紀から始まり、その後、時期によって人員の構成も変わっていた。田中健夫 2012 によれば、14～15世紀における倭寇は「前期倭寇」と呼ばれ、その中心となるのは九州、五島、対馬あたりの日本人であり、主に朝鮮半島で活動していた。それに対して、16世紀における「倭寇」は「後期倭寇」で、その活動の範囲を中国大陸の山東、浙江、福建、広東などの沿岸地域にまで拡大しており、人員構成では中国人が七、八割を占め、日本人が二、三割であったという。

『明代倭寇考略』などによれば、嘉靖年間における「後期倭寇」の入寇回数が最も多く、当時の明政府にとって深刻な問題になった（田中健夫 2012）。その発生の要因には明政府の海禁政策の強行があるとされている。海禁政策とは中国人が海上に出て外国人と接触することを禁じることである。海賊団の防止と外国貿易の独占がその目的であった。海禁政策は明の初期から中期に至ってだんだん厳しくなり、私的外国貿易の禁止から国内貿易をも含む海上の貿易が一切禁止されることとなった。しかし、海禁政策を無視して船を出し、海上貿易を行う中国人も少なくはなかった。それは福建、広東、浙江などの地方の住民であり、多くが海上活動に依存して生活をしてきたからである。海禁政策の強行の結果、地方の郷紳や商人が取締を行う官吏に賄賂を贈り、密貿易に乗り出すような状態になり、さらに密貿易群は海禁政策に抵抗して海賊団と組み、武装集団へ転化するようになった。これが倭寇の温床である。

一方、日明貿易の面では、明政府は海禁政策の実施と同時に、唯一の外国貿易制度を許していた。朝貢の形式としての勘合貿易である。勘合とは明政府が外国使者の真偽を証明するために「勘合符」という符節を発行し、それを所有するのを来貢の条件としていた。日本では応永十一年（1404）に初めて勘合符が支給されたという。明政府にとってそれが日本使者と倭寇を見分ける手段でもあった。しかし、下に述べる「寧波の乱」はこうした勘合貿易に起因したものである。

1.1. 編纂の起因——寧波の乱

倭寇の防衛、勘合貿易により、明政府と日本との接触の増加が、日本に関する書物の出版の原因となったことは上に述べたが、『日本国考略』の編纂の引き金となったのは朝貢としての勘合貿易をめぐって起きた、嘉靖二年（1523）のいわゆる「寧波の乱」という事件（「寧波争貢事件」とも呼ばれる）であった。冒頭に事件に関する記述が見られる。

歲嘉靖癸未、変生倉卒、職是事者、雖聞知食焉不避其難之為義、且不能為身計、況於他乎、時南閩鄭侯崇善宰定海、目激其弊、謂往者既失之不預、而來者宜凶之未然

嘉靖癸未、つまり嘉靖二年の変はあまりにも突然であった、云々とある。嘉靖二年の変とはすなわち寧波の乱であろう。また、『四庫全書総目提要』「日本考略」にも

明薛俊撰、俊定海人、嘉靖二年、日本国使宗設来貢、抵寧波、未幾、宋素卿等亦至、互争真偽、自相殘殺、所過州縣、大肆焚掠、浙江瀕海之地、人民苦之、俊因纂輯是書、大略言防禦之事為多、而国土風俗、亦類入焉

とあるように、編輯の理由は寧波の乱であったと説明されている。

日明間の勘合貿易は中国への朝貢形式をとったものであるが、名義上の朝貢は日本にとって実は損なものではない。明政府は国の恩徳を顕示するため、外国からの入貢に対して、頒賜の慣例を設けており、朝貢された物より多くの物資を朝貢国に送り返すからである。それゆえ、このような朝貢制度に引きつけられた外国の船や商人は数多くあった。もちろん、朝貢から得られる利益が日本の幕府にとっても大きかったからである。そこで、明政府は広州（広東）、泉州（福建）、寧波（浙江）の地に市舶司を設置し、入貢や外国に関する事務を扱わせていた。そのうち、もっぱら日本の遣明船や商人を管理するのは寧波の浙江市舶司であった。

一方、日本で遣明船の派遣を始めたのは応永八年（1401）足利義満であった。当初、遣明船は幕府の経営する船だけであったが、次第に有力な大名や寺社の船も参加するようになり、ついに幕府と各大名や各寺社との間で遣明船の主導権をめぐって争う状態が生じた。「寧波の乱」はそういった時期に遣明船を持った細川氏と大内氏の間で起こったのである。その詳細な経緯については以下に田中 2012 の記述を引用する。

永正十六年（一五一九）ころには大内氏の遣明船派遣計画が具体化し、それに対抗して細川氏の派遣計画も熟した。大内氏は新たに遣明船三隻を豊前池永で艤装し、正徳新勘合の一・二・三号を与え、謙道宗設を正使、月渚永乗を副使として入明させ、彼らの船は大永三年（嘉靖二年、一五二三）四月に寧波に到着した。一方、細川氏は幕府に強請して、すでに無効になっているはずの弘治の勘合一道を獲得し、鸞岡瑞佐を正使とし、明人宋素卿を付し、南海路によって入明させた。細川船が寧波に到着したのは大内船の到着に遅れること数日であった。

ここで当然勘合船としての両者の真偽が問題になったわけであるが、宋素卿はいちはやく市舶司に賄賂を贈り、はやく入港した大内船よりもさきに、規定に反して細川船の貨物を陸揚げさせて東庫における点検をすませ、しかも嘉賓館における席次も細川船の鸞岡を大内船の宗設の上におかせるようにしてしまった。この状態に憤激した宗設らは五月一日東庫から武器を持ち出して鸞岡を殺し、宋素卿らの船を焼却し、さ

らに素卿を追って紹興の城下に至った。素卿は府衛に獲られて少し離れた青田湖に退避した。宗設らは寧波に帰り、沿道で放火乱暴し、指揮袁璠を捕え船を奪って出帆した。細川・大内二氏の対立関係はここに極点に達し、ついに爆発したのである。素卿はその後、明において獄死した。この事件の結果、浙江各官の不正怠慢が指弾され、嘉靖八年（享祿二年、一五二九）浙江省舶司太監が廃止された。

田中 2012:113-114

「寧波の乱」の起因には浙江省舶司における内部の腐敗もあったけれども、細川氏と大内氏との両勢力の間の紛争を主な原因と考えて差し支えないであろう。「寧波の乱」の被害は寧波府の東北に位置する定海県（現在寧波市鎮海区）にも及んでいた。『寧波府志』「海防」では当時定海県知県鄭余慶と定海衛掌印指揮李震の全力の抵抗により被害が最少限に収められたと述べている。ただし、この変乱は従来の倭寇によるものと異なり、鄭余慶にとって、さらに入貢を含む日本への対策を変える契機となった。その対策の一つとして、事件の直後に『日本国考略』の編纂を薛俊に命じたのである。

2. 編著者

薛俊は鄭余慶の命を受け、すぐに『日本国考略』の編纂を始めた。鄭余慶と薛俊に関する記事はわずかながら、次のようなものが見られる。まず、鄭余慶に関しては、雍正『寧波府志』「名宦」にその伝が見られる、

鄭余慶、字崇善、閩県人、正徳十五年、由举人令県、勞心撫字、不務繁苛、嘉靖二年日本入貢……聘薛俊纂輯県志、躬為裁訂、師事郡人……

薛俊に関しては、同書「文苑」に

薛俊、字梓山、定海人通之子、自少刻意問学、経史百家靡不究心、正徳末、県令鄭余慶聘修邑志、定之有志、実自俊始、嘉靖三年、由歳貢授常州訓導、陞浮梁教諭、以文行董率諸生、人咸重之

という記事がある。大意はすなわち、薛俊は字が梓山であり²、定海の人の薛通³の子である。幼い頃から学問に専念し、経史百家に通じる。正徳末年に鄭余慶の招聘を受け、『定海県志』を編纂した。定海の県志は薛俊から始まる。嘉靖三年に「歳貢」⁴で常州（現在江蘇省常州市）訓導となり、後に浮梁（現在江西省内）教諭に昇進した。文書と道徳で学生を導き、尊重されていた、となる。記事が僅かしかないが、そこから薛俊の経歴が窺える。

正徳（1506-1521年）末年、鄭余慶の招聘をうけ、『定海県志』⁵を編纂し、その後、間もなく寧波の乱が起こり、薛俊は再び『日本国考略』の編纂に当てられた。薛俊の昇進は嘉靖三年つまり寧波の乱の翌年1524年である。それ以前はまだ官職を持たなかった。しかし、以上の二書の編纂に当てられることはそれなりの才能があり、知県鄭余慶の信頼を得た人物であったと推測される。また薛氏の一族は宋代進士、衡州知事の薛朋亀の後裔であり、寧波の一族であるから、薛俊が教養ある家庭で育ち、相当な学識のある文化人であったことも想像に難くない。

3. 書名

『日本国考略』は『日本考略』とも呼ばれている。書名は伝本によって異なり、「国」の字が書かれたり、書かれなかったりしている。その混乱は現存する最古本である東洋文庫本から見られる。東洋文庫本では改装表紙の書名、鄭余慶引の題、本文の題名が「日本国考略」となっている一方で、王文光による重刊の序、鄭余慶引の本文⁶、版心では「日本考略」（ただし、二十七丁の版心では「日本国考略」）となっている。

それから見れば、初刊では正式の書名が「日本国考略」であったが、重刊の際に「日本考略」と改められたと考えられる。そもそも中国の正史、『旧唐書』『新唐書』『宋史』『元史』『明史』などにおいては、日本の呼称が「日本」と「日本国」と両方に記されており、特に意味上の区別があるとは思われない。「国」の字があってもなくてもさほどの違いは生じないであろう。

ちなみに、内閣文庫本では「日本国考略」と題されているが「国」は「日本」の右下にあり、やや小さく書かれている。それはおそらくその底本に見られる複数の書名が不統一であったためであろう。

本論文においては書名を『日本国考略』にする。

4. 「寄語略」

『日本国考略』は沿革略、疆域略、州郡略、属国略、山川略、土産略、世紀略、戸口略、制度略、風俗略、朝貢略、貢物略、寇辺略、文詞略、寄語略、評議略、防御略から構成され、防衛上の内容はもちろん、日本に関する全般的な紹介が行われている。

中国音で日本語を写す、すなわち音写した「寄語略」は、当時の日本語の姿を記録したものである。16世紀末のキリシタン資料より約半世紀も前に成立した資料であるため、日本語学の資料として価値が高いということに注目される。

日本語を音写する目的については、薛俊が「寄語略」の末に次のように述べている。

士君子非先王之法言不敢言、而方言固不足煩唇齒、然言者心之声、得其言或可以察其心之誠与偽、故特寄其常所接談字、彷彿音響而分繫之似、以資衛辺將士之聽聞、亦防衛之一端也、初無義理、觀者不必字為之積

大意はすなわち、知識人は地方の言葉を話さず、先王の正しい言葉を話すのである。しかし、言葉とは心の声でもあり、人の言葉を分かることで、その心の真偽も見分けられるのである。それゆえ、日本人の日常談話の発音を模倣し、それを訳し、そして分類することが、辺境の兵士にとって有益であり、防衛の一端でもある。寄語の部分は音訳なので字の意味にはとらわれないといい、目的は防衛の一端として日本語を兵士に習わせるということである。

日本語を音写する同類の資料には早くは南宋の羅大経の『鶴林玉露』、明初の陶宗儀の『書史会要』が挙げられるが、両書は各僅か十数語の日本語を収録しているにすぎない。それに対して、『日本国考略』では日本語を三百六十数語も収録しており、しかも兵士に習わせることを目的としている。『鶴林玉露』と『書史会要』の該当部分が中国人に日本語を紹介する随筆だとすれば、『日本国考略』は中国人が初めて日本語を勉強するための

学習書であると言えよう。

5. 「寄語」について

「寄語」という語はその後の書籍、『日本図纂』などにも使われている。ここでその意味について述べる。

「寄」の解釈について、早くは『礼記・王制』（『四部備要』所収による）に

五方之民、言語不通、嗜欲不同、達其志、通其欲、東方曰寄、南方曰象、西方曰狄鞮、北方曰訳

と見える。現代中国語の「訳」の意味は日本語と同じく「訳す」であるが、ここでは北方の言語ができる人、すなわち翻訳者や通訳者のことを指す。これに対して、「狄鞮」とは西方⁷、「象」とは南方言語の翻訳者や通訳者のことである⁸。したがって、対象となる地域に差異はあるが、「寄」も「象」「狄鞮」「訳」と同様な意味で解される。

『日本国考略』本文の冒頭に

日本乃東夷一種、遐隔大海、其習俗妍醜、固不足為軒輊、第叛服不常、巧於用詭、語音不寄、則向背罔知、事体不諳、則情偽莫測

とある。「語音不寄、則向背罔知」とは「(その)言葉に通じなければ、従うか背くかは把握できない」という意味であろう。さらに、「寄語略」の冒頭には

寄即訳也、西北曰訳、東南曰寄

という記述がある。『礼記・王制』と似る内容であるが、「寄」はすなわち「訳」であると指摘されている。「寄語略」の末にも

得其言或可以察其心之誠与偽、故特寄其常所接談字、彷彿音響而分繫之似、以資衛辺將士之聽聞

とある。「故特寄其常所接談字」とは「それゆえ、その常用談話の語彙を訳し」という意味である。したがって、本書における「寄」は翻訳者、通訳者の意味よりは、「訳する」という意味であると考えられる。しかし、「寄語略」においては、日本語を訳するというよりも、写音するという意味で、それが「彷彿音響」というわけである。一方、『日本一鑑』「窮河話海」巻五の冒頭にも

故採日用文字、類分十八、凡字之下、以為寄音、庶通其言

という著者鄭舜功による記事がある。この「寄音」とはまさに写音のことであろう。以上を総じて、中国資料における「寄語」「寄音」というのは、狭義では写音のことと解釈することができる。

【注】

¹ 倭寇という文字が最も古く現われるのは『高麗史』に「倭寇金州」という文が見られ

るのに遡る。「倭が金州を寇す」という文脈であったらしい。

² 『鎮海県志』によれば、「文祥」という字もあるという（:1473-1474）。

³ 薛通については、同書に伝がある。また、『中国家譜総目』8:4509によれば、寧波天一閣所蔵『四明新莊薛氏六修家譜』六巻がある。薛俊の先祖、宋代薛朋龜からの記事があるという。

⁴ 歳貢：地方政府の推薦により最高学府である国子監の入学試験。

⁵ 残念ながら、現在該書は散逸した。

⁶ 鄭余慶引には「薛生俊者、学務博、行務修、恒日孝親忠君学者分内事、雖未偶於時、而事理世故、蓋諸之素矣、乃命為日本考略若干巻、誠有裨於边防也、捐俸寿諸梓」とある。

⁷ 孔穎達の疏に「鞞、知也、謂通傳夷狄之語、与中国相知」とある。

⁸ 鄭玄の注に「通夷狄之言者曰象」とあり、『漢書・礼楽志』に「蛮夷竭歡、象來致福」とある。

第2節 諸本

1. はじめに

『日本国考略』の初刊本は現存しない。重刊本以降の諸本では、寄語の音注漢字の誤刻や脱字、衍字などが多く、解読に支障をきたす。そもそも音注漢字は割注の形で項目の見出しの下に施されている。例えば、

南迷南米 明日換逆
重失且 (原文縦書き)

割注が小さいため、読みにくいことは言うまでもない。それだけならば、誤刻や脱字、衍字などはそれほどひどくならないはずなのだが、こうした音注は日本語の発音を写すものであり、音注漢字の配列自体が意味とほとんど無関係で、脈絡がない。日本語の知識が皆無の刻工にとって、本書における「寄語」の部分は無意味な漢字配列でしかなく、さらにそれが不鮮明で掠れた字である場合、文脈から推測することは不可能なため、誤刻が誘発されることは想像に難くない。重刊本及びそれ以降の諸本の編纂に際しては、誤りが一層ひどくなる。

しかし、諸本に見られる寄語の以上のような誤りはおそらく作業の際に起こる、不可抗力の理由によるものであり、決して『日本国考略』そのものの、日本語を記録する際の「粗製濫造」によるものではないということも言うておかなければならない。ほかにも本の破損、虫食いなどによる諸本の異同も生じている。従って、『日本国考略』の寄語を考察するには諸本の詳細な対照が不可欠となる。

そのような状況の中、大友信一 1963 は『日本国考略』の諸本に対する丹念な考察により、大きな成果を残している。また蔣垂東はさらに重刊本以降のものを二三冊紹介した。筆者がさらに調べたところ、朝鮮本系統のものは見つかったが、重刊本より善い本を見つけることはできなかった。ただし、諸本及び寄語の再録書は数多く見つまっている以上は、寄語の校訂において、各本の間での伝承関係を整理する必要がある。この章では、『日本国考略』の諸本、及び寄語の再録書の成立、所蔵を述べ、各書の伝承関係を明らかにする。

2. 重刊本の伝承

2.1. 重刊本 1530 年（明・嘉靖九年）

東洋文庫所蔵の『日本国考略』は、1530 年、寧波府定海縣事王文光によって重刻された書であり、現存する最古にして、且つ唯一の、明代中国で刊行された単行本であると言われている。明刊の単行本はこれ以外現存しないため、今までこの重刊本は単に「明刊本」と呼ばれてきた。しかし、蔣 2010 の指摘にもあるとおり、『中国古籍善本書目』によれば、中国の無錫市図書館にも明の重刊本が一冊所蔵されており、版式は「十行十九字白口左右双边」とされている。東洋文庫本の版式では十行十九字白口まで一致するが、匡郭が四周单边で、無錫市図書館本と異なり、別本のようなところ。ところで、東洋文庫本に「天文類」の 12「雷」や「身体類」の 224「身」、225「目」という項目が重刊本を底本とした『日本図纂』や朝鮮本などには記されておらず、東洋文庫本以外にも重刊本の別本があることを裏付けている。残念ながら、無錫市図書館に伺ったところ、本書は破損が甚だしく、閲覧

できる状態ではないとのことであった。書の修復を待たなければならないが、その存在は寄語の校訂に重大な意味を持つに違いない。

2.2. 朝鮮本 1565 年跋（明・嘉靖四十四年）

朝鮮本というのは、朝鮮人が入手した重刊本を、再刻したものである。版本及びその写本は日本、韓国、中国にも散見される。日本では早稲田大学図書館蔵本、内閣文庫蔵本、東大史料編纂所蔵本¹などの写本がある。韓国では国立中央図書館蔵の写本がある²。また中国国家図書館は刻本のマイクロフィルムを所蔵している³。

朝鮮本は巻末に鈴平府院君尹漑⁴が書いた嘉靖四十四年（1565）の跋があるのが特徴である。その跋によれば、乙卯倭変⁵を経験した尹漑が朝鮮防衛上の考慮から入手した『日本国考略』の重刊本を、漢学教授金驥にさらに翻刻させたという。従って朝鮮本は重刊本の校訂上、重要な版本であると言える。

2.3. 叢書本

重刊本の『日本国考略』は明から清にかけ、数多くの叢書に収められている。知り得る限りでは以下のものがある。

2.3.1. 『国朝典故』1542 年（明・嘉靖二十一年）

明の鄧士龍が編纂した叢書である。この本には三つの版本があり、それぞれは北京大学図書館蔵刊本、北京図書館蔵朱當泗写本、無名氏写本である。最近では 1993 年に北京大学出版社により、その校訂本が出版されているが、寄語の部分には誤植も見られる。『国朝典故』は『日本国考略』が重刊された 12 年後に刊行され、朝鮮本よりも早くできあがったもので、現在、『四庫全書存目叢書』に収められている『日本国考略』はこの版本によるものである。

2.3.2. 『明鈔五種』（明）

明の写本としては唯一のもので上海図書館にある。著者と制作年はまだ分かっていないが、重刊本王文光の序があり、重刊本の写本であると考えられる⁶。

2.3.3. 『得月簞叢書』1831 年（清・道光十一年）

清の栄誉が編集した叢書である。所収の『日本国考略』の序文を見ると、重刊本を転載したものであることが分かる。ただし、重刊本と異なる箇所も見られる。重刊本では巻頭に王文光序、鄭余慶引、それから本文という順となっており、本文の冒頭に薛俊による叙述がある。『得月簞叢書』本では、鄭余慶引、王文光序、その次に薛俊の序、すなわち重刊本における薛俊の叙述となっており、順序が乱れている。また本書は「寄語略」で終わっており、重刊本にある「評議略」、「防御略」、「補遺」の部分は見られない。大友はこの本を端本と見て、その体裁が初刊本の体裁を反映しているという。

「寄語略」においても重刊本と異なるところが多く見られる。特に注意すべきは、重刊本では漢語の下に割注形式で音注が記されているのに対して、『得月簞叢書』では逆に、音注を上、漢語を音注の下に並べている。例えば、

重刊本： 天^{天帝}
 得月篠叢書本： 天帝^天

とある。それに音注のいくつかは重刊本とは異なる字を使っている。例えば、

	重刊本	得月篠叢書本
羊	羊其	揚其
害	天	添
眼	眉眉	梅梅

などがある。これら左右の字は現代北方方言や呉方言では同音字であり、当時もそうであったと推定されることから考えて、同音による誤りが生じたものであろう。それについて、福島 1965 は『得月篠叢書』の音注を施した人は日本語の分かる人であるとした。そうであるとすれば、なぜ「眼」の音注「眉眉」を一字に直さなかったかという疑問が残る。

一方、寄語を他の書と照らし合せてみると、誤字の箇所が『国朝典故』本と似ていることが分かる。

	『国朝典故』本	『得月篠叢書』本	その他の諸本
硯	那俚力子	那俚力子	孫助俚／尊力子
大刀	瀾四達打柰	瀾四達打柰	瀾中撻打柰
快去	活古計	活古計	法古計
昨日	傑妙	傑妙	傑奴

このように、『得月篠叢書』本は『国朝典故』本を底本にしたか、または『国朝典故』本と同じ底本を使ったかということになる。とにかく、他のものに比べ、以上の特徴を持つので、この版本は参考に値する。『得月篠叢書』はその後に『叢書集成初編』に収められた。

2.4. 類書、寄語の転載書

『日本国考略』の中の「寄語略」が多くの書物に転載されていることは先行文献においても紹介されているが、調べたところ、それ以外に数種の文献があった。

2.4.1. 『日本図纂』1561年（明・嘉靖四十年）

明の鄭若曾が編纂した書で、初版は単行本であると思われているが、現在広く流布している版本は清康熙三十年（1691）に鄭若曾の五世孫の鄭起泓が再刊した『鄭開陽雜著』に収められたものである。単行本には中国国家図書館蔵明写本⁷と日本静嘉堂文庫蔵重鐫本との二書がある⁸。大友 1959 は、単行本に嘉靖辛酉（1561）夏五月の序があることから、初刊は1561年に完成されたと推定している。

この書の寄語は「寄語島名」と「寄語雜類」の二部からなり、「寄語雜類」では『日本国考略』「寄語略」とほぼ同じ語彙が並んでおり、鄭若曾が『日本国考略』の寄語略を転載したものと考えられる。一方、『日本国考略』にはなかった「寄語島名」には日本令制国の国名及びいくつかの島名が載せられており、鄭若曾が新たに増補した部分である。

「寄語島名」における日本国名は上下の二段に配列され、五畿七道順に並べられている。

まず畿内の国名から、東山道の国名までは、十七丁表の上段の右から左へ、それから十七丁裏の上段、それから十八丁表の上段、というように上段に並べられ、そして西海道の国名からは、十七丁表の下段に戻り、それから十七丁裏、十八丁表、といった配列の順序である。五畿七道に関する記述は本書の「日本紀略」にもあり、編纂者は日本の行政区分が分かっているはずにも関わらず、なぜかここで順序を誤ったのかという疑問が残る。編集者が複数いた可能性がある。

その後の『籌海図編』ではその順序をさらに乱して並べてしまった。下に述べる『日本風土記』における寄語島名も『籌海図編』と同じように順序が乱れている。ここから、『日本風土記』は『籌海図編』に拠っていることが分かる。

『日本図纂』													
伊豆	駿河	遠江	三河	尾張	志摩	伊勢	伊賀	攝津	和泉	河内	太和	山城	寄語島名
因慈			迷茄懷	倭阿里		衣舍	衣加	子弩因你	因字知	茄懷知	野馬多	羊馬失羅	
(版心)													
讚耆	阿波	炎路	紀伊	薩摩	大隅	日向	肥後	肥前	豐後	豐前	筑後	筑前	
	挨懷齊	山飯計	乞飯	撒子馬	阿思米	兄加	非谷	非前	蓬哥	字前	職骨骨	職骨前	

『籌海図編』『日本風土記』												
伊豆	炎路	三河	大隅	伊勢	肥前	和泉	筑後	山城	筑前	寄語島名		
因慈	山飯計	迷茄懷	阿思米	衣舍	非前	因字知	職骨骨	羊馬失羅	職骨前			
讚耆	駿河	紀伊	尾張	日向	伊賀	豐後	河内	筑前	豐前	太和	筑後	
		乞飯	倭阿里	兄加	衣加	蓬哥	茄懷知	職骨前	字前	野馬多	職骨骨	
甲斐	阿波	遠江	薩摩	志摩	肥後	攝津	豐前	太和	豐前	野馬多	筑後	
既怡苦藝	挨懷齊		撒子馬		非谷	子弩因你	字前					

2.4.2. 『籌海図編』 1562 年（明・嘉靖四十一年）

鄭若曾の著書であり、その成立は嘉靖四十一年（1562）とされ、『日本図纂』よりわずか十カ月後に刊行されたものである。本書は明の歴史において重要な位置を占める軍事名著とされ、その後の海防書にも大きな影響を与えている。その中に日本に関する記述は巻

二に見られるが、すでに田中 1953 に指摘されているように、巻二の記事と地図は『日本図纂』とほとんど同じものである。

諸本については明の嘉靖から清の康熙にかけ、三回重刊されている。『四庫提要』では、編纂者が胡宗憲とされたため、多くの誤解を招いた。李致忠 2007 によれば、実は二回目の重刊に際して、鄭若曾の名前が胡宗憲の子孫により胡宗憲の名前に改ざんされた。清の康熙、鄭若曾の五世孫である鄭起泓（前述『鄭開陽雜著』の編者）が三回目の重刊を行い、鄭若曾の名前に戻したという。

近年、李致忠により校訂本が出版されている。

2.4.3. 『日本風土記』 1592（明・万曆二十年）

明の侯継高の撰になる『全浙兵制考』の附録として刊行されたものである。また、李言恭、郝杰によって『日本考』と改題し、再刊されたものもある。本書は『日本国考略』、『籌海図編』などの記事に依拠したところが多いと、安田章 1961 による指摘がある。寄語は大幅に増補したものの、『籌海図編』の誤りをそのまま踏襲したところもある。

2.4.4. 『籌海重編』 1592 成立（明・万曆二十年）

蕭彦の指示により、鄧鍾が鄭若曾の『籌海図編』を重編したものである。万曆の刻本は『四庫全書存目叢書』に収められている。成立時期は万曆二十年（1592）であるが、袁昌祚による万曆甲午の跋があることから、刊行は 1594 年以降になる。寄語の部分は『籌海図編』重刊本とほぼ一致する。また、『籌海図編』との異同についての研究には金子 1958 がある。

2.4.5. 『皇明馭倭録』（明・万曆）

明万曆年間、王士騏により編纂されたものである。成立時期は不詳で、巻末に 1596 年の上奏文があることから、その後に来たものと思われる。日本に関する記事が附略巻に見られるが、寄語を転載するほかの書と異なり、「寄語略」に

籌海図編所載、與日本国略微有不同、今並存之

という記事があり、『日本国考略』と『籌海図編』と所載寄語に異同があると指摘し、両書の寄語を併存するという。そして「寄語略」の本文では、『籌海図編』の寄語に次ぎ、『日本国考略』の寄語を並べるが、音注漢字が同じ場合、「同」と書いて、『日本国考略』の音注を省略する。音注漢字が異なるならば、両方の音注漢字をともに記す。例えば、

『籌海図編』	天	天帝	霜	名未辟満
『日本国略』	天	同	霜	多未碎満

のようである。しかし、王士騏が『日本国考略』の底本としたのは重刊本でなく、『国朝典故』本なのではないかと思われる。『国朝典故』では、『日本国考略』を『日本国略』と称し、王士騏はそのまま引用した。しかも、他の諸本にない、『国朝典故』と同じ誤刻を犯している。

	『国朝典故』	『皇明馭倭録』	他の諸本
霜	多未碎満	多未碎満	名未辟満
落雨	挨迷仕魯	挨迷仕魯	挨迷付魯
昨日	傑妙	傑妙	傑奴
石	依五	依五	依水

ここから見れば、王士驥が『国朝典故』を底本としたようである。直接に重刊本を参考にしたものではないが、『日本国考略』と『籌海図編』を対照させることで、寄語に対する最初の校訂を行った文献である。

2.4.6. 『倭情考略』1597年序（明・万暦二十五年）

明の郭光復が編集した書である。『四庫全書存目叢書』はその写本を収録しているが、刻本は中国国家図書館にある⁹。写本に明万暦二十五年の著者の序が見られ、本の成立はその頃と考えられる。蔣垂東 2002 によれば、本書の内容はほぼ『籌海図編』の巻二と巻六からの引用であるという。また著者による序文には、

（前略）…毎閱籌海編及旧所考、聞得其倭情之略、因彙集成帙、而授之刻、曰倭情考略、刻成遍布軍民、俾知倭情大概…（後略）

とある。下線のところは『籌海図編』あるいは『籌海重編』のことを指すと考えられるが、『倭情考略』の構成が『籌海図編』と類似しているため、「籌海編」は『籌海図編』を指す可能性が高い。揚州知府である郭光復が十三巻からなる『籌海図編』から「倭国事略」などの日本に関する記事を抜き出し、僅か三十六葉の書を成した。その主旨は『籌海図編』より読みやすい本を軍隊と民衆に広く配布することであったという。実用的な目的があるためか、本書は『籌海図編』「寄語島名」の部分を引用していない。

2.4.7. 『登壇必究』1599年序（明・万暦二十七年）

王鳴鶴が編んだ軍事書である。万暦刻本が『四庫禁燬書叢刊』『中国兵書集成』に収められている。万暦二十七年（1599）の序があるため、その頃の成立と考えられる。巻二十四に「寄語雑類」が収められている。そこに「島名」という類が見られるので、『日本図纂』の系列に属すものと分かる。

2.4.8. 『両浙海防類考統編』1602年（明・万暦三十年）

明万暦三十年、范涑が編纂した軍事書である。明万暦三十年刻本が『四庫存目叢書』に収められている。日本に関する記事は巻三の「倭国事略」にあるが、『籌海重編』巻八「倭国事略」と全く同様な内容なので、范涑が『籌海重編』「倭国事略」をそのまま引用したと考えてよからう。

2.4.9. 『武備志』1621年（明・天啓元年）

茅元儀が編纂した二百四十巻もある大部の明代軍事書である。天啓元年刻本は『続修四庫全書』『中国兵書集成』に収められている。その後、日本に伝わり、寛文四年（1664）、江戸の儒学者である鵜飼石斎により刊行された和刻本もある。

巻三百二十「占度載・四夷・日本考」に日本に関する記事がみられ、その概説以外の「疆域」「訳語」「嗜好」「舶船」「利器」「寇術」は『籌海図編』「日本国論」の内容（例えば「倭

好」「倭船」「倭刀」「寇術」などの箇所) とほぼ同様である。訳語の内容も『籌海図編』のそれとほぼ同じである。ただし、「島名」が「地理」の次に入れられていることなど少し順序の異同はある。

『続修四庫全書』『中国兵書集成』に収められた天啓元年刻本の「津要」「訳語」の音注に片仮名が振られていることが注目される。

2.4.10. 『四夷広記』(明・万暦年間)

明の慎懋賞の著書で、成立年は不詳であるが、万暦年間のものと思われる。『玄覽堂叢書続集』に収められている。

日本に関する記事は本書の「東夷・日本国」に見られる。内容は所々『日本国考略』と『籌海図編』に類似しているが、二書より日本地理や中日航路、倭寇の入寇時の気象などについてより詳細な記述が見られる。

寄語は、「日本寄語」と名づけられた二箇所と「日本訳語」と名づけられた一箇所に見られる。

一箇所の「日本寄語」の内容および配列は『日本図纂』と同様であるから、『日本図纂』からの転載と考えられる。少し相違が見られるところとしては、『日本図纂』の「寄語島名」を「州島類」と名付けており、国名に「州」の字をつけていることが挙げられる(例えば、山城州、太和州)。

もう一箇所の「日本寄語」はその記録した言語また音注の所拠言語も不明である。その冒頭に次の記事がある。

此乃莆田知縣孫繼有聞之莆人劉懷春者、比前本迥異、蓋劉所居之島不同、猶閩之與浙其聲音自不相通也。

つまり莆田(福建にある)知縣孫繼有が莆田人劉懷春が持っている書の寄語が前書と異なるのを知った。それは劉が違う島に住んでいるため、福建の発音と浙江の発音が異なるように寄語も異なる、という意味である。その中の「天文類」を次に挙げてみる。

日 梭羅 月 劉 風 氏厨 雨 蛇 雷 殊羅三羅

音注が日本語、少なくとも日本の共通語を反映しているとは考えにくい。今後の究明が期待される。

また「日本訳語」は、『日本館訳語』のそのの写しである。『日本館訳語』の諸本にはロンドン本、阿波国文庫本、稲葉本、静嘉堂本、ハノイ本(焼失)があると言われているが、この写本の存在は知られていないようである。

2.4.11. 『説郛続』1646(清・順治三年)

明末清初の陶珽によって編纂された叢書であり、順治三年に刊行されたものと言われる。

本書の『日本寄語』には薛俊の名前が載せられており、さらに冒頭に「定州薛俊」とあり、その次に「寄即訳也、西北曰訳、東南曰寄」とある。『日本図纂』の系統のものには、「寄即訳也、西北曰訳、東南曰寄」という一文がないので、底本はひとまず重刊本あるいは朝鮮本と考えられる。しかし、次の音注の異同から分かるように、『説郛続』は重刊本あるいは初刊本を底本としている。ただし、陶珽は寄語のみを掲載しているため、ほかの

部分について判断することは難しい。(／は割注の前後を分ける)

説郛統	重刊本	朝鮮本(早大本、内閣本)
南 迷南来	南 迷南来	南 迷南米
雪 計伏六／攸計	雪 計伏六／攸計	雪 計伏女／攸計
叔 阿迨／王前老官	叔 阿迨／王前老官	叔 阿迨／王前老官

前にも述べたように、「定州薛俊」と書いた著者の陶珽は重刊本の序にある「薛子定人也」という文で、著者の薛俊を定州と勘違いした。さらに、この誤りは後のエドキンスなどの誤解を招いた。

2.4.12. 『古今図書集成』1728(清・雍正六年)

『古今図書彙編』とも呼ばれ、康熙帝の命を受けた陳夢雷らが編纂した大型類書である。日本に関する記事は「方輿彙編・辺裔典・日本部」にある。出典も明記されており、所載の寄語は『日本寄語』という書から引いたことが一目瞭然であり、「寄即譯也、西北曰譯、東南曰寄」という文も写されている。

寄語の中に「缺」という字が小さく書かれている箇所がいくつかある。また音注が抜けている箇所もある。例えば以下のようなところが挙げられる(□は音注が抜けたところを示す)。

「方向類」北 尤兀□

「通用類」好銅錢 姚_缺善尼

「人物類」百姓 別_缺、後生 倭加_缺、財主妻 _缺

「人事類」久不見 倭非_缺水何面凸辣水、_缺一掇水姚羅扛歩

これらを『説郛統』と対照してみると、『説郛統』でも同じところがぼんやりしており、掠れていることが分かる。『古今図書集成』所引『日本寄語』はまさに『説郛統』の『日本寄語』にほかならない。

2.5. 日本書

『日本国考略』は日本に伝わり、日本人の手による書物にも収められている。管見では、以下の三冊がある。

2.5.1. 『武備志』和刻本1664(寛文四年)

前に述べたように、明の天啓元年に版行された『武備志』が日本に伝来し、鶴飼石斎により訓点を入れられたものである。寄語の一部に解説が施されている。

2.5.2. 『異称日本伝』1693(元禄6年)

前に述べたように、江戸時代の儒医である松下見林が編集したものである。『武備志』における寄語の部分は巻中六に収められ、寄語の一部に解説が施されている。同書には『説郛統』も収められているが、『武備志』の寄語と重複することを避けるため、寄語の部分は「云云」と書かれて原文の内容は省略された。

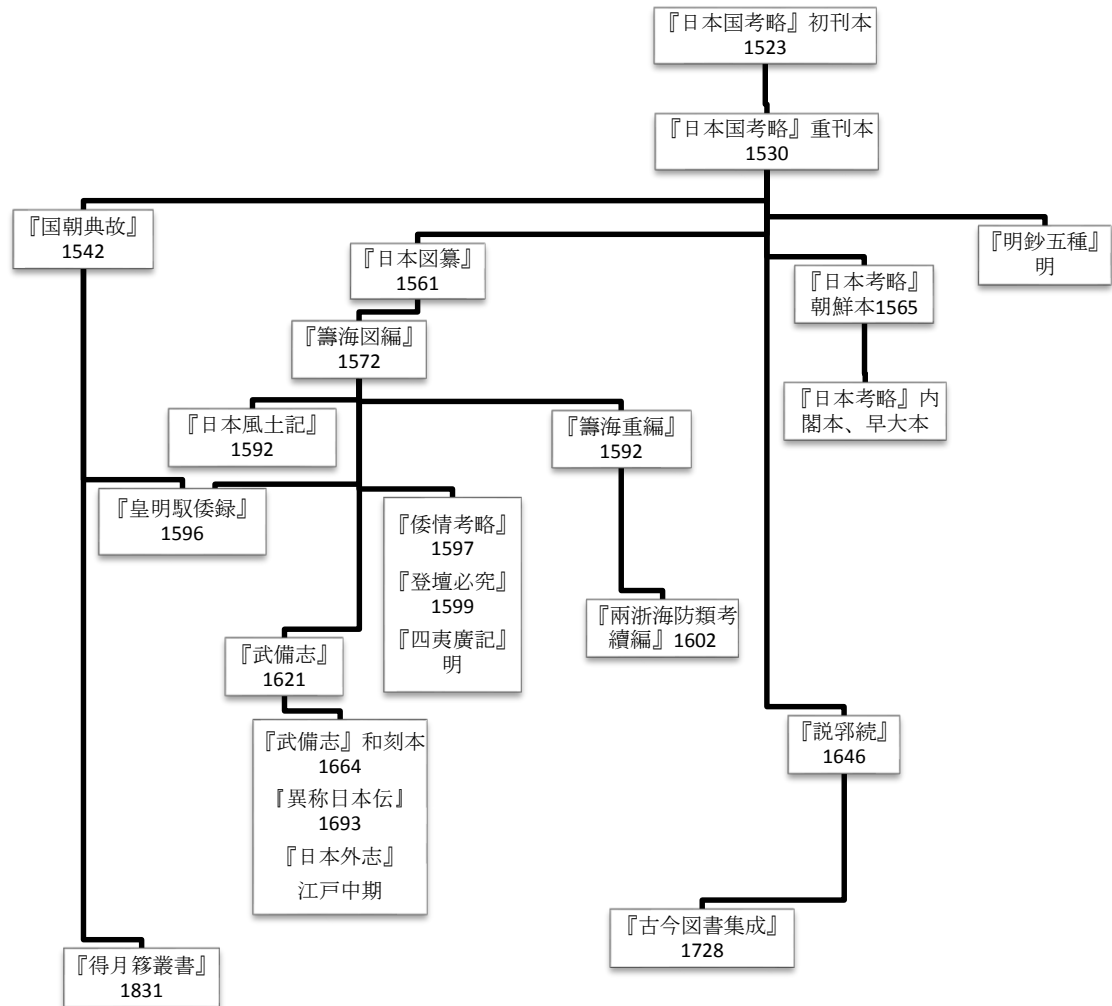
2.5.3. 『日本外志』江戸中期

江戸時代の儒学者山本北山が編纂した写本である。『異称日本伝』に収められていない日本に関する書籍を集めた補遺のようなものである。

本書には『日本国考略』の重刊本を収め、寄語もそのまま転載してある。そのほかに『全浙兵制考 日本風土記』も収録している。

3. まとめ

以上、『日本国考略』の重刊本、叢書本及び寄語の転載本について考察した。所載寄語の比較を通して、寄語の伝承関係を捉えることができた。それを図示すれば、以下のようになる。



『日本国考略』は初刊本の成立から『得月簞叢書』にかけて、三百年余りの年月を経て

数多くの書物に引用転載され、後世へ大きな影響を与えたと言えよう。その継承の脈絡を正確に把握することは、言語学的な研究のため直接役立つ基礎的な研究である。『日本国考略』の初刊本が発見されない限り、重刊本を最善本として扱われることになるが、重刊本の誤りを確かめるには、現在調査可能な諸本の中、重刊本を底本とした書、つまり重刊本に近いものを校訂に用いるべきである。従って本論文は東洋文庫本、『国朝典故』本、『日本図纂』、『籌海図編』、『続説郭』本、『得月簞叢書』本、さらに朝鮮本の中の内閣文庫本、早大本¹⁰を照合することにする。その一覧表を末尾に資料として掲載する。

【注】

¹ 東大史料編纂所蔵本は、建仁寺両足院謄写本である。ただし、寄語略の章は欠けている。

² 『韓国所蔵中国漢籍総目 史部』による。未見。

³ 中国国家図書館の検索サイトによる。未見。ID 番号：602001008213。

⁴ 尹漑については、『朝鮮人名辞書』に「尹漑：字は汝沃。晦齋と号す。坂平の人。炯の従曾孫なり。業を慕齋金安国に受け中宗丙子文科に登り、史曹佐郎と為る。乙卯の禍に斥けられて外官と為る。漢語を能くするを似て、僅かに世に容れらる。人となり細故に精しく、大体を知らず。人或いは以て礼を知ると為す。乙巳礼曹判書となり、尹元衡に附して以て士禍を作し、衛社の衛勳に録せられ、鈴平府院君に封ぜられ、辛亥右相を拝し、左議政に至り、几杖を賜る。宣祖の初勳爵を追削せらる。」とある。

⁵ 乙卯倭変は達梁倭変とも呼ばれ、嘉靖三十四年（1555）、日本の五島を根拠地としていた明人王直を首魁とする大海賊団が七十余隻の船団で全羅道方面に行動して、大いに朝鮮の朝野を戦慄させた大事件である（田中健夫 2012 参照）。

⁶ 柴申晟氏の御教示による。筆者未見。

⁷ 中国国家図書館の検索サイトによる。未見。ID 番号：411999008958

⁸ 大友 1959 による。未見。

⁹ 中国国家図書館の検索サイトによる。未見。ID 番号：411999024604

¹⁰ 朝鮮本の三つの写本のうち、東大史料編纂所本は誤写が多く、寄語略が欠如しているので、対象から外すことにする。

第3章 寄語の解説

第1節 『日本国考略』の所拠言語

1. はじめに

前述のように、音注漢字の音声特徴から『日本国考略』の所拠言語が呉方言であることは先行研究により明らかにされている。さらに所拠言語を寧波方言、また定海方言と特定し、それを基に研究を進めた先学もある。ただし、これらの指摘はいずれも著者が定海の出身ということのみに拠っており、言語学的な分析や論証の面においては検討が不十分である。仮にその結果としての指摘が正しいとしても、論証過程が欠けているという問題がある以上は、その上に展開する論証も、仮説の上に仮説を積み上げるものになってしまう。

ところで、呉方言の大きな特徴、また他方言との区分について言えば、趙元任 1928 は、声母の幫滂並、端透定、見溪疑におけるそれぞれに対立があること、つまり中古音の全濁声母の並、定、疑母が清音化しないということを第一に挙げた。それに従うと、呉方言の範囲は江蘇省南部、上海市、浙江省などの広い地域を含み、話者はおよそ7千万人もいると言われている¹。その下位に太湖方言、台州方言、甌江方言、婺州方言、処衢方言という五つの地域の方言があり、さらにこれらの下位方言は細分化されている²（本節末尾の資料参照）。要するに中国七大方言の一方言と呼ばれる呉方言とは、江蘇・浙江一帯に位置する、全濁声母の保持という音声特徴を持つ複数の方言の総称である。

従って『日本国考略』の所拠言語が呉方言とはいえ、具体的にどこの下位方言に属するかという問題を解明することが本論文において重要な手順であり、後に行う考察の土台となるものである。本節では、それについて論じることとする。

2. 著者の出身、及び寄語の編纂目的

所拠言語が編著者の母語である可能性については、筆者も先行研究の指摘に賛成する。『日本国考略』は著者の薛俊が鄭余慶の指示を受けて編纂したものであることが、本書の序文や『寧波府志』などに述べられている。鄭余慶は閩人、すなわち福建の人で、おそらく母語は閩方言であろう。所拠方言が呉方言であるからには、鄭余慶は寄語の編纂に関わらなかったと見るのが自然であろう。

前述にしたように、『寧波府志』「文苑」に「薛俊、字梓山、定海人通之子」という記述がある。なお『日本国考略』王文光序にも「薛子定人也」があるので、薛俊及びその父の薛通とも定海の人であることが分かる。明代の定海県（現在寧波市鎮海区）は、寧波府（現在寧波市より狭い行政地域）内の東北に位置する県である。従って、薛俊は定海で生まれ育った人で、その母方言は寧波方言である可能性が高い。

『寧波府志』「文苑」にはまた「嘉靖三年、由歲貢授常州訓導、陞浮梁教諭、以文行董率諸生、人咸重之」とある。薛俊は 1524 年から、常州（現在江蘇省常州市）訓導、浮梁（現在江西省内）教諭に任命されて故郷を離れた時期があるが、いずれも『日本国考略』の編纂後のことであり、編纂前には定海県に暮らし、故郷を長期間離れたことはなかった

と思われる³。要するに、薛俊は『日本国考略』の編纂までに他の方言地域で生活することなく、その母方言である寧波方言を使っていた可能性が高いということになる。

前に挙げたことでもあるが、『日本国考略』「寄語略」の末尾に次のことが書かれている。

以資衛辺將士之聽聞、亦防禦之一端也

これはすなわち、防衛策の一端として寄語を前線の兵士に習わせるという寄語の編纂目的を述べたものである。寧波府において来貢の日本船や商人の事務を扱っていたのは、浙江市舶司であった。一方、海上防衛にあたるのは定海衛、觀海衛、昌国衛などの衛所であり、それぞれ寧波府内の舟山諸島、慈溪県、象山県に設置され、それぞれ軍事上の要衝であった。特に定海衛は来貢の船が寧波に到着する前に通る場所である⁴。「衛辺將士」とはおそらくこれらの衛所の兵士のことを指しているのであろう。そうであれば、寧波方言を寄語の所拠言語とするのがより合理的である。

3. 寧波方言音の反映

以上、著者と編纂目的から所拠言語は寧波方言と考えられるので、ここでは寧波方言に注意を向けて考察することにする。

寧波方言は、吳方言の下位方言である太湖方言に属している。太湖方言は吳方言の下位方言の中で最も広い地域に分布しており、さらに毗陵方言、蘇滬嘉方言、苕溪方言、杭州方言、臨紹方言、甬江方言に分かれる。甬江はおおむね現在の寧波市と舟山市の地域を指している。舟山はもともと寧波市の管轄下にあり、明代洪武の初期においても寧波府の所轄⁵であったため、甬江方言を本論文では便宜上、寧波方言と呼ぶことにする。

3.1. 諸撰における知章組と精見組

寧波方言の音韻特徴について言えば、效、流、咸、深、山、臻、宕（知組）、曾の諸撰における知章組の字が細音字として対応すること、すなわち主母音または介音が[i][y]である音節とあり、同韻の精見組の字と混同することである⁶。例えば、

（知章組）朝招[tɕyo] = （精見組）焦嬌[tɕyo]

（知章組）肘帚[tɕiv] = （精見組）酒九[tɕiv]

（知章組）珍真[tɕin] = （精見組）津巾[tɕin]

この特徴は『日本国考略』にも見られる。

章組：71 丈人 守多（シウト）、72 丈母 守多謬（シウトメ）、190 死 身大（シンダ）、215 足 挨身（アシ）、289 塩 収河（シオ）、

精組：80 親眷 新雷（シンレイ）

「身」、「新」は臻撰、「守」、「収」は流撰の字である。これらの字は細音字であったからこそ、シ、シウ、シンに当てることが可能になったと考えられる。吳方言の下位方言におけるこれらの字を比較してみると、次の表1のようになる（音価は錢 1992 を参照、太湖方言の地域が広いため、三つの代表地域を選出する）。

【表 1】

	太湖方言			甌江方言	処衢方言	台州方言	婺州方言
	寧波	蘇州	上海	温州	衢州	黄岩	永康
身	[ɕiŋ]	[sən]	[səŋ]	[sɿŋ]	[ʃɿən]	[ɕiŋ]	[səŋ]
新	[ɕiŋ]	[sim]	[ɕiŋ]	[səŋ][sɿŋ] ⁷	[siŋ]	[ɕiŋ]	[səŋ]
守収	[ɕɿ]	[səi]	[ɕɿu]	[ɕiu]	[ʃɿu]	[ɕiu]	[ɕiəu]

表から分かるように、章組が細音で現れ、精組と区別しない（「身」＝「新」）地域は台州方言と太湖方言の寧波のみである。

なお、婺州方言については他の呉方言に見られない特徴が知られている。それはすなわち咸、深、山、臻、宕、江、曾、梗、通の諸摂舒声における幫母、端母を[m]、[n]と発音することである。例えば、東[noŋ]、且[na]である。しかし『日本国考略』では32「水 明東（ミヅ）」、22「明日 亞失旦（アシタ）」とあり、端母の「東」「旦」はタ・ダ行に当てられている。従って、婺州方言の可能性を排除することができる。

また甌江方言、例えば温州方言については、效摂一等字の韻母が中舌非円唇の[ɜ]、二等字では奥舌円唇[ɔ]で現れる⁸。例えば、

- 一等：「報」[pɜ]、「老」[lɜ]
- 二等：「包」[puɔ]、「交」[kuɔ]

のように一等より二等のほうに円唇性がある。しかし『日本国考略』では、100「媳婦 嫌妙報（ニョウバウ）」、86「和尚 刁老（チャウラウ）」とあり、一等字を用いる。この点においても、甌江方言の可能性を排除できるのではないと思われる。

さらに処衢方言については、果摂の韻母の多様性という特徴が報告されている。ここで開化、龍遊、慶元の地域を挙げるならば以下のようなものである⁹。

- 多：開化[to]、龍遊[tu]、慶元[dai]
- 蘿：開化[le]、龍遊[la]、慶元[la]
- 個：開化[kɛ]、龍遊[kəʔ]、慶元[kai]
- 婆：開化[bie]、龍遊[bu]、慶元[po]
- 貨：開化[ɕye]、龍遊[xu]、慶元[xo]

しかし『日本国考略』の音注では、果摂は主にオ段に対応しており¹⁰、処衢方言のこの特徴は見られない。

- 25 前日 阿多堆（オトトイ）
- 151 喜 姚羅扛歩（ヨロコブ）
- 216 心 个个路（ココロ）
- 304 梅子 面婆水（メボシ）
- 187 換 皆賀（カオウ）

それゆえ、やはり所拠言語の可能性は寧波方言と台州方言にのみ残ることになる。両地域は地理的に隣接しており、音声的に近くても不思議ではない（本節末尾の図参照）。そもそも台州方言においては子音[k k' g h]が狭母音[y]に前接することが特徴とされている。

一方、寧波方言では狭母音[y]に前接するのは子音[tɕ tɕ' dz ɕ]である。例えば、

台州方言：「挙」[ky]、区[k'y]、跪[gy]、虚[hy]¹¹

寧波方言：「挙」[tɕy]、区[tɕ'y]、跪[dzy]、虚[ɕy]

のようである。とはいえ、この区別は寧波方言において牙喉音の口蓋化が起こったことにより生じたものである。それについては後に詳述するが、19世紀以前には、寧波方言における牙喉音は台州方言と同様な音節[ky]、[k'y]、[gy]、[hy]を保持していたわけである。要するに『日本国考略』成立当時において寧波方言と台州方言とはかなり近似する方言同士であったということになる。そうであるならば、『日本国考略』の考察に際して、現在の寧波方言、台州方言という分け方に従わなくても差し支えないのである。

3.2. 後部歯茎音

また19世紀西洋人資料の考察を通して、当時の寧波方言に後部歯茎音のあったことが分かった。それについては後に詳述する。現代日本語のシ、シャ、シュ、シヨの子音は他のサ行音[s]と異なり、歯茎・硬口蓋音[ç]（または後部歯茎音[j]）である。『日本国考略』では基本的に後部歯茎音の漢字を用いて、当時の日本語のシ、シャ、シュ、シヨ、セの子音を忠実に写している。サ行の音注と『日葡辞書』のローマ字綴りを次の表2で比べてみる。

【表2】

	寄語音注漢字	19世紀寧波	日葡辞書
サ	晒	sa[sa]	sa[sa]
シ	水	shü[jy]	xi[çi]
ス	宿	soh[soʔ]	su[su]
セ	十	jih[ziʔ]	xe[çe]
ソ	梭	so[so]	so[so]

『日本国考略』におけるサ行の音注が、室町末期の『日葡辞書』に見られるサ行の子音とほとんど合致することは明白である。後部歯茎音は19～20世紀の上海方言、蘇州方言などには見られない。これも『日本国考略』の所拠言語が寧波方言である、もう一つの証拠と言えるのではないかと思われる¹²。

3.3. lとnの混同

また、鼻音nと流音lの混同が『日本国考略』に見られることも注目される。

89 強盜 六宿鼻脣 (ヌスピト)

116 賊 陸宿人 (ヌスニン)

181 殺 其奴 (キル)

184 不曉得 惜頼路 (シラヌ)

日本の諸方言の中に、ナ行とラ行の混同がほぼ見られない。しかし、中国の諸方言の中

では、鼻音と流音を区別しない南方方言が多くある。呉方言の地域においても、閩方言や粵方言ほど混同地域が多くはないが、散見される。しかし寧波西洋人資料では『日本国考略』のような混同を反映していない。現在の寧波でも鼻音と流音は基本的に区別されている。

しかし、寧波に隣接する紹興市の嵊州市の太平、崇仁では、鼻音と流音の混同が見られる¹³。ただし、その混同はすべての音節に起こるのではなく、合口と細音に限られている。例えば、以下のようなものがそれである。

泥母「努」[lv]=来母「炉」[lv]
泥母「那」[ʔna]≠来母「拉」[ʔla]
泥母「泥」[ni]≠来母「礼」[li]¹⁴

『日本国考略』におけるナ行とラ行の混同ではすべてウ段音に起こっていることは一目瞭然であり、この特徴はまさに太平、崇仁の混同条件、すなわち合口と細音であることと合致するのである。16世紀の寧波でもこの条件で鼻音と流音の混同が起こっていたのではないかと推測される。

現在ではこの混同が見られないというのは、おそらく標準語の普及により、規範性が求められ、ついに実際の音韻意識にも影響を及ぼすようになったのではないかと考えられる。筆者の母語である粵方言においても、もともと鼻音と流音の混同が激しかったが、今でもその区別を完全に失われたというわけではない。しかし標準語の普及により、その混同はこれ以上深刻な状態になるとは思われぬ。

3.4. 「環」の子音

現在、山攝二等合口匣母である「環」など（ほかに「寰」「鬢」「鑽」）が他の匣母字[h]と異なり、子音[g]で読まれるのは多くの呉方言の特徴である。明代においてすでにこの特徴が現われていたとされる（古屋 1982）。しかし「環」を[huen]のように発音されるわずかの呉方言地域、例えば、寧波、黄岩、余姚、衢州もある。寧波西洋人資料の『字彙』はwænまたはgwænと記録しており、『The Ningpo Syllabary』1901ではwænとのみ書いている。gwæn([quen])は北部地域の影響を受けてできた発音かもしれないが、とにかく、19世紀の寧波でも[huen]という読み方を持っていたことが分かる。

一方、『日本国考略』では

313 鶏 泥環多礼（ニワトリ）

という項目がある。「環」はワ行に当てられている。その子音が[g]でなく、[h]であることは日本語のワを写すのに適している。これも所抛方言が寧波方言である可能性を示してくれる一つの証拠と言えよう。

4. 結び

以上、『日本国考略』の著者の出身地、編纂目的、使用地域、また寄語の音注に反映した音声特徴から、『日本国考略』の所抛言語の可能性を論じてみた。編纂状況に合うことはもちろん、呉方言の下位諸方言のなかで、以上の音声特徴に最も符合するのが寧波方言

であった。台州方言にも同様の特徴が観察された。およそ百年時代を遡れば、台州方言と寧波方言の間に大差はなかったと考えられる。

従って、以下の考察は所拠方言と目される寧波方言を中心に行うことにする。

【注】

¹ 錢乃栄 1992。

² 傅国通他 1985,1986、錢乃栄 1992。しかし、李栄他 1987 では宣州の辺りも吳方言の一地域と見なし、下位方言を六つの地域に分ける。

³ 『日本国考略』鄭余慶引に「薛生俊者」、「未偶於時」と述べているから、当時の薛俊は官職もなく、一般の生員であることが分かる。生員とは科挙時代、院考に合格して府州県学の学生となった者をいう。

⁴ 朱莉麗 2013 参考。

⁵ 洪武十九年（1385年）倭寇の侵害により住民のすべてが大陸に移住させられ、舟山は寧波府象山県の所轄になったという。

⁶ 傅国通他 1986。

⁷ 白読[səŋ]、文読[sΛŋ]、鄭張尚芳 2008 も参照。

⁸ 鄭張尚芳 2008 参照。

⁹ 曹志耘他 2000 参照。

¹⁰ ウ段に対応するものもある。

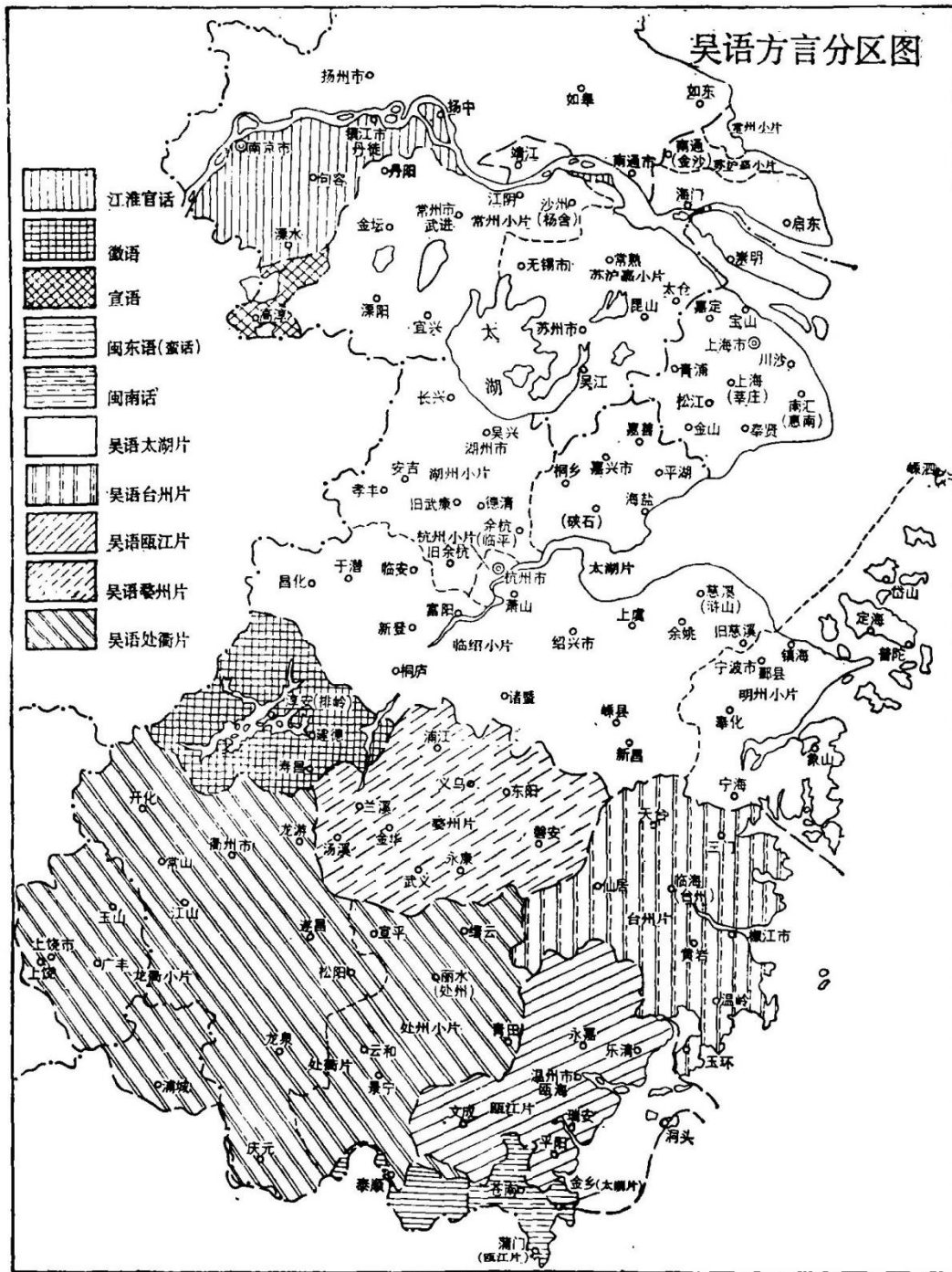
¹¹ 黄曉東 2007 も参照。黄 2007 では精密表記で、「擧」[cy]、区[c'y]、跪[jy]、虚[çy]としている。

¹² 錢乃栄 2003、石汝傑 2011、丁邦新 2003。

¹³ 錢 1992 による。

¹⁴ 錢 1992 による。

【資料】(傅国通他 1986:2 引用)



第2節 寄語の解読

『日本国考略』の初版は散逸し、現存の各版本では特に寄語略の章において異同が多く見られる。それは版刻される際の誤刻であろう。その各版本の異同により、先行研究の解読もそれぞれ異なっている。

解読の違いは寄語に対する音韻的な研究にも大きな影響を与える。この節では先行研究では触れていない『国朝典故』本、早大本などの版本を対照し、先行研究の解読を参考にしながら、改めて寄語の解読を進め、それに考察を加える。

1. 凡例

先行研究の解読と違った解読をする場合には先行研究の解読も並列し、次の符号で記することにする。

- B：天啓刻本 1621 『武備志』に見られる解読の振り仮名。
- M：松下見林 1694 『異称日本伝』巻中六「武備志」に見られる解読。
- U：鶴子直 1792 『武備志』巻二百三十に見られる解読
- E：Edkins, J. 1882. A Chinese and Japanese Vocabulary of the Fifteenth Century
- S：Satow, E. M. 1882. Notes on Dr.Edkins' Paper A Chinese-Japanese Vocabulary of the Fifteenth Century
- I：今西春秋 1936-1938 「日本図纂中の日本寄語」
- H：浜田敦 1951 「日本寄語解読試案」
- F：福島邦道 1959 「『日本寄語』語解」
- O：大友信一 1963 『室町時代の国語音声の研究』

以下の参考書についても略称を用いる。

- 『日国』：『日本国語大辞典』第二版
- 『日方』：『日本方言大辞典』
- 『全方』：『全国方言辞典』（及び『標準語引 分類方言辞典』）
- 『日葡』：『日葡辞書』（『邦訳日葡辞書』を使用）
- 『明清』：『明清呉語詞典』

『寧波土話初学』『The Ningpo Syllabary』『An Anglo-Chinese Vocabulary of the Ningpo Dialect 字語彙解』『Ningpo Colloquial Handbook 寧波方言便覧』を以下「寧波西洋人資料」と呼ぶことにする。

また、解読を行う際、東洋文庫本を底本とするが、本書における改行や脱字、誤刻あるいは音注漢字の解読を保留するなどの場合は以下の符号で示すことにする。

- ／：割注の改行
- △：字の解読を保留
- ：脱字
- ：訂正
- ：誤刻及びその訂正箇所
- ()：解読案

2. 解読

【天文類】

1. 天 天帝 (テン△)

E は *tento* と読み、I はテントと読み、H はテンと読み、O はテンチと読む。

「天」をテンで読むことは先行研究でも一致しており、問題は「帝」をどう解釈するかである。O は天地の意味と解釈したが、天文類に属していることと、「地」が地理類に出ているので、天地と解釈することについては少し疑問に思われる。また、「天帝」の音注は『日本風土記』に引かれているが、類似の音注は他の中国資料に見られない。

『日方』『全方』によれば、鹿児島方言では天のことをテンズという言い方があり、「天上」の転訛とされている。ここでは「天帝」は天地でなく、天だけの意味を表している可能性が考えられる。ちなみに、空を「天竺 (テンヂク)」と呼ぶ地域もある。ここでは「天」をテンと読み、「帝」の解読を保留としておきたい。

2. 日 虚路 (ヒル)

S は *koro* と読み、I、H、O はヒルとしている。

「日」を昼間の意味のヒルに当てるのは意味がずれているようであるが、寧波方言などの呉方言においては、昼間のことを「日里」、「日頭」と呼ぶのが一般的である。しかも、「虚路」の音声面から、他の意味は考えにくいので、ここではヒルと解するのが妥当である。

3. 月 禿計 (ツキ)

E は (*toke*) と読み、それ以外ではツキとされている。ツキのほうが妥当であろう。

4. 星 付泥 (△△)

E は「泥」を「洗」に改めて *hoshi* と読んだが、各版本には「洗」の字が見られない。『The Ningpo Syllabary』では「洗」を *sin* と表記するが『An Anglo-Chinese Vocabulary of the Ningpo Dialect 字語彙解』では *si* とするように発音が乱れている。洗うという意味で「汰」という語を使うのが呉方言の特徴であるため、「洗」という字に対する馴染みがないのではないかと考えられる。

「付」をフと読む例が 11「落雨」の項に見られるが、ホと読むのは他に見られない。『日本風土記』では「伏西」としている。この「付」は「伏」の誤刻の可能性もあるので、この二字の解読を保留とする。

5. 風 有朱 (△△) / 加前 (カゼ)

E は「有朱」を *usi* と読み、S は *arasi, kaze* と読んでいる。他では「加前」をカゼと読んでいるが、「有朱」については解読していない。

「前」は寧波西洋人資料では *dzin* としており、全濁の従母に属するので、ここではゼと読むのが適切であろう。先行研究に従い、「加前」をカゼと読んでおく。

「有朱」については S はそれを訓読だと考えて、*arasi* と読む。『全方』『日方』によれば、南風をヨウズと読む近畿、中国、四国などの地域がある。さらに検討を要する。

6. 雲 朽岡 (△△)

「岡」は内閣文庫本では「岡」となっているので、Eは **kumo** と読む。M、I、Hもクモとしている。確かに「岡」は「岡」の誤刻であると見られるが、同じ朝鮮本系統の早大本では「岡」となっており、『日本風土記』『日本図纂』では「木」となっている。「岡」は常用の漢字でもなく、用いられることが不審である。しかも、宕撰の字で、寧波西洋人資料では **mông** ([mɔŋ])¹ である。クに当てるにも問題がある。したがって、「岡」は必ず「岡」の誤刻であるとは言えない。

「朽」も解きにくい。早大本、内閣文庫本などでは「朽」となっているが、曉母字の「朽」はクには当てにくい。『日本風土記』では「枯」としているが、『日本図纂』では「因」となっている。「因」は「困」の誤りであろうが、「困」をクと読む用例は他に見られない。ここでは両字の解釈を保留する。

7. 雨 挨迷 (アメ)

Eは **ame** と読み、他ではアメと読んでいる。それに従う。

8. 霧 吉利 (キリ)

先行研究ではキリと読まれている。それに従う。

9. 雪 計伏六→□計伏六 (□キフル) / 攸計 (ユキ)

M、Uは「攸計」をユキと訓じ、Eは **yuki** と読んでいる。特に問題はない。

「計伏六」についてはIはケフルと読んで、疑問符をつける。Hは「計」の前に一字が脱落し、本来の意味は「雪降る」のことに指摘している。Oも一字が落ちたとして、ユキフル、ユキと読んでいる。確かに「伏」をフで読む語は以下にも現れるので、「伏六」をフルと読むことにする。

10. 霜 名未→名末 (△モ) / 碎満→碎満 (シモ)

「未」は早大本と『日本図纂』では「末」となっており、恐らくモに当てられたものであろう。「末」を「未」と間違ふことは本書に数箇所見られることから、ここも「末」と考えてよい。しかし、「名」については読みにくい。Sはそれを「石」や「夕」の誤りとして、**shi** と読んだが、「石」と「夕」とともにシと読む用例はない。しかも後に検討するシを写す音注漢字は寧波西洋人資料で **sh** と綴るものばかりであり、「石」と「夕」はいずれも **s** と綴るので認め難いところがある。ここではと保留としておきたい。

一方、Eは「碎」を「薛」とし、**si** と読む。しかし、「薛」は他本に見られない。また、内閣文庫本、早大本では「碎」となっており、『国朝典故』本では「碎」となっている。「薛」の声母は幫母[p]なので、シとは読めない。「碎」は「碎」の誤り、あるいは異体字であろう。「満」はモと読んで特に問題がない。

11. 落雨 挨迷 (アメ) / 付魯 (フル)

Eは **ame furu** と読んでいる。他でもすべてアメフルとしている。それに従う。

ちなみに北京語などの北方方言では雨が降るということを「下雨」というが、呉方言な

どの南方方言では「落雨」という言い方をする。

12. 雷 付路 (△△)

Oは保留としている。他でも解説されていない。

「雷」の項目は重刊本、内閣文庫本、『国朝典故』本、得月簾叢書本に見られるが、他の伝本にはない。後に加えたものであろうか。また、「付路」をフルと読むことは可能だが、「雷」の意味で解説できないので保留とする。

【時令類】

13. 早 來運接接 (△△△△) / 発耀 (ハヤウ)

「來運接接」は解説できない。

「発耀」についてはEは hayo と読み、Iは「接接発耀」を一語とし、ヤヤハヨと読み、Hは「接接」はサウサウ (早早) である可能性を指摘した。少々無理があるように感じられる。またOは「発耀」をハヤウと読んでいる。確かに「発耀」は、ウ音便でハヤウと読むのが妥当である。

14. 夜 搖落 (ヨル)

Sは yoru と読み、他でもすべてヨルとしている。「落」は宕撰開口一等入声で、寧波西洋人資料では loh また lôh としており、オ段の口に相応しいものである。『日国』によれば、「夜」をヨロという岩手、茨城、埼玉、千葉、岐阜、静岡、鳥取などの地域がある。オ段とウ段の母音交替である。ただし、入声音の「落」の主母音が短いので、ウ段にあたると考えることも可能である。ヨルと読んでおく。

15. 午 非路 (ヒル)

Sは hiru と読み、他でもすべてヒルとしている。それに従う。

16. 晩 搖撒田五→搖撒里 (ヨウサリ、ヨサリ)

Eは yukata と読み、Sは「搖撒瓦田」に本文を訂して yosagata と読んだ。Iは「搖撒」をヨサと読み、Hは「田五」を「里」の誤りとし、ヨウサリと読んでいる。Oは『日仏辞典』に「yousari、ユウサリ」とあるので、ユウサリとする。

ユウサリともヨウサリとも読めることは確かであるが、『日国』には「『ゆうさり』『ゆさり』は夕方になること。また、その時。夕方。夕刻。」「『ようさり』『よさり』は夜。また、夕方。」とあり、ユウサリとヨウサリは母音交替形である。14「夜」の項の「搖」はヨと当てられているので、ここはヨウサリまたはヨサリとする。

17. 明 挨介水 (アカシ)

Eは akasi、他でもアカシと読んでいる。これに従う。

18. 暗 骨辣水 (クラシ)

Sは kurasi、他でもクラシとしている。これに従う。

19. 冷 三孝水 (サブシ)

『武備志』と『登壇必究』では「三孝水」となっており、Mはニブシと読んでいるが、その他の版本はすべて「三」である。サブシと読むのが妥当であろう。Iはサムシとし、Eはsamusiとsabusiとの二つの可能性があるとして述べ、Sはsabusiとし、HとOはサブシとした。『日本館訳語』でも「冷 三不世(サブシ)」とある。ムとブとの子音交替である。ここではサブシと読むことにする。

20. 煖 挨掇水 (アツシ)

Uはアサシとしており、「サ」は「ツ」の誤りであろう。Eはatsusiと読み、Iはアタシにし、「あたたかい」の意味を取ったと思われる。他の先行研究では「アツシ」としている。ここでは「アツシ」の読み方にするが、一つの根拠を補足したい。

中国語の「煖」は「暖」の異体字である。暖かいという意味で考えることもできるが、ここでは暖かいという意味ではなく、気候の暑さを意味する語と考えたい。その理由はまずこの項目が时令類に入っており、「煖」は気候に関することばのはずである。今でも揚州では気候の暑いのことを「暖」と言うのである。そこで「煖」は気候の暑さを意味しているので、ここではアツシと読んでよいと考える。

21. 今日 詐以呼鷄声 (注釈) / 介喬 (△△)

Iはコイニチと読み、Eはkioと読み、HとOともにケウと読んでいる。注の一行目は音注でなく、音に関する注釈で、鷄を呼ぶ時の擬声語のように考えたい。ただし、『説文解字』に「呼鷄重言之、从田州声、讀若祝」とあり、『吳下方言考』『鎮海県志』(鎮海すなわち定海)には「呼鷄曰𪛗𪛗、𪛗音祝」のような説明がある。これはすなわち鷄を呼ぶ時の擬声語は「祝」のような音だということであるが、「祝」は寧波西洋人資料ではtsiuであるので、「今日(ケウ)」に近い音ではない。

また、「介喬」にも問題がある。「介」は他の五箇所でカに当てられている。「喬」は他に用いられていないが、效撰三等字であり介音iをもつ。「介喬」を反切のように理解すれば、kjoと読めるが、類例がない。保留とする。

22. 明日 挨速→挨速 (アス) / 亞夫旦→亞失旦 (アシタ)

東洋文庫本では「挨速」でなく「挨速」となっているが、『国朝典故』本では「速」、内閣文庫本では「述」、『日本図纂』では「迷」となっている。EとSはasuと読み、Oはアシタが『日仏辞典』で朝の意味で用いられていることから、「挨速」も朝の意味で、アクル(ルが脱落)と解説した。「速」がスと読まれるのは138「不在」の項にも見られるので、やはり「速」の誤りと考えられる。

「亞夫旦」は先行研究がすべて「夫」を「失」の誤りとして、アシタと読んでいる。それに従う。

23. 後日 亞撒里→亞撒田 (アサッテ)

Eはasatteと読み、Iはアサとしたが、疑問符をつけている。Mは「里」を「呈」に改めてアサッテと読み、他の先行研究でもそれに従っている。しかし、「呈」は他の音注に見られない。「呈」は澄母、破擦音であり、テに当てることは適切ではない。355「不是」

の項では「田」をデに当てている。ここはまさに 16「晩」の項の反対で、「里」は「田」の誤りとして、テと読むべきではないか。

24. 昨日 傑奴 (キノウ)

E は kino と読み、B と I はキノとし、H と O ではキノウと読んでいる。ここではキノウにする。

25. 前日 阿多堆 (オトトイ)

S は ototoi、M と U はヲトトイ、I はオトツイ、H と O はオトトイと読んでいる。「堆」は蟹摂灰韻一等合口で、現在寧波の白読音で[tei]となっている。円唇性は失ったが、韻尾 i は維持している。寧波方言における蟹摂灰韻一等合口字の特徴と言える。ここではオトトイとする。

26. 日暮 非故路路 (ヒクルル)

S は hikururu と読み、他でもすべてヒクルルと読んでいる。それに従う。

27. 今日來 个阿耶俚 (△オヤレ)

「个」は『武備志』では「介」となっており、H の指摘のように、呉方言の「介」と「个」とは通用することも多い。しかしいずれにしても、ケウの発音には似ていない。21「今日」の項の寄語「介喬」と関係しているかもしれないが、ここではこの字を保留とする。

「个阿耶俚」の解説については M はケヨリと読み、U はケウヨリと読み、S は kiô oi yari とし、F は「个」を除いてオヤリとし、H はキョウオヤレまたキョウオリヤレと読み、O はケウオヤレと読んでいる。さらに H は「おりやれ」の変化した形の「おやれ」であると指摘する。『日葡』にも「Voriari, ru, atta. (おりやり、る、つた) 有る、来る〔……の状態、位置にある〕」があるので、ここでは H の説に従い、「阿耶俚」をオヤレと読む。ただし、注意しなければならないのは、呉方言における「来」は「来る」という意味のほかにも、「ある、いる」という意味もあるということである。

28. 明日來 挨戍打俚→挨戍打□□俚 (アシタ□□レ)

M と U はアスヨリと読み、H は「戍」を「戌」の誤りとしてシと読んだ。O もそれを認め、さらに二字の脱落があるとして、アシタオヤレと読む。ここは O に従い、アシタオヤレと読んでおく。

29. 後日來 挨殺核阿耶俚 (アサ△オヤレ)

S は asatte oiyari と読み、I はアサツテオヤレと読むが、テのところに疑問符をつけている。H と O もテについては疑問とした。「挨殺核」はアサツテの他に読めない。ただ、「核」はテと読み難いので、H と O の意見に賛同し、それのみを保留とする。

【地理類】

30. 地 大様 (△△) / 禿智 (ツチ)

I は「大様」をタヤと読み、「禿智」をトチと読んでいる。「大様」については他の先行

研究は保留とするが、「禿智」についてはEは tuchi、他でもツチと読んでいる。温州方言では「様」が ji となっており、「大様」をタイ（田居）と読むこともできるが、同じ宕撰三等以母の「羊」はヤに当てることが多いので、ここでは「大様」を保留とする。

「禿」については、3「月」のツに「禿」が当てられているから、ツチと読むことにする。

31. 山 羊売（ヤマ）／耶売（ヤマ）

Eは yama、他でもヤマと読んでいるが、ただIは「羊売」をヤンマと読んでいる。「羊」の鼻音韻尾を考慮に入れたのであろうか。「羊」はヤに当てられることがほかにもあるし、次のマの子音 m の影響もあるので、ここではヤマと読んでおきたい。

32. 水 明東（ミヅ）

Eは midzu と読み、他でもミヅと読んでいる。それに従う。先行研究の指摘通りに、ここからヅはまだ破擦音化していなかったことが分かる。

33. 海 烏彌（ウミ）

Sは umi と読み、他でもすべてウミと読んでいる。それに従う。

34. 石 依水（イシ）／在木古→依水古（イシコ）

「依水」についてEとSは ishi と読み、他でもイシと読んでいる。「在木古」については、IとOでは石木材の意味でザイモクと読んでいる。しかし、石木材が地理類に入ることは無理がある。Eは ishiko と読んでいる。その理由として「木」を「水」の誤りだと指摘する。ここではそれに賛成するが、ほかに一点を補足したい。それは「在」も「依」あるいは「衣」の誤りと考えられることができるということである。そうすると、「依水古」と改め、小石という意味でイシコと読むことができる。

35. 沙 阿吉大水（△△△△）

Iはホチタシと読んでいるが、他の先行研究では解説していない。ここの「沙」の意味はおそらくOの指摘のように、面積の小さい海の陸地や砂浜である。音注漢字も寄語の中でよく使われているものばかりである。そのままに読むと、オキダシであるが、どういふ語か不明であるため解説を保留する。

36. 火 非（ヒ）

Sは hi と読み、他でもヒと読んでいる。それに従う。

37. 郷 羊埋俚（△△△）

Iはヤンムラと読んでいる。他では解説していない。ここでも保留とする。

38. 江 打各計（△△△）

Iはタコクと読んでいるが、他では解説していない。ここでも保留とする。

【方向類】

39. 東 熏加→熏加口（ヒガ口）

東洋文庫本などは「熏加」となっており、天啓刻本『武備志』でも同じように音注漢字が二文字しかなかったが、UとMでは「熏加什」となっている。重刊本ではシに当たる一字が脱落した可能性がある。

Iはヒンガ、Eはhingashiと読んでいる。他の先行研究ではヒガシと読んでいる。ここでは「熏加」をヒガと読んでおく。

40. 南 迷南来→迷南米（ミナミ）

東洋文庫本は「迷南来」となっているが、内閣文庫本、早大本、『国朝典故』本では「迷南米」となっている。「来」は「米」の誤りであろう。

先行研究ではIはミナンミと読んでいるが、Eはminamiとし、そのほかもすべてミナミと読んでいる。ナの音注に「南」という字が選ばれたのは、写音だけでなく、記憶の便宜のために南という意味が考慮されたのではないか。次の41の音注「西」も同じようなものである。ここはミナミと読んでよい。

41. 西 義西（ニシ）

Eはnisiと読み、他でもすべてニシと読んでいる。

「義」は疑母で、中古音では子音が[n]であり、現在では北方方言の多くはjiとなるが、寧波方言などの呉方言では[n]とも読まれる。ニに当てることには問題がない。音注の「西」は寧波西洋人資料ではsiとされており、もっとも相応しい漢字ではないが、記憶上の便宜のために選ばれたのであろう。先行研究の解説に従う。

42. 北 尤兀俚（△△△）

UとMでは「計多」となっているので、ともにキタと読んでいるが、中国の伝本のほとんどは「尤兀俚」である（『日本図纂』では「兀木」）。保留とする。

43. 前 日皆門利婆（△△△△△）

先行研究で解説されていない、難解のものである。保留とする。

44. 後 吾失利（ウシ△）

Eはusiroと読み、Iはウシリと読む。UとMがよる底本には「吾」の字が脱落していたので、UとMはこれをシリと読んだ。その他はウシロと読んでいる。「利」はロと読めない、何かの誤りであろう。「利」だけを保留とする。ちなみに『日本語源大辞典』では「後ろ」の語源にウシリがある。

【珍宝類】

45. 金 空措泥（コガネ）

Eはko-ganeと読み、他もほとんどコガネと読んでいるが、Mはコカネと読む。黄金の意味で取れば、コガネと読んで異論はない。

「措」は溪母で清音であり、他の多くのところではカに当てられている。濁音に当てら

れるのは假撰に群母の字が排されていないので、清音の溪母、見母の字を使わざるをえなかったと考えられる。「空」が鼻音韻尾 η を持つことは、おそらくガの鼻音的要素を表すためであったと考えられるので、ここはコガネと読む。

46. 銀 失禄措泥 (シロカネ)

S は shiro-gane と読み、M はシロカネとし、他ではシロガネと読んでいる。

ここにも 45 と同じように「措」がカとガのどちらに当てられたかという問題があるが、『天草本平家』や『日葡』に Xirocane としているので、『日本国考略』の成立時はまだシロカネと読まれていた可能性が高い。また、「措」の前の「禄」は入声であり、鼻音韻尾の字を使わなかったことから、「措」は清音のカを表したことになるのではないか。ここではシロカネと読む。

47. 珠 他売 (タマ)

E は tama と読み、他でもすべてタマと読んでいる。問題はない。

48. 錢 前移 (ゼニ)

E は zeni と読み、他でもゼニと読んで意見が一致している。

「移」は以母であり、他のところではイに当てる。ここでニに当てるのはおそらく、中国人の耳には ze.ni が zen.i と聞こえたためであろう。解説は先行研究に従う。

49. 黄銅 中若左→中若古 (チウジャク)

B と M はチウジャク、E は「申若右」として sinchiu と読み、H はチュウジャク、O はチウジャクと読んでいる。

「左」をクと読むのは無理であり、『日本風土記』には「中若古」とあることから、「左」は「古」の誤りである可能性が高い。ここでは「中若古」に改め、チウジャクと読んでおく。

50. 紅銅 鶯更措尼 (アカガネ)

B、M、U、I はアカカネと読み、E は連濁した akagane とし、H と O もアカガネと読んでいる。

寧波西洋人資料では「鶯」が白読で ang であるから、ここでアと読むことに問題はない。「更」は「鶯」と同じ梗撰二等で、カと読むこともできる。「措」の前の音節は「更」であるから、「措」はガと読むほうが適切である。『邦訳日葡辞書』にも「Acagane アカガネ」とあるから、ここでもアカガネと解説する。ただし、問題は「鶯更」において「鶯」が鼻音韻尾の字だということである。法則的にはこれをアガと読むべきであるが、この点は不明である。

51. 水銀 明東措泥 (ミヅガネ)

S は midzu-gane と読み、他ではすべてミヅカネと読んでいる。ただし、鼻音韻尾をもつ「東」に後接する「措」は濁る音ではないか。『日国』『全方』によれば、「みずがね」と読む岐阜県恵那郡、山口市などの地域があるという。ここでは、ミヅガネと読む。

52. 好銅錢 姚礼善尼 (△△ゼニ)

U と M はヨリゼニと読み、I はヨイゼニとし、S は yorizeni, yoizeni と読み、O はヨイゼニとした。「好」を形容詞と考えればヨイゼニと読んでもいいが、「礼」は他にもレと当てられているので、イと読むことには無理がある。「姚礼」は保留とする。

「善尼」をゼニに読むことについては異論がない。

【人物類】

53. 皇帝 大利 (ダイリ) / 天三家里 → 天王家里 (テンワウ△△)

E は「大利」を dairi と読み、I はダイリテンノーと読んで疑問符をつけた。O は「大利」をダイリとし、「天三」を「天王」の誤りと見なしてテンワウと読んでいる。

「内裏」また「大里」は、天皇の住居を中心とする御殿をいうところから転じて天皇のことを指すようになった。そこで「大利」をダイリと読むのは妥当である。「天三」が『国朝典故』本、『日本図纂』では「天王」とあるので、恐らく「天王」の誤りであろう。テンワウと読める。「家里」については見当がつかないので、保留とする。

ちなみに「天王家里」は天皇の家という意味で「内裏」の説明文である可能性もある。

54. 官 大米 (ダイメイ) / 烏野鷄 (オオヤケ)

M は「野鷄」をヤケと読み、E は daimiō, oyake と読み、S は tami, oyake と読み、I は「大米」をダイミウ、H はダイミョウ、オオヤケ、O はダイメイ、オオヤケと読んでいる。

「大米」が大名という意味を表すことについては異論がない。ただし「米」はメイとミャウとどちらに読むかが問題になる。『文明本節用集』には「大名タイミャウ 大名 (メイ) ハ守護 / 大名 (ミャウ) ハ錢持 (ゼニモチ)」とあり、両方の読み方が見られる。ところが「米」は蟹摂四等開口で、拗音には読みにくいので、メイと読むのが穏当であろう。

「烏野鷄」は H と O に従い、オオヤケと読む。

55. 百姓 別姑常 (ヒャクシャウ)

S は hiaku-shō と読み、I はバクショウとし、他ではヒャクシャウと読んでいる。

オ段長音の開合については後述するが、「常」は宕摂開口三等で、ヒャクシャウと読むのが穏当である。

56. 大官 大大鳥野鷄 (△△オオヤケ)

H はオオヤケと読んで「大大」は正訓文字とすべきとした。O は「大大」を説明と解釈した。ただ、21「今日」の項においては、説明と音注とが分かれて二行の注のようになっている。ここに「大大鳥野鷄」と一行になっているのは一語の音注と考えることもできる。また、二番目の「大」は「米」の誤りである可能性もある。つまり何らかの手違いで、54「官」の音注をつけてしまったのかもしれない。「大大」については保留とする。

57. 公 翁知 (オオヂ)

S は oji, I と H はオヂとしたが、I は疑問符もつけた。O は『日仏辞典』『節用集』で「祖父」のことを「オオヂ」とするので、「翁知」をオオヂと読んでいる。ここでも O に従っ

て、オオヂと読んでおく。

58. 婆 猶蒲 (△△) / 翁妃 (△△)

Iはオバと読み疑問符をつける。他では保留としている。57「公 (オオヂ)」から見て、ここは祖母の意味と思われるが、「猶蒲」「翁妃」をどう読むべきか難解である。

59. 父 阿爺 (オヤ)

B、U、M、H、Oはオヤ、EとSは一字が脱落したとして *oyaji* と読んでいる。

『日方』によれば、父のことを「おや」と呼ぶ地域に仙台市と宮古島がある。また『日国』によれば、鹿児島方言に「おやっどん」「おやっちゃあ」「おやっ」「おやっきん」などの言い方があるそうである。なお、『古今著聞集』1254に「ともなる力者法師ききとがめて、『おやまきの聖覚や、ははまきの聖覚や』など、ねめつつ、見かへり見かへりにらみけり」とあって、「はは」に対して「おや」があるので、父のことをオヤと言っていたかもしれない。

また、Oに指摘されるように、『節用集』にも「親父 (おや)」とあることから、ここはオヤと読んで良いであろう。

60. 母 発発 (ハハ)

先行研究はすべてハハと読んでいる。それに従う。

61. 兄 挨尼 (アニ)

Sは *ani* と読み、他もすべてアニと読んでいる。アニが妥当である。

62. 嫂 阿尼尤尼 (アニヨ△)

先行研究ではすべてアニヨメとしているが、Eは「尼」を「米」に改めて *me* と読み、Oは「尼」について、マ行音をナ行音に誤聴した結果だとした。

『日本風土記』では「嫂」が「阿尼揺密」とある。従って、ここはアニヨメを写したことは確かであり、二番目の「尼」は前の「尼」の影響を受けて誤ったと考えられる。ここでは前三字をアニヨと読み、二番目の「尼」を保留とする。

63. 弟 阿多多 (オトト)

Eは *ototo* と読み、他でもすべてオトトとする。それに従う。

64. 妹 亞尼多 (△△△) / 一沒多 (イモト)

「一沒多」についてEは *imoto* と読み、Sは *imōto* と読む。他ではイモトと読んでいる。それに従う。

「亞尼多」についてはI、H、Oがアネトと読む。中国語の「妹」は日本語と同じ意味で、姉の意味は含まない。「姉」の項目も次に出てくるので、「亞尼多」は何かの誤りかもしれない。これを保留としたい。ちなみに『全方』によれば、千葉県夷隅郡では「妹」のことを「あねご」と言う。

65. 姊 亞尼 (アネ)

E は **ane** と読み、他もすべてアネと読む。それに従う。

66. 嬪 完多 (△△)

I はヲトと読んでいるが、他は保留にする。H は、「完」はヲと読めないと指摘している。ここも保留とする。

67. 子 莫宿哥 (ムスコ)

E は **musuko** と読み、他もすべてムスコと読む。それに従う。

68. 姪 阿義 (オイ)

U と M はヲイ、E も oi と読む。O もオイと読んでいるが、「義」にいささか訛りがあると述べた。

「姪」は「甥」と同じ意味で取れば、オイと読める。しかし疑母の「義」は寧波西洋人資料では **ni** で、現在でも[ni]としか読めない。ところが、『日本風土記』では「戊 義奴 (イヌ)」「姪 何義 (オイ)」とある。「義」がイに当てられるのは[fi]のような文読音で読まれた可能性がある。ここでは「阿義」と直してオイと読むことにする。

69. 女 莫宿眠 (ムスメ)

E と S は **musume** と読み、他でもすべてムスメと読んでいる。それに従う。

70. 孫 阿奚 (オイ) / 胡來 (△△)

B は「胡來」をマコと読み、E は「胡來」を「麻哥」と改めて **mako** とした。O は「阿奚」をオイとしたが、「胡來」については不明としている。

「奚」は蟹撰四等匣母で、寧波西洋人資料では **yi** としている。匣母の字はア行に当てることが多いので、イと読んでもよい。『字通』には「甥」は姉妹の子、また兄弟の子、外孫とある。また『昆山新陽合志』²には「名不正者、呼姪為孫、呼外孫為甥」とある。呉方言において甥は外孫の意味もあったらしいので、ここではオイと読んでおきたい。「胡來」は保留とする。

71. 丈人 子多→守多 (シウト)

E は **shiu-to**、I はツト、H はシュウトと読み、O もシウトと読んでいる。

「子」は精母 (破擦音 **ts**) であり、他の項目でもツ・ズに対応しているにも拘わらず、ここで摩擦音の **s** に読むのはやや疑問である。『日本風土記』では「守多」とし、また「丈母」の項目に「守多妙」と記している。「子」は「守」の誤刻であろう。続く 72「丈母」の「子多謬」も「守多謬」であった可能性が高い。ここでは「守多」と改め、シウトと読む。

72. 丈母 子多謬→守多謬 (シウトメ)

E は **shiu-to-me**、I はツトメ、H はシュウトメと読み、O もシウトメと読んでいる。

71「丈人」を参照。ここでも「守多謬」と改め、シウトメと読む。

73. 叔 阿治→阿治 (オヂ) / 王前老官 (△△△△)

東洋文庫本は「治」とあるが、『国朝典故』、『日本図纂』などでは「治」であるので、「治」は「治」の誤刻と考えられる。「阿治」についてUとMではヲヂとし、Eはojiとし、IとOではオヂと読んでいる。ここでもオヂと読んでおく。

UとMは「老官」をヲヂと訓じているが、これは難しいのではないだろうか。「王前老官」については保留とする。

74. 丈夫 壽山 (△△)

Eはjiu-samaと読んでいる。他では解説していない。中国語の「丈夫」というのは、夫あるいは男の意味である。次の75「婦人」は妻の意味であることから、ここは夫の意味であろう。ただし、「壽山」は不明である。保留とする。

75. 婦人 倭家倒 (ワカタウ)

BとMはヲタカとし、Iはワガツ(マ)、Eはonnako-go、HとOはオタカと読んでいる。

中国語の「婦人」は成年女性、既婚の女性、また人の妻のことである。『日国』にオカタ(御方)は「中流以下で、他人の妻を呼ぶ語。近世では農家や一般町家の人妻に対していったが、青森県や九州地方では、今でも格式ある家の主婦に対していう。また、宮城・山形県や関東・甲信地方では、自分の妻のことを他にいう場合や陰口に使う。」とあるので、ここでは妻の意味で取るのがよいであろう。

「加」はカに多く当てられるので、同音の「家」をもカと読んで良いだろう。「倒」は效撰一等の字でau韻母を持っている。これは他の效撰一等の字からも支持される。例えば「老」がラウ、「幫」はバウに当てられている。ここでもタよりはタウと読んだほうが良いだろう。そして「倭」は合口で、オでなく、ワを写したと考えられる。

従って、ワカタウと読むことができる。「婦人」をワカタウと読むのは不審であるが、78「後生」では音注が「倭加達」となっている。78の音注と入れ替わったのではないか。ここでは、ワカタウと読むことにする。

76. 男子 阿奈公姑 (オノコゴ)

Mはオナコノコ(女子)と訓じた。恐らく当該項目を「男子」ではなく「女子」と考えているようである。Bはコノコ、Iはオノコとしながら、疑問符もつけている。Eはotokoとよみ、Oはオノコゴとしたが、Oは「奈」をノと読むことに無理があるとも指摘している。

「奈」をナと読むとオナコゴとなる。女子の意味ではオナゴ、オンナゴという言葉は確かにあるが、オナコゴは見当たらない。ちなみに、中国語の「奈」は蟹撰開口一等泥母と果撰開口一等泥母に属しており、両読されていたようである。ここでは果撰の方で読まれていると考えれば、「奈」をノと読むことは問題ないであろう。

『日方』によれば、群馬県、多野郡、島根県石見、広島県比婆郡などの地域では男の子のことをオノコゴと呼ぶという。従って、オノコゴと読むことにする。

77. 老 禿古要个 (△△△△)

Eは「禿古要个」を「禿昔要利」と改めて toshiyori と読み、Iはトシヤクと読んでいる。Hはスコヤカとも読むべきかとしたが保留にしている。Oは不明とした。

人物類に属することから「老」は老人のことであろうが、音注漢字については見当がつかない。保留とする。

78. 後生 倭加達 (オカタ)

Bはヲカタ、Mはワコタチとし、Sは wakatachi、Iはワコタ (チ) とし一字が脱落したとした。HとOはワカタウと読んでいる。

前述のように、75「婦人」の項と音注が入れ替わったと考えられるので、「倭加達」をオカタと読んでおく。

一方、この中国語の「後生」は若者、青年の意味である。寧波でも同じ意味で用いられる。若党 (ワカタウ) とは、若い従者や若い侍の意味になるので、少々意味上のずれは残る。

79. 孩 歪爛鼻 (ワランベ)

U、M、Iはワラベ、Eは akambo、Sは warambe、HとOもワランベとしている。

「爛」はEのようにカとは読み難い。文明本『節用集』では「童」をワランベと読んでいる。ここでもワランベと読んでおく。

80. 親眷 新雷 (シンルイ)

Sは shin-rui と読み、他でもすべてシンルイと読んでいる。それに従う。

81. 朋友 道門大聖 (トモダ△) / 瀾門大帝 (△モダチ)

Bは「門大聖」をモタチとし、Uは二行の音注をすべてトモタチとしている。Mでは「道門大聖」をトモタチ、「門大帝」をモタチと読んでいる。IはMと同じくしているが、所拠資料の『日本図纂』には「瀾」が「満」となっており、それをマと読んでいる。

「朋友」は友達の意味であるが、「瀾」は『国朝典故』本、『得月簞叢書』本では「閻」となっており、『日本図纂』では「満」となっている。いずれにしても難解である。また、「聖」についても見当がつかないので、この二字については保留とする。

82. 姐夫 木哥迷 (ムコ△)

Eは muko、Oもムコと読んだが、「迷」を衍字としている。Hは「め」が謙遜を表していると考えている。

「姐夫」は姉の夫という意味である。次の83「女婿」でも「木哥」をムコと読んでいるので、ここでもムコと読む。「迷」は保留としておく。

83. 女婿 木哥 (ムコ)

ムコと読むことに異論はない。先行研究に従う。

84. 僕 三字即→三孝郎□ (サブラ□)

Eは sannsuke と読み、Hは「字」を「孝」の誤りとしてサブラウに読む可能性を指摘し

た。Oはそれに従い、サブライと読んでいる。

「僕」は「僕」の異体字で、仕える者の意味である。侍の意味であろう。「即」については読みにくい、早大本では「郎」としているの、その誤りであろうか。そうすれば、「郎」をラと読むことは無理ではない。サブライのイに当てる漢字は脱落した可能性がある。とりあえず「三字即」を「三亭郎」とし、サブラと読むことにする。

ちなみに、篠崎久躬 1997によれば、長崎方言では召使のことを「さぶろう」とも呼ぶという。

85. 小廝 歪皆水 (ワカシ)

B、U、Mはワカシ、Eは wakai-shi、Iもワカシと読み、若い衆とした。HとOはワカシと読んでいる。

「水」は圧倒的にシに当てられるので、ここだけシュと読むのは少し問題がある。もちろん、シュとシの混同とも考えられるが、若衆から転じてワカシと読むこともできる。『日国』によれば『滑稽本・続々膝栗毛』に用例が見られるという。従って、ワカシと読むことにする。

86. 和尚 刁老 (チャウラウ) / 烏索→烏堂 (オシャウ)

「刁老」については、Iはサイロ、HとOはチャウラウとしている。

「烏索」については、Iはオショ、Eは osio、HとOはオシャウとしている。

「刁」は端母 t でありサとは読み難い。ここは長老の意味でチャウラウと読んでよいであろう。「烏索」をオシャウと読むことに関しては第4章第1節で述べるが、「索」はおそらく「常」の誤刻であろう。

87. 老實人 埋骨多 (マコト)

Eは makoto と読む。他でもすべてマコトと読んでいる。それに従う。

88. 艱難人 胡奈故人 (ウナクニン) / 間関人 (△△△)

Fはカナシと読んでいるが、他では解説されていない。

『日本風土記』にも「艱難人 白流古/胡奈故人門関人」とあるが、同様に難解である。

『日方』では「うなくだち (女立) : 寡婦。鹿児島県奄美大島」とあり、そして「女」を「うなぐ」と読む地域は奄美大島と沖縄県北部に見られるという。『全方』でも寡婦の意味で「ういなぐやぐさみ」が南島首里に見られるという。

「うなく」あるいは「うなぐ」と読むとしたら、寡婦という意味に近い。「艱難人」という中国語は「艱難」が苦難や困難という意味で、寡婦の生活を指していた可能性も考えられる。「胡奈故人」をウナクニンと読んでおく。

「間関人」についてはやはり不明である。

89. 強盜 六宿鼻隨→六宿鼻惰 (ヌスビト)

Eは「六宿鼻隨」を「惰六鼻」として dorobo と読んでいる。MとUはヌシヒト、Sは「隨」を「惰」と改めて nusubito と読み、H、O、Iもヌスビトと読んでいる。

「隨」は「惰」の誤りと考えてよいだろう。「六」をヌに当てるのは頭子音 n と l の混

乱と考えられる。それは当時の寧波方言の問題であろう。ここではヌスビトと読んでおく。

90. 獨眼人 密皎 (△△) / 關鴻 (△△)

Mは「關鴻」をカンタとし、Sは「密皎」を mekkō、Iは「密皎」をメコとし、「關鴻」をカンあるいはメカンチとする。Oはこれらを保留とする。

『全方』では北海道、仙台、庄内、東北、大分などの地域において、隻眼の意味でメッコと呼ぶという。しかし、「皎」は效撰二等で寧波西洋人資料では kyiao としている。キヤウと読めるが、コと読むには無理がある。保留とすべきであろう。

「鴻」は『国朝典故』本では「鳴」となっており、メに当てられたかもしれないが、ここでは保留とする。

91. 瞎子 眉骨頼 (メクラ)

Sは mekura と読み、他でもメクラと読んでいる。それに従う。

92. 你 撫哥了 (△△△) / 梭俚 (ソレ)

Eは「撫」を「撫」、「俚」を「多」とし、さらに「撫」と「梭」との両字を入れ替えて sokomoto と読んでいる。Oでは「梭俚」をソレと読み、「撫哥了」を不明とした。

ソレは第二人称を指すこともあり、『日葡』に「Soresama, ソレサマ(それ様)あなた様」とあるので、ここでもソレと読んでよいであろう。「撫哥了」は読み難いので、保留とする。

93. 我 阿埋俚 (△△△) / 阿奴利 (オノレ)

Uではワモレ・ヲノレ、Mはワレヲ・ヲノレ、Eは ore, onore、Sは oriri, onori、Iはオモレ・オノレと読んでいる。HとOは「阿奴利」をオノレと読んでいるが、「阿埋俚」は保留とした。

「阿奴利」をオノレと読むことについては異論がない。「阿埋俚」については「埋」がなければ、オレと読むことは可能である。また、『国朝典故』本では「埋」も「俚」となっていてオレレにも読めるが、ここではやはり保留としておく。

94. 誰人 荅梭 (タソ)

Iは「荅」をタと読み、「梭」を疑問として残す。Eは tazo、他はタソと読んでいる。

『日国』に「たそ(誰):不明の人について、直接問いかけたり、まわりの人に尋ねたりするときのことば。だれだ。だれですか。」とあるので、タソと読むことにする。

95. 徒弟 加食難 (△△△)

Eは deshi と読んでいる。Hはカシラと読み、弟子のことと首領のこととの食い違いではないかと述べた。しかし、やはり証拠が欠けているので、ここでは保留とする。

96. 財主妻 斗烏壳 (△△△)

「財主妻」はお金持ちの妻の意味であろう。『得月簞叢書』本では「財主」で、音注が「妻斗烏壳」となっているが、他の版本では項目が「財主妻」となっている。『日本風土

記』にも「財主妻」の項目があるので、ここも「財主妻」と考えてよい。

「斗」をツとし、「売」をマとしたら、ツマと読める。しかし、「鳥」は(『日本図纂』では「島」となっている)読み難い。また、「斗鳥」が「篤」の誤刻であれば、ツとも読めるが、保留とする。

97. 生得好 眉眉月失 (ミメヨシ) / 眉眉姚水 (ミメヨシ)

Eは mimeyoshi、Iは「眉眉月失」をミメユシと読み、「眉眉姚水」をミメヨシと読んだ。Uはメメヨシ、他の先行研究はミメヨシ・ミメヨシと読んでいる。Oは「月」をヨと読むことについて疑問とする。

中国語の「生得好」は格好いい、または綺麗な意味であろう。ミメヨシと読んで妥当である。

98. 外甥 萌哥 (マゴ)

Uは「甥」をコ、Iはムコと読んでいる。HとOは70「孫」と入れ替わったとし、マゴと読んでいる。

70の項でも述べたが、呉方言において甥は外孫の意味もあったので、ここでは寄語の入れ替わったミスでなく、呉方言の親族語の特徴を考慮してマゴとするのが妥当である。

99. 長子 難解水 (ナガシ)

Eは nagashi、Iもナガシと読んでいる。他では不明あるいは保留としている。

中国語の「長子」の意味は日本語と同じく、長男のことであるが、「難解水」をナガシと読むと、「長い」という意味になる。Oに指摘されているように『日本風土記』にも「長子」の項目があり、身長の高い人の意である。

そもそも「長」は両読され、有気音では「長い」という意味で、無気音では年上や地位の高い人の意味である。『明清』では「長子」を背の高い人と解釈している。また、『漢語方言詞彙』によれば、武漢、蘇州、温州、双峰において有気音の「長」は身長を指すという。なお、日本語の「長い」にも背が高いの意味がある。ナガシと読んでよい。

100. 媳婦 嫌妙報 (△ニョウパウ)

Eは kamisan、Iはヨメとした。Hは「妙」にナ行とマ行の混乱があったと見なし、エイニョウパウとした。Oはヨイニョウパウとした。ここでは「嫌」のみを保留とする。

「妙報」は女房の意味で取ればいいが、「嫌妙報」をエイニョウパウと読めるかどうかについてはにわかには同意できない。ニョウを写す音節 niauは実は寧波方言に稀である。「尿」という常用字があるが、寧波ではそれを規範的な[nio]でなく、一般的に[sy]と読む。呉方言の字書『同文備考』では、「尿」について「寧教反」、また「恤回反」としている。「恤回反」は[sy]に対応する。そのため、子音 mの「妙」を使わざるを得なかった可能性があるもので、必ずしもナ行とマ行の混乱があったとは言えない。

101. 長 吊 (チャウ)

Eは chio、Iはチャウ、HとOはチャウと読んでいる。それに従う。この「長」は、地位の高い人や、かしらの意味であろう。

102. 年少 華盖 (ワカイ)

Bはワカ、Eは *wakai*、他でもワカイと読んでいる。

「盖」は蟹撰開口一等字で、現在寧波は[ke]であり、二重母音[kai]ではない。ただし、『日本国考略』では蟹撰開口一二等字、例えば「壳」はマに使うことが多いが、マイに使うこともある。当時の一二等字の i 韻尾が完全には失われていなかったことを物語っている。ここでもワカイと読む。

103. 主人 床杲孕 (△△△)

Eは「床杲孕」を「答晏孕」と改めて *danna* と読んだ。他では解説していない。

中国語の「主人」には夫の意味がないので、ここでは保留とする。

104. 生得醜 魯歪失→歪魯失 (ワルシ)

Eは *waroshi*、IとHはワルシ、Oは『日仏辞典』にワロシがあることを根拠に、ワロシと読んでいる。

先行研究では、「魯歪失」が「歪魯失」の誤りであったことに意見が一致している。それに従う。ワロシとワルシについては、「魯」は11「落雨」の項でルに当てられていることが参考になる。ワルシと読むことにする。

105. 聰明 力哥 (リコウ)

Bはリコ、Eも *riko*、他ではリコウと読んでいる。リコウと読んでよいであろう。

106. 貴 他介水 (タカシ)

Sは *takashi*、Uはタトシ、他ではすべてタカシと読んでいる。ここでもタカシと読む。

中国語の「貴」とは、値段が高いや、身分が高いという意味である。日本語では『日国』に「たかい：身分や地位が上位にある。高貴である」また、「容姿や品位がすぐれている。上品である」がある。この項目は人物類に属しているので、値段ではなく、高貴の意味で取ればよいであろう。

107. 賤 那朔→耶塑 (ヤスウ) / 羊碎水 (ヤスシ)

Eは「羊碎水」を「萬碎水」として *madzusi* と読み、Sは「那」を「耶」の誤りとして *yasu*, *yasushi* と読んだ。Iはいずれをもヤヒと読んでいる。FとOは「羊碎水」をヤスシと読み、Hは『得月簃叢書』本で「那望羊碎水」となっているので、これをナマヤスシと読んでいる。

106「貴」のタカシに対して、「賤」はヤスシと考えられる。さらに『日国』に「やすい：格が低い。身分が低い。品質が劣っている。」とある。従って、「羊碎水」はヤスシと読んでよい。

「朔」については早大本、『国朝典故』本で「塑」となっている。「朔」は江撰二等入声で、寧波西洋人資料では *soh* としている。「塑」は遇撰一等暮韻で、寧波西洋人資料では *su* としている。恐らく「朔」は「塑」の誤りであろう。「那」についてはSの説が妥当である。ここでは、「那朔」を「耶塑」と訂正してヤスウと読むことにする。

108. 富 烏多姑 (ウトク)

B と I はユタカ、E も yutaka、S は utoku、H と O もウトクと読んでいる。

『日葡』には「Vtocu. ウトク (有徳) 富裕な、豊かな (人)」がある。なお、『日国』にも「(形動) 富み栄えること。また、その人。金持ち。有徳人。」があるので、ここではウトクと読むことにする。

109. 貧 肥東旦 (△△△)

H は『日本館訳語』に「貧人 非老世那非多」、「艱難」を「非老世」と注すことから、「東」をラウとし、「旦」を「且」と改めて、「肥東旦」をヒラウシと読んでいる。他では解説されていない。

確かに H の指摘通りに、『日国』に「疲労 (ひろう) : 貧しい」という解釈がある。しかし、「東旦」は難解で、ここでは保留とする。

110. 乞丐 寛需計 (コジキ)

E は kojiki、他もすべてコジキと読んでいる。それに従う。

111. 好淫 梭羅 (△△)

B はトラ、E は sora、H は「房事を行う」の意で、スルと読んでいる。O は不明としている。

『日本風土記』では「娼妓」の項目を「紹樂」としている。O はそれを女郎の意でジョラウと読んでいる。「樂」は宕摂一等入声で、「羅」は果摂合ロ一等歌韻である。恐らく「樂」、「羅」とも口あるいはロウに当てられていたであろう。『日国』にも「じょろ」に「じょろ (女郎)」の変化した語。」という説明がある。女郎という語を写した可能性がある。

しかし、「梭」は臻摂合ロ一等で精母と清母とに両読される。いずれにしても濁音のヂョに相応しい音注とは言えない。ここでは解説を保留とする。

112. 年紀 一故都 (イクツ)

M はイク、E は ikutu、他もすべてイクツと読んでいる。それに従う。

ただし、「何歳」の意味でありながら、なぜ人物類に入っているかについてはやや疑問が残る。

113. 麻子 莫入 (△△)

内閣本、早大本、『日本図纂』などでは「莫入骨水」となっている。I は醜いの意味でミニクシと読んだが、疑問符をつけている。他では解説されていない。

中国語の「麻子」は「もがさ」、あるいは「あばた」の意味である。この音注はよく分らないので、保留とする。

114. 村 孫 (△)

S は sung とし、I はソンと読んでいる。H と O は『得月簞叢書』本の「孫」の下に缺字がみえるので、保留とする。村 (むら) を音読みすることは不審であるので、ここでも O

に従い、保留とする。

115. 拐 科水非計 (コシヒキ)

E は nusubito、U と M はサシヒキ、H と O はコシヒキと読んでいる。

『日国』に「こしひき：足が悪くて普通に歩けない人。また、いざって歩くこじき」がある。従って、コシヒキと読む。

116. 賊 陸宿人 (ヌス△)

E は nusubito、H と O もヌスビトと読んでいる。O が指摘したように、89「強盗 六宿鼻隨」と同様に、「六」「陸」は来母 l で、ヌに当てるのは l と n の混同であろう。

「人」については、ビトと訓で読まれるのは不審である。ここでは「人」の部分を保留とする。

【人事類】

117. 要 坡水水 (ホシシ)

U はホシ、S は hoshi-shi と読む。他でもホシシと読んでいる。

H はシク活用の形容詞の終止形の語尾をシシとすることは中世の文語としては珍しいことではないと述べる。ここでもホシシに従う。

118. 不要 依也 (イヤ)

E は iya、I はイエ、他ではすべてイヤと読んでいる。それに従う。

119. 立 達子 (タツ)

E と S は tatsu、他でもすべてタツと読んでいる。それに従う。

120. 等待 埋祖 (マツ)

E は matsu、他でもすべてマツと読んでいる。それに従う。

121. 眠 羊達路 (ヤドル) / 烏将率 (△△△)

H と O は「羊達路」をヤドルと読んでいるが、「烏将率」は不明とする。

ここでもそれに従うが、「達」は他ではタに当てられている。ここでドと読んでよいかという点に疑問が残る。

122. 拿來 木低吉歹俚 (モッテキタレ) / 未得哥已→未得哥已 (モッテコイ)

E は motte kitari, mottekoi、I はモテキタレ・モテコイ、他ではモテキタレ・モッテコイと読んでいる。

「未」はおそらく「末」の誤りであろう。入声の「末」で促音便を写しているのではないと思われる。

モッテキタレ・モッテコイと読んでおく。

123. 拿去 未低於古→未低於古 (モッテユク)

Eは *motte yuku*、Iはモテイク、他ではすべてモッテユクと読んでいる。
上と同じ「未」を「末」の誤りとすれば、モッテユクと読んで問題はない。

124. 乱説 思量骨多（スラゴト）／莫話介歹俚（モ△カタリ）

Sは「話」を「諾」と改めて *sirio-goto*、*monogatari* とし、Iはシランコトモオカタリと読んでいる。Hは「思量骨多」をシレゴト、またソラゴトとし、「莫話介歹俚」をタワケカタリとしている。Oはシレゴト、モノガタリと読んでいるが、「話」をノに当てることについては疑問としている。

「乱説」の意味については、光緒二十五年『黎里続志』³「方言」に「搬弄是非曰乱説」とある。すなわち嘘をついて紛争を引き起こすという意味である。『日国』には「痴事・痴言（しれごと）：ばかなこと。おろかなこと。また、ばかげたことば。たわごと」とある。シレゴトとも読めるが、寧波西洋人資料では「思」が *sz*、「量」が *liang* であるから、それぞれをイ段、エ段に当てることに問題がある。一方、『日国』に「空言（すらごと）：うそ、いつわり」があるので、スラゴトを写したのではないか。

モノガタリは少し意味がずれているようである。「話」はノと読めないのも、何かの間違いであろう。152「説話」の項には、連濁を起こさない「モノカタリ」がある。従って、ここでも連濁は起こっていないかもしれない。「話」だけを保留として、「介歹俚」をカタリとする。

125. 相擾 括計（△△）／括盆（△△）

先行研究では解説されていない。中国語の「相擾」の意味については『雅俗漢語訳解』に「相擾：ごぶさた（お邪魔）」という解釈がある。ただし、音注は読み難いので、保留とする。

126. 看 覓見（ミ△）／迷路（ミル）

「迷路」についてEとSは *miru*、他でもすべてミルと読んでいる。「覓見」は解説されていない。

「覓」は梗撰四等入声でミに当てることもできる。「見」はルと読み難いため、ここでは、「見」だけを保留とする。

127. 不送 何埋解（△△△）／邵壳（△△）

Eは *okurimasen*、Iはオマケ・ショマイ、Hはオマエカエショマイと読んでいる。Oは不明としている。

Oは「不送」の意味を「送らないとか客が主人にお見送りには及びませんか主人が見送らない時にここで失礼しますという意味」と解釈している。その通りであろうが、ただし人事類にこのような丁寧な言葉があることは稀である。ここでは保留とする。

128. 嬉 挨核蒲→挨孫蒲（アソブ）

Eは *asobu*、Iは「挨」を129「坐」の項にある「移路」の誤りと見なし、イロコブと読む。HとOは「核」を「孫」などの誤りとしてアソブと読んでいる。

確かに中国語の「嬉」は「遊ぶ」の意味であるので、ここではアソブと読んでよいだろう

う。

129. 坐 移路 (イル) / 阿拏~~掄~~→阿拏~~掄~~ (オリソウ)

「移路」については、E は *iru* と読み、他でもイルとして異論はない。F は「阿拏~~掄~~」をオリソと読んでいる。

「掄」を「掄」の誤りと考えれば、「拏」は臻撮合口三等入声で、リと読むことはできる。従ってここではオリソウと読むことにする。

130. 病 羊埋依子 (ヤマイ△)

「羊埋依」について E は *yamai* と読み、他でもすべてヤマイと読んでいるが、「子」については U と M はト、E と I は保留、H と O は「病出づ」の意で、ヅと読んでいる。

しかし、ヅには全濁の字を使うはずである。ここでは「子」を保留とする。

131. 搨 科眉乃可→科眉乃 (ゴメンナイ) / 悵奈礼→可悵奈礼 (ゴメンナレ)

E は「科眉乃可」を *komanoku* と読み、H と O はゴメンナ・ゴメンナレと読んでいる。

「搨」は「搨」の異体字であり、両手で敬礼するという意味である。H が述べたように、「可」はおそらく次の行の音注で、「可悵奈礼」と見なすべきである。それならば「科眉乃」はゴメンナと読める。上述のように蟹撮一二等字の *i* 韻尾が完全に失われていないため、ここでもナイを写した可能性がある。長崎方言には「御免ない (ゴメンナイ)」がある (篠崎久躬 1997:199)。

「眉」がここでメンに当てられるのは後ろのナの影響も考慮してのことである。

132. 罵 寛彼計乃俚 (△△△△△) / 話鸞褪皮 (△△△△△)

E は *nonoshiru* と読んでいるが、他では解説していない。中国語の「罵」は叱ることや罵ることの意味で、133「詈」と意味が類似しているが、この音注はよく分らない。保留とする。

133. 詈 烏論羊埋水 (△△△△△) / 烏爺蛮計 (オヤマキ)

E はそれぞれ *uyamashi*, *uyamaki* と読む。I は「烏論羊埋水」をウラヤマシと読んでいる。他は保留としている。

「詈」は人を叱るという意味である。『日国』には『古今著聞集』1254「ともなる力者法師ききとがめて、『おやまきの聖覚や、ははまきの聖覚や』など、ねめつつ、見かへり見かへりにらみけり」という用例が見られる。人を罵る語とされている。「烏」が母音交替で、オに現れるところは他にもあるので、ここではオヤマキと読んでおきたい。

「烏論羊埋水」については「烏論」を「愚」のオルと読んで、「羊埋水」を「疾」のヤマシと読むことも考えられる。但し、典拠は見つかっていない。保留としておく。

134. 𪗇 因彼計 (イビキ)

E と S は *ibiki*、他でもすべてイビキと読んでいる。それに従う。

135. 睡 蜜路 (△△)

Eは *nemuru*、IとOはネルと読んでいるが、Oは「蜜」をネにすることに疑問を残す。筆者もOの指摘に同意し、保留とする。

136. 去 漫陀羅 (モドラウ) / 獺俚旦多 (△△△△)

「漫陀羅」についてSは *modoru*、HとOもモドルと読んでいる。

H、Oに従う。ただし、「漫」は他のところでマに当てられているが、同じ山撰合ロ一等の「満」はモに当てられていることもあるので、モと読めないこともない。また、「羅」はロに当てられるので、ルとは読みにくいという問題がある。ここは、意志形のラウを写したのではないかと思われる。177「買」、187「換」でも動詞の意志形が現れている。

「獺俚旦多」については、難解なので保留とする。

137. 在 何故伊虜 (オクイル) / 何耶路 (オヤル)

Eは *okayeri*, *oiyari*, Sは *okayeri*, *oiyaru*, Iはココイル・オヤルと読んでいる。Hは「奥に居る」の意でオクイル・オリヤルとし、Oはオクイル・オヤルと読む。それに従う。

138. 不在 論速 (ルス) / 持疎 (△ス)

Eは *rusu*、Iはともにルス、Hもルスと読んだが、「持」の如き文字をルに当てたのはラ行音をダ行音として発音する傾向のある方言を写したものとした。Oも「論速」「持疎」ともにルスと読んでいる。

「論速」をルスと読むことについては問題ないので、先行研究に従う。「持」については、確かに「持」は濁音の澄母なのでルに当てるのは無理である。『日国』によれば、「留守」をズス(岐阜・飛騨・静岡・鳥取・島根・伊予)あるいはヅス(八丈島・静岡・瀬戸内・佐賀・壱岐・鹿児島・大隅)と言う地域もあるというがここでは保留としておく。

139. 來 阿耶俚 (オヤレ) / 吉大→吉大□ (キタ□)

Sは *oiyari*, *kita*, Iは「阿耶俚」をオヤリとした。Hはオリヤレ・キタと読んでいる。Oはオヤレ・キタと読むが、キタはキタルのルが脱落したものと考えている。ここではOに従い、オヤレ・キタ□と読む。

140. 便來 羊解地何爺俚 (ヤガテオヤレ) / 慢陀的姑→慢陀的□姑 (モドッテ□ク)

Sは *yagate oiyari*, *modote ko*, Hはヤガテオリヤレ・モドッテコイ、Oはヤガテオヤレ・モドッテコウと読んでいる。

「羊解地何爺俚」についてはOに従い、ヤガテオヤレと読む。

「慢陀的」は136「去」の「漫陀羅」と同じ動詞「戻る」を写している。

ところで、次の141「便去」では音注「密路」が不審であり、こここの「慢陀的姑」と入れ替わった可能性がある。なお、「姑」はクに相応しいものである。その前にイに当たる一字が脱落していたとしたら、「帰る」という意味でモドッテイクと読むことができる。

141. 便去 密路 (△△)

先行研究では解説されていない。前述のように、140「便來」の項の「慢陀的姑」は、ここに属す可能性がある。「密路」の解説は保留としておく。

142. 回來 慢慢の何→慢陀的何 (モドッテオ) / 耶俚 (ヤレ)

『武備志』には「何」がないため、UとMはママテヤレとした。Sは *modotte oiyari*、Iはモドッテオヤリとし、Hは「慢慢」は「慢陀」の誤りであると述べて、Oはモドッテオヤレと読んでいる。

136「去」、140「便來」の動詞「戻る」と似ている。なお、中国語の「回來」は帰ってくるや戻ってくるの意味であるから、ここはOに従い、モドッテオヤレと読んでおく。

143. 快來 発下何耶俚 (ハヤウオヤレ) / 法古 (ハク)

Eは「法」を「滴」と改めて *haya kayetteko* と読んでいる。Sは *haya oiyari*、*hayaku*、Hはハヤオリヤレ・ハヤク、Oはハヤウオヤレ・ハヤクと読んでいる。

中国語の「快來」は速く来てという意味であろう。「下」は現在寧波では[io]にも読まれているから、「発下何耶俚」はハヤウオヤレと読むことができる。

「法古」はハヤクと考えられる。しかし、ここにはヤに当たる音注がない。160「快去」の音注にも「法古計」があり、これもハヤクと考えられるが、同じくヤに当てる字が見られない。当時用いられた日本語がハヤクのヤが落ちているであろうか。『日国』によれば、山梨などに「はやく」をハークや、ハクと言うことがあるという。ここでは「法古」をハクと読んでおく。

144. 送與我 面皮 (△△)

UとMはメンヒと訓じている。Eは、準拠する底本が「送與我 南皮」であるため、*manabi* と読んでいる。他は解説していない。

難解であるため、保留とする。

145. 愛惜 搖路扛蒲 (ヨロコブ)

Eは *yorokobi*、*bu*、I、H、Oはヨロコブと読んでいる。

しかし音注のヨロコブと「愛惜」とは意味が合わない。Oは、151「喜」の音注に「一掇水」と「姚羅扛歩」とあるが、「一掇水」が「搖路扛蒲」と入れ替わった可能性を指摘する。

ここではOに従ってヨロコブと読むが『日本図纂』、『籌海図編』、『武備志』などは「路」が「落」となっている。ルに当てられることが多い「路」は「落」の誤りかもしれないが、ロに当てられた例が他にも二箇所あるので、ここではロと読んでおく。

146. 怕 倭疎路路 (オソルル)

Uはオソル、Eは *osoruru*、他でもオソルルと読んでいる。それに従う。

147. 久不見 倭非怕水 (オヒ△シ) / 何面凸辣水 (オメヅラシ)

Sは *ohisashi*、*omedzurashi*、Hは「怕」を誤りとし、オヒサシ・オメヅラシと読んでいる。Oもオヒサシ・オメヅラシと読む。Oに従うが、「怕」は何かの誤刻であろう。保留とする。

148. 出去 一一計 (△イケ)

Eは ideyuki、Iはイイク、HとOは「一」を衍字としてイケとしている。
ここではOに従う。

149. 前行 殺鷄→殺鷄倭 (サキヲ)

内閣本では「殺鷄 (禾委)」、早大本、『日本図纂』では音注が「殺鷄倭」となっている。
Sは「倭」が前にあるとして osaki としている。Iはサケヨとし、疑問符をつけている。Oはサキと読んでいるが、「倭」が次の150「後行」の「後」の誤りであるとしている。

Oの指摘した通りであると思われるが、「殺鷄」がサキであっても、「前行」の「行」の意味は表されていないという疑問が残る。

「殺鷄倭」は相手に先を譲るという意味で「先を (サキヲ)」と読むこともできる。

150. 後行 挨尨門→行 挨尨門 (アユム)

Iはアルとし、疑問符をつけている。Eは aruku、HとOはアユムと読んでいる。

内閣本、早大本、『日本図纂』などでは、見出しが「行」のみである。それが正しいならば、「行」は呉方言などの南方方言において歩行の意味であるので、アユムという音注が適切である。私案では、東洋文庫本などの見出しの「後」字は前項の「倭」の誤りである。またユに当てる江撰の「尨」はおそらく「尨」の誤りであろう。

151. 喜 一掇水 (イトシ) / 姚羅扛歩 (ヨロコブ)

Sは ureshi, yorokobu、Iはイサミヨロコブ、Hはイトシ・ヨロコブ、Oはイトオシと読んでいる。

前述の通り、「一掇水」は145「愛惜」の音注「搖路扛蒲」と入れ替わったものである。

ただし、「掇」は短い入声音であり、『日葡』にも Itoxiy とあるから、ここはイトシと解説したほうがいいのではないか。

152. 説話 未納惣打俚→未納惣打俚 (モノカタリ)

Eは monogatari、U、M、F、Iもモノカタリと読んでいる。Hは「皆来たれ」の意でミナキタレと読み、Oは『節用集』『日仏辞典』により、モノガタリと読んでいる。

「未」は「末」の誤りであろう。ここではモノカタリと読んでおく。

153. 怠慢 難利是 (△△△) / 罵山好 (△△△)

内閣本、早大本、『日本図纂』などでは「難利骨多 / 罵山奴」となっているため、Sは nani-gotomōsaru、Hは「何事も為ぬ」の意でナニゴトモセヌと読んでいる。IとOもナニゴトモセヌとする。

ナニゴトモセヌと読むことには問題がある。『琉球館訳語』に解説しにくい一項目「作揖 撒哇利是禮」がある。「利是」を使っているところがここと同じだが、やはり難解である。音注から見ると、第5章第1節に述べるが、『日本国考略』におけるガ行の前には基本的に鼻音韻尾の字を使うので、このナニゴトのゴの前にだけ鼻音韻尾の字を使っていないことは不審である。やはり解説を保留とする。

ちなみに、呉方言では「罵山門」という人を罵る言葉がある、音注の「罵山」はそこか

ら取ったかもしれない。

154. 羞愧 番即山水水→番助皆水水 (ハヅカシシ)

内閣本、早大本、『日本図纂』などでは「即」が「助」となっている。また、「山」が早大本では「皆」となっている。

E は hadzukashi-shi、I はハズサシシ、H、F、O はハヅカシシと読んでいる。

H は「山」が「皆」の誤りであると指摘している。早大本でも確かに「皆」となっているので、ここでは「皆」と考えることにする。「即」については、「即」が清音の精母で、「助」は濁音の崇母である。ヅを写すならば「助」の方が相応しいので、ここでは「助」と改める。

155. 飲 那慕 (ノム)

E は nomu、他でもすべてノムと読んでいる。それに従う。

156. 吃 何売利 (オマイリ)

S は omaire、I はカブリ、H と O はオマイリと読んでいる。H は「お参り」の意で、すなわち現代語の「召し上がれ」の意味の語であると説明する。『日国』には「参る」に『食う』『飲む』の意の尊敬語。召し上がる。」という説明がある。

ここでは H と O に従い、オマイリと読んで差支えないと思う。

157. 独楽 哥売 (コマ)

E と S は koma、他でもコマと読んでいる。それに従う。

H は中国語として「独楽」が「こま」の意に用いられることは考え難く、本来は「独り楽しむ」の意の語としてここに入れられたのであろうと述べ、これに対して O は玩具の意味でもあるとした。玩具が人事類に入ることは少し疑問だが、読みから見ると、玩具の意で考えてよいであろう。

158. 安排 蘇路 (ソロ)

S は soroeru の意味で soro と読み、I はソロと読み、H は「為る」の意でスルと読み、O は『日仏辞典』に「soroï, eô, rôta, ソロウ、ロウ、ロウタ」があるのでソロウとした。

中国語の「安排」は支度、手配などの意味である。「する」「揃う」よりは「候」の意味に近い。また、『日葡』にも「soro ソロ (候) sôrô に同じ」がある。ここではソロと読んでおく。

159. 不来 未旦盧売矢 (△△△△△)

U と M はマタルカシ、S は motarumashi、I もモタルマシ、O は、内閣本で「未」が「木」となっており、「戻る」に否定の助動詞のマジをつけてモドルマジと読んだ。

内閣本、早大本では「売矢」が「売大」となっている。マタに当てられたのかもしれない。ここでは保留とする。

160. 快去 法古計→法古口計 (ハク口ケ)

E は hayayuki、I はハクケと読んでいる。H はイにあたる文字が抜けているとし、ハヤクイケとした。O もハヤクイケと読んでいる。

前述のように「法古」は早くの意で、訛りでハクあるいはハークと読まれていたと考えられる。そして、H と O が言ったようにイに当たる字が落ちていると考えれば（例えば「一」は落ちやすい）、ハクイケと読めることになる。

161. 走 法古 (ハク)

U と M はハシル、I はハク、H と O はハヤクと読んでいる。

北方方言の「走」は「歩く」の意味になっているが、南方方言では「走る」の意味で用いられている。この音注は前述のようにハクと読むことにするが、意味は少しずれているようである。ここは命令の「速く歩け」の意味であろうか。「法古」の後に文字が落ちているかもしれない。

162. 借 脛路 (△△) / 各夾 (△△)

E は karu と読む。H は、「脛」は何かの誤りで、「夾」は「失」の誤りかもしれないので、カルとカシではないかとした。O は H に従い、カル・カシと読んでいる。

「脛」は（内閣本、早大本では「胫」となっている）山撰開口三等仙韻徹母でカとは読みにくく、H の言うとおりに、何かの誤りと考えられるが、ただ「路」をルと読めることだけで、この音注がカルに対応すると推定することには無理があるので、ここでは保留とする。

「各夾」についても、「各」は宕撰入声でカに相応しいものとは言えない。さらに「夾」が「失」となっている他本は見当たらないため保留とする。

163. 添 所有路路 (ソユル△)

U は「所有」にソフとし、E と S は soyuru、I と H はソユルルと読んだが、H は「路」の一つは衍字であるとした。O も「路」の一つを衍字としている。

O に従い、ソユルと読んでおく。

164. 打人 生亜達達个 (△△タタカウ)

U と M は「達達个」をタタケとし、S は hitotataku、I はショアタタケ、F はシャタタケ、O もシャタタケと読んでいる。

「个」は宕撰開口一等見母で、寧波西洋人資料では go または ko となっているので、ケとは読み難い。意志形のカウと読むべきであろう。

「生亜」については、「生」が梗撰開口二等生母で、「亜」は假撰開口二等影母である。寧波方言においてはいずれも i 介音を持たないので、拗音のシャに当てることは無理である。ここでは「生亜」を保留とする。

165. 唱 嘔大 (ウタウ)

E は uta と読み、I は『日本図纂』の「嘔天」をウテンあるいはウタウと読んでいる。F は『日本館訳語』によってウタと読み、H と O は「唱」が動詞なので、ウタウと読んでいる。H、O に従う。

166. 痛 一 (車亘) 水 (イタシ)

E は itasi、S は itashi、他でもすべてイタシと読んでいる。それに従う。

167. 教 何水尤路 (オシユル)

M と U はヲシユル、E は osiyuru、他でもすべてオシユルと読んでいる。それに従う。

168. 買売 烏礼加→烏礼加口 (ウリカ口)

U と M はウリカイ、E は urikai、I はウリカ、H は「烏礼加一」ではないかと推定し、O はウリカイと読んでいる。

U と M が写した『武備志』には音注が「烏礼加一」となっている。ここでも「一」が脱落したと見なし、ウリカ口と読む。

169. 不吃了 禁哥 (△△)

M はケコと、H は下戸の意と説明している。O は『日仏辞典』、『下学集』や『節用集』にゲコ (下戸) があるのでゲコと読んでいる。

『日国』に「下戸：酒の飲めない人。酒を好まない人。」とあるが、「不吃了」はもう食べないあるいはもう飲めないという意味である。必ずしも飲酒に関していうわけではない。ここでは保留とする。

170. 多吃酒 阿賢鼻旦 (△△△△)

S は okebitashi と読んでいるが、他は不明としている。

難解のため、保留とする。

171. 売 為路→烏路 (ウル) / 無大→無六 (ウル)

E は uru と読み、他でもウル・ウルと読んでいる。

内閣本、早大本、『日本図纂』などは音注が「烏路、無六」となっており、恐らく「為」は「烏」の誤りで、「大」は「六」の誤りであろう。先行研究に従う。

172. 吃酒 麻黒晒鷄 (△△サケ)

S は「黒」を「里」と改め、「麻黒」と「晒鷄」を入れ替えて saka mairi と読んでいる。I はマムサケ、H は『日本図纂』に従い、「黒」を「墨」にして、ノムサケとしたが、「麻」がノに当たることには疑問がある。O もノムサケと読んでいる。

「黒」は「墨」の誤りとしても、「麻」の字をノに当てることには無理がある。それに、動詞が前置するのも日本語としては不審であるので、ここでは「麻黒」を保留とする。「晒鷄」については先行研究に従い、サケと読んでおく。

173. 莫恠 哥面乃礼 (ゴメンナレ)

U と M はコメンナレと訓じ、I はカミナリと読み、H と O はゴメンナレと読んでいる。

H、O が述べるように、中国語の「莫恠」は「すみません」「ごめん」という意味で、ゴメンナレと読んでよいであろう。ここではそれに従う。

174. 老實説話 買多溢多 (マッタウ△△)

Iはマイドイッタ、Hは『日本風土記』に「至誠人 莫打許多」があるから、マッタウイッタと読んでいる。Fはさらに『日葡辞書』に「Matai」(率直)があるので、マッタウイッタとしている。Oもマッタウイッタと読んでいるが、マツトウの可能性もあるとしている。

「多」は果摂開口一等で、トに多く当てられている。ここでは「買多」はマッタウに当たるとしても、実際の音はマツトウであろう。オ段長音の開合にも関わる問題で、詳しくは後述する。なお、過去形「イッタ」と解説することも不審である。「溢多」は保留とする。

175. 遊 四孫歩→垂孫歩 (アソブ)

内閣本、早大本では「四」が「垂」となっている。恐らく「四」は「垂」の誤りであろう。

Eは asobu と読み、他もアソブと読んでいる。それに従う。

176. 那里去 陀姑移姑 (ドコイク)

UとMはトコイク、Eは doko iku、他もドコイクと読んでいる。それに従う。

177. 買 加和 (カアウ)

『日本図纂』が「加利」となっているため、Iはカリと読んでいる。Eは kawu と読み、他もカウと読んでいる。

しかし、「和」は果摂合口字で、ウより意志形のアウのほうが相応しい。カアウと読んでおく。

178. 行路 約益磨滅 (△△△△)

東洋文庫本では「約益」に次ぐ二字がはっきり見えない。内閣本、早大本、『日本図纂』では「約益磨滅」となっている。

Iはこれをトホミチと読み、他では不明としている。難解なので、保留とする。

179. 曉得 个个俚打失大 (ココレータシッタ)

Sは kokoro-eta とし、Iは『日本図纂』の音注が「个个俚打夫火」となっているため、ククリトフタと読んでいる。Hは「心得た」と「知った」の意味で、「俚」を「路」の誤りと見なし、そして、エに当たる一字が落ちているとし、ココロエタシッタと読んでいる。Oも『日仏辞典』に「cocoroye」があることから、ココロエタシッタと読んでいる。

『日葡』には「cocoroye ココロエ (心得) 用心すること、または、了解すること」とある。ここは連母音融合して、「个个俚打」はココレータであろう。「失大」を「知った」の意でシッタと読んでおく。

180. 多吃了 前行哥 (△△△)

Oは「膳飽く」の意でゼンアクと読んでいる。他では解説していない。

ただし、「哥」はコとゴに当たるのではないか。Oの解釈には無理があるため、保留とする。

181. 殺 其奴 (キル) / 瞎咀郎 (△△△)

Eは「其奴」を *kiru* としている。Sは「瞎咀郎」を *hatsu* と読んでいる。Iは「血をはいたら」という意味でチオハイタラと読み、HとOはキル・ハタスと読んでいる。

「其奴」は「切る」で、「奴」の声母における l と n の混乱は他にもあるので、キルと読んでよいであろう。

「瞎咀郎」については「瞎」が山撰開口曉母で、これをハと読むかどうかは、ハ行子音の音韻変化に関わる問題であり、詳しくは後述する。それとは別に、音注「咀」と「郎」にも誤刻の問題があるので、ここでは保留とする。

182. 害 天 (テ)

Sは「害」を傷の意として *te* と読み、Oもテと読んでいる。

『日国』には「て(手)」に「刀や矢などの武器で傷つけること。また転じて、武器によって受けた傷。てきず。」とある。中国語の「害」にも傷つけるや傷の意味があるので、SとOに従い、テと読んでおく。

183. 醉 等帶→邀帶 (ヨウタ)

Eは *yotta*、IとOはヨウタ、Hはエウタと読んでいる。

内閣本、早大本、『日本図纂』では音注が「邀帶」となっている。「邀帶」のほうが正確であろう。

「邀」は效撰開口三等影母である。同音の「揺」、「姚」がヨに当てられたところがあるので、ここでは「邀」をヨウと読んでおく。

184. 不曉得 措頼路→惜頼路 (シラヌ) / 不失打 (△シッタ)

Eは *satoru masen*、Oは「措頼路」を不明とし、「不失打」の「不」が説明で、「失打」をシッタとしている。Hは「措」をシと読むのがいささか無理であると述べている。

「措頼路」については、『国朝典故』本には「惜」とあるので、恐らく「措」は「惜」の誤りであろう。「路」はまた声母 l と n との混同で、ヌと読める。従って「措頼路」はシラヌと読むことができる。

「不失打」についてはOに従う。

185. 哭 乃古 (ナク)

Eは *naku*、他もすべてナクと読んでいる。それに従う。

186. 打 胡子 (ウツ)

Eは *utsu*、他もすべてウツと読んでいる。それに従う。

187. 換 皆賀 (カアウ)

Eは *kayu* と *kaye* との可能性があったとした。Iは『日本図纂』が「皆貨」となっている

ため、カフと読んでいる。HとOはカウと読んでいる。

「賀」は果摂合口一等匣母で、唇音のフには相応しくない。オ段にあたるはずである。177「買」の音注「加和」と同様にカアウと読めるのではないかと思われる。『明清』では「換」も買うという意味で使われているという。それゆえ、ここではカアウと読むことにする。

188. 叫人 多奴 (△△)

UとMはトノ、Eは tamomu、Iはトヌまたはトフと読んでいる。Hは身分の高い人に対する呼び掛けの語とし、召使の者共がトノと呼ぶ事もあるとして、トノと読んでいる。

この「叫人」は人を呼ぶという意味であろう。従って「殿」の意味では少しずれているようである。やはり保留としておく。

189. 恠 発頼旦多 (ハラタツ) / 堅故 (△△)

Eは「堅」を「智」に改めて haratachigo とし、Hは「発頼旦多」がハナハダの可能性があると述べ、Oは「発頼旦多」をハラタツタと読み、「堅故」については保留としている。

Oの言うように、中国語の「恠」は人を責める、非難するという意味である。従って、ハラタツタと読んでもよいが、「多」は果摂開口一等で、オ段またはウ段にあたるはずであるから、ここではツと読んでおく。

「堅故」は読み難いので、保留とする。

190. 死 身大 (シンダ)

Eは sinda、他でもシンだと読んでいる。それに従う。

191. 喚 加右 (△△)

Eは kayu、Hは187「換」の誤りで、カユと読んでいる。Oもそれに賛成し、さらに「路」が脱落しているとしてカユルと読んでいる。

「換」が二回現れることは不審であるので、保留とする。

192. 咲 歪羅 (ワラウ)

UとMはワラヒ、Eは waro、Iはワラ (フ) とし、フが脱落したとしている。HとOはワラウとしたが、Oは『日仏辞典』により実際の発音はワロウであるという。

ここでは先行研究に従い、ワラウとする。

193. 肚飢 勳大路水 (ヒダルシ)

Eは hidarushi、Sは hinndarushi、他でもすべてヒダルシと読んでいる。『日国』には「ひだるい：空腹である。餓えてひもじい。ひだるし」とある。ここでは先行研究に従う。

194. 還了 姪也数→措也数 (カヤス)

内閣本、早大本、『日本図纂』などでは「諧也数」となっている。

UとMはカヤス、EとSも kayasu、Iはカエスとしている。Hはカエスとしたが、カヤスの可能性もあったとした。Oはカヤスと読んでいる。『日国』には「かやす：もとの場所、

状態にもどす。前にもっていた人にもどす。」とあるので、カヤスと解するのが妥当である。

「也」は假摂三等で、118「不要」の項でもヤに当てられているので、ここでもヤと読んでおく。

問題になるのは「諧」である。「諧」は匣母の字であり、カ行に当てるのは不審である。恐らくここは見母の「措」の誤りであろう。

195. 慢慢的 買得買得 (マテマテ)

UとMはマトマト、Eはmate mate、他でもマテマテと読んでいる。

中国語の「慢慢的」はゆっくりという意味であるが、『明清』によれば、「慢慢里」は「ちょっと待って」という意味である。ここの「慢慢的」もそのような意味であろう。ここではマテマテと読んでおく。

196. 起身 倭達の掬→倭達の梭□ (オタチソ□)

Eはotachi、Iはオタチエとオタチ、Hは「お立ち候へ」の意で、エに当たる文字が落ちたとしてオタチソと読んでおり、Oは「お立ち候う」の意味でオタチソウと読んでいる。

『明清』では「起身」に旅立つや出発の意味がある。『日国』に「御立ち」が出立すること、来客が帰ることをいう尊敬語と説明されている。ここでは「お立ち」の意味で、「倭達の」をオタチと読んでよいだろう。「掬」は「梭」の誤りで、ソと読んでおく。

197. 腫 刺大 (△△)

Eは「刺」を「罰」としてharetaと読んでおり、Iはハに当たる字が脱落したとして(ハ)レタと読んでいる。Hもハに当たる字が落ちたとしてハレタと読んでいる。Oもそうしている。

しかし、「刺」は寧波西洋人資料でもlahである。レに当てるのは適切でない。ここでは保留とする。

198. 請人 家那 (土匪) 多 (カノヒト)

UとMはケナヒト、Eは著者が中国語の文法の語順により日本語を記録したとしてhito wo koiと読んでおり、Hは「彼の人」の意味でカノヒトと読んでいる。Oもカノヒトと読む。

『日国』によると「彼の人」には「恋人。情人」の意味がある。項目の「請人」は「情人」であった可能性もある。意味はともかくとして、カノヒトと読んでおく。

199. 不売 烏魯売加 (ウルマイ△)

Eはurumai、Sはurumaika、Iはウロマイカと読んでいる。HとOはウルマイカとする。

「まいか」は『日国』により勧誘・依頼の意を表すものである。「不売」は売らないという意味だけで、勧誘や依頼の意ではないので、「マイカ」と読むのは少し不審である。

『国朝典故』本と『得月簞叢書』本では「加」が「多」となっているが、「多」にしても、解説は難しい。ここでは「加」「多」を保留として、「烏魯売」をウルマイと読んでおく。

200. 恁麼売 難烏礼在 (△ウリ△)

E は nani uruno ka、S は naniurimasu、H は「ねえお売りなさい」の意でナウリサイと読んでおり、O は「何売りぞ」の意でナニウリゾと読んでいる。

意味から考えると、「烏礼」は「売り」の意味でウリと読めるが、「難」はナニあるいはナンと読めるとしても、「恁麼」とは意味がずれているようである。

「在」は寧波方言でも母音がやや狭い[e]になっており、寧波西洋人資料でも zæ としている。ゾよりゼに相応しいものである。ここでは「烏礼」をウリと読んで「難」と「在」を保留とする。

201. 活 吉打→□吉打 (△キタ)

E は ikita、他ではすべてキタと読む。「生きた」のイに当たる字が落ちたと考えられている。ここでは先行研究に従う。

202. 輸 埋計打利 (マケタリ)

E は maketa と maketari とし、他ではすべてマケタリと読んでいる。H は商売人の常套語「おまけしましょう」の意で解釈しているが、中国語の「輸」はそのような意味を持たないので、「負ける」の意味と考えてよいだろう。ただし、なぜ「利」が付いているかという疑問が残る。

203. 有情 亞姊吉乃→亞姊吉 (アヂキ)

M はマシキナ、E は ajikina、S は ajikino、I はアツキノと読んでいる。F は情の厚いという意味でアツキとし、ノを準体助詞としている。H は「味気ない」の意味として、アヂキナイと読んでいる。次の「無情」にも同様の音注を施すが、この音注はむしろ「無情」にこそふさわしいと述べる。O は「乃」は衍字として、アヂキと読んでいる。

意味上から考えると、O の解釈が妥当であろう。それに従う。

204. 無情 亞姊吉乃乃水→亞姊吉乃水 (アヂキナシ)

S は ajikino nashi、I と F はアツキノナシ、H は「乃」一字を衍字としてアヂキナシと読んでおり、O はアヂキナシと読んでいる。

ここでも O に従う。

205. 一家 一董 (△△)

『日本図纂』、『籌海図編』にもこの項目があるが、他の版本では見られない。I はイツケンと読んでいる。他ではこの項目を解説していない。

他の版本に見られないため、もともとあった項目かどうかは疑わしい。中国語の「一家」の意味は日本語と大きな違いはないが、「一董」は解説しがたい。ここでは保留とする。

206. 傷寒 鷄骨示 (△△△)

E は kega と読んでいる。H は「鷄骨」をキクとしたが、東洋文庫本では「示」の字が掠れており、「票」とも見えるため、「病」の意味でビャウとも解説した。O は不明とした。

「示」は東洋文庫本では掠れているが、確かに何かの字の下部であると見える。ほかの

本にも違いが見られる。例えば、内閣本では「軌」、早大本では「瓢」、『国朝典故』本では「禁」となっており、これ以外の本では「鶏骨」しかないのである。

早大本によると「瓢」は「病」を表す音注で、ビョウに当たると考えられるが「鶏骨」は難解である。保留とする。

207. 多少 一故頼介 (イクラカ)

E は ikura kai、他はすべてイクラカと読んでいる。イクラカと読む。

208. 無工夫 一孫擲水 (イソガシ)

E は isogashii、他はすべてイソガシと読んでいる。それに従う。

ちなみに「擲」は方言用字であり、『呉音奇字』に「擲、音哈、柴擲」、疑母字である。

209. 寫字 加計 (カケ)

E は kake、他でもすべてカケと読んでいる。それに従う。

210. 耳 眉眉 (ミミ)

S は mimi、他でもすべてミミと読んでいる。それに従う。

211. 口 骨止 (クチ)

『日本図纂』『籌海図編』では「骨土」となり、『武備志』では「骨上」となっているが、東洋文庫本の「骨止」が正確であろう。

E は kuchi、他でもすべてクチと読んでいる。それに従う。

212. 鼻 発柰 (ハナ)

E は hana、他でもハナと読んでいる。それに従う。

213. 眉 売 (マイ)

U と M はマユ、E は mayu, mai と読んでいる。H は当時の京都ではマイとマユともに存在しており、『日葡辞書』などは普通には「まゆ」であるが、「眉毛」Maigue もあるため、マイとした。O は『日仏辞典』で Mayu と Mai ともにあることから、マイと読んでいる。

「売」は i 韻尾を持っているので、ここではマイとしておく。

214. 手 鉄 (テ)

E が te、他でもテと読んでいる。それに従う。

215. 足 挨身 (アシ)

E は ashi、他でもアシと読んでいる。それに従う。

216. 心 个个路 (ココロ)

先行研究はすべてココロと読んでいる。それに従う。

217. 頭 客成頼→客戌頼 (カシラ)

E は kashira と読み、他もカシラと読んでいる。

「成」は效撰開口三等常母で、鼻音韻尾を持ち、全濁音でもあるため、シとは読み難いのではないか。28「明日来」の項で「戌」がシに当てられていたが、「成」は「戌」の誤りと考えられる。ここでは「客戌頼」と改め、カシラと読むことにする。

218. 鬚 薰計 (ヒゲ)

E は hige、S は hingi、他でもヒゲと読んでいる。それに従う。

219. 髪 措謎→措迷 (カミ) / 夾迷 (カミ)

「措」は内閣本では「(木苦)」、『国朝典故』本では「措」となっている。

E は「夾迷」を kami、I は「措謎」をソメと読んでいる。他ではカミ・カミとする。恐らく『国朝典故』本の「措」が正確で、カと読んでよいであろう。ともにカミと読んでおく。

220. 肚 発頼 (ハラ)

E と S は hara、他でもハラと読んでいる。それに従う。

221. 指 尤皮 (ユビ)

E は yubi、他でもユビと読んでいる。それに従う。

222. 爪 卒謎 (ツメ)

E は tsume、他でもツメと読んでいる。それに従う。

223. 齒 法 (ハ)

E は ha、他でもハと読んでいる。それに従う。

224. 身 泄 (セ)

この項目は東洋文庫本と『得月簞叢書』本、『国朝典故』本にのみある。O は不明とする。他では解説していない。

身体のことを「背」、または「身」とも言えよう。『日葡』でも「背をくくむ」、「背を取る」のことを「身をくくむ」、「身を取る」とも言うとしている。「泄」は、「背」の意味でセと読むことができるので、セと読んでおく。

225. 眼 眉眉→眉 (メ)

東洋文庫本、『国朝典故』本、『得月簞叢書』本以外には見られない。『得月簞叢書』本では音注が「梅梅」となっている。

H は念を押すために二度言ったのを一語として写したものか、あるいは幼児語かと指摘する。O は一字を衍として、メと読んでいる。

メメは幼児語としか考えられないので、やはり「眉」一字は衍字とみなして、メと読む。

【器用類】

226. 小刀 曆个乃 (△△△) / 空客打乃 (コガタナ)

Uはニカタナ・ユカタナ、MとEは「空客打乃」を *kogatana* と読んでいる。Sは「客打奈」を *katana* と読み、Iはカタナ・コガタナと読んでいる。HとOは「空客打乃」をコガタナと読み、Oは「曆个乃」を不明としている。

「曆」を「皆」の誤りとすれば、カと読むこともできるが、「个」はタと読めない。Oに従うことにする。

227. 中刀 歪計柴需 (ワキザシ)

U、M、Iはワキサシ、Eは *wakizashi* と読んでおり、Hは呉語では「柴」が濁音 *za* であることが多いことから、ワキザシと読み、Oもワキザシと読んでいる。

「柴」は全濁崇母であるから、Oに従いワキザシと読む。

228. 大刀 濶中撻打奈 (△△△タナ)

Iはジュンチュウタタナ、Eは *tachi*、Hは「濶」と「撻」とが入れ替わったものとし、タチカタナと読めると述べ、Oは不明としている。難解であるが、「打奈」をタナと読んでもよいであろう。「濶中撻」は保留とする。

229. 刀柄 脱介俚 (ツカ△)

Iはツカ、「俚」に疑問符をつけている。Hは「俚」を保留とし、「脱介」をツカとした。Oも「脱介」をツカと読み、「俚」を衍字としている。

H、Oに従い、「俚」を保留とする。

230. 甲 大買路 (ドウマル)

Iはドーマル、Hは『日葡』に *Dômaru* とあるのによって、ドウマルと読む。Oもドウマルと読んでいる。それに従う。

231. 弓 油米 (ユミ)

Eは *yumi*、他でもユミと読んでいる。それに従う。

232. 盒子 剛白哥 (カウバコ)

UとMはカウバコ、Eは *kobako*、Iもコバコと読む。Hは「香匣」の意味で、カウバコと読んでいる。Oは「白粉入」が中国語では粉盒子であることから、コバコとする。

『日本風土記』に「香匣 剛白哥 (カウバコ)」があり、『日本館訳語』にも「香盒 稿法个 (カウバコ)」がある。ここの「盒子」はやはりHの指摘通りであろう。カウバコと読む。

233. 磨刀石 依水 (イシ)

Eは *ishi*、他でもイシと読んでいる。

中国語の「磨刀石」は砥石のことである。少し意味がずれているが、イシと読むことに

する。

234. 砂石 措路依水 (カルイシ)

E は karo ishi、他はすべてカルイシと読んでいる。それに従う。

235. 硯 孫助俚 (スズリ) / 尊力子 → 尊子力 (スズリ)

E は suri としており、誤植であろう。U、M、I は「孫助俚」をスズリとし、S は sotsuri, sutsuri と読んでいる。H は「尊力子」を「尊子力」の誤りとして、「孫助俚」と共にスズリと読んでいる。O も H の説を認めている。ここでは H、O に従う。「尊」は精母[ts]でスに当てることに問題があるが、丸山徹 1981 によれば室町時代末のサ行子音に破裂を伴うという。「尊」はそれを反映しているかもしれない。

236. 紙 措袂 (カミ) / 加迷 (カミ)

I はカク・カミと読んでいるが、他ではすべてカミ・カミとする。ともにカミと読んでもおく。

237. 厚紙 沃速水 (△△△)

E は atugami と読んでいるが、他では解説していない。「水」はシと読めるので、何かの紙であろうか。保留とする。

238. 薄紙 沃蛮子 (△△△)

E は usugami、S はウツシと読んでいるが、他では解説していない。難解なので保留とする。

239. 筆 粉地 (フデ)

S は funde と読んでいるが、他ではフデとする。
フデと読んでもおく。

240. 墨 疎煤 (スミ)

U はスヨとしているが、ヨはミの誤りであろう。E は sumi、他でもスミと読んでいる。それに従う。ちなみに「煤」を用いたのは意味も考慮したことだと思われる。

241. 扇 黄旗 (アウギ)

U はワウギとし、E は oogi、I もオーギ、H は濁音ギの前の母音はおそらく鼻音化していたらしく、「黄」はむしろア (ワ) ンに近く聞こえたとして、アウギと読んでいる。O もアウギとする。「黄」は宕摂合口なので、アウギと読んでよい。

242. 泥金扇 空措泥黄旗 (コガネアウギ)

U と M は「空措泥」をコカネとし、E は kogane oogi、H と O はコガネアウギと読んでいる。

45 「金」には「空措泥」があったので、ここでもコガネアウギと読んでよいであろう。

243. 鑰匙 坑其 (カギ)

E は kagi、他でもカギと読んでいる。それに従う。

244. 泥銅扇 法古黄旗 (ハクアウギ)

E は haku oogi、他でもハクアウギと読んでいる。O は『節用集』に「箔 (ハク) 金～、銀～」があり、『下学集』には「減金 (メッキン)、濃金 (ダミエ)」と並んで「薄 (ハク)」があることから、ハクアウギとした。

ここではOに従う。

245. 鎖 哥利素→哥索利 (クサリ)

E は kusari、他でもクサリと読んでいる。H は「利」と「素」が入れ替わったとしてクサリと読んでいるが、「素」をサに当てるのは疑問としている。

確かに「素」は遇撮合口一等で、サには当てられないはずである。筆者は、「素」は「索」の誤りではないかと思う。本文を「哥索利」と改めてクサリと読む。

246. 船 浮泥 (フネ)

E は fune、他でもすべてフネと読んでいる。それに従う。

247. 鑊 難皮 (ナベ)

E は nabe、他でもすべてナベと読んでいる。それに従う。

248. 針 快利 (△リ) / 法利 (ハリ)

E は hari、他でもハリ・ハリと読んでいる。「快」をハと読むのは問題である。第5章第2節で詳述する。ここでは、「快」を保留とする。

249. 等子 発介俚 (ハカリ)

E は hakari、他でもハカリと読んでいる。それに従う。

250. 箒 花鷄 (ハウキ)

U と M はハキとし、E は hooki、H は『日葡』に「Föqi」とあるのを根拠に、ハウキと読んでいる。O は『日仏辞典』に「Föqi」、『節用集』に「ハウキ」とあることから、ハウキとするのが妥当であるとした。なお、『節用集』に「帚 (ハハキ)」、『日仏辞典』に動詞の場合「Fawaki, cou, waita, ハワキ, ク, ワイタ」があるとも述べている。

ハ行子音に関わる問題で、詳しくは第5章第2節で論じることにする。ここではハウキと読んでおく。

251. 小箱 法哥 (ハコ)

E は hako、他でもハコとしている。それに従う。

252. 硯箱 孫助利法哥 (スズリハコ)

E は *suzuri bako* また *suzuri hako* と読んでいる。H と O はスズリハコとする。

「法」は非母であり、濁音に当てられることはないであろう。バ行には並母の字のほうが相応しいので、H と O に従うことにする。

253. 鋸 拏剛撃利 (ノコギリ)

E は *nokogiri*、他でもノコギリと読んでいる。それに従う。

254. 酒盞 晒加藤計 (サカヅキ)

U と I はサカヅキと読んでいるが、E は *sakazuki*、他でもサカヅキと読んでいる。

「藤」は全濁の定母であるので、サカヅキと読む。鼻音韻尾を持つ「藤」を用いることで、次の「計」は濁音のように聞こえることになるので、やや疑問に思うが、32「水 明 東」の場合もヅに鼻音韻尾を持つ「東」を使っているので、ヅの鼻音性が音節を貫通していたかもしれない。

255. 磔 晒頼 (サラ) / 沙頼 (サラ)

E は *sara* と読み、他でもサラ・サラと読んでいる。それに従う。

256. 傘 隔落隔晒 (カラカサ)

E は *karakasa*、他でもカラカサと読んでいる。それに従う。

257. 鏡 坑皆彌 (カガミ)

E は *kagami*、他でもカガミと読んでいる。それに従う。

258. 枕 麻骨頼 (マクラ) / 埋骨頼 (マクラ)

E は *makura*、他でもマクラと読んでいる。それに従う。

259. 蓆 不奴 (△△)

先行研究は解読していない。木津 1994 ではボロと解読した。

中国語の「蓆」は「筵 (むしろ)」の意味である。「不」が「水」の誤りであれば、「水 奴」はムシロのシロと読めるかもしれしない。ここでは保留とする。

260. 盤 何水鷄 (オシキ)

先行研究はすべてオシキと読んでいる。それに従う。

261. 銀硃 失禄挨揩水 (シロアカシ)

S は *shiro-akashi*、他でもシロアカシと読んでいる。それに従う。

262. 漆 烏論水 (ウルシ)

E は *urushi*、他でもウルシと読んでいる。それに従う。

263. 筋 法水 (ハシ)

E は hashi、他でもハシと読んでいる。「筋」は「箸」の異体字であるので、それに従う。

264. 香 宣哥 (センカウ)

U はセンコウ、E は senko と読んでいる。H と O はセンカウとする。H、O に従う。

265. 沉香 沉哥 (ヂンカウ)

E は jin ko、H と O もヂンカウと読んでいる。H、O に従う。

266. 麝香 射哥 (ジャカウ)

B はシャコウ、E は jia ko、H と O はジャカウと読んでいる。H、O に従う。

267. 木香 木哥 (モッカウ)

E は mokko、H と O はモッカウと読んでいる。H、O に従う。

268. 酒瓶 哭笋昆皮 (△△△△)

E は sakekabi、sakegame と読み、H は「昆」を「里」の誤りとして、クスリビンと読んでおり、O は保留としている。

難解なので、保留とする。

269. 碗 倭吉貼湾 (オオキイチャワン)

S は ōki chawan、H と O はオオキイチャワンと読んでいる。

ここでもオオキイチャワンと読んでおく。

270. 梯 課水飛計 (コシヒキ)

H は「課計飛水」と改め、カケハシと読めるかもしれないとしている。O は不明としている。

中国語の「梯」でも、梯子 (はしご) や梯 (かけはし) の意味である。H のように、カケハシと読めば意味は相応しいが、「飛」をハに当てることには無理がある。

115 「拐 科水非計」を見れば、「科」は「課」と同音であり、「非」も「飛」と同音である。そのことは偶然と思えない。そこで、「課水飛計」はコシヒキと読むべきであろう。何かの誤りで、「拐」の音注がここに入れ替えられたと考えられる。意味はともかくとして、ここではコシヒキと読んでおく。

【衣服類】

271. 衣服 乞麻俚 (キモ△)

E と S は kimono、H は「俚」が不審であるとしながらもキモノと読んでいる。O もキモノとする。

『日本風土記』では「乞木那」となるので、「乞」をキと読んで妥当である。「麻」は假撰開口二等で、オ段モと読んでも差し支えない。「俚」は「那」の誤りかもしれない。この部分だけを保留とする。

272. 靴 骨都 (クツ)

E は kutsu、他でもクツと読んでいる。それに従う。

273. 鞋 水托里 (シ△レ) / 失其里 (シキレ)

U はシキレ・シキレと訓じ、H は「托」を「乞」の誤りとして、ともにシキレと読んでいる。O も『日仏辞典』に「Chikire, しきれ」とあることから、ともにシキレと読んでいる。

「しきれ」は草鞋の一種の「尻切」である。ここではH、Oに従い、「托」だけを保留する。

274. 箬帽 搖婆俚 (△△△)

先行研究は解説していない。ここでも保留とすることにする。

275. 錦 歪帯 (ワタ)

E は wata、他でもワタと読んでいる。「錦」はHの指摘のように「綿」の誤りであろう。解説は先行研究に従う。

276. 襦衫 迷奴 (ミノ)

S は mino、他でもミノと読んでいる。それに従う。

277. 手巾 達昂个→達昂个□ (タノゴ□)

E は tenogui、H はテノゴイ、O も『下学集』『節用集』『日仏辞典』にテノゴイがあることからテノゴイと読んでいる。

「達」は寧波西洋人資料では dah であり、『日本国考略』でもタに当てられることが圧倒的に多いため、テに当てるのは不審である。『日国』に「たのごい」「たなごい」「てぬぐい」「てのごい」の語が収録されている。従って、「達」をタと読んでも間違いではない。イに当たる字が脱落していると考えられる。ただし、「昂」は疑母で、寧波西洋人資料では ngông とあるが、ノに当てるのは少し疑わしい。

278. 綿布 木綿 (モメン)

U はモメン、M はモンとしたが、メが脱落したのであろう。E と S も momen と読み、H は当時の日本語資料ではモンメンの形が多く見られることから、モ(ン)メンと読んでいる。O は『下学集』『節用集』『日仏辞典』を参考にモメンとする。

ここではOなどの意見に従い、モメンと読んでおく。

279. 夏布 奴奴綿 (ノノメン)

U と M は「奴奴」をヌノと読み、E は nunomen、H と O もヌノメンと読んでいる。F は、『日本館訳語』にある「夏布 那那」をノノと読んでおり、また『全方』にノノの形が多数の地方に見受けられるので、「奴奴」をノノと読むべきとした。

『日国』によれば布をノノと読む地域は岩手、仙台方言、秋田、秋田鹿角、山形小国、福島、島根、長崎、対馬、鹿児島など多数あるので、ここではノノメンと読んでおく。

280. 被 伏思麻 (フスマ)

E は fusima、他でもフスマと読んでいる。それに従う。

【飲食類】

281. 茶 鮮素→鮮壺 (センサ)

E は cha と読んでいるが、他は解説していない。H は「鮮」を「解」と改め、カスと読むのではないかとしたが、疑問としている。

『国朝典故』本では「詐素」となり、『得月簞叢書』本では「鮓素」となっている。「詐」と「鮓」とも假撰開口二等で同音字である。「詐」と「鮓」はチャに当てられたかもしれないが、269「碗」の項の「チャ」には「貼」を使っている。

一方、「素」が「索」の誤りであれば、煎茶の意味でセンサと読むことができる。例えば、文明本『節用集』に「煎茶 (センサ)」がある。『日国』によれば『運歩色葉』(1548)『塵芥』(1510-50頃)にも、その用例が見られるという。ここではセンサと読んでおく。

282. 酒 晒箕 (サケ)

E は sake、他でもサケと読んでいる。それに従う。

283. 白酒 明東晒箕 (ミズサケ)

E は shiro sake、他ではミズサケと読んでいる。恐らく「明東」は32「水」の項でミヅに使ったので、ここでもそのままミヅに当てたものと思われる。「東」は必ずしも後の音節を濁らせるために使われたのではない。しかもライマンの法則では、濁音に後接する音節では連濁を起こさないというから、ミヅサケと読んでおく。

284. 焼酒 隔辣晒箕 (カラサケ)

E は karai sake、S は karasake、他でもカラサケと読んでいる。カラサケと読むことにする。

285. 老酒 福禄晒箕 (フルサケ)

E は furu sake、他でもフルサケと読んでいる。それに従う。

286. 飯 蜜黍 (メシ)

E は meshi、他でもメシと読んでいる。それに従う。

287. 飲酒 晒加乃 (サカナ)

E は sakenomu、H は「肴」の意味で「酒を呑むときに必要なものだから、錯乱を惹起したのである」とし、サカナと読んでいる。O は音注が「酒を飲む」の意と合わないため、保留としている。

155「喫酒」の項がすでに「酒を飲む」の意であったことから、ここの「飲酒」は重複しているようである。ところで、呉方言を含む中国の南方方言では「飲む」の意味で「喫」を使っている。ここの「飲酒」は酒の料理や酒宴のような意味で、それにサカナを当てた

のかもしれない。サカナと読んでおく。

288. 吃飯 蜜黍阿羅俚 (メシオ△リ)

Uは「蜜黍阿羅」をミスハルとし、Eは meshi ku、Sは meshi omairi、Hは「阿羅俚」がアガレまたはオマイリを写したもので、「羅」は何かの誤りとした。Oは、156「吃」の項の「阿売利」がオマリに当たるので、この「羅」を「埋」のような字としてマイリと読んでいる。

「阿羅俚」はオマイリを写そうとしたもので「羅」は「買」または「売」の誤刻かもしれない。「羅」を保留とする。

289. 塩 失河 (シオ) / 收河 (シオ)

MとUはシヲ、Eは shiwo、HとOはともにシオと読んでいる。それに従う。

290. 醬 弥沙 (ミソ)

EとSは miso、他でもミソと読んでいる。それに従う。

291. 米 科媚科媚 (コメコメ)

Sは kome、Eは komekome、他でもコメコメと読んでいる。なぜ同じ音注を二回も写したかという疑問が残るが、コメコメと読んでよいだろう。

292. 油 挨蒲頼 (アブラ)

Eは abura、他でもアブラと読んでいる。それに従う。

293. 大麥 烏蒙崎 (オオムギ)

MとUはヲヲムギ、Eは oomugi、HとOでもオオムギと読んでいる。それに従う。

294. 小麥 柯蒙崎 (コムギ)

Eは ko mugi、他でもコムギと読んでいる。それに従う。

295. 穀 暮米 (モミ) / 倭米 (△ミ)

Eは momi、他でもモミ・モミと読んでいる。Hは「倭」が「埋」の誤りとする。

Oは、「倭」をマ行の誤聴としてモミとした。『日本図纂』では「倭」が「俚」になっているが、仮に「俚」だとしても読みにくいので、「倭」だけを保留とする。

296. 羹 水路 (シル)

Eは shiru、他でもシルと読んでいる。それに従う。

297. 荳 磨米 (マメ)

Eは mame、他でもマメと読んでいる。それに従う。だが、「磨」は果摂合口字で、寧波西洋人資料では mo としている。ア段でなく、オ段に相応しい字である。ここで「磨」を使ったのは、米をひくという意味で「磨米」を意識的に使ったか、もしくは「磨」は「麻」

の誤りかと思われる。マメと読んでおく。

298. 肉 恕恕 (シシ)

E は shishi、他でもシシと読んでいる。それに従う。

299. 笋乾 大吉糯古 (タケノコ)

E は take noko、他でもタケノコと読んでいる。それに従う。

300. 醬瓜 可羅米糯 (△△△△)

B はウリ、M と U はカウモノ、E は karamono、H は、「米」を「木」の誤りとしてカラモノ「辛物」の意でと読んだ。F と O もカラモノと読んでいる。しかし、「可」「羅」とも果撰のものであり、寧波西洋人資料には母音 o で表記されており、ア段に当てることには無理がある。諸本でも「米」は「木」になっていない。それゆえ、カラモノと読むことは不適切である。保留とする。

【花木類】

301. 杉 松計 (スギ)

E は sugi、他でもスギと読んでいる。それに従う。

302. 檜 去那鷄→非那鷄 (ヒノキ)

E と S は hinoki、他でもヒノキと読んでいる。それに従うが、「去」はおそらく 321 と 323 の項の音注「丟」と同様に「非」の誤刻であろう。それについてはハ行子音の変化に関わる問題で、後に述べることにする。ここでは「去」を「非」に改める。

303. 松 埋止 (マツ)

E は matsu、他でもマツと読んでいる。それに従う。

304. 梅子 面婆水 (メボシ)

M と U はムメボシ、E は ume-boshi と読んでいる。H はウメボシ、O はムメボシとした。

梅はウメともムメとも発音されていたことは先行研究にも述べられている。ムメと読む場合に mu の母音が脱落する mume > mme と発音されれば、「面」で写すことも可能であろう。つまり、中国人にとってメボシにしか聞こえなかった。従って、ここではメボシと読む。

305. 芥 愨辣水 (カラシ)

E は karashi、他でもカラシと読んでいる。それに従う。

306. 菜 柰 (ナ)

E は na、他でもナと読んでいる。それに従う。

307. 瓜 烏埋→烏里 (ウリ)

Eは uri、他でもウリと読んでいるが、HとOは「埋」が「理」の誤りであると指摘している。

『国朝典故』本では「埋」が「里」となっている。恐らく「里」であったのであろう。ウリと読む。

308. 麻 莫入骨水 (△△△△)

Eは asa、Sは minikushi と読んでいるが、113「麻子 莫入」との関連も指摘する。HとOも「麻子」すなわち「あばた」の注を誤って入れたとし、不明としている。

ここでも保留とする。

309. 茄子 乃沈皮 (ナスビ)

Eは nasubi、他でもナスビと読んでいる。それに従う。

【鳥獸類】

310. 牛 胡水 (ウシ)

Eは ushi、他でもウシと読んでいる。それに従う。

311. 狗 意奴 (イヌ)

Eは inu、他でもイヌと読んでいる。それに従う。

312. 猪 豕豕 (シシ)

EとSは shishi、他でもシシと読んでいる。それに従う。

313. 鶏 抓泥掇地→泥掇地 (ニワト△) / 泥環多礼 (ニワトリ)

Eは niwatori、Sは niwatodi、niwatori、他でもニワトリと読んでいる。Hは「抓泥」は「泥抓」の誤りとする。

「抓」は莊母で、ワ行に当てることは無理がある。恐らく「抓」の字は呉方言用字の「掇」と関係しているだろう。『呉音奇字』には「掇、音蛙、手捉物也」とある。「抓」は手でものをつかむという意味で、まさに「手捉物也」ということである。しかも「掇」は「蛙」と同音で、ワに当てるには好都合な字である。従って、「抓」は「掇」の誤りか、または当時の寧波において「掇」と読まれていた可能性がある。

「地」は何かの誤りであろうか。保留とする。

314. 鵝 解 (ガ) / 加 (ガ)

Eは ga、他でもともにガと読んでいる。それに従う。

315. 馬 烏馬 (ウマ)

Eは uma、他でもすべてウマと読んでいる。それに従う。

316. 魚 遊河 (イオ)

Uはイヲ、Eは uwo、Hは『日葡』で Io と Vuo とを並べて出しているが、実際の発音

がユオに近いので、「遊」が用いられたと述べ、イオと読んでいる。Oもイオと読んでいる。「遊」は流撰開口三等で、寧波西洋人資料でも yiu としている。日本語の母音連続が二重母音になりやすいので、io が iuo と実際に発音されていたのであろう。

317. 蟹 揩泥 (カニ)

E は kani、他でもカニと読んでいる。それに従う。

318. 蝨 失辣水→失辣米 (シラミ)

E は sirami、S は shirami、他でもシラミと読んでいる。先行研究に言われたように「水」は「米」の誤りであろう。それに従う。

319. 羊 羊其 (ヤギ)

E と S は yagi、他でもヤギと読んでいる。それに従う。

320. 鼠 眠助米 (ネズミ)

E は nedzumi、他でもネズミと読んでいる。

内閣本では「眼」となっており、『国朝典故』本では「服」となっているので、恐らく各本の拠る底本のネに当たる文字は掠れていたのであろう。m と n の間違いの可能性もあり、「眠」は「泥」のような字であったかもしれない。ここでは先行研究に従う。

【数目類】

321. 一 丢多子→非多子 (ヒトツ) / 丢徵咀多→非徵咀多 (△△△△)

B、M、U は「丢多子」をヒトツとし、E も「丢多子」を hitotsu と読んでいる。H は『得月簞叢書』本により「丢」を「去」に改めてヒトツと読んでおり、「丢徵咀多」については「徵」を衍字とした。O は「丢多子」をヒトツ、「丢徵咀多」を不明としている。

「丢」をヒに当てるのは何か所かあった。それについてはハ行子音の変化に関わる問題で、後に述べることにする。ここではそれを「非」の誤りとみて、ヒと読む。

「丢徵咀多」についても、「丢」はやはり「非」の誤りである。そして「徵」が衍字であるならば、323「二」の音注「非咀多」と誤ったのではないか。二を「非咀多」と読むことについては下に述べる。

322. 一箇 个利 (コリ)

E は kaori、 kori、F はコリ、O は『日仏辞典』に一つの小包の意で「Cori, コリ」があるので、コリと読んでいる。

『数え方の辞典』には『梱 (こり)』は、竹や柳で編んだかごを表し、行李 (こうり) を数えます」とある。ここでもコリと読んでおく。

323. 二 扶達子 (フタツ) / 丢咀多→非咀多 (ヒタツ)

M と U は「扶達子」をフタツと読み、E も futatsu、H も「扶達子」をフタツと読んだが、「丢咀多」については方言の言い方 (秋田、岩手、尾張) としている。O は「丢」を「去」に改め、ともにフタツとする。

「扶達子」をフタツと読むことには問題がない。『日国』には、フタツをヒタツと読む地域（岩手、秋田、千葉、鹿児島）が挙げられている。従って、「丟」は「非」の誤りとして、「非咄多」は方言の言い方のヒタツに当てられたと考える。ここでは、それをヒタツと読んでおく。

324. 三 密子（ミツ）／倏咄多（△△△）

MとUはミツ、Eも *mitsu* と読んでいる。Hは「密子」をミツとし、「倏咄多」を保留としている。Oはコリヤードの『日本文典』の例を挙げ、数字の「三（ミツ）」、「四（ヨツ）」、「六（ムツ）」、「八（ヤツ）」では促音になっていないことを指摘し、「密子」をミツと読んでいる。なお、「倏咄多」については不明とする。

しかし、「密」は入声で、次の「四 学子」においても入声の「学」を使っている。偶然とは考えにくいので、ここではミツと読んでおく。

「倏咄多」は保留とする。

325. 四 学子（ヨツ）／摇摇做（△ヨツ）

MとUはヨツ、Eも *yotsu*、Hは「摇摇做」が促音を表したかもしれないと述べ、両方ともヨツと読んでいる。Oは「揺」の一字が衍字として、両方ともヨツとする。

「学子」はやはり促音を表わしたのではないかと思われる。ヨツと読んでおく。

「摇摇做」については衍字の可能性はあるが、「揺做」をヨツと読んでおくのが無難であろう。

326. 五 意子子（イツツ）／難難多（ナナツ）

Uはイツツ、Eも *itsutsu* と読んでいる。Hは「意子子」をイツツと読んでいるが、「難難多」が328「七」の注かもしれないとした。Oもイツツ、ナナツと読んでいる。それに従う。

327. 六 後子（△ツ）

Uはムツ、Eは「後」が「没」の誤りとして *mutsu* と読んでいる。Hは日本語のムという鼻音音節に適切な文字がなかったとし、ムツと読んでいる。Oもムツを写したもののだが、訛りがあるとしている。

ここでも「後」を保留とする。

328. 七 乃乃子（ナナツ）

Eは *nanatsu*、他でもナナツと読んでいる。それに従う。

329. 八 效子（ヤウツ）

Eは *yatsu*、Sは *yatu* と読み、他でもヤツと読んでいる。

「効」は效撰開口二等であり、效撰の字をヤに当てる項目は他に見られない。寧波西洋人資料ではそれを *yiao* としている。ヤに当てる字には「也」「野」「耶」があるにも関わらず、これらを使わないことは、ここではヨウツを写したのではないかと思われる。「八日（ヤウカ）」もあるからには、ヤツツではなく、ヤウツの形で存在していた可能性もあ

る。ヤウツと読んでおくことにする。

330. 九 个个乃子 (ココノツ)

Bはココナツ、MとUはココノツ、Eも kokonotu、HとOもココノツと読んでいるが、Oは「乃」がナに用いられる点で訛りがあると述べた。

ここでもココノツと読んでおく。

331. 十 多 (トオ)

MとUはトヲ、Eはto、HとOはトオと読んでいる。

トオと読んでよいだろう。

332. 十一 多多丢達子→多多非達子 (トオトヒトツ)

Uはトヲヒトツ、Eも tō to hitotsu、Hも「丢」は「去」の誤りで、「十と一つ」の意でトオトヒトツと読んでいる。Oも「達」に訛りがあるとして、トオトヒトツとする。H、Oの意見に従うが、「丢」を「非」に改める。

333. 五十 大 (△)

先行研究はすべて解読していない。ここでも保留とする。

334. 百 法古 (ヒヤク)

Eは hiaku、他でもヒヤクと読んでいる。ここではヒヤクと読む。ただし、「百」は漢音がハクであるので、当時、ハクと読まれていた可能性も排除できない。

335. 千 借 (△) / 一貫 (説明文)

Eは借を chi と読み、Hは「借」をチあるいはセンとし、「一貫」は銭千文の意で説明文であると述べる。Fも「借」をチと読んでいる。Oはロドリゲス『日本大文典』に「Quamme (貫目)」「Icquamme (一貫目)」などがあるため、「借」をチと読み、「一貫」を説明文として解釈する。

確かに「一貫」を説明文とするのは妥当である。だが、「借」をチと読むことには賛成できない。「借」は假撰三等韻で、広い母音を持つ。寧波西洋人資料でも tsiaē としているので、チに当てるのは無理である。ここでは保留とする。

336. 萬 慢亦 (マン△)

Hは「慢」をマンと読み、「亦」については解し難いとしている。Oも「亦」を不明とする。

ここでも「慢」をマンと読んで、「亦」を保留とする。

【通用類】

337. 有 挨路 (アル) / 何路 (オル)

MとUは「挨路」をアルとし、Eは aru, oru、Sは aru, aru と読んでいる。Hは「挨路」をアル、「何路」をオルとしたが、「何」が「阿」の誤りであるかもしれないとした。Oは

『節用集』『日仏辞典』に「ある」「おる」があることから、アル・オルと読んでいる。

内閣本、早大本では「何」が「阿」となっている。確かに「何」は誤刻の可能性はある。とはいえ、「阿」と「何」は果摂一等で、オに相応しいものである。ここではアル・オルと読んでおく。

338. 無 乃 (ナイ)

Mはナ、Uはナシ、Eはnai、HとOもナイと読んでいる。前述のように「乃」は蟹摂一等で、i韻尾を持っていた可能性があるので、ナイと読んでよいであろう。

339. 好 高高的 (△△△) / 姚鎖盧 (ヨウソロ)

MとUはココチヨサル、Eは「鎖」と「盧」を入れ替え、yorosiと読んでいる。Sはkokochiyoshi、HとOはココチヨウソロと読んでいる。

「高高」をココに当てることには問題がある。「高」は效摂で、寧波西洋人資料にはaoとある。コよりカウのほうに相応しい音注である。ここでは保留とする。

340. 極好 明哥多 (ミゴト)

Sはmigoto、他でもミゴトと読んでいる。それに従う。

341. 不好 由無奈 (ヨウナイ)

Eはyou nai、他でもヨウナイと読んでいる。それに従う。

342. 大 加小思姑奈 (カ△スクナイ) / 何計 (オオキ)

Eは「奈」を「倭」と改めてookiと読んでいる。Sはkazu sukunai, ōkiと読む。Hは、「何計」はオオキに違いないが、「加小思姑奈」は読み難いとした。Oは「加小思姑奈」をカズスクナイとし、「何計」をオオキと読んでいる。

「小」は「子」の誤りで、カズスクナイと読めるかもしれないが、この項の意味に合わない。345「少」の音注がここに誤って入れられたかもしれない。とりあえず、カ△スクナイ・オオキと読んでおく。

343. 小 発篩 (ホソイ)

H、F、Oともホソイと読んでいる。Hは「小さい」ことをホソイという方言もあると述べる。

『日国』には「ほそい」の意味に「体積が小さい。こまかい。小さい。」とある。今でも多くの地域に「小さい」の意で用いられているようである。従って、ここではホソイと読んで妥当である。

344. 多 快都 (△△) / 河河水 (オオシ)

MとUはクハトヲヲシ、Eはoosi、Sはkazu ooshiと読んでいる。HとOもカズオオシとする。

「快」は蟹摂合口溪母で、寧波西洋人資料ではkuaとしている。なぜかに合口の字を使うのか問題である。また、「都」をザ行のズに当てるのも不審である。従って、「快都」を

保留とする。

また、先行研究にも指摘されているが、音注の「河」を二回使ったのはオオシが長音化されず、*wowosi* であったことを物語っている。

345. 少 疎古乃水 (スクナシ)

E は *sukunasi*、他でもスクナシと読んでいる。それに従う。

346. 遠 多俟 (トオシ)

M と O は「多」をトヲとし、E は *tosi*、H はトオイ、O はトオシと読んでいる。「俟」は止摂崇母開口三等であるが、『康熙字典』では「又于紀切、音矣」とある。つまり前者によれば、シに相応しいが、後者によれば、イに相応しいのである。ここではトオシと読んでおく。

347. 近 的企→的介 (チカイ)

M と U はチカシ、E も *chikasi*、H は、チカ (イ) としても不当ではないが、連用形チコウとするほうが良さそうであるとした。O はそれに従い、チコウと読んでいる。

『日本国考略』所載の寄語には形容詞が連用形ウ音便で現れることがほとんどない。前述のように、呉方言においては「企」と「介」との混同がある。この「企」は「介」の誤りで、チカイを写したのではないかと思われる。

348. 瘦 牙十大 (ヤセタ)

E は *yaseta*、他でもヤセタと読んでいる。それに従う。

349. 短 迷加→迷□加□ (ミ□カ□)

E は *mijikai*、S は *mijika*、H は「短い」の意で、ジに当たる字と「い」に当たる字が脱落しているとし、O もそれに賛成してミジカイと読んでいる。ここではH、Oに従う。

350. 細相 快大 (△△)

『寧波方言詞典』によれば、「細相」は繊細、精巧という意味である。ただし、音注は解説されていない。『得月簞叢書』本では項目が「細」で、音注が「相快大」となっているが、それでも読み難いので、保留とする。

351. 朽 骨蒔路 (クサル)

E は *kusaru*、他でもクサルと読んでいる。それに従う。

352. 厚 挨卒水 (アツシ)

E は *atsusi*、他でもアツシと読んでいる。それに従う。

353. 薄 温卒水 (ウスシ)

E は *ususi*、他でもウスシと読んでいる。それに従うが、O も指摘したように、「温」をウに当てることには少々疑問が残る。また、「卒」は精母[ts]でスに当てることにも問題が

あるが、この時期のサ行音に弱い破裂を伴うためか（丸山 1981）。235「硯 尊子力（スズリ）」においても同じようなことが観察される。

354. 歪貨 不高（△△）／歪頼水（ワロシ）

Eは「歪頼水」を warusi と読み、Hも「歪頼水」をワルシとすべきであろうとし、Oは「不高」が説明文で、『日仏辞典』に「Warochi, ワロシ」とあること、及びウ段とオ段とが類似していることから、「歪頼水」をワロシと読んでいる。

ここではワロシと読んでおく。しかし「頼」をラと読むことに問題はないが、ロには相応しくない。ところで、寧波方言に「歪頼」という言葉がある。『鄞県志』「方言」⁴に「歪頼、言人放刁……」とあり、無頼の行為という意味である。ここで「歪頼」を音注にしたのはおそらく記憶上の便宜のためであろう。

「不高」は読み難いので、保留とする。

355. 不是 松田乃係（サウデナイ）

Eは sode nashi、HとOは「係」が呉方言では i となるので、サウデナイと読んでいる。「係」は匣母字で、イと読むのは妥当であろう。それに従う。

356. 破 羊鉞里里（ヤブルル）

Mは「羊鉞」をヤブ、Uはヤブルル、Eは yaburi、他ではヤブルルと読んでいる。それに従うが、「里」をルに当てるのは不審である。

357. 要緊 馬多合手→馬多拿（マツナ）

Sは mata hoshi、Hはモットホシイ、Oは「馬多」を不明とし、「合手」をホシイと読んでいる。

中国語の「要緊」とは大切や緊要の意味であるが、呉方言では急ぐの意味もある。ハ行子音に関わる問題もあるので後述するが、「合手」はおそらく「拿」の誤りで、正しくは「馬多拿」であって、マツナを写していたものであろう。

358. 緩 漫大漫大（マダマダ）

Eは mada mada、HとOもマダマダと読んでいる。それに従う。

359. 無用 設計（△△）

Eは yoke と yokeda と読んでいるが、他では解説されていない。よく分からないので、保留とする。

360. 多有 何何水（オオシ）

MとUはヲヲシ、Sは ōshi、HとOもオオシと読んでいる。

344「多」と類似する意味であるが、オオシと読んでよいであろう。

361. 未 慢大（マダ）

MとUはマタ、Eは mada、HとOもマダと読んでいる。マダを採る。

362. 香 干牌水 (カンバシ)

E は kobashii、S は kōbashii、kaubashii、H と O はカウバシと読んでいる。

「干」は山攝開口一等で、ア段に相応しいものである。『日葡』には cōbaxij のほかに canbaxij もある。「干」はカンに相応しいもので、ここではカンバシと読んでおく。

363. 臭 骨篩水 (クサシ)

E は kusasi、他でもクサシと読んでいる。それに従う。

【注】

¹ 括弧内は音価である。第4章第1節を参照。

² 波多野太郎『中国方志所録方言彙編 六』所収による。

³ 黎里：江蘇省市内にある。呉方言地域。波多野太郎『中国方志所録方言彙編 六』所収。

⁴ 波多野太郎『中国方志所録方言彙編 七』所収。鄞県は寧波府所属である。また、「歪頼」は同書所収『新昌県志』、『象山県志』にも記録されている。

第4章 寧波方言の音韻

第1節 寧波方言の音韻体系

1. はじめに

前章では『日本国考略』の成立事情や、音注漢字に見られる音声特徴から、その所拠言語を寧波方言と推定した。寧波方言の音韻体系を正確に把握することは、『日本国考略』による日本語音韻の研究にとって重要な基礎研究である。しかし、寧波方言を反映する音韻資料は決して豊富とは言えない。1727年、寧波方言の韻書といわれる清の仇廷模が編んだ『古今韻表新編』がある¹。しかし、本書は鼻音韻尾 *m*、*n*、*ŋ*、入声韻尾 *p*、*t*、*k* が揃い、疑母 *ŋ* 細音と洪音を区別しないなどの問題があるため、必ずしも当時の寧波方言を反映しているとは言い切れない。それによって、忠実に音価を再構することも困難であろう。一方、方言音や方言用字から俗語までを記録する寧波一帯の地方志、例えば乾隆五十三年（1788）『鄞県志』、光緒五年（1879）『鎮海志』²など幾冊かあるが、中国語で書かれたものであるため、個別の方言字音を求めることはできるとしても、音韻資料としての限界がある。そうした状況のなかで、19世紀の西洋人の手により書かれた資料は、寧波方言をローマ字で記録したものであるため、音韻体系を反映する好資料である。この節では、先行研究の成果を基に、西洋人資料を利用して19世紀寧波方言の音韻体系について考察する。

2. 19世紀寧波西洋人資料

第一次アヘン戦争以降、自由貿易港に定められた寧波は、西洋人が貿易や宣教活動をする一つの重要な場所となった。それに伴い西洋人の手によってローマ字で書かれた寧波方言資料が続々と現れた。それ以前の韻書や字書、方言誌などの記録方法とは異なり、寧波方言を表音文字で記録したこれらの資料は寧波方言の音韻資料として非常に貴重なものである。

游汝杰 2002:54 によれば、1850年代から寧波方言を記録したローマ字キリシタン資料が続々と現われ始めたという。当時、ルカ福音書、マタイ福音書、賛歌などの宣教関係の書物が数多く出版され、寧波方言の辞書や語学の学習書も現れた。現在、これらの書物の多くはアメリカ聖書協会やイギリス聖書協会に所蔵されている。

はじめの頃のローマ字キリシタン資料は、それぞれのローマ字表記が一樣ではなかったという。宣教師の間でもっとも広く採用されているローマ字表記は、ランキン牧師によるものである³。また、宣教師とは別に、中国諸方言についても研究していたイギリス外交官パーカーによるローマ字表記もある。同時代の、この二種のローマ字表記の存在は、当時の音韻体系を知るのに有益であることは言うまでもない。以下では二種のローマ字表記を対照して、寧波の音韻体系を再構する。

2.1. ランキンとパーカーのローマ字表記

ランキン (Rankin, H. V. V. 1825-1863) はアメリカニュージャージー州ニューアークの出身で、アメリカ合衆国長老教会に所属する宣教師であった。1847年プリンストン神学院を卒業し、しばらくして1849年2月中国に渡り、8月香港を經由して寧波に到着した。その後、長年にわたり、寧波を中心にして布教活動に努め1863年に登州で亡くなった。

ランキンに関する記述は多くはないが、Wylie, A. 1867によれば、彼によるローマ字資料が幾冊かある。

『Nying-po T'u-wô Ts'u-'oh 寧波土話初学』1857

『Foh-ing tsæn di』(福音真諦) 出版年不詳

『Ts'ong shü kyî』(創世記) 1860

『C'ih Yiài gyih』(出エジプト記) 1860

『Tsæn-me s』(讚美詩) 1860

『Sing jah djün shü』(新約全書(改訂版、共著)) 1868

もちろん『Nying-po T'u-wô Ts'u-'oh 寧波土話初学』(以下『初学』と略称する)のローマ字表記をそれ以前の表記や、ランキンのほかの訳書における表記に比較し、確かめる必要があるが、資料の多くはアメリカに所蔵されるため、それは今後の課題としなければならない。ただし、これらは同著者によるものであり、おそらく最初に『初学』のために創作したローマ字表記はその後の書物にも使い続けたと思われる。

『初学』についてはWylieによれば、ローマ字を寧波で普及させるために、学習書として作られたそうである⁴。ページ数の少ない小冊であるが、本書の内容は音韻、方言語彙をはじめ、短句、ことわざ、中国の歴史、天文学、キリスト教など、多様であった。上に述べたように、その後このローマ字表記が、広く使われており、語学的な書物、モリソン(Morrison, W. T.)の『An Anglo-Chinese Vocabulary of the Ningpo Dialect 字語彙解』1876や、モレンドルフ(Möllendorff, P. G.)『The Ningpo Syllabary』1901にも採用された。それゆえに、当時の寧波方言をかなり忠実に反映したものであると思われる。モリソンの著書は方言辞書であり、標準語に見られない方言語彙や慣用表現を載せているが、とくに貴重なのは、語彙やフレーズの声調も記録しているところである。モレンドルフの著書は同音字表であり、またローマ字記号に対する説明も行っている。それゆえ、本論文は寧波方言音の再構にあたって、この二冊の書を利用する。またモレンドルフの『Ningpo Colloquial Handbook 寧波方言便覧』1910も参考にする⁵。

Morrison, W. T. 『An Anglo-Chinese Vocabulary of the Ningpo Dialect 字語彙解』1876
(以下『彙解』と呼ぶ)

Möllendorff, P. G. 『The Ningpo Syllabary』1901 (以下『音節』と呼ぶ)

———— 『Ningpo Colloquial Handbook 寧波方言便覧』1910 (以下『便覧』と呼ぶ)

(以下では諸資料を総合的に言う場合、寧波西洋人資料と総称することがある)

19世紀の寧波方言の音韻体系に関しては、かつて徐通鏘 1990 によって再構案が出されたことがある。徐は『彙解』『音節』『便覧』のローマ字表記や、現代寧波方言音を基に再構を行ったが、『初学』は参考にしなかったようである。もちろん『彙解』『音節』『便覧』のローマ字表記は『初学』を受け継いだものである。ただし、第3節で述べるように、『初学』の冒頭にある音節表の音節の並び方は、寧波方言における牙喉音口蓋化の問題に解決のための手掛かりを与えてくれる。

また、パーカー (Parker, E. H. 1849~1926) が著した「The Ningpo Dialect」1884 という論文がある。パーカーは 1869 年から 25 年近く中国の各地で勤めていたイギリスの外交官、漢学家である。彼は中国の思想や、宗教、言語などにも多くの論著があり、中国の方言に関する論文も数多く見られる。「The Ningpo Dialect」以前には北京、福州、揚州、客家、広東などの方言に関する論文を発表しており、寧波方言を考察する際、これらの成果に基づいて比較言語学的な考証が行われている。パーカーのこの論文はランキンのローマ字と異なるローマ字方案を提示しており、各音節についても説明しているので、参考に値するものである。

3. 音韻体系の再構

ここでは、ランキンのローマ字とパーカーのローマ字を照らし合わせ、改めて 19 世紀の寧波方言音韻体系の再構を試みる。その上で、声母と韻母それぞれに『日本国考略』に見られるいくつかの音韻現象について述べる。

3.1. 声母

ランキンとパーカーのローマ字表記、及び徐の再構音価を下に並べる。

【表 1】

声母							
例	ランキン	パーカー	音価	例	ランキン	パーカー	音価
非反	f	f	[f]	—	—	—	—
維亡	v	v	[v]	里魯	l/l̃	l	[l]
比波	p	p	[p]	低帶	t	t	[t]
批派	p'	p'	[p']	體態	t'	t'	[t']
皮婆	b	b	[b]	地道	d	d	[d]
米埋	m/m̃	m	[m]	奴奈	n/ñ	n	[n]
西山	s	s	[s]	水爽	sh	sh	[ʃ]
徐柴	z	z	[z]	樹尚	j	j	[ʒ]
祭債	ts	ts	[ts]	主中	c	ch	[tʃ]
妻蔡	ts'	ts'	[ts']	趣沖	c'	ch'	[tʃ']
池才	dz	dz	[dz]	住重	dj	dj	[dʒ]
喜孝	hy	hs	[h'] [ç]	海轟	h	h	[h]

意阿	無表記	無表記	ゼロ	汗紅	ˊ	無表記	[ɦ]
幾皆	ky	c	[kʰ] [tɕ]	干公	k	k	[k]
氣楷	kyˊ	cˊ	[kʰˊ] [tɕˊ]	肯空	kˊ	kˊ	[kˊ]
其橋	gy	dj	[gʰ] [dʒ]	共狂	g	g	[g]
濃絨	ny	ng	[n]	岩昂	ng/ŋg	ng	[ŋ]

3.2. 韻母

ランキンとパーカーのローマ字表記と再構音価、および現代寧波の音価を下の表に示す。なお、声母に比べ、韻母の体系はやや複雑であるため、現代寧波の音価は高志佩他 1991、湯珍珠他 1997 も参照する。

【表 2】

例	ランキン	パーカー	現代
時司	無表記 ⁶ [ɿ]	z[ɿ]	[ɿ]
西基	i[i]	i[i]	[i]
大解	a[a]	a[a]	[a]
写借	ia[ia]	ia[ia]	[ia]
改海	æ[ɛ]	e[ɛ]	[ɛ]
也斜	iæ[iɛ]	ie[iɛ]	[iɛ] ⁷
雷美	e[e]	ei[ɐi] ⁸	[ɐi] ⁹
坐婆	o[o]	ou[ou]	[əu] ¹⁰
沙茶	ô[ɔ]	o[ɔ]	[o]
草包	ao[ao]	oa[ɔ]	[ɔ]
兆搖	iao[iao]	ioa[iɔ]	[iɔ]
剖斗	eo[œy]	öü[œy]	[œy] ¹¹
流酒	iu[iu]	iu[iu]	[iʏ]/[y] ¹²
碰坑	ang[aŋ]	añg[ã]	[ã]
央姜	iang[iaŋ]	iañg[iã]	[iã]
藍班	æn[ɛn]	aañ[ẽ]	[ɛ]
念茄	iæn[iɛn]	ieñ[iẽ] ¹³	[i] ¹⁴
鑽端	ön[øŋ]	öün[ø]	[ø]
潭安	en[ɛn]	eiñ[ɛĩ]	[ɐi] ¹⁵
天建	in[in]	ieñ[iẽ]	[i]
盆根	eng[ɛŋ]	êng[ɛŋ]	[ɛŋ]
近因	ing[iŋ]	ing[iŋ]	[iŋ]
東孔	ong[oŋ]	ung[oŋ]	[oŋ]

扛浪	ông[ɔŋ]	oŋg[ɔ̃]	[ɔ̃]
辣麦	ah[aʔ]	ah[ɛʔ]	[ɛʔ]
虐綽	iah[iaʔ]	iah[ieʔ]	[ieʔ]
勒末	eh[eʔ]	ah[ɛʔ]	[ɛʔ]
溺失	ih[iʔ]	ih[iʔ]	[iʔ] ¹⁶
薄竹	oh[oʔ]	oh[oʔ]	[oʔ]
落各	ôh[ɔʔ]	oh[oʔ]	[oʔ]
部/古	u/wu[u]	u[u]	[u]
具/水	ü[y]	ü[y]/i[ɥ] ¹⁷	[y]/[ɥ]
拐快	wa[ua]	wa[ua]	[ua]
懷乖	wæ[ue]	waa[ue]	[ue]
威會	we[ue]	wei[uɐɪ]	[uɐɪ] ¹⁸
花挂	wô[uɔ]	wo[uɔ]	[uɔ]
垂下	üô[yɔ]	üo[yɔ]	[yo]
橫梗	wang[uaŋ]	waŋg[uã]	[wã]
關還	wæn[ueŋ]	waañ[uɛ̃]	[ue]
歡伴	un/wun[un] ¹⁹	ouñ[ũ]	[ũ]
專權	ün[yn]	öñ[ỹ]	[y]
昏滾	weng[uəŋ]	wêng[uəŋ]	[uəŋ]
均薰	üing[yŋ] ²⁰	üing[yŋ]	[yŋ]
濃迴	üong[yɔŋ]	üung[yɔŋ]	[yɔŋ]
光忙	wông[uɔŋ]	wong[uɔŋ]	[uɔ̃]
江降	üông[yɔŋ]	üong[yɔŋ]	[yɔ̃]
滑括	wah[uaʔ]	wah[uaʔ]	[uaʔ]
骨忽	weh[ueʔ]	wah[uaʔ]	[uaʔ]
決鬱	üih[yiʔ]	üeh[yɪʔ]	[yɪʔ] ²¹
局玉	üoh[yoʔ]	üoh[yoʔ]	[yoʔ]
育覺	üôh[yɔʔ]	üoh[yoʔ]	[yoʔ]
姆嚙	m[m]	m[m]	[m]
魚悟	ng[ŋ]	ng[ŋ]	[ŋ]
二耳	r[l]	r[ɥəl] ²²	[əl] ²³

4. 寧波方言に関する覚え書き

4.1. 次濁音

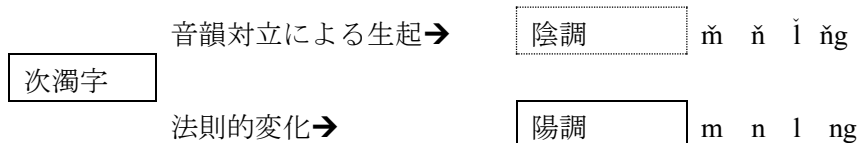
ランキンの中古音の次濁音[m n l ŋ]には二種の表記が見られる(表に/で示した箇所)。

それは次濁音を陰調と陽調に書き分けたものである。吳方言において、中古の全濁字と次濁字は陽調（低い声調）に、全清字と次清字は陰調（高い声調）に変化するのが法則である。しかし、実際には少なくとも 19 世紀において、陰調、すなわち高い声調を伴う次濁字が存在していたことがこの二種の表記から確認できる。

【表 3】

	次濁音 ²⁴			
陰調	m̃ 嗎	ñ 納	l̃ 囉	ŋ̃ 哦
陽調	m 姆	n 納	l 羅	ng 我

陰調の具体例を見ると、方言的な用語や擬声語（例えば、口偏を使う当て字、時には漢字表記されていない語もある）が圧倒的に多い。次濁字が陽調に変化を遂げ、[m n l ŋ]で始まる音節(字)がすべて低い声調になる。陰調と陽調という音韻的対立が形成されると、すべての音節において陰調と陽調の対立が求められるようになる。従って、[m n l ŋ]で始まる低い音節が形成された後、法則に合わない[m n l ŋ]で始まる高い音節の枠が新たに組み立てられる。その枠に方言的な語彙や擬声語が入ってきたものと推測される。



パーカーはこの声調の違いを書き分けることをしなかった。記号の経済、また全体の整然性から言えば、パーカーのローマ字表記は効率的だと思われる。

4.2. 口蓋化

ランキンの hy、ky、ky'、gy に対して、パーカーは hs、c、c'、dj を使っている。そして、ランキンの c、c'、dj に対して、パーカーは ch、ch'、dj を使っている。パーカーはランキンが区別していた gy、dj を一つの dj にまとめている。

これは牙喉音の口蓋化に関わる問題で、次の節で詳述するが、大体から言えば、ランキンの時には牙喉音の口蓋化がまだ起こっていないのに対して、パーカーの時には起こりはじめたと解釈することができる。パーカーのローマ字の牙喉音はすでに歯音 ch、ch'、dj に近づいている（dj においては同じ）ことが分かる。

4.3. 蟹摂の韻尾

蟹摂一二等に属する字は中古音において i 韻尾を持っていたと推定されており、現在でも多くの方言に聞かれる。蟹摂の i 韻尾を消失しながらも、一等と二等の区別がほぼ保たれているのは吳方言の一つの特徴である。

【表 4】

蟹摂	例	寧波	北京	広東	日本漢音
一等	開	[k'e]	[k'ai]	[hɔi]	カイ
二等	楷	[k'a]	[k'ai]	[k'ai]	カイ
一等	災	[tse]	[tsai]	[tsoi]	サイ
二等	齋	[tsa]	[tʂai]	[tsai]	サイ

この特徴は 19 世紀の資料の再構音からも確認できる。例えば次のようである。

「大解」[a]、「拐快」[ua]、「改海」[ɛ]、「懷乖」[ue]、「雷美」[e]/[ɛi]、「威會」[e]/[uei]

『日本国考略』に見られる蟹摂の一二等韻はア段音に多く用いられている。「楷（カ）」「晒（サ）」「買（マ）」「大（タ）」「乃（ナ）」などがそれである。それに対して、少ないながら、ア段・オ段・ウ段＋イに当てるのも十数例ある。

25 前日 阿多堆（オトトイ）

54 官 大米（ダイメイ）

80 親眷 新雷（シンレイ）

156 吃 何売利（オマイリ）

338 無 乃（ナイ）

341 不好 由無奈（ヨウナイ）

これは当時において、蟹摂一二等の i 韻尾が完全には消失していなかったことを意味するのかもしれない。ただし、これ以上の根拠を見つけるのは困難である。

4.4. 假摂

假摂二等字の再構音は「沙茶」[ɔ]、「花挂」[uo]である。『日本国考略』ではア段とオ段に用いられている。

315 馬 烏馬（ウマ） 271 衣服 乞麻俚（キモ△）

357 要緊 馬多拿（マツナ） 253 鋸 拏剛擊利（ノコギリ）

255 碟 沙頼（サラ） 290 醬 弥沙（ミソ）

現在でも假摂の字に文白異読音がある。例えば、「花」は[huo]または[hua]とされている。当時において両読された可能性がある。あるいは、広母音[ɔ]が[a]と[o]の間にあるので、写音に際して、ア段とオ段のどちらに当てても、さほどの違和感はなかったかとも考えられる。

4.5. 蟹摂・止摂三四等字とイ段・エ段

『日本国考略』でイ段音とエ段音の両方に用いられた音注漢字は次の通りである。

キーケ：計、鷄、吉

チーテ：的

ニーネ：泥、尼

ビーベ：鼻、皮

ミーメ：米、迷、眉、謎、密

リーレ：礼、里、利、俚

一見したところ、イ段音とエ段音とを混同しているように見える。なお、これらの音注漢字がイ段、あるいはエ段に偏っている傾向は見出しえない。ところが、イ段とエ段に当たる音注は中古音の止摂開口、蟹摂開口三四等の字が多い。現代呉方言では止摂開口と蟹摂開口三四等が合流している（精知章組を除く）。この現象は早くも明代に起こっていたことは呉方言による明代の詞話や韻書から確認できる（古屋昭弘 1986、丁鋒 2001 など）。イ段とエ段に使われているこれらの字は寧波西洋人資料を調べると母音[-i]を持つものばかりである。

蟹摂開口一二等の字は例えば「帯」は宣教師資料では[te]、『日本国考略』ではタに用いられているように、16世紀には[e]よりも広い[a]のような母音であったであろう。蟹摂合口一二等の字は、例えば、「雷」は宣教師資料では[le]、『日本国考略』ではルイを写している。さらに『日本風土記』でも「累」ルイ、「回」オイの例が見られる。このようなことから16世紀から19世紀にかけて蟹摂合口一二等の字は[oi]>[e]という変化を経たと思われる。

そうであれば、16世紀の寧波方言ではイ段音とエ段音に近い音節は[-i]だけで、イ段音とエ段音を写し分けることは困難であった。これが、同じ音注漢字がイ段音とエ段音との両方に当てられている理由なのである。

4.6. 遇摂・果摂とウ段・オ段

次に、ウ段とオ段の音注漢字を見る。以下のように、ウ段とオ段の両方に用いられた音注漢字がある。

ウーオ：鳥 クーコ：古、姑、个、哥、骨
 スーソ：松 ツート：多、都、
 ヌーノ：奴 ムーモ：木、莫、門
 ユーヨ：尤 ルーロ：落、羅、禄、路

注目されるのは、ウ段とオ段の音注漢字にはグループによって使い分けの傾向があることである。ウ段に遇摂、オ段に果摂の字が偏っていることが表5から分かる。

【表5】

	ウ段		オ段	
	遇摂	果摂	遇摂	果摂
ア行	15	2	5	36
カ・ガ行	19	2	4	27
サ・ザ行	8	0	3	5
タ・ダ行	5	4	0	19
ナ行	3	0	4	6
ハ・バ行	7	0	0	2
マ行	1	0	1	0
ラ行	25	1	3	3
合計	83	9	20	98
比率	90%	10%	17%	83%

このように、ウ段を表わすには遇撰、オ段を表わすには果撰の字を使う明らかな傾向があるとと言える。現在の呉方言においては果撰が遇撰に合流している地域もある。例えば上海、松江はそれである。ただし、現在寧波方言では果撰と遇撰の合流は認められない。19世紀の寧波西洋人資料においても果撰と遇撰の混同は認められない。さらに、遡れば明代呉方言の伝統芸能である詞話や、呉方言の字書でもその混同例が皆無のため、おそらく16世紀の呉方言の全地域において遇撰と果撰の区別ははっきりしていたと考えられる。

そうであるならば、ウ段に果撰の字、オ段に遇撰の字が現れることは、当時の日本語側の問題で、ウ段とオ段との間に母音の揺れが生じていたことを意味していると言える。つまり母音交替の可能性が考えられるわけである。

日本語における母音交替の現象は上代から中世にかけて多く見られる。室町時代末の『日葡辞書』にもその例が多くある。例えば、以下のようである。

カルイーカロイ（軽い）
ワルイーワロイ（悪い）
アユミーアヨミ（歩み）
クルルークロロ（樞）
カウムリーカウモリ（蝙蝠）

従って、『日本国考略』がウ段音とオ段音の交替現象を反映した可能性も十分にある。下に母音交替の可能性のある語を挙げてみる。

果撰：(ウ段>オ段)

245 鎖 𪛗索利（クサリ>コサリ）、323 二 非咄多（ヒタツ>ヒタト）、
328 七 難難多（ナナツ>ナナト）、357 要緊 馬多拿（マツナ>マトナ）、

遇撰：(オ段>ウ段)

34 石 依水古（イシコ>イシク）、76 男子 阿奈公姑（オノココ>オノコク）、
86 和尚 烏常（オショウ>ウショウ）、93 我 阿奴利（オノレ>オヌレ）、
133 罾 烏爺蛮計（オマヤキ>ウマヤキ）、146 怕 倭疎路路（オソルル>オスルル）、
158 安排 蘇路（ソロ>スル）、176 那裡去 陀姑移姑（ドコイク>ドクイク）、
216 心 个个路（ココロ>ココル）、276 襦衫 迷奴（ミノ>ミヌ）、
279 夏布 奴奴綿（ヌノメン>ヌヌメン）、295 穀 暮米（モミ>ムミ）
299 笋乾 大吉糯古（タケノコ>タケノク）、339 好 姚鎖盧（ヨウソロ>ヨウソル）

流撰：(オ段>ウ段。ユに流撰三等、ヨに效撰三等の字がもっぱら使われている。ヨに流撰三等の字が現われることもあり、ヨ>ユの母音交替の可能性もある。)

不好 由無奈（ヨウナイ>ユウナイ）、嫂 阿尼尤尼（アニヨメ>アニユメ）

現代日本語においては以上のような揺れは、少なくとも共通語には見当たらない。これらの母音交替は後の時代に定着しなかった、もしくは規範意識によって本来の形に戻ったのではないか。また、オ段>ウ段の交替がウ段>オ段の交替に比べ、数多く観察されたこ

とも興味深いところである。

【注】

¹ 耿振生 1992、平田直子 2008。

² 波多野太郎 1965 所収。

³ Morrison, W. T 1876:vii。

⁴ 『初学』編集の際に Cobbold, R. H.の『Spelling Book in the Ningpo colloquial dialect』を参考にしたという。しかし『Spelling Book in the Ningpo colloquial dialect』はただ8頁の小冊子である(Wylie 1867 訳本:189)のに、『初学』(再版)は68頁もあるということから、ほとんどの内容はランキンの手によるものであることが窺える。

⁵ Taylor, J. H 『Ah-lah kyiü-cü Yiæ-su Kyi-toh-go Sing Iah Shü』 1868 という寧波ローマ字聖書もある。ローマ字表記はランキンのローマ字を使用している。ここでは考察対象にしないが、方言語彙や表現の面で研究に値する資料である。また、著者名は Wylie, A. 1867 によって分かる。

⁶ 音節を子音 s、z、ts、ts'、dz のみで表わした。

⁷ 湯他 1997 は「茄」の一字しか収録していない。

⁸ 『音節』(:vii) でもランキンの e について「e の発音は舌構えが ae と同じである」(原文: e is pronounced with the tongue conformation as in ae.) としている。従って、[eɪ]と再構する。

⁹ 高他 1991 では[eɪ]。

¹⁰ 高他 1991 では[eʊ]。

¹¹ 高他 1991 では[œø]。

¹² [ɣ]:「留、流、丟」、[iɣ]:「由、修、紐」のように両読されている。ただし山撮合口例えば「旋」などは湯他 1997 では[ɕɣ]、高他 1991 では[ɕiɣ]としているように混乱が起きていることが窺える。徐通鏞 1989 は[iɣ]、[ɣ]が[y]に合流し始めたと指摘している。

¹³ パーカーはこの音節が[ie][i]とも読まれるという。

¹⁴ そのほかに[ie]「念、験」もある。

¹⁵ 高他 1991 では[eɪ]。

¹⁶ 高他 1991 では[ieʔ]。

¹⁷ 『音節』によれば、c、c'、sh、j、dj に続くのは ü でない。徐ではそれを[ɥ]と、趙 1928 では[ɥ]としている。そり舌音の[ɥ]は現在では観察されていないため、徐に従う。

¹⁸ 高他 1991 では[uɛɪ]。

¹⁹ 『初学』では、-wun が k-、g-、h-及びゼロ声母にのみ後接し、-un はそれ以外の声母に後接するという補い合う分布になっているので、音韻的に一つの母音と見なすことができる。『彙解』、『音節』では kun, k'un の綴りが現われ、一見 kwun と k'wun とが対立しているように見える。ところが、『音節』は「w が u の前に来るとき、u と似ている。hwu は huu である」(:viii)。「裏山人(訳者:山の人)が「寛」k'wun を k'un と、kwun を kun と発音する」(:56) と述べている。ということは kun, k'un と kwun, k'wun との対立には

地域性があり、「裏山人」という人々は kun, k'un と発音するが、寧波では kwun, k'wun と発音するのが一般的であると理解してよいであろう。その差はよく分らないが、wun は[un]、un は[un]であろうか。

²⁰ 『音節』では k-, g-, h-の後ろに-iüŋ と表記する。

²¹ 高他 1991 では[yeʔ]。

²² パーカーは r の音価についてほとんど述べていない。『音節』では l の前に後部歯茎音 (c, j, dj, sh) に続く ü のような音があり、正しい書き方では yrɿ であると述べている。そのことから、19 世紀末においては、この r は単純な[l]でないことが分かる。現代寧波でも[ɹ]になっているので、とりあえず『音節』の記述のように[ɹəl]としておく。

²³ 高他 1991 では[l]。

²⁴ 『音節』ではこの陰調のローマ字表記を書き換えた。ñ→n' l→l' ŋg→ng'。

第2節 『書史会要』と『日本国考略』に観察される 呉方言の後部歯茎音

1. はじめに

この節では、『書史会要』と『日本国考略』を通して、明代呉方言における後部歯茎音を考察する。前述のように、両書とも呉方言を所拠言語とし、中世の日本語を記録しているので、音韻史の資料として用いられてきた。特に『書史会要』は早くから注目されており、研究成果が収められている。最近では、丁鋒、蔣垂東による中国語資料との対照的研究によってさらに所拠言語の具体的な地域が明らかになっている。先学の成果を踏まえて、筆者が『日本国考略』を考察したところ、サ行音の写音において、『書史会要』と共通点のあることが分かった。一方、『日葡辞書』などのキリシタン資料が反映した、日本語のサ行子音が[s]と[ç]¹、二種類の子音を持っているという音声事実は中国資料にも反映されている。これは中国資料の写音の正確性、特に『日本国考略』の所拠言語が寧波方言であることを証明する根拠でもあるし、さらに現代呉方言にほとんど聞かれない後部歯茎音が音韻史上には存在していたことの論拠ともなりうる。

2. 『書史会要』

2.1. 陶宗儀とその著書

『書史会要』は元末明初浙江台州黄岩の人、陶宗儀の著書である。第八巻の「外域・日本国」では、克全（字を大用とする）という日本僧侶から聞いた日本語の「いろは」を平仮名で記録し、漢字音注を付けている（本節末尾、資料1参照）。

本書は1376年の成立であることから、14世紀日本語の貴重な音韻資料として知られている。『書史会要』の写音に対する研究は早くからあり、小川環樹1947、有坂秀世1950、渡辺三男1957、大友信一1963などの論考が挙げられる。

『書史会要』の音注には呉方言の特徴が反映しており、さらに著者の陶宗儀が呉方言地域の出身であるので、所拠言語は呉方言であることに間違いない。丁鋒2000、蔣垂東2010によれば、陶宗儀は20代から故郷を離れ、人生の三分の二の時間は蘇州南部の松江（現在上海市）で暮らしていたことが明らかであるから、『書史会要』の所拠言語も松江一帯の方言であるという。

ところで、陶宗儀は別に『南村輟耕録』という書も著した。その中で記録された射字詩は方言音韻資料として知られ、当時の松江方言の音韻体系を反映していると言われる。射字詩とは当時文人の間に流行していた、反切を利用した遊戯である。遊び方としては、中国語（ここでは松江方言）のすべての声母と韻母の字母（代表字）を詩の形に配列し、それぞれの拍数を決める。そして、ある文字の声母と韻母それぞれの拍数を鼓などで叩き、その文字を相手に当てさせるというものである²。

『南村輟耕録』の射字詩に関する研究には周祖謨1966、魯国堯1988、また最近では蔣2010がある。先行研究では音韻の再構を行っているが、歯音の再構音についてはさらに検討する余地があるのではないかと思われる。次にはまず『書史会要』と射字詩に見られ

る知照組と精組の音価について見てみよう。

2.2. 『南村輟耕録』の助紐字

『南村輟耕録』所収の射字詩では声母を以下の28個としている。(括弧は助紐字、○は原文空白)

輕(輕牽) 兵(兵辺) 平(平便) 明(明眠) 逢(○○) 興(興掀) 征(征煎)
 経(経堅) 迎(迎年) 傳(傳偏) 停(停田) 応(応煙) 成(成涎) 声(声臚)
 清(清千) 澄(澄纏) 星(星鮮) 晴(晴誕) 丁(丁顛) 繁(繁虔) 盈(盈延)
 能(能○) 称(称千) 非(○○) 精(精煎) 零(零連) 汀(汀天) 橙(橙纏)

その中に歯音が9個あり、それは次の通りである。表1は蔣2010:881を基に作成したものである。「射字詩字母」と「射字詩助紐字」は射字詩の原文にある字母及び助紐字である。これと中古声母との対応を示すため、中古声母(精組を□、知照組を△で示す)をその下に加える。

【表1】

射字詩字母	精	清	星	晴	征	称	澄	声	成
中古声母	□	□	□	□	△	△	△	△	△
射字詩助紐字	精煎	清千	星鮮	晴涎	征煎	称千	澄纏	声臚	成涎
中古声母	□□	□□	□□	□□	△□	△□	△△	△△	△□

表1の中古声母との対応から、9個の射字詩字母を二グループに分けることができる。

A: 精、清、星、晴 (□)

B: 征、称、成、澄、声 (△)

Aグループの字母は中古音の精組に由来するものである。その助紐字は二字とも精組のものである。これに対して、Bグループの字母は中古音の知照組に由来するその助紐字には中古音の精組、また知照組のものもある。その中で、「澄、声」の助紐字はそれぞれ二字ともに知照組のものである。「征、称、成」の助紐字は前字が知照組、後字が精組のものである。

現在松江方言において、知照組が精組に合流しているため、魯1988は、助紐字が混同する「征、称、成」がある一方、区別する「精、清、星、晴」と「澄、声」もあるということは、当時知照組が精組へ合流する中間段階であったことを反映していると指摘した。また、現在、松江の北部に位置する常熟、無錫などの地域では、精組、知照組がそれぞれ歯茎音([ts]など)、そり舌音([tʂ]など)であることから、A、Bグループの音価を次のように再構した。

精[ts] 清[tsʰ] 星[s] 晴[z] 征[tʂ] 称[tʂʰ] 澄[dz] 声[s] 成[z]

これに対して、蔣2010は「吳方言の[ts-][tsʰ-][s-][z-]は北京音の[ts-][tsʰ-][s-][z-]よりも発音部位が後ろよりのため、前舌高母音の[i]の前では、[i]の影響で、[tʂ][tʂʰ][ç][z]との違

いが曖昧になるため、区別しにくくなった」として、A、Bグループの音価を次のように再構した。

精征[ts(tʃi)] 清称[tsʰ(tʃʰi)] 澄[dz(dʒi)]^{ママ} 星声[s(ji)] 晴成[z(ʒi)]⁴

以上の魯と蔣の再構に対して、筆者はそれぞれに賛成するところと、さらに検討を要するところがあると思う。助紐字の混同は魯の指摘の通りに、知照組が精組に合流する中間段階の反映だと思われる。しかし、Bグループの音価は魯の再構したそり舌音ではなく、蔣の再構した後部歯茎音である。ただし、それは蔣が根拠とした呉方言の[ts-][tsʰ-][s-][z-]の調音位置とは無関係であろう。

なぜ魯の言うそり舌音ではないか。それは、まずそり舌音は母音[i]と組み合わせられることが少ないからである⁵。現代の諸方言においても、[tʃi][ʃi]のような音節は見当たらない。そり舌音は舌尖を硬口蓋に向かって持ち上げて発音するので、舌尖を平らにし、硬口蓋に近づけて発音する母音[i]との間で[tʃi][ʃi]のような発音を為すことには実に過剰な労力が要される。つまり、調音上不経済なのである。

2.3. 『書史会要』の写音と『日葡辞書』の綴り方

また、以下『書史会要』の写音から、Bグループの子音がそり舌音でないことを説明することもできる。『書史会要』に記録された「いろは」の中からサ行音の音注を抜粋すれば以下の通りである⁶（括弧は原文の割注を示す）。

さ篩（又近柴）、し尸（又近時）、す疏（又近徂）、せ蛇（又近奢）、そ座（平声又近莎）

ここのシの音注漢字は書母字「尸」、その濁音は常母字「時」である。もしも「尸」が[ʃi]、「時」が[ʒi]の音価であったとしたら、シ[ci]、ジ[zi]とは聴覚上に異なり、むしろス、ズに近い音に聞こえると思われる（ス・ズの場合には、uの母音が[ɥ]で現れることが多く、ス・ズの音価は[sɥ][zɥ]となる。それについては第5章第3節で述べることにする）。「尸」[ʃi]、「時」[ʒi]より心母字（例えば「西」[si]）、従・邪母字（例えば「寺」[zi]）のほうが聴覚的にシ[ci]、ジ[zi]に近い音節であろう。精組字（「西」「寺」）を使わずに、章組字（「尸」「時」）を使うことは、章組字のほうがシ[ci]、ジ[zi]に近い音であることを意味する。この点について、小川 1947 も言及しているが、章組字の使用については疑問を残したままである。

一方、セには書母の「奢」、ゼには船母の「蛇」が使われ、シ・ジと同じく章組字が使われている。しかし、サ・ス・ソ・ザ・ズ・ヅに当てる「篩」「柴」「疏」「徂」「座」「莎」ではすべて精組のものである。これはただ偶然のこととは思われない。

ところで室町末期のキリシタン資料においてサ・ザ行音の綴り字に特徴があることは周知の通りである。それを『書史会要』の写音と照らし合わせると、音注漢字の声母とローマ字の間に共通点のあることが表2から分かる。

【表 2】

	サ・ザ	シ・ジ	ス・ズ	セ・ゼ	ソ・ゾ
日葡辞書	sa / za	xi / ji	su / zu	xe / je(ge)	so / zo
書史会要	精組・精組	章組・章組	精組・精組	章組・章組	精組・精組

両資料における一致は当時のサ行子音の音価を忠実に反映していることを意味する。定説に従えば、ローマ字 s と z の音価は[s][z]、x と j の音価は[ç][ʒ]である⁷。関東においてはセ・ゼの音価が[se][ze]となるが、シ・ジでは[çi][ʒi]のままで現在でも安定している⁸。

このように安定したシ[çi]とジ[ʒi]は、『書史会要』における章組の音価を推測するのに重要である。つまり、章組の音価は[ç][ʒ]、またはそれに近似する子音であったと思われる。本章第 3 節にも述べるが、寧波方言における歯茎硬口蓋音[ç][ʒ]などの発生は 19 世紀の牙喉音の口蓋化によるものであるため、章組の音価は歯茎硬口蓋音[ç][ʒ]に近い後部歯茎音[ʃ][ʒ]であったと推定される。

2.4. 『南村輟耕録』の助紐字の音価

『南村輟耕録』における A グループの字母は子音が歯茎音[ts][tsʰ][s][z]であり、これについては異論がない。B グループの字母の子音は『書史会要』の写音とキリシタン資料のローマ字との対応から、後部歯茎音[tʃ][tʃʰ][ʃ][ʒ]であったと推定することができる。また、B グループ字母「征、称、成」の助紐字が精組字と知照組字を含むことは魯 1988 の指摘通りに、知照組が精組へ合流したことを反映したと考えられる。一方、字母「澄、声」は知照組字しかないため、その音価は後部歯茎音であると考えることができる。当時の歯音声母の音価を次のように再構する。

精[ts]清[tsʰ]星[s]晴[z] 征[tʃ/ts]称[tʃʰ/tsʰ]澄[ʈ]声[ʃ]成[ʒ/z]

3. 『日本国考略』

ここでは『日本国考略』の音注漢字について考察を行う。その際、主に、19 世紀の寧波方言を記録した寧波西洋人資料を参考とする。

3.1. 寧波西洋人資料

かつて寧波西洋人資料に基づき、寧波方言の後部歯茎音について考察を行ったのは徐通鏘 1990、胡方 2001 であった。徐は西洋人のローマ字綴りに現代寧波方言に見られない、声母 sh、j、c、cʰ、dj と声母 s、z、ts、tsʰ、dz との対立を発見し、sh、j、c、cʰ、dj を後部歯茎音と再構した。

春 shông[ʃɔŋ] ≠ 桑 sông[sɔŋ]
 尚 jông[ʒɔŋ] ≠ 上 zông[zɔŋ]
 中 cong[tʃɔŋ] ≠ 宗 tsong[tsonŋ]
 沖 cʰong[tʃʰɔŋ] ≠ 聡 tsʰong[tsʰɔŋ]
 重 djong[dʒɔŋ] ≠ 従 dzong[dzɔŋ]

後部歯茎音は主に精、知、章の三等に分布しており、円唇母音と組み合わせられ、音節を為している。例えば、「叔」shoh[ʃoʔ]、「選」shün[ʃyn]、「書」shü[ʃy]などである。なお、徐は「震」cing[tʃiŋ]、「舜」shing[ʃiŋ]、「春」c'ing[tʃ'iŋ]など、iと表記されている母音があるが、『音節』によると、これらの母音の音価はiとyの間にあるというから、その音価は[y]であると説明している⁹。従って、円唇母音が後部歯茎音の現れる条件ということになる。

3.2. 『日本国考略』の音注漢字

ここでは、19世紀に観察された後部歯茎音という子音が16世紀においてどのような形で現れたかについて考察する。

まず『日本国考略』におけるサ・ザ行音の音注漢字をまとめてみたい。

3.2.1. サ・ザ・ソ・ゾ

まずは広母音を持つサ・ザ・ソ・ゾから見てみる。それらに当てる音注漢字は次のようである（数字は使用回数）。

サ・ザ：沙1、山1、三2、殺2、晒9、篩2、索2、撒2／柴1

ソ・ゾ：沙1、踈1、所1、梭4、鎖1、蘇1、孫2、篩1

徐は後部歯茎音の特徴を主に精、知、章組の三等に分布し、円唇母音と組み合わせられると指摘しているが、上のサ・ザ・ソ・ゾの音注漢字はこの特徴に適さない。寧波西洋人資料では次のように表記している。

沙所 sô[sɔ]、山三 sæn[sɛn]、殺撒 sah[sɑʔ]、晒 sa[sɑ]、篩 s[sɿ]¹⁰、索 sôh[sɔʔ]、柴 za[za]
踈蘇 su[su]、梭鎖 so[sɔ]、孫 seng[sɛŋ]

サ・ソに当てる漢字は心母字または生母字であり、章母字のないことが分かる。丁2004も指摘しているように、寧波方言の生母が精母に合流したことが伺われる。キリシタン資料でサ・ソの子音をsとしていること、また現代寧波方言でも心母と生母とも[s]となっていることから、当時においても、[a]、[o]の前に来る心母と生母の音価は[s]であったのであろう。濁音の例はただ一例「柴（ザ）」であるが、心母と生母の[s]に対して、崇母では[z]であったと考えられる。

3.2.2. ス・ズ

ス・ズに当てる音注漢字は次のようである。

ス：宿4、踈3、思3、孫2、速2、松2、尊1、卒1、数1、沈1、碎1、塑1

ズ：助3、姊2、都1、子1

サ・ザ・ソ・ゾの音注漢字と同様に、ス・ズに当てる音注漢字も後部歯茎音の特徴に適さない。寧波西洋人資料では次のように表記される。

宿速 soh[sɔʔ]、踈数塑 su[su]、思 s[sɿ]、孫 seng[sɛŋ]、松 song[sɔŋ]、尊 tseng[tseŋ]、
卒 tseh[tseʔ]、沈 sing[sin]、碎 se[se]、助 dzu[dzu]、姊 tsi[tsi]、都 tu[tu]、子 ts[tsɿ]

これらの音注漢字は母音においてはまちまちで不統一に見えるが、寧波方言における母

音の変化の問題、また、日本語側のス・ズにおける母音の異音の問題があると思われる。いずれにせよ子音が[s]であることは明白である。

3.2.3. シ・ジ

シ・ジに当てられた音注漢字は次のとおりである。

シ：水 45、失 11、恕 2、黍 2、戌 2、需 2、碎 1、收 1、豕 2、惜 1、西 1、身 1
守（シウ） 2、常（シヤウ） 1、身（シン） 1、新（シン） 1
ジ：需 1、射（ジャ） 1、若（ジャ） 1

シに当てる漢字のなかにもっとも多いのは「水」で、45例もある。「水」は止摂書母合口であり、寧波西洋人資料では shü[jy]¹¹。合口の「水」を用い、『書史会要』のように「尸」などの開口字を用いないことは、これは徐 1990 のいう寧波方言の後部歯茎音の特徴に当てはまり、後部歯茎音と円唇母音との関係を物語っている。ほかに「恕、黍、戌、碎、需、常」も「水」と同じ円唇母音である。

使用回数が「水」に次ぐ「失」は臻摂開口三等字で、多くの呉方言において非円唇母音を持っているが、寧波西洋人資料ではそれを shih と表記しており、sh に後接する i は上述のように[y]、すなわち円唇母音である。要するに、シ・ジに当てる音注漢字は寧波西洋人資料に見られる後部歯茎音のものが圧倒的に多いということである。

3.2.3.1. 歯茎音の使用例について

シ・ジを表わす漢字には、わずかながら歯茎音[s]を持つ漢字も使われている。「守、收、惜、西、豕、身、新、射、若」である。

そのうち、「西」、「豕」の二字では、その寄語項目が 41「西 義西（ニシ）」、312「猪豕豕」である。寧波西洋人資料で「西」は歯茎音の si[si]であり、豕も歯茎音 s[s]であって、母音はさらに[i]と似ていない。しかしこれは「西」と「猪」という項目の意味から、記憶上の便宜で、「西」と「豕」が選択されたわけである。音注漢字の音声上の近似性は二次的になっていたのである。

また、「守（シウ）」では、寧波西洋人資料で siu[siu]とされているが、寧波方言に音節 shiu[jiu]がないために選ばれたのである。

「收」は「守」と同音であり、寧波西洋人資料では siu[siu]とされている。その項目 289「塩 收河（シオ）」では、オの影響で[ciwo]が[ciuo]のように発音されたのではないかと思われる。従って、「守」と同じような理由で選ばれたのである。

「射」は寧波西洋人資料で zia[zia]とされている。「射」は假摂開口三等字で、同音（声調のみ異なる）の「蛇」は jia[jia]とされている。文白異読の関係にあるもの同士であろう。「射」も jia[jia]という発音も持っていたのではないかと思われる。

「若」でも同音の「惹」がある。寧波西洋人資料では「若」が ziah[zia?], 「惹」が[jæ]とされている。「若」は「惹」に読まれたか、あるいはそもそも「若」が「惹」の誤刻という可能性もある。

一方「身」と「新」が「シン」に当てられたのは、その鼻音韻尾 n を利用することに理由がある。寧波西洋人資料では音節 sin[sin]とされるが、寧波方言に音節 shin[jin]がないためである。

このように、歯茎音の使用例のほとんどは意味上の考慮や、寧波方言に適切な音節が欠如しているなどという理由でやむを得ず使われたことが明らかになった。

3.2.4. セ・ゼ

セ・ゼに当てる音注漢字は次のようである。

セ：泄 1、十 1、宣（セン） 1、鮮（セン） 1

ゼ：前 2、善 1

寧波西洋人資料では「十」jih[ʒiʔ]、「善」jün[ʒyn]、「宣」shün[ʃyn]とあり、後部歯茎音である。一方、「前」dzin[dʒin]、「泄」sih[siʔ]、「鮮」sin[sin]が歯茎音である。全体的にセ・ゼの使用回数が少ないとはいえ、ほかのサ行子音に比べ、歯茎音の割合が高いということがわかる。これについては、以下の二つの可能性が考えられる。

一つは『日本国考略』の成立時において、セ・ゼの子音が歯茎硬口蓋音[ç][ʒ]から歯茎音[s][z]へ合流しつつあり、そのため二種の子音が記録されたという可能性である。ただし、『日葡辞書』では xe と綴っているので、この可能性は低いであろう。もちろん、『日葡辞書』が強い規範性を持っていることも考えなければならない。

もう一つの可能性については、寧波方言における後部歯茎音の出現条件を考えたい。つまり、後部歯茎音に後続する母音は円唇母音でなければならないのだが、日本語セ・ゼの母音は非円唇母音であり、母音[e]は聴覚的に子音より優位なものであるため、写音する際、母音要素を優先させたのではないかという可能性である。

二番目の可能性があるとしても、なぜシ・ジの音注漢字においては母音要素を優先させないのかという問題が湧いてくる。筆者はシ・ジにおいては、母音より子音のほうが弁別的機能を担っていたのではないかと考える。そうであればシの母音は無声化、または脱落しやすくなる。この母音の無声化と脱落は、コリヤード『日本文典』により 17 世紀にすでに起こっていたことが確認できる。これが 16 世紀にあった可能性は十分にある。一方、セでは無声化が一般に起こらない。母音が担う弁別的機能が子音より大きいということもその一つの理由であろう。

4. 終りに

以上、中国資料の『書史会要』と『日本国考略』を通して、呉方言の後部歯茎音について考察した。14～16 世紀において少なくとも松江方言と寧波方言に後部歯茎音が存在していたことが分かった。また、『南村輟耕録』の射字詩において、B グループの字母にある二種の助紐字は、後部歯茎音が舌尖音へ合流する中間段階を反映していることも確認した。また、『日本国考略』におけるシ・ジにもっぱら後部歯茎音の漢字が使用されていることも観察された。これは『日本国考略』の所拠言語が寧波方言である一つの重要な根拠となる。

現在呉方言の中で後部歯茎音を持つ地域は極めて少ないが、寧波市周辺の新碶、霞浦にはそれのあることが胡 2001 により報告されている。一方、丁 2001 によれば、呉方言字書の『同文備考』に反映した 16 世紀崑山方言にも後部歯茎音が存在していたという¹²。ここから、明代の呉方言において後部歯茎音は現在より広い範囲にあったことが推測される。

【注】

- ¹ [ʃ]とも表記されることがあるが、本論文では[ç]に統一する。
- ² 射字詩について蔣垂東 2010 に詳しい。
- ³ 射字詩では歯音が 10 声母となっているが、魯によれば、「橙」母と「澄」母とは一つの声母と見なすべきである。射字詩は七言の形に揃えるために、「澄」という一字を増やしたという。確かに「橙」と「澄」は中古音において同音であるから、魯の指摘は妥当である。それゆえ、実際の声母は 9 個と考えられる。
- ⁴ 澄[dz(dʒi)]は澄[dz(dʒi)]の誤植であろう。
- ⁵ 京劇ではそり舌音と母音[i]との組み合わせがあると言われている。
- ⁶ 蔣によれば、『書史会要』の音注漢字には、平声字を使用する規則があり、仄声字を使用した場合には割注で平声と書いているという。
- ⁷ 丸山徹 1981 は中世のサ行音は弱い破擦音を伴っていたと推測している。
- ⁸ 室町時代においてジ・ゼは鼻音性を伴っていた。それについては次の章に述べる。
- ⁹ 徐は趙元仁 1928 の表記を参考にした。
- ¹⁰ 寧波西洋人資料では「篩」と「師」は同音である。
- ¹¹ 文読では se[se]であるが、白読のほうがよく使われている。
- ¹² 崑山方言の後部歯茎音は非円唇母音と組み合わせることができる。地域差によるものである。

【資料 1】『書史会要』いろは（括弧は本文の割注を表わす）

い以（又近移）、ろ羅、は法（平声又近排）、に宜、ほ波（又近婆）、
へ別（平声又近奚近靴）、と多（又近駄）ち啼（又近低）、り梨、ぬ奴、
る盧、を窩、わ懐、か楷（作喉音呼）、よ饗、た大（平声）、れ俵、
そ座（平声又近莎）、つ土（平声又近屠）、ね尼（縮舌呼）、な乃（平声）、
ら阿頼（頼作平声弾舌）、む謨、う烏、ぬ伊、の那、お和（又近窩）、
く枯、や爺（作喉音呼）、ま埋、け茄、ふ蒲（又近夫）、こ軻、え奚、
て悌（平声縮舌呼）、あ挨（作喉音呼）、さ篩（又近柴）、き欺（又近其）
ゆ由、め七、み皮（又近眉）、し尸（又近時）、ゑ繫（平声）、ひ非、も摩
せ蛇（又近奢）、す疏（又近徂）

【資料2】サ・ザ行を含む寄語項目

	項目	寄語訂正	解説			阿掬梭	オリソウ
5	風	有朱 加前	△△ カゼ	133	罨	烏論羊埋水 烏爺蛮計	ウラヤマシ オヤマキ
10	霜	名未 碎滿	△モ シモ	138	不在	論速 持踈	ルス △ス
16	晩	搖撒田五	ヨウサリ	146	怕	倭踈路路	オソルル
17	明	挨介水	アカシ	147	久不見	倭非怕水 何面凸辣水	オヒ△シ オメヅラシ
18	暗	骨辣水	クラシ	149	前行	殺鷄	サキ
19	冷	三字水	サブシ	151	喜	一掬水 姚羅扛步	イトオシ ヨロコブ
20	煖	挨掬水	アツシ	154	羞愧	番即皆水水	ハヅカシシ
22	明日	挨速 亞失旦	アス アシタ	158	安排	蘇路	ソロ (ウ)
23	後日	亞撒里	アサ△	163	添	所有路路	ソユル△
28	明日來	挨戍打□□俚	アシタ□□レ	166	痛	一(車亘)水	イタシ
29	後日來	挨殺核阿耶俚	アサ△オヤレ	167	教	何水尤路	オシユル
34	石	依水 依水古	イシ イシコ	172	吃酒	麻黑晒鷄	△△サケ
41	西	義西	ニシ	175	遊	亞孫步	アソブ
44	後	吾失利	ウシ△	179	曉得	个个俚打失大	ココレータシ ッタ
46	銀	失祿措泥	シロカネ	181	殺	其奴 瞎胆即	キル △△△
48	錢	前移	ゼニ	184	不曉得	惜賴路 不失打	シラス △シッタ
49	黃銅	中若古	チウジャク	190	死	身大	シンダ
52	好銅錢	姚礼善尼	△△ゼニ	193	肚飢	勳大路水	ヒダルシ
55	百姓	別姑常	ヒヤクシャウ	194	還了	措也数	カヤス
67	子	莫宿哥	ムスコ	203	有情	亞姊吉乃	アジキ△
69	女	莫宿眠	ムスメ	204	無情	亞姊吉乃乃水	アジキ△ナシ
71	丈人	守多	シウト	208	無工夫	一孫擲水	イソガシ
72	丈母	守多謬	シウトメ	215	足	挨身	アシ
80	親眷	新雷	シンルイ	217	頭	客戍賴	カシラ
84	僕	三字郎	サブラ	224	身	泄	セ
85	小廝	歪皆水	ワカシ	227	中刀	歪計柴需	ワキザシ
86	和尚	刁老 烏索	チャウラウ オシャウ	233	磨刀石	依水	イシ
89	強盜	六宿鼻脣	ヌスビト	234	砂石	措路依水	カルイシ
92	你	撫哥了 挨俚	△△△ ソレ	235	硯	孫助俚 尊子力	ズブリ ズブリ
94	誰人	荅梭	タン	240	墨	踈煤	スミ
97	生得好	眉眉月失 眉眉姚水	ミメヨシ ミメヨシ	245	鎖	哥索利	クサリ
99	長子	難解水	ナガシ	252	硯箱	孫助利法哥	ズブリハコ
104	生得醜	歪魯失	ワルシ	254	酒盞	晒加藤計	サカヅキ
106	貴	他介水	タカシ	255	碟	晒賴 沙賴	サラ サラ
107	賤	那朔 羊碎水	ヤスウ ヤスシ	256	傘	隔落隔晒	カラカサ
110	乞丐	寬需計	コジキ	260	盤	何水鷄	オシキ
115	拐	科水非計	コシヒキ	261	銀硃	失祿挨措水	シロアカシ
116	賊	陸宿人	ヌス△	262	漆	烏論水	ウルシ
117	耍	坡水水	ホシシ	263	筋	法水	ハシ
124	亂說	思量骨多 莫話介歹俚	スラゴト モ△ガタリ	264	香	宣哥	センカウ
128	嬉	挨梭蒲	アソブ	266	麝香	射哥	ジャカウ
129	坐	移路	イル	270	梯	課水飛計	コシヒキ

273	鞋	水托俚 失其里	シ△レ シキレ	312	猪	豕豕	シシ
280	被	伏思麻	フスマ	318	蝨	失辣米	シラミ
281	茶	鮮索	センサ	320	鼠	眠助米	ネズミ
282	酒	晒箕	サケ	339	好	姚鎖盧	ヨウソロ
283	白酒	明東晒箕	ミヅサケ	342	大	加小思姑奈 何計	カ△スクナイ オオキ
284	焼酒	隔辣晒箕	カラサケ	343	小	発篩	ホソイ
285	老酒	福祿晒箕	フルサケ	344	多	快都 河河水	△△ オオシ
286	飯	蜜黍	メシ	345	少	疎古乃水	スクナシ
287	飲酒	晒加乃	サカナ	346	遠	多俟	トオシ
288	吃飯	蜜黍阿羅俚	メシ△△△	348	瘦	牙十大	ヤセタ
289	塩	失河 收河	シオ シオ	351	朽	骨篩路	クサル
290	醬	弥沙	ミノ	352	厚	挨卒水	アツシ
296	羹	水路	シル	353	薄	温卒水	ウスシ
298	肉	恕恕	シシ	354	歪貨	不高 歪頼水	△△ ワロシ
301	杉	松計	スギ	355	不是	松田乃係	スヂナシ
304	梅子	面婆水	□メボシ	360	多有	何何水	オオシ
305	芥	惹辣水	カラシ	362	香	干牌水	カンバシ
309	茄子	乃沈皮	ナスビ	363	臭	骨篩水	クサシ
310	牛	胡水	ウシ				

第3節 寧波方言の子音推移について

1. はじめに

前述のようにパーカーの「The Ningpo Dialect」は、宣教師資料には反映されていない当時の音韻状態を詳細に記述したものである。この節では、「The Ningpo Dialect」を中心に当時の寧波方言に起きた牙喉音の口蓋化及び一連の子音変化について考察し、先行研究の指摘を改めて検討し、子音における音変化の過程を明らかにすることを目的とする。結論を先に言えば、一連の子音変化は牙喉音の口蓋化に起因し、同時または順次に起こる近似する子音同士の間引きあいによって引き起こされたものである可能性が高い。変化の過程において、音声学でいうところの「押し推移」及び「引き推移」の現象が観察されることも指摘する。

2. 牙喉音の口蓋化及び尖団の統合

2.1. 牙喉音の口蓋化

現代呉方言の多くは中古音でいう二三四等牙喉音が口蓋化を起し、北方方言と同じ変化の道をたどっている¹。[h k k' g] > [ç tç tç' dz] という音変化である。

【表1】

	例字	中古音 ²	現代寧波
牙音	氣	[k'iəi]	[tç'i]
喉音	喜	[hiə]	[çi]

この音変化の発生は19世紀末頃と推定される。『初学』のローマ字綴りでは二三四等牙喉音を hy ky ky' gy と表記している。これは後の『彙解』『音節』『便覧』にも採用されている。徐通鏘1990では『彙解』『音節』『便覧』に基づいて、この表記を牙喉音の口蓋化、つまり [ç tç tç' dz]（以下 [ç] グループ）と見なしているが、胡方2001では『初学』も参考にしようとして、それを口蓋化でなく、硬口蓋音 [h' k' k' g]（以下 [h'] グループ）と再構した³。そこに二つの理由を挙げている。

一は『音節』の冒頭に書かれた hy ky ky' gy についての記述である。

ky gy hy は i あるいは y のみと組み合わせられる。ky gy は一般に k+y、g+y であるが、現在の発音では tsh と dj になっているようである。hy は h+y であるが、北方官話では hs と発音する。古い h と s の結合である。c と ky の違いについては、c は舌の閉鎖 t で始まり、ky は声門破裂音で始まる。寧波ハンドブックではこれらの発音が見られ、発音の仕方が示されている⁴。

北京官話における牙喉音の口蓋化は寧波より先に18世紀前半までに起こっていた。この hs, tsh というのはまさに北京官話の [ç tç] である。従って『音節』の成立時すでに口蓋化が起こり始めているということになる。ここは徐の指摘の通りである。しかし一方、「c は舌の閉鎖 t で始まり、ky は声門破裂音で始まる」というのは、両者の調音点にお

る区別を述べているように取れる。『音節』の成立時、[h]グループは[ç]グループと共存していたと考えたほうが妥当であろう。ただし注意しなければならないのは『音節』より約 50 年も前に成立した『初学』当時、つまり 19 世紀半ばの段階ではまだ口蓋化が起きていなかった可能性が高いということである。

胡のもう一つの理由は寧波地域の方言、及び寧波以南の一部の地域では、[h]グループの子音が観察され、[ç]グループの子音が欠如しており、その子音の状態は寧波西洋人資料の記述とそっくりだということである。

筆者は胡の指摘に同意する。補足的に理由を言えば、次の二点を挙げることができる。

まず、馬・屠 2013 でも述べたとおり『初学』の冒頭にある音節の配列は子音の調音位置によって並べられている。例えば母音 o の場合は次の通りである。

ko k'o go ngo o ho 'o to t'o do no lo lo po p'o bo mo mo tso ts'o
so zo

調音位置の同じ子音同士が隣り合っていることが分かる。そして軟口蓋音が母音と隣接している。舌尖音 ts、s などが t、d などと離れているが、それはおそらく調音法が摩擦音や破擦音で、破裂音とは異なるからであろう。次に母音 i の配列を見てみたい。

kyi ky'i gyi nyi i hyi yi ti t'i di ni li li pi p'i bi mi mi fi vi
tsi ts'i dzi si zi

ky gy hy などは母音 i yi と隣り合って並べられている。このような配列は ky gy hy が口蓋化しておらず、軟口蓋音であったことを意味する。

また、一般音声学的視点から見た場合、上でも述べたとおり、『初学』から帰納される寧波方言には、ミニマルペアとなる歯茎音[s ts ts' z] (以下[s]グループ) と後部歯茎音[tʃ tʃ' ʒ] (以下[tʃ]グループ) が存在している。例えば、

春 shōng[ʃoŋ] ≠ 桑 sōng[sōŋ]
尚 jōng[ʒoŋ] ≠ 上 zōng[zoŋ]
中 cong[tʃoŋ] ≠ 宗 tsoŋ[tsoŋ]
沖 c'ong[tʃ'oŋ] ≠ 聰 ts'ong[ts'oŋ]
重 djong[dʒoŋ] ≠ 從 dzong[dzoŋ]

このミニマルペアの対立は安定しており、その存在は 16 世紀にも遡りうると考えられる⁵。安定したこのミニマルペアが存在している以上、歯茎硬口蓋音、すなわち[ç]グループが存在するとは考えにくいのである。なぜならば、聴覚や調音の面から考えれば、後部歯茎音と歯茎硬口蓋音の差は極めて微細であり、音韻的に対立させている言語は少ない⁶。少なくとも寧波方言において歯茎音、後部歯茎音、歯茎硬口蓋音の鼎立は到底安定した音韻構造であるとは思われないからである。

2.2. 尖団の統合

中国語音韻学において、精組[s ts ts' dz]に属し、介音[i]または韻母[i]が後続するもの(例：西、精)は、清朝の初めに、満州文字で先端の尖った字母で写したので尖音と呼ばれる。一方牙喉音が口蓋化したもの、すなわち上述の[h]グループ>[ç]グループという変

化を遂げた音（例：稀、京）は先端の丸い字母で写したので団音と呼ばれる。中国の近世から現代にかけて、尖音と団音が混同し、[s]グループ>[ç]グループという音変化は官話方言をはじめ、多くの方言に起こっており（現代北京語：西＝稀[çi]、精＝京[tçin]）、寧波方言もその一つである。この節ではパーカーの記述に基づき、先行研究の指摘を検討し、尖団の統合の時期及び過程を推測する。

『初学』が記した寧波方言の子音には、調音上近似する子音[s]グループ、[ʃ]グループ、[hʰ]グループが存在していたことがうかがえる。上に引用した『音節』の記述から考えれば、当時 hy ky ky' gy と表記されたものはすでに口蓋化を起し、[ç]グループに変化し始めた（ただし、[hʰ]グループは完全に消失していない）。『彙解』『音節』『便覧』において尖団の区別が明確であったことから、徐 1990 はその統合時期を 20 世紀初めの 20 年間で推定している。

尖団の問題は団音の[ç]グループが発生してから、本来安定していた尖音の[s]グループと、いつ、どのように統合したかということである。この問題について、パーカーの記述に注目したい。パーカーは『音節』のローマ字（すなわち『初学』のローマ字）の欠点を指摘し、自分なりのローマ字方案を作った。そこで[s]グループ、[ʃ]グループ、[hʰ]グループの混同について次のように述べている。

寧波では hi「喜」と si「洗」（英語の he と see）の違いはほとんど失っている。ただし、不思議なことに、hih「閱」と sih「屑」（英語の hit と sit、t を除く）は時に明確に区別される。即ち、hih の発音は hsih で、sih の発音は純粋な s である。ただし、hieh「歇」と sheh「攝」の二音節とも寧波では韻母 ih となるから、問題が複雑になっているわけである。前者は hsih、後者は sih とよく読まれている。理論上 i の前に現れる h は hs になり、そして、s と sh は区別されない⁷。日常会話においてはこれらすべて hs（北京のそれと同じ）と見なしても、誤解は招かないであろう。hing, sing「興心」、hiao, siao「梟消」、hien, sien「軒先」、hie, sie「駭卸」などについては、その違いは不明確、ないし不規則である。使い分けられることもあるが、hs だけが使われることもある。しかし、純粋な h が純粋な s の代わりに使われることはないし、反対に純粋な s が純粋な h の代わりに使われることもない⁸。

[hʰ]と[s]それぞれの音節について両声母の口蓋化や統合の程度、及びその違いを述べる段落である。まず、hs という表記は「北京のそれと同じ」と述べられるところから、[hʰ]グループが口蓋化して北京方言の[ç]などになっていると考えられる。『音節』の記述と一致する。

[hʰ]グループと[s]グループのどちらが先に口蓋化を起したかという問題において、北京方言の場合には、[hʰ]グループが先に口蓋化したという説と、[s]グループが先に口蓋化したという説の両説があり、見解が分かれている⁹。では、寧波方言の場合はどうなるか。

「hih の発音は hsih で、sih の発音は純粋な s である」の記述から、[hiʰ?]>[çiʰ?]という変化が先行し、[siʰ?]と区別されていたということが分かる。こうした団音[ç]の発生は、それに調音位置に近い尖音[s]の口蓋化に先行して、後に間もなく[s]>[ç]との統合を引き起こしたということである。

ただし、団音[ç]と尖音[s]の統合の具合は、各音節において斉一的ではなく、韻母が i

である音節 (hi[ci] : si[si]) は i 介音 (hing[ciŋ] : si[sin]など)、入声 (hih[ciʔ] : si[siʔ]) より先に統合を遂げたということが明らかである。一方、団音の音価[hʰ]は各音節により変化程度に差があるが、完全に消失していないことはまた『音節』の観察と符合している。同グループの[kʰ kʰˈ gʰ]、[ts tsˈ dz]も同様に考えてよい。その音変化の過程を次の表に示す ([hʰ]と[s]を例とする)。

【表 2】

	[hʰi]	→	[ci]	↘	
hʰ	[hʰiŋ] [hʰiao]…	→	[ciŋ]([hʰiŋ]) [ciao]([hʰiao]) …	↘	
	[hʰiʔ]	→	[ciʔ]	↘	[ci]
					[ciŋ][ciao]…
s	[si]	→	[ci]	↗	[ciʔ]
	[siŋ][siao]…	→	[ciŋ]([siŋ]) [ciao]([siao]) …	↗	
	[siʔ]	→	[ciʔ]([siʔ])	↗	

これを要するに、音節によって尖団の統合には遅速があった。ただし、1880 年代においてはすでに始まっていたに相違ない。それゆえ、それは徐のいう 20 世紀の初めより、約 20 年も早く進んでいたことが分かる。

こうした尖団の統合には子音 [ʃ tʃ tʃˈ ʒ] も関わりあって連動的な音変化を起こしたと推測される。それに関して、胡は口蓋化した [ç] グループの音価が [ʃ] グループに近似のものになったため、[ʃ] グループが本来の調音位置から押し出され、[s] グループへの変化を引き起こした。そこで、[s] グループの字が数多くなり、またその他の原因により、結局 [s] グループの一部 (+i) が [ç] グループへ統合することになったと推測し、またそれを押し連鎖 (push chain) という理論で解釈した。それについてパーカーはどのように記述しているかを見てみたい。

sh は必ず i という特殊な母音の前に現れる。この母音は i と ü の中間の母音であるが、tsz の母音とは異なる。この母音を一つの韻母と見なす。当面では純粹な sh、ch、j 以外のものはその前に現れない。従って、「書世、主知、如緒」を shī、chī、jī と発音する。その声母は純粹なものではなく、hs に変化することがある (それと関わる ch と j も)。しかし、いかなる状況でも s、ts、z に変化することはない。この声母とその母音は開音節のみならず、「神順、鎮准、人巡、詢筭」(jīng、chīng、jīng、shīng のような音節にも現れる。Morrison の Ningpo Vocabulary [筆者注:『彙解』] では sh、c、j を用いて、三つの声母を表わしたが、この綴り方ではその母音を区別することができない。もちろん、ch は有気の chʰi なども含む (例えば「趣鼠」)。また、この三つの声母の後ろにしか来ない、もう一つの母音がある。これは英語の shut の母音であり、例えば「説刷設」shêh、「拙出」chêh と chʰêh、「日術集」jêh である¹⁰。

sh に後接する母音について、パーカーは『彙解』の表記 shü を批判し、それを i で書き表わした。この母音はおそらく彼が以前に考察した北京、温州、広東などの方言に見られないほど特殊な母音であろうか、これらの方言に比較する記述もなかった。「この母音は

i と ü [筆者注：[i]と[y]] の中間の母音であるが、tsz の母音 [筆者注：[ɿ]] とは異なる」ということが、現代寧波方言に見られる[ɿ]の円唇母音[ʉ]のことを想起させる。[ʉ]は寧波方言、ないし呉方言においても散見されるものだが、他方言に多く見られるものではない。しかも円唇母音[ʉ]の分布はパーカーの表記 shī chī ch‘ī jī、つまり[ʃ]グループの音節に対応している。

【表 3】

	表記 (パーカー)	現代寧波 ¹⁾
書世	shī	[sʉ]
主知	chī	[tsʉ]
趣鼠	ch‘ī	[ts‘ʉ]
如緒	jī	[zʉ]

したがって、この「特殊な母音」を円唇母音[ʉ]としておきたい¹²⁾。ただし、上の表に見られるように現代寧波方言では円唇母音[ʉ]に前接するのは sh、ch、ch‘、j が表す[ʃ]グループの子音でなく、[s]グループの子音である。「その声母は純粹なものではなく、hs に変化することがある（それと関わる ch と j も）。しかし、どんな状況でも s、ts、z に変化することはない。」とあるから、パーカーが観察した sh、ch、ch‘、j は hs[ɕ]などに近い音のため、[ɕ]に変化することも起こっていたが、[s]になることはまだなかったということである。しかし、現代寧波方言では[ʃ]グループが規則的に[s]グループになっている。パーカーの記述と矛盾する結果になる。

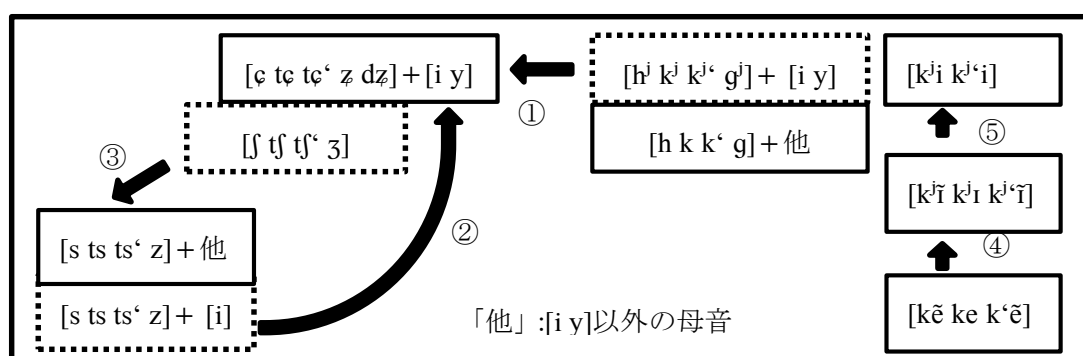
この記述が反映するのは、[ʃ]グループが[s]グループへ変化する中間段階だったのではないと思われる。[ɕ]グループの発生により本来安定していた[ʃ]グループが調音上や聴覚上に[ɕ]グループと近似するものになってきた（例えば「書」[ʃy]と「虚」[ɕy]）。中間段階において[ʃ]グループは[ɕ]グループとの間に混同例も発生していた可能性がある。例えば現代寧波方言で「取」や「娶」に[ts‘ʉ]と[tc‘y]二つの音があるが、それは当時の[ʃ]グループと[ɕ]グループとの混同の名残であるかもしれない¹³⁾。しかし、その時の[ɕ]グループは[s]グループと統合して、字数の多い音節になっていた。それ以上の意味の混乱を回避するために、[ʃ]グループは[ʃy] > [ʃʉ] > [sʉ]という音変化の道を選んだ、ということである。

この推測を音声学における押し推移 (push shift) という音変化の概念で説明すると、すなわち、後部歯茎音の[ʃ]グループが、歯茎硬口蓋音の[ɕ]グループによって、歯茎という「縄張り」から追い出され、舌尖化を起し、[s]グループに変化したということである。胡の推測に近い結果となるが、音変化の順番としては[s]グループ (+[i]) が[ɕ]グループへ合流した後に、[ʃ]グループが音変化を始めるということである。押し推移がただ一か所に起こったため、胡のいう「押し連鎖」とは異なる結果となった。さらに考えれば、胡の解釈は次の理由から否定されよう。つまり先に[ʃ]グループが[s]グループに変化したとしても、[ʃ]グループから変化した音節の韻母は元からの[s]グループの音節の韻母と区別されるため、それによる意味の混乱は招かない。それゆえ、[ʃ]グループの変化は[s]グループを追い出す力を持っていなかったはずである。

また、以上に述べた子音の変化は後の母音変化にも関連している。現代寧波方言には音

節[kɿ]「干、該」、[kʰi]「看」が新たに形成されている。これらの音節は『初学』では ken、ke、kʰen と、パーカーでは kein、ke、kʰein と表記されている。韻母の鼻音の脱落、主母音の狭母音化が起こったことが分かる¹⁴。音節[kɿ]、[kʰi]の形成が以上述べた子音の変化と無関係のものではない。すなわち、[hʰ]グループが口蓋化して本来の軟口蓋の調音位置を離れた後に、隣接する音節[kɛ̃][ke][kʰɛ̃]が空白に引き寄せられ、その調音位置を占めることになったのである。これはいわゆる引き推移 (drag shift) という音変化である。趙元任 1928 では「干、該、看」の母音を [i] と表記しているから、この音変化は 20 世紀に入ってから起こったと考えられる。

子音におけるこの一連の変化をまとめると、以下の図のように示すことが可能である。



図で音変化の順番を数字で示したが、①と②においては時間差が短く、①が進行している間に②が起こり始めた。③はおそらく①が終わった後に動き出したと思われる。また、①、②は後接する母音が [i][y] の場合に限って、起こる部分的変化であるに対して、③はすべての音節において起こるといふ全面的変化である。さらに④と⑤は、③の変化が終了した後に起こった音変化である。

3. 終りに

この節では、パーカーの記述を中心に、19 世紀の寧波方言の子音について分析を行った。パーカーは他資料に反映されない実際の音韻現象について詳細に記述している。それによって当時の牙喉音の口蓋化、尖団の統合、及び後部歯茎音の舌尖化における連動的音変化を知ることができた。1850 年代～80 年代の間に牙喉音の口蓋化がはじまり、それによって間もなく 80 年代にも尖団の統合は音節別で起こり始めた。その後、後部歯茎音はさらなる混同を避けるために、舌尖化を引き起こした。そして 20 世紀に入ると、狭母音化とともに、牙喉音 (ki など) が新たに形成されるということである。

明代中国資料の『日本国考略』や『日本図纂』、『日本風土記』における牙喉音の音注漢字はア・カ・ガ・ワ行音に当てられており、サ・ザ・タ・ダ行音に当てられていなかった。これは、寧波方言を含む呉方言において牙喉音の口蓋化が、16 世紀にはまだ起こっていなかったことを裏付ける。また、『日本国考略』ではヤ行音に「牙」「学」「下」を当てるいくつかの用例が見られ、そこには牙喉音の二等韻に介音 i の存在していたことが窺える。

【注】

¹ 東韻、山韻など一部の合口では口蓋化しない。

² 佐藤昭 2002 参考。

³ 硬口蓋音[h' k' k' g']は[h k k' g]の口蓋化した音価と見ることができるが、便宜上、ここでは[h' k' k' g']>[ç tç tç' dz]という変化を口蓋化と称し、硬口蓋音[h' k' k' g']の段階と区別する。

⁴ 原文 : Ky, gy, hy, can only be followed by i and ü. Ky and gy, originally k + y and g + y, are now pronounced like tsh and dj ; hy = h + y, is pronounced like hs in northern mandarin, a combination of the old h and s initials. The difference between c and ky is that c commences with the lingual stop t, while ky is the same sound with the addition of the glottal catch. In the Ningpo Handbook the development of these sounds will be shown, here it suffices to point out the pronunciation. (:x.)

⁵ 馬之濤 2013a。

⁶ 管見の限り、ロシア語、クロアチア語、中国山西潞城方言では歯茎音、後部歯茎音、歯茎硬口蓋音の対立があるらしい。

⁷ ここの sh は上の北京方言の「sheh『攝』」の声母である。寧波方言の sh ではない。

⁸ 原文 : The distinction between *hi* 喜 and *si* 洗 (English *he* and *see*) has quite disappeared in Ningpo, but, strange to say, the distinction between *hih* 閱 and *sih* 屑 (English *hit* and *sit* minus the *t*) is occasionally clear, i.e. the *hih* are pronounced like *hsih*, and the *sih* with a purer *s* : but this is complicated by a number of words of the *hieh* 歇 and *sheh* 攝 classes, whose finals are also both *ih* in Ningpo. The first seem to be usually *hsih*, and the second *sih*. Thus the theoretical *h* before *i* becomes *hs*, and the theoretical *s* and *sh* are not distinguished : yet, in ordinary conversation, the whole may be lumped under the comprehensive *hs* (as in Peking) without risk of misapprehension. With regard to *hing*, *sing*, 興心; *hiao*, *siao*, 鼻消; *hien*, *sien*, 軒先 ; *hie*, *sie*, 駭卸, and such ; the distinction is uncertain and irregular, but either pure form may be used, or *hs* may be used : yet *h* pure may not be used for *s* pure, nor *vice versa*. (:139)

⁹ 陳曉 2013:13。

¹⁰ 原文 : *Sh* only appears before a very strange vowel which must be described as *i*, being intermediate between *i* and *ü*, but yet not the same as the vowel in *tsz*. This vowel will be treated of under the finals: for the present it is enough to say that only pure *sh*, pure *ch* and pure *j* precede this vowel. Thus 書世主知如緒 are pronounced (in pairs) *shi*, *chi* and *ji*. The initial may not be quite pure and may run into *hs* (with correlatively impure forms of *ch* and *j*), but at any rate it never becomes *s*, *ts*, or *z* pure. This initial with its vowel is not confined to words ending with vowels. Thus 神順鎮准人巡詢筭 are pronounced (in pairs) *jing*, *ching*, *jing*, and *shing*. Morrison's Ningpo Vocabulary uses *sh*, *c*, and *j* to represent the above three shibboleth initials, but fails to distinguish the vowel. Of course the *ch* includes the aspirated forms *ch'í* & c., e.g. 趣鼠. There is another final which only these three initials may precede, —the vowel contained in the English word *shut*. Thus 說刷設 *shéh*; 拙出 *chéh* and *ch'éh*; 日術集 *jéh*. (:140)

¹¹ 現代寧波音は高志佩他 1991、湯珍珠他 1997、錢乃榮 1992 を参考。

¹² 同様、ê と書き表わされるもう一つの母音は現代寧波の[œ]であると考えられる。例えば、「出」[ts'ʏœʔ]、「日」[zʏœʔ]である。

¹³ 高志佩他 1991 では「取」「娶」の[ts'ʏ]を白読音、[tɕ'y]を文読音としている。そうだとすれば、パーカーが sh>hs と思った音は文白異読の関係にあるかもしれない。

¹⁴ これについて、母音全体における「押し連鎖」と解釈する徐の説が有力である。

第5章 室町時代における日本語の音韻

第1節 濁音の鼻音的要素

1. 室町時代のガ行音の鼻音的要素及び問題の所在

室町時代の日本語の濁音についてはロドリゲス『日本大文典』1604の記述に

D・Dz・Gの前のあらゆる母音は、常に半分の鼻音かソンソネーテかを伴ってゐるやうに発音される。即ち、鼻の中で作られて幾分か鼻音の性質を持ってゐる発音なのである（土井忠生訳註 1955）

とある。それをうけて、橋本進吉 1950 は、このような濁音の前の母音が鼻音化することが室町末期に多くの地方で行われていたと述べた。

一方、朝鮮資料の『捷解新語』（1636年頃）には、日本語の濁音の前の音節末尾に鼻音が用いられている。例えば、

あいだ	아인다 (‘a-’in-ta)
あかがね	아강가네 (‘a-kaŋ-ka-nyə)
どこ	고 (nto-ko)

勿論、従来から多く論じられてきた日本側の資料である『和字正濫鈔』（1693）、『以敬齋口語聞書』（1752 写本）などにも鼻音的要素に関する記述が見られる。

ただし、問題はロドリゲスの『日本大文典』では D・Dz・G の前の母音のことを語る一方で、濁音そのものについては述べていないことである。例えば、ガ行の子音が g か ŋ かあるいは ng か、ロドリゲスの記述からは分からないのである。一方、福島邦道 1959 は朝鮮語ではそもそも音韻上清濁の区別をしないために、『捷解新語』で濁音の前の音節末尾に鼻音を添えたのは、入り渡り鼻音を表したのか、単に濁音を示そうとしたのか、やはり疑問が残ると指摘した。また、日本資料の記述からも、従来、それを濁音の前の入りわたり鼻音と見るか、濁音の前の母音の鼻音化と見るかは先行研究の間で意見が分かれている。

中国資料の『日本国考略』においても濁音の前の音節には鼻音韻尾を持つ字がよく当てられている。

32 水	明東 (ミヅ)
110 乞巧	寛需計 (コジキ)
175 遊	亞孫歩 (アソブ)
241 扇	黄旗 (アウギ)

この問題を取り上げ、濁音について言及している先行研究には浜田 1952、福島 1959、大友 1963 がある。浜田 1952、大友 1963 ではそれを「鼻音的 Initial glide」あるいは「Initial glide の鼻音」¹と呼んだ。つまり、濁音の前に入り渡り鼻音の存在を主張しているのである。それに対して、福島 1959 は

日本語特有の鼻濁音が音韻体系に見出されない、呉地方の中国人にとっては、鼻濁音

をいかに表記したらよいか、などということは思っていたらなかったことであろう。日本寄語における表記のしかたが、まちまちであり、不完全であることは、それをよく物語っている。第三の表記を、単なる濁音表記であると考えたい所以である

と述べた²。中国資料に対して、先行研究の間では意見が分かれている。この節では、『日本国考略』における濁音の音注漢字を考察し、寄語に使用された寧波方言の特徴から濁音の音価を改めて検討してみたいと思う。

2. ガ行音

確かに福島の指摘のように、ガ行子音が η の音であったとしたら、 η 韻尾の字のみを用いるはずであるが、寄語におけるガ行音の前の音節に η 韻尾、 n 韻尾両方の字が用いられているのは、それと矛盾している。ここは福島のいうように「まちまちであり、不完全」である。この問題について浜田 1952、大友 1963 は一言も言及していない。ここでは、その問題に対して、まずガ行音から考察を行う。

2.1. 中国語の全濁字と日本語の濁音

周知の通り、中国語の中古音における全濁字は無声化し、清音になる傾向があり、現代でも北方方言、粵方言、閩方言など広い地域において清音となっている。かつて全濁字であったころの特徴を今でも保存している方言としては、呉方言、湘方言（一部）がよく知られている。先行研究で指摘されているように寄語が呉方言により編纂されたものであるところから見ると、日本語の濁音を表現するのに呉方言は北方方言より都合のいいものである。

ところが、寄語が寧波方言に基づいて編纂されたとしても、寄語に見られる全濁字とその表す日本語の濁音との対応は必ずしも整然としたものではない。

45 金 空揩泥（コガネ）（「揩」は溪母 k' である）

253 鋸 撃剛擊利（ノコギリ）（「擊」は見母 k である）

上記の例のように、日本語の濁音に対して全濁字を使わないことには何か理由があるのだろうか。これについては、寧波方言の方面から考える必要があるように思われる。

2.1.1. 全濁字と濁音との対応

中国語の中古音において、鼻音韻尾を持つ韻母は m 、 n 、 η 韻尾と再構される三つのグループに分かれている。 m 韻尾のグループには深摂、咸摂の字（入声では p 韻尾）、 n 韻尾のグループには臻摂、山摂の字（入声では t 韻尾）、 η 韻尾のグループには通摂、江摂、宕摂、梗摂、曾摂の字（入声では k 韻尾）が含まれる。

下の表 1 ではカ行音・ガ行音の前の音節に当たる字を m 韻尾、 n 韻尾、 η 韻尾、入声韻尾（ p 韻尾、 t 韻尾、 k 韻尾）に分類し、さらに前の音節が開音節の場合、また当該音節が語頭の場合³とともに比較する。中古音における声母と日本語のカ・ガ行音との対応は縦に並べ、使われた三種の韻母の字を考察する。

【表 1】

前の音節 カ・ガ行音を 表す字の声母			鼻音韻尾			入声 韻尾	開音節	なし	保留 ⁴
			m	n	ŋ				
見母 k	カ行	127	1	2	2	28	60	30	4
	ガ行	16		4	9			3	
溪母 k'	カ行	19				1	2	16	
	ガ行	7			5			2	
群母 g	カ行	3					1	2	
	ガ行	7			7				

表 1 から、見母字と溪母字の多くはカ行音に対応し、一方群母字の多くはガ行音に対応していることは明らかである。しかし、ガ行音は全濁声母である群母字だけに対応しているのではなく、清音である見母字と次清音である溪母字にも対応しているのである。また、カ行音は群母字にも対応することが見てとれる。

なぜ全濁字とガ行音との対応は整然としていないのか。その理由の一つとしてガ行音に対応する群母字がいわゆる「三等韻」にしか現れないことが挙げられる。大友 1963 が

特に『が』に当てるにふさわしい群母の字は、その韻母が一・二等の場合が多いからして、これに制約されて、殆んど見当たらないというのが実情である

と指摘したとおり、三等にしか現れない群母字は広母音のガ、ゴに当てにくく、見母と溪母字を使わざるを得なかったと考えられる。言いかえれば、ガ、ゴに当てようとすれば見母字と溪母字を用いるしかなかったのである⁵。

また、表 1 のガ行音に注目すれば、ガ行音の前の音節に当たる字には鼻音韻尾を持つものが圧倒的に多いのが分かる。ガ行音に当たる 30 字（見母 16、溪母 7、群母 7）の内に前の音節に鼻音韻尾を持つものが 25 字ある。そして、他には 5 字が語頭に当たる音節、つまり前の音節を持たないものなので、これらを除くならば、例外は一例もない。

ガ行音に当たる 30 字（見母 16 字、溪母 7 字、群母 7 字）

前の音節が鼻音韻尾を持つ音節 25 字

語頭に当たる音節、前の音節なし 5 字

こうしたことは、当時の中国人にとって、日本の語中のガ行音の鼻音的要素がかなり明瞭な特徴であったということを物語っていよう。

一方、カ行音に当たる 149 字（見母 127、溪母 19、群母 3）のうち、前の音節に鼻音韻尾を持つものは 5 字しかない。要するに、カ行音を表記する際、その前の音節に鼻音韻尾の字を用いないということが分る。

カ行音に当たる 149 字（見母 127、溪母 19、群母 3）

前の音節が鼻音韻尾を持つ音節 5 字

前の音節が入声、開音節及び保留 96 字

前の音節がなく、語頭に当たる音節 48 字

更に例外の5例のうち、以下の2例はほかの3例と状況を異にする。

264 香 宣哥 (センカウ)

265 沉香 沉哥 (デンカウ)

2例とも漢語であるが、「宣」と「沉」との鼻音韻尾は後接の濁音を写すのではなく、単に撥音「ン」を表すために使われていることが分かる。この2例を除けば、例外はわずか3例となり、全体に対する比率は極めて低いことが明らかである。

以上のことから、鼻音韻尾の字がもつばら濁音の前の音節に用いられ、清音の前の音節に用いられないという規則の存在が明確である。これは鼻音的要素が『日本国考略』の日本語記録者にとって明確に聞き取れるものであったことを意味している。しかも次に述べるように、この特徴は意味の弁別上、優位に立つものである。

2.1.2. ガ行音の前の音節が n 韻尾の場合について

もしガ行子音が[^hg]の音であったとしたら、その前の音節に η 韻尾のものを用いるはずである。表1の中では鼻音韻尾を持つ25字の内、21字が通摂、宕摂、梗摂の字であり、つまりこれらは中古音において、η 韻尾で終わる音節である。現代呉方言では中古音の η 韻尾を完全には保っていないが、19世紀までの寧波方言では通摂、宕摂、梗摂がすべて η 韻尾を持っていたことが寧波西洋人資料から分かる。

しかし、表1から分かるように、n 韻尾を用いた例が4例ある。そこで、何故ガ行音の前に η 韻尾でなく、n 韻尾の音節が使用されたかについて考える。n 韻尾を使ったのは次の4例である。

39 東 熏加口 (ヒガシ)

99 長子 難解水 (ナガシ)

208 無工夫 一孫擲水 (イソガシ)

218 鬚 薰計 (ヒゲ)

「熏」、「薰」、「孫」(「熏」は「薰」と同音)の3字は臻摂(n 韻尾)に属するものである。呉方言における臻摂は深摂(m 韻尾)と共に梗摂(η 韻尾)三四等と合流していたと考えられ、その合流は15世紀に遡ることができる⁶。現代呉方言においては、合流した臻摂、深摂、梗摂その韻尾の音価が[n]となった地域(蘇州、杭州など)、[ŋ]となった地域(上海、松江など)、[ŋ]となった地域(寧波、温州など)がともに存在している。19世紀末の寧波方言を反映した宣教師資料では合流した臻摂、深摂、梗摂をすべて-ngで写しており、現在の寧波方言と一致している。したがって、『日本国考略』編纂当時にも臻摂の韻尾の音価が[ŋ]だったと考えてよいのではないかと思われる。そうしてみると、「熏」、「薰」、「孫」の3例はいずれも η 韻尾であり、例外とはならない。

残りの唯一の例外は通し番号99ナガシのナに当たる「難」である。「難」は山摂(n 韻尾)一等開口で当時寧波方言の音価では[nan]である。ナガシの場合は、[nan]より[nan]という音節のほうがナに相応しいはずである。寧波方言においてはこの条件を満たす音節(つまりn 頭子音、広い母音、かつ η 韻尾を持つ音節)は宕摂一等泥母(例えば「囊」)のみが考えられる。しかし、宕摂一等字は才段の音節に多く用いられている。宣教師資料における宕摂一等字は *ông* と表記されており、その韻母の音価は[ɔŋ]と推定されている。現在の寧波でも宕摂一等字は[ɔ]である。これらはいずれも宕摂一等字の主母音の円唇性

を反映している。このことから、当時の寧波方言における宕攝は円唇母音[o]を持っていたため、例えば「囊」の音価は[nan]でなく、[nɔŋ]であったというように、[nan]という音節は当時実在しなかったと推測される。それゆえ、ナガシのナを写すに当たって、宕攝一等字でなく、山攝泥母の「難」が選ばれた可能性が十分に考えられる。

2.2. ガ行音の音価

以上の考察を通して、ガ行音の記述においては、その前の音節に η 韻尾を有する音節を用いるという法則が厳密に行われていたことが明らかになった。そうであるとすれば、『日本国考略』に反映される語中のガ行子音の音価について、寧波方言の音声特徴に基づき、以下のように記述できる。

- 一、ガ行音の前の音節に η 韻尾の字を利用したのはその音節の母音の鼻音化を表していたのではない。η 韻尾の字の使用率が極めて高いからである。つまり、母音の鼻音化だけを表すには、η 韻尾の字でも、n 韻尾の字でもよかったのに、数字が η 韻尾に偏っているのである。
- 二、ガ行子音は単純な濁音[g]ではない。浜田 1952 にも指摘されているように、呉方言には全濁字である群母字[g]が存在しているから、ガ行音が[g]であればその字だけで表すことができるのにもかかわらず、その前の音節に鼻音韻尾の字を用いていることから、このように考えられる。
- 三、ガ行子音は喉内鼻音[ŋ]ではない。中古音にいう疑母[ŋ]が現代寧波方言にも存在しており（例えば現代では「硬」が[ŋã]であり、宣教師資料の表記では「硬」が ngang ([ŋan]と推定)である)、15 世紀当時にも存在していたと考えられるが、ガ行音を表記する際には一度も使われていないからである。

この三点を考慮すると、『日本国考略』が反映した語中のガ行子音の音価は入り渡り鼻音を持つ[p̚g]以外には考えられない。従来ガ行音と中国語との対応が整然とした形ではないとされてきた問題について、以上の考察によってその実体が明らかになった。(具体例を本節末尾資料 1 に挙げる)

3. バ行音

次にはバ行音について考察する。ただし、バ行音を写音するのに寧波方言側の事情があるため、まずはそれについて述べておく。

3.1. 呉方言における m 韻尾

『日本国考略』では、ハ行音には唇歯摩擦音の非母字、バ行音には両唇破裂音の幫組字を当てている。ハ行音が無声両唇摩擦音、バ行音は有声両唇破裂音であったことを物語る。ところで、有声両唇破裂音であるバ行音はガ行音と同様に入り渡り鼻音を伴っていたのか。もし伴っていたならば、その前の音節が m 韻尾(咸攝・深攝)の音注漢字を使うのが都合がいい。

だが、中古音における m 韻尾は現代寧波方言では n 韻尾、ŋ 韻尾に合流している。この合流は寧波西洋人資料からも確認できる。『日本国考略』成立時期に近い十五、六世紀における幾冊かの呉方言の韻書には m 韻尾の韻目がある⁷が、十四世紀の南戲『琵琶記』、

十五世紀吳方言の説唱詞話などでは m 韻尾が n 韻尾と合流していることが明らかにされている⁸。韻書は規範性、保守性を持つものであるからであろう。また、丁 2001 によれば、韻書『同文備考』(1540)でも m 韻尾の韻目を保持しているにもかかわらず、m 韻母と n 韻尾との混同例が見出される。そして張竹梅 2007 によると、元末明初の吳方言においては m 韻尾が存在していたが、n 韻尾に合流した地方もあり、明末になると、合流はほぼ完成したという。従って、『日本国考略』編纂時において m 韻尾が n 韻尾へ合流している可能性が十分ある。仮にバ行音が mb であったとしても、m 韻尾の字をその前の音節に当てることができないと思われる。

3.2. バ行音の入り渡り音

さて、以下では当時のバ行音における鼻音的要素を考察する。表 2 はもっぱらバ行音に使われる幫、並母字の使用回数とその前の音節に用いられる漢字の韻尾を示すものである。

【表 2】

前の音節 バ行音を 表す字の声母		-m	-n	-ŋ	入声韻尾	開音節
		幫母 (p-)	2	1		
並母 (b-)	16		8	4	1	3

表 2 から見てとれるように、バ行に用いられる 18 例の中、濁音の並母字が 16 例を占めている。清音の幫母字はただ 2 例である。ここからバ行音の濁音に対して多くは全濁字を用いたことが言える。しかも、その前の音節のうち、13 例が鼻音韻尾を持つものである。このことはバ行音が入り渡り鼻音を持っていたということを意味する。例外の中で 221 「指 尤皮 (ユビ)」については、寧波方言に音節[iuŋ]がないために、やむを得ず「尤」[iu]を使った可能性が考えられる。また例外の 100 「媳婦 嫌妙報 (△ニョウバウ)」についても同様に、寧波方言に音節[nion]、[nioŋ]がないためだったのであろう。それゆえ、例外と言えるのは 3 例であり、全体の 16%にすぎない。

先に述べたように、当時吳方言において、m 韻尾は n 韻尾へ合流しつつあった。そのため、バ行音の前の音節には中古音における m 韻尾の字だけでなく、n 韻尾の字と ŋ 韻尾の字も使われているわけである。従って、当時のガ行音が g であるのに対して、バ行音は mb であったことが明らかである。(具体例を本節末尾資料 2 に挙げる)

4. ザ行音

ザ行における入り渡り鼻音について見てみる。音注漢字を清音の生・心・書母と、全濁音の船・常・崇・澄・日母に分け、考察する。

【表 3】

前の音節 ザ行音を 表す字の声母		前の音節			入声 韻尾	開音節	なし	保留
		-m	-n	-ŋ				
生・心・書・精 母(清)	サ行	132	4	3	23	59	38	5
	ザ行	2	2					
船・常・崇・日 母(全濁)	サ行	4				4		
	ザ行	9	3	1		2	2	1

サ行音に全清音をもつばら使っており、合計 132 例ある。例外と言えるのは全濁字を使う 4 例であるが、全体の約 3%しか占めていない。また、前の音節が鼻音韻尾のものが 7 例あるが、割合は全体の約 5%に過ぎない。

ザ行にはガ行音のような入り渡り鼻音が存在しているかどうかについて考えるが、ザ行音は合計 11 例、その中で全濁字を使用したのは 9 例ある。ザ行音と全濁字の対応は明らかである。ただし、語頭にあたる 2 例を除き、その前の音節が鼻音韻母のものであるのは 6 例、開音節のものが 2 例、保留とするものは 1 例である。

ガ行音に比べ、その前の音節が鼻音である割合は高くないが、入り渡り鼻音は存在すると判断してもいいであろう。サ行音に当てる全濁字も 4 例あるが、それについてはよく分らない(具体例は本節末尾資料 3 に挙げる)。また、前の音節が n 韻尾のものが多いため、入り渡り鼻音が[m]で実現されることは推測される。

5. ダ行音

次にはダ行音について見てみる。チ・ヂ・ツ・ヅの破擦音化が『日本国考略』などの中国資料で確認されている(大友 1962、1963)。本来、端・透・定母字で写されるはずのチ・ヂ・ツ・ヅは知・澄・精・章母でも写されている。

- 30 地 禿智(ツチ)
- 73 叔 阿治(オヂ)
- 119 立 達子(タツ)
- 303 松 埋止(マツ)

そのため、ここでは音注漢字が端・透・定・知・澄・精・章母に属するものをまとめてみる。

【表 4】

前の音節 ダ行音を 表す字の声母		前の音節		-m	-n	-ŋ	入声 韻尾	開音節	なし	保留
		タ行	ダ行							
端母 ⁹	タ行	51			2		14	28	7	
	ダ行	3				3				
透母	タ行	8					1		7	
	ダ行	0								
定母	タ行	18					4	8	5	1
	ダ行	19			12	2		1	4	
知母	タ行	10					6	2	1	1
	ダ行	1				1				
澄母	タ行	0								
	ダ行	2						1	1	
精母	タ行	19			1		5	10	2	1
	ダ行	3						2	1	
章母	タ行	2					1	1		
	ダ行	0								

濁音は計 28 例ある。その中で、全濁字（定母、澄母）が 21 例、全清字（端母、精母）が 7 例である。また、語頭にあたるもの 6 例を除き、前の音節が鼻音韻尾のものであるのは 18 例、前の音節が開音節であるものは 4 例である。

ダ行音においても、前の音節に鼻音韻尾の漢字が使用される回数はガ行音に比べて多くないけれども、入り渡り鼻音が存在すると判断して差し支えないのである。前の音節が開音節のものを使用する例はすべてイ段とウ段のものであることが興味深い（具体例を本節末尾資料 3 に挙げる）。また前の音節が η 韻尾のもの、例えば「明東（ミヅ）」があるが、全体的に n 韻尾のものが多い。このことから、ダ行に伴う入り渡り鼻音は [ŋ] で実現されると推測される。

6. おわりに

以上『日本国考略』における濁音に伴う鼻音要素について考察を試みた。ガ行音については、先行研究で証明されなかった子音の音価が、入り渡り鼻音を伴う [ᵐg] であることを証明した。音声学的に見てもガ行音はこの音価で現れるのが最も合理的である。バ行音については、その前の音節に m 韻尾の字だけでなく、n 韻尾と η 韻尾の字も用いられていることは、当時の呉方言における m 韻尾と n 韻尾との合流を反映していることを指摘した。ガ行音と同様に鼻音韻尾の字が多く用いられることから、その音価がガ行音と並行して [ᵐb] であったことがと推測できよう。ザ行音とダ行音でも、ガ行音ほど入り渡り音を伴う割合は高くないが、いずれも入り渡り鼻音 [ᵐ] の存在は確実である。

当時の日本語における清濁の対立について、大友は次のように述べている。

無声音対有声音に加えて、Initial glide の鼻音があるかないかが、大きな標識であることが明瞭となる。しかも、無声音対有声音の対立が決定的でなかった事を思い合わせると、却って、この Initial glide の鼻音が、優位に立つ様にも考えられる

筆者もそれに賛成する。以上の考察を通して、入り渡り鼻音は 16 世紀初において濁音の主な弁別要素であったと考えてよいであろう。また、上にバ・ザ・ダ行音において入り渡り鼻音の存在を示さない音注も観察されたことは、入り渡り鼻音の衰退がバ・ザ・ダ行音において始まったことを物語っている。

【注】

¹ 中世の濁音に伴う鼻音に対して、その呼び方は統一しておらず、例えば浜田 1952 では「鼻音の渡り音」、大友 1963 「Initial glide の鼻音」、高山倫明 2012 では「前鼻音」と呼んでいる。後述するように濁音の音価、例えばガ行子音の場合では^[ʷg]であったとすれば、その発音の仕組みは弱い軟口蓋鼻音^[m]の後に口腔の閉鎖が開放されるとともに破裂音^[g]が発生するということである。確かに高山の指摘通りに、「わたり音」の定義によればその鼻音を「入り渡りの鼻音」と呼ぶことに問題がある（高山 2012:154）。だが、「前鼻音」の呼び方にも問題がないというわけではない。それはすなわち、有声破裂音、例えば^[g]から鼻音を伴う^[ʷg]に変化したことを前提としているということであろう。^[ʷg]の生起は必ずしも^[g] > ^[ʷg]という変化によるとは限らず、^[ŋ] > ^[ʷg]という可能性も考えられるのである（例えば唐代中国語における^[m] > ^[ʷm]などのいわゆる「非鼻音化」が知られている）。

^[ʷg]のような子音の調音法は破擦音^[ts]と類似しており、それを「鼻裂音」のような呼び方にして、^[m]を鼻音と呼んだほうが適切かもしれない。ただしこれ以上用語が多くならないように、本研究では便宜上、濁音に伴う鼻音を「入り渡り鼻音」の呼び方にする。

² 福島 1959:70。「第三の表記」とは日本寄語において、鼻音韻尾の字の後の字が、濁音となっていることである。この論文では鼻音韻尾の字がなくても、当然濁って読むべき言葉を挙げたが、中にはガ行音の用例が挙げられていないため、本稿はそれについて論じないことにする。

³ 表 1 の「前音節」の「なし」にあたる。例：173 「莫恠 哥面乃礼（ゴメンナレ）」。

⁴ 保留とは誤刻や脱字などと思われる、まだ解読できない音節のこと。例：349 短 迷 □加（ミジカイ）

⁵ 『韻鏡』で群母に属さない「扛」字が現代寧波方言では全濁字と次清音と読まれているが、寧波西洋人資料では次清音しか記録されなかった。『日本国考略』でも「扛」がコに当てられるため、例えば、151 喜 搖落扛蒲（ヨロコブ）、『日本国考略』において「扛」は全濁字でなく、清音として扱われていると考えられる。

⁶ 大島正二 1972、古屋昭弘 1984、1986 を参照。

⁷ 例えば、『同文備考』（1540）には淫、簪、鹽など、『併音連声字学集要』（1561）には侵、覃、鹽がある。

⁸ 大島正二 1972、古屋昭弘 1984、1986。

⁹ 166「痛 一（車豆）水」の「（車豆）」についてはよく分らないので、とりあえず端母と見なす。

【資料1】ガ行音例

項目	寄語	解説	前音節が臻摂の例			
前音節が通摂、梗摂、宕摂のもの			39	東	熏加口	ヒガ口
45	金	空 <u>揩</u> 泥	99	長子	難 <u>解</u> 水	ナガシ
50	紅銅	鶯更 <u>揩</u> 尼	208	無工夫	一孫 <u>擲</u> 水	イソガシ
51	水銀	明東 <u>揩</u> 泥	218	鬚	薰 <u>計</u>	ヒゲ
76	男子	阿奈公 <u>姑</u>	語頭に当たるガ行音の例			
98	外甥	萌 <u>哥</u>	131	挹	科眉乃 可 <u>恨</u> 奈礼	ゴメンナ ゴメンナレ
124	乱説	思量骨多	173	莫怪	哥面乃礼	ゴメンナレ
140	便來	羊 <u>解</u> 地何爺俚	314	鵝	解ノ加	ガノガ
226	小刀	空客打乃	鼻音韻尾に後接する清音の例			
241	扇	黄旗	50	紅銅	鶯更 <u>揩</u> 尼	アカガネ
242	泥金扇	空 <u>揩</u> 泥黄旗	133	罇	烏爺蛮 <u>計</u>	オヤマキ
243	鑰匙	坑 <u>其</u>	254	酒盞	晒加藤 <u>計</u>	サカヅキ
244	泥銅扇	法古黄旗	264	香	宣 <u>哥</u>	センカウ
253	鋸	拏剛 <u>擊</u> 利	265	沉香	沉 <u>哥</u>	デンカウ
257	鏡	坑皆 <u>彌</u>				
277	手巾	達昂个口				
293	大麦	烏蒙 <u>崎</u>				
294	小麦	柯蒙 <u>崎</u>				
301	杉	松 <u>計</u>				
319	羊	羊 <u>其</u>				
340	極好	明 <u>哥</u> 多				

【資料2】バ行音例

前音節が鼻音韻尾を持つもの				前音節が開音節及びその他のもの			
19	冷	三 <u>壺</u> 水	サブシ	304	梅子	面 <u>婆</u> 水	メボシ
79	孩	歪爛 <u>鼻</u>	ワランベ	309	茄子	乃沈 <u>皮</u>	ナスビ
84	僕	三 <u>壺</u> 郎	サブラ	356	破	羊 <u>鉞</u> 里里	ヤブルル
134	馱	因 <u>彼</u> 計	イビキ	362	香	干牌水	カンバン
145	愛惜	搖落扛 <u>蒲</u>	ヨロコブ	前音節が開音節及びその他のもの			
151	喜	姚羅扛 <u>步</u>	ヨロコブ	89	強盜	六宿 <u>鼻</u> 脣	ヌスビト
175	遊	亞孫 <u>步</u>	アソブ	100	媳婦	嫌妙 <u>報</u>	△ニョウバウ
232	盒子	剛白 <u>哥</u>	カウバコ	128	嬉	挨梭 <u>蒲</u>	アソブ
247	鑊	難 <u>皮</u>	ナベ	221	指	尤 <u>皮</u>	ユビ
				292	油	挨 <u>蒲</u> 頼	アブラ

【資料3】ザ・ダ行音例

ザ行			
前音節が鼻音韻尾を持つもの			
49	黄銅	中若古	チウ <u>ジャク</u>
110	乞巧	寛盡計	コ <u>ジキ</u>
235	硯	孫助俚／尊子力	ス <u>ズリ</u> ／ス <u>ズリ</u>
252	硯箱	孫助利法哥	ス <u>ズリ</u> ハコ
320	鼠	眠助米	ネ <u>ズミ</u>
語頭に当たるもの			
48	錢	前移	ぜ <u>ニ</u>
266	麝香	射哥	ジャ <u>カウ</u>
前音節が開音節及びその他のもの			
5	風	加前	カ <u>ゼ</u>
52	好銅錢	姚礼善尼	△△ <u>ゼニ</u>
227	中刀	歪計柴需	ワキ <u>ザシ</u>
ダ行			
前音節が鼻音韻尾を持つもの			
32	水	明東	ミ <u>ヅ</u>
51	水銀	明東揩泥	ミ <u>ヅ</u> ガネ
57	公	翁知	オオ <u>ヂ</u>
81	朋友	道門大聖／濶門大帝	トモ <u>ダ</u> △／△モ <u>ダチ</u>
121	眠	羊達路	ヤ <u>ドル</u>
136	去	漫陀羅	モ <u>ドル</u>

140	便来	慢陀的姑	モ <u>ド</u> ツテロク
142	回来	慢陀的何耶俚	モ <u>ド</u> ツテオヤレ
147	久不見	何面凸辣水	オメ <u>ヅ</u> ラシ
154	羞愧	番助皆水水	ハ <u>ヅ</u> カシシ
190	死	身大	シ <u>ンダ</u>
193	肚飢	勳大路水	ヒ <u>ダ</u> ルシ
239	筆	粉地	フ <u>デ</u>
283	白酒	明東晒箕	ミ <u>ヅ</u> サケ
355	不是	松田乃係	サウ <u>デ</u> ナイ
358	緩	漫大漫大	マ <u>ダ</u> マ <u>ダ</u>
361	未	慢大	マ <u>ダ</u>
語頭に当たるもの			
53	皇帝	大利	ダイ <u>リ</u>
54	官	大米	ダイ <u>メイ</u>
111	好淫	梭羅	ヂョ <u>ロ</u>
176	那里去	陀姑移姑	ドコ <u>イク</u>
265	沉香	沉哥	ヂ <u>ン</u> カウ
前音節が開音節及びその他のもの			
73	叔	阿治	オ <u>ヂ</u>
203	有情	亞姊吉	ア <u>ヂ</u> キ
204	無情	亞姊吉乃水	ア <u>ヂ</u> キナシ
254	酒盞	晒加藤計	サカ <u>ヅ</u> キ

第2節 ハ行音の音価

1. はじめに

ハ行子音¹の音価については、多くの先行研究により、[p]>[ɸ]>[h]という変化を経て現代に至ったということが明らかになり、ほぼ定説となっている。但し、[ɸ]>[h]の移行が具体的にいつ頃起こったのかという問題については、先学の間でも意見が一致しているとは言えない。問題となるのは、[ɸ]>[h]が起こったように思わせるハ行子音の写し方が16世紀明代の中国資料、あるいは朝鮮資料に見られることである。これは[ɸ]>[h]の移行を反映する他の諸資料が17世紀に入ってからのものであることと矛盾することになる。つまり、中国資料と朝鮮資料がハ行子音の音価の移行を反映しているという推測が成立するならば、その移行は17世紀より百年も早い時代に遡ることになるのである。

この節では、『日本国考略』1523を中心に、16世紀の中国資料におけるハ行子音の音価の移行例と見られる箇所について考察を加え、ハ行子音の音価の移行をもう一度検討する。

2. 室町時代におけるハ行子音

室町末期から江戸期にかけ、ハ行子音は唇音退化の一種とも言われる[ɸ]>[h]の変化を起こしたとされる。その主な論拠としては以下のようなことが指摘されている。

①現代日本標準語をはじめとする日本中央部諸方言において、ハ行子音は声門摩擦音[h]（あるいは硬口蓋摩擦音[ç]）であるが、琉球各地、南九州、出雲、北陸、奥羽など周辺部諸方言では、唇摩擦音[ɸ]、[f]（破裂音[p]となっている地域もある）の存在がしばしば認められる²。

②『日葡辞書』イエズス会1603、『日本大文典』ロドリゲス1604、『日本文典』コリヤード1632などのキリシタン資料では、ハ行子音をもつばらローマ字のfで写していることから、一般的にハ行子音は両唇摩擦音であったと考えられる³。ただし、コリヤードはハ行子音がfとhとの中間的な音で発音される地方のあることにも言及している⁴。これにより17世紀には、地方によって時期の違いはあるものの、ハ行子音の音価の移行が徐々に起こっていたことは明らかである。

③ハ行子音の音価が[ɸ]であったことは日本の文献資料からも窺える。例えば周知の『後奈良院御撰何曾』1516にあるなぞなぞや、また室町末期書写とされる謡曲伝書『五韻之事』所載五十音図のハ行仮名の下に「唇^{クチビル} あハせす唇ニさハる」とあることや⁵、寛永五年『韻鏡』1628の扉裏にある「五音五位之次第」に「アワヤ喉サタラナ舌ニカ牙サ歯音ハマノフタツハ唇の軽重」とあることも、ハ行子音が唇音的なものであることを反映している⁶。したがって、16世紀から17世紀にかけてのハ行子音は主に[ɸ]であったと考えられる。

17世紀後半の寛文頃（1661-1672）には黄檗唐音資料に見られる京都のハの頭子音が明瞭な[f]ではなく、[h]あるいは[h]に近い子音であったという指摘がある⁷。また、17世紀末『蜆縮涼鼓集』1695には、「唇の軽」や「変喉」のような記述も見られる。その一方で『平曲指南抄』1695や『音曲玉淵集』1727などにはハ行音が唇で発音すべきことが説かれているが、これらは伝統芸能に伝えられたものであるから、前代の発音を述べたものであろう⁸。ここから推定するに、ハ行子音は17世紀末には一般的に[h]に発音されていたと考え

られる⁹。

④朝鮮資料の弘治五年朝鮮版『伊呂波』1492 では

ハ (하) ヒ フ (후) ヘ ㅍ 호 (호)¹⁰

とハングルで表記している。朝鮮語の固有語は子音[ɸ]を有しないため、唇音であるㅍ、ㅍ(朝鮮漢字音ではそれぞれ非母[f]、敷母[f]に用いていた)を使用しており、これらによりハ行子音[ɸ]を写そうとしたのであろう。しかし、喉音ㅎ[h]の使用(例：ハ 하)はハ行子音の音価の移行を反映した表記かと見られている。この移行が15世紀末にすでに起こっていたとすれば、他の文献に見られる移行の時期よりかなり早い。

一方、一定した写音法による『捷解新語』1676刊¹¹では、ハ、フ、ホは喉音ㅎ、ヒ・ヘは唇音ㅍで表わされている。ここでは喉音ㅎも用いられているが、これをハ行子音の音価の移行と見てよいかどうかはまだ疑問が残る¹²。ただし、『捷解新語』のハ、フ、ホの写音法については、以下に考察する中国資料と、円唇性の音の使用というところに共通点がある。それについては後述する。

以上、現代の日本方言や、内外の文献資料に反映したハ行子音は16世紀まで[ɸ]が保たれており、[ɸ]>[h]の移行は、地方による遅速の違いはあるが、17世紀に入ってから徐々に始まり、17世紀末には一般に[h]となっていたと考えられる。

しかし、16世紀明代の中国資料には、以上の諸点と矛盾するように見えるところがある。それはすなわち、ハ行音を写すのに非母字[f]と曉母字[h]との両方を用いているところであり、曉母字の使用はハ行子音の音価の移行[ɸ]>[h]を反映したと考えることもできるからである。これについては、ハ行子音の音価の移行と認めない有坂秀世 1939、橋本進吉 1950 がいる一方で、ハ行子音の音価の移行と認める浜田敦 1952、1955、また移行の可能性を指摘した大友信一 1963 などの研究もある。さらに、多数の辞書、専門書がハ行子音の音価の移行に言及する時、これらの中国資料を取り上げており、そのようなものには佐藤喜代治 1973、松本宙 1977、肥爪周二 2007、沖森卓也 2010 などがある。このようにハ行子音の音価の移行が中国資料に反映されているかどうかについては意見が定まっていない。

さて、16世紀の中国資料と言え、『日本国考略』1523、『日本館訳語』-1549、『日本図纂』1561、『日本一鑑』1565、『日本風土記』1592 が挙げられる。ハ行音の音注漢字として曉母字が使われた例はこれらすべての資料に見られる。これをそのまま認めると、資料の成立が早ければ早いほど、反映したハ行子音の音価の移行も早かったということになる。ここでは、16世紀初頭に成立した『日本国考略』を中心に、そこに反映したハ行子音の音価について考察を加える。

3. 『日本国考略』に現れるハ行音

まず『日本国考略』に現れるハ行音の音注漢字の声母 ([]は寧波方言の復元音)、およびその出現回数を下の表1に示す。(「へ」を含む語は現れない)

【表 1】

	重唇音	軽唇音	牙音	喉音
ハ		非母[f]17 敷母[f]1	溪母[k']1	曉母[h]1
ハウ				曉母[h]1
ヒ・ヒヤ	並母[b] 1	非母[f]13		曉母[h]4
フ		非母[f]3 奉母[v]4		
ホ	滂母[p']1	非母[f]1		
計	2	39	1	6

重唇音と軽唇音とはいずれも調音位置が唇であり、これらの声母の字を用いてハ行子音を写すのはハ行子音が両唇摩擦音[ɸ]であったことを反映している。牙音と喉音は、前述のように、ハ行子音がすでに[h]になっていたように見える問題の箇所である。そのようなところは、ハ行音全体に占める割合としては高くないが、全部で7例見出され、確かにハ行子音の音価の移行を反映していると考えられることもできる。しかしこの7例には、それぞれ何らかの理由によって牙音あるいは喉音の字が用いられたのではないか、また誤刻の可能性もあるのではないか、という疑いが残る。以下ではこの7例を一つずつ検討したい。

3.1. ハ（ハウ）の3例

ハ及びハウの3例は次のとおりである（この3例は第3章でも解説したが、ここでは浜田 1951、大友 1963 の解説案をそのまま載せ、検討する）。

181 殺 其奴／瞎咄即（キル／ハタス）、248 針 快利／法利（ハリ／ハリ）、
250 簞 花鷄（ハウキ）

「瞎」：「瞎」は曉母であり、寧波西洋人資料では hah[heʔ]とあるので、ハと読めるようである。しかし、この項目は「殺す」という意味であって、それを「ハタス」と解説することについては少々疑問に思われる。スの音注漢字が「即」であるのは『国朝典故』本のみであり、最善本の重刊本を含む他の版本では皆「郎」となっており、『国朝典故』本の「即」は誤刻の可能性を排除できない¹³。発音上でも、「即」は精母[ts]で、それがス[s]に当てられるのは不審である。この項目は解説を保留すべきものであろう。

ただし、解説の上での問題はともかくとして、「瞎」が誤刻でなければ、ハの発音に近いものであることも否定できない。さらに、後述のように中国資料では円唇的（合口的）な韻母の字を以てハ行音を表すことも許容されることがあったと思われる。寧波方言には「搯」、「豁」など[hueʔ]となっている合口字もあるので、「瞎」がそのような字の誤刻である可能性も考えなければならないが、現段階では解説を保留としておく。

「快」：溪母[k']の「快」は摩擦音でなく破裂音である。ハが[ha]であったとしても、摩擦音の字を使わずに、破裂音の「快」を用いることは考えにくい。ところで、「針」の項目の下には「快利」と「法利」との二行の音注が並列しており、音注の「快」と「法」は字形が類似しているところに注意すべきである。「快」を[ha]に読めるかどうかはともかくとして、「快」の解説は保留しておかなくてはならない。

「花」：「花」の例を検討する前に、まずハ、ホの音注を見ておきたい。

ハの音注にもっとも多く用いられるのは「法」(9例)と「発」(8例)である。中古音において「法」は咸摂乏韻(p入声)、「発」は山摂月韻(t入声)であり、もともと異なる音であったが、現代呉方言においては二字ともに声門閉鎖音[-ʔ]を持つ同音の字となっている。なぜハに当てるとに入声音を使用したのかというと、ア段に数多く当てられる、韻母が[a]である蟹摂の中に頭子音が軽唇音[f]である音節が存在しないためであり、山摂・咸摂の入声字[feʔ]のような音節を用いざるを得なかったからである。

ホに当てた例には、「発」(1例)と「坡」(1例)がある。「発」は山摂月韻でハに多く用いられており、その主母音はアに近い[e]であったと考えられる。一方、「坡」は果摂戈韻一等滂母で、韻母が恐らく当時の日本語のオと同じく[o]であったと考えられる。このように両字はそれぞれ異なる主母音を持つのであるが、共にホに当てられるのはなぜであろうか。

これは、当時の呉方言には日本語のホに相応しい音節がなかったためであると大友1963は指摘している。韻母[o]に近い果摂、假摂において軽唇音[f]を有する音節がないからである。それゆえ、「発」の主母音[e]はホの母音[o]とは異なるが、頭子音の唇歯摩擦音[f]が「坡」の破裂音[pʰ]より聴覚上、両唇摩擦音[ɸ]に近い音に聞こえるために選ばれたのであろう。一方、「坡」はその主母音[o]がホと同じであり、その子音というよりもホの母音を持っているために選ばれたと考えられる。『日本国考略』では一定した写音法に準拠して日本語に音注を施したわけではなく、聞いたままの日本語の発音を、思いついたそれに近い発音の漢字で当てたもののようである。そのため、頭子音も主母音も異なる「発」と「坡」を以てホを表したのは、二字がそれぞれホに近いという特徴を利用した結果であり、そのことは逆に当時呉方言にはホに相応しい音節がなかったことを裏付けている。

さて、周知のとおり、室町末期の日本語におけるオ段には開合二種類の長音が区別されていた。オ段の短音と合音は開口度の狭い[o]と[o:]であり、開音は開口度の広い[ɔ:](それ以前は[ao]あるいは[au])であって、後に開音[ɔ:]が合音[o:]へ合流したとされている。とすれば『日本国考略』当時にもオ段長音は開合の別があったとみてよいであろう。

「花」はオ段開音のハウに当てられたという点が注意すべきところである。オ段開音のハウの音価は開口度の広い[ɔ:](あるいは[ao] [au])であり、発音の短い入声音の「発」、開口度がやや狭い[o]を持つ「坡」は短音ホに当てることができたとしても、開音のハウを表すことは困難であったのだろう。

一方、『日本国考略』においては開音を表すのに效摂、宕摂、假摂の字を用いている。その中で開音にもっとも多く使われるのは效摂の字である。しかし、軽唇音[f]、介音[u]を有しない效摂はハウの両唇摩擦音[ɸ]を表わせない。鼻音韻尾を持つ宕摂の字では濁音音節の前に用いられることが多い(例:241 扇 黄旗(アウギ))。ここで軽唇音の字、例えば「方」などが使われないのは鼻音韻尾により後接の音節が濁って聞こえるからである。一方、假摂合口の「花」は軽唇音ではないが、寧波西洋人資料には hwô[huo]とあるので、その頭子音[h]と介音[u]によって、聴覚上、[hu]が子音[ɸ]に近い音に聞こえる。つまり、「花」はオ段開音の特徴が優先され、ハ行子音[ɸ]は二次的に声母[h]と介音[u]との組み合わせで表されたのである。

以上、ハ、ホ、ハウに近似する音節がそれぞれ存在しないため、他の音節を代用せざるを得ないことを次の表2で示す。

【表 2】

	存在しない近似音節	代用音節
ハ[ϕ a]	[fa]* (蟹撰)	[feʔ]法、発
ホ[ϕ o]	[fo]* (果撰)	[feʔ]発、[p'o]坡
ハウ[ϕ o:]	[fɔ]* (假撰)、[fao]* (效撰)	[huɔ]花

3.2. ヒの4例¹⁴

ヒの例外は4例とも曉母[h]である。大友 1963 では、この4字をヒが[h]へ移行した例と見なしている。しかし、ハ行子音に当たる音節だけでなく、語の前後の音節を合わせてみると、ハ行子音に曉母字を用いる理由がほかにあったと考えられる。その4例は次のようである。

2日 虚路 (ヒル)、39東 熏加 \square ¹⁵ (ヒガシ)、3肚飢 勳大路水 (ヒダルシ)、
218鬚 薰計 (ヒゲ)

まず、同音字である「熏」、「勳」、「薰」は3例とも後接の音節が濁音であることに注目すべきである。前節で考察したが、濁音に伴う鼻音的要素が少なくとも室町時代末まで存在していた。すなわち、『日本国考略』に見える室町時代のガ行音は、その前の音節に鼻音韻尾の漢字を使用するという規則がある。規則から外れる例が極めて少ないことから、当時日本語を記録した人にとって濁音に伴う鼻音的要素は顕著な日本語の特徴であったと思われる。ザ・ダ・バ行音においても例外は少しあるが、入り渡り鼻音の存在は確認できる。

ザ行：110 乞丐 寛需計 (コジキ)、235 硯 孫助俚 (スズリ) / 尊子力 (スズリ)
ダ行：32 水 明東 (ミヅ)、239 筆 粉地 (フデ)、361 未 慢大 (マダ)
バ行：151 喜 姚羅扛歩 (ヨロコブ)、175 遊 亞孫歩 (アソブ)、232 盒子 剛白哥 (コバコ)

「熏」、「勳」、「薰」は臻撰に属し、中古音においては鼻音韻尾[n] (寧波西洋人資料では ng[ŋ]) を持つものとされている。この3例とも濁音の前に用いられたのは偶然のこととは考えにくい。『日本国考略』にはヒを表すのに「非」が多く使われているが、濁音の前のヒを表すには、子音[ϕ]と母音[i]、さらに濁音の入り渡り鼻音、この三つの条件を満たさなければならない。しかし、呉方言においてはこの三つの条件をすべて満たす音節は存在しなかった。それゆえ、母音[i]と鼻音韻尾との二つの条件が優先的に考えられ、頭子音[ϕ]の条件にはそれに近い子音[h]を持つ合口字、つまり[hu]のような音で始まる「熏」、「勳」、「薰」が選ばれたものと推定する¹⁶。要するにこの3例が濁音音節の前にしか用いられないというのは、入り渡り鼻音を表すためである。しかも、曉母開口の音節、例えば寧波西洋人資料では「陰」hyin[hin]、「欣」hying[hin]のような非円唇の字が使われていない以上は、ヒが先に[h]へ移行したとは言えないのである。

「虚」については、後接するのが清音で、以上の3例と異なり、例外と見なさなければならぬ。下にも紹介するように『日本風土記』にも同様に遇撰曉母の「許」が多く用いられている。浜田敦 1955 ではヒが他のハ行音より先に移行したとした。だが、「虚」、「許」は遇撰でその母音は円唇母音[y]である¹⁷。子音[h]と円唇母音[y]との組み合わせは聴覚上[ɸi]に近く聞こえる音である。止撰曉母開口、例えば「喜」[hi]のような音節がヒに用いられない限りは、ヒの子音に[ɸ]>[h]という移行が起きていたとは判断できないであろう。

3.3. 357「要緊 馬多合手」について

ところで、第3章でも述べたが、357「要緊 馬多合手」という項目について浜田 1951 は「マツトホシイ」と解説しており、大友 1963 では「馬多」の解説を保留としたが、「合手」を「ホシイ」と解説した。そして、匣母[h]の「合」がホに写されるのを、ホにおいても[ɸ]>[h]の移行が起きた一つの例と見なしている。

「要緊」という語は北京方言においては大切、緊要という意味であるが、呉方言においてはその他に「すぐ、急いで」という意味もある¹⁸。またその次の項目は 358「緩 漫大 漫大 (マダマダ)」とあり、「急いでいない」という意味である。「要緊」と「緩」とは反義語の対として挙げられた項目なので、「要緊」はおそらく「すぐ、急いで」という意味に考えたほうが適切である。

その意味で考えれば、「馬多」はマツと読み、「合手」は恐らく「拿」の誤刻であり、ナと読む可能性が高く、「待つな」という日本語を記録した音注ではないかと思われる¹⁹。そうであるとすれば、これをハ行子音の音価の移行例と見なすことはできない。誤刻は先に述べたように寄語に多く見られる。このような誤刻には 16「晩 搖撒田五」が挙げられる。ここの「田五」が「里」の誤りであり、正しくは「搖撒里 (ヨサリ、ヨウサリ)」である。

3.4. まとめ

以上を要するに、ハ行子音の音価の移行と思われる例において、「快」、「瞎」、「合」には誤刻や解説の問題があり、「花」はオ段開音に配慮した音注であり、「熏」、「勳」、「薰」は後接の濁音に配慮した音注である、ということである。確かにハ行子音の音価が[ɸ]であるならば、それを写すには軽唇音や重唇音の漢字を以て表したほうが分かりやすい。しかし、日本語を記録した中国人は、中国語側の制約によって、日本語と同じ音構造を持つ音節を選べたわけではない。その場合は、日本語の音構造に近い中国語の音節を以て表すことになる。「花」、「熏」、「勳」、「薰」、「虚」はその例である。これらの音注漢字は子音[h]と、介音[u]あるいは円唇母音[y]などとの組み合わせでハ行子音[ɸ]を表すもので、これをもってハ行子音の音価の移行と見なすことはできない。

4. 他の中国資料

『日本国考略』以降の中国資料においてはハ行子音がどう反映されているのか。成立時期は異なるものの、音注漢字の使用においては『日本国考略』と軌を一にする。以下具体例を見ていきたい。

4.1. 『書史会要』

『日本国考略』より早く成立した『書史会要』では、ハ行子音と音注漢字との対応が「は 法 ひ非 ふ夫 へ靴 ほ波」である。「法、非、夫」は軽唇音の字で、今は問題にならない。問題になる「靴、波」については有坂 1950 の説が有力である。つまりへ[ϕe]、ホ[ϕo]に相応しい音節が呉方言に見当たらないため、それに近い「靴、波」が用いられたというものである。「靴」は子音[h]と介音[u]を持ち、「波」は[ϕ]に近い重唇音[p]を持つ。

4.2. 『日本館訳語』

北方方言に基づいた『日本館訳語』-1549 では、ハ、ヒ、フ、へを表すのにすべて軽唇音及び重唇音を使い、ホだけは唇音字の他に喉音である匣母の「活」、「賀」も用いている²⁰。呉方言のみならず、当時の北方方言においても音節[fo]が存在しなかったため、子音が[h]で、介音[u]また円唇母音[o]を持つこの二字がホに近い音の字として用いられたのではないかと考えられる²¹。

4.3. 『日本一鑑』

徽州方言に基づいて編まれた『日本一鑑』1565 では、例外も少しはあるが、一つの仮名にもっぱら一つの音注漢字を用いた点と同類書と異なる（『日本館訳語』にもこの傾向が見られるが厳密ではない）。ハ行子音とその音注漢字は「は法 ひ沸 ふ付 へ穴 ほ荷²²」である。「法、沸、付」は軽唇音であり、「穴、荷」は上述した同類書と同様、子音が[h]で、介音[u]あるいは円唇母音[o]を持つものである。

4.4. 『日本図纂』

呉方言に基づいた『日本図纂』1561 には、『日本国考略』の「寄語略」をそのまま転載したところがあり、オリジナルの部分としては「日本紀略」と「寄語島名」との二箇所がある²³。曉母字を用いたところはわずかであるが、「本渡 昏陀 (ホンド)」、「日向 兄加 (ヒュウガ)」は 3.2 に論じた 3 例と軌を一にする。つまり、写音する際、ハ行音の後に接する濁音の入り渡り鼻音を考慮したことが窺える（「昏陀」の「昏」はさらに二拍のホンを表す役割もあるように見える）。

その他、「花」が「博多 花哈嗒 (ハカタ)」、「伯耆 花計 (ハウキ)」の二箇所に見られる。「伯耆」は 3.1 の「花」の写音と同じであり、開長音のハウ[$\phi o:$]を写すのに、「花」[huo]は相応しい音節である。しかし、「博多」の音注の「花」については、『日本国考略』にも見られるように、假撰の字がア段音とオ段開音とともに用いられることがある。寧波方言における假撰がア段にも、オ段開音にも近似する[o]であったからであろうか。あるいは假撰における文白異読の対立で、白読[huo]に対して文読[hua]もあつた可能性が考えられる（例えば現代では、「家」[ko]_白:[tɕia]_文、「蛙」[uo]_白:[ua]_文、「寡」[kuo]_白:[kua]_文²⁴）。母音の問題はともかくとして、「花」が合口で、介音[u]を持つため、ハ行子音に当てることが可能であった。

4.5. 『日本風土記』

呉方言に基づいた『日本風土記』1592は『日本国考略』、『日本図纂』の内容をそのままに転載したところがあるが、日本語語彙を千語余り増補している。本書においてはハ行音を軽唇音、重唇音の字だけでなく、喉音の曉母字また匣母字[h]で当てることが同類書より多く見られる。用例が多いため、一々列挙することは控えるが、その一部を挙げれば、

ハ：伯耆 花計 (ハウキ)、博多津 花哈塔 (ハカタ)²⁵、炮烙 火羅骨 (ハウラク)、
埴生 花浦 (ハブ)

ヒ：人 許多 (ヒト)、未 血子石 (ヒツジ)、左 熏大里 (ヒダリ)、鬚 虚竭 (ヒゲ)

ヘ：臍 血所 (ヘソ)、表背匠 靴毀才古／梟毀才古 (ヘウホエザイク)

ホ：法院 火運 (ホウイン)、波菜 河蓮奈 (ホウレンナ)、熱 貨眉骨 (ホメク)²⁶

これらの字は上に述べてきた同類書と同様、子音が[h]、[h̥]で、介音[u]あるいは円唇母音[o]などを持つものばかりであり、例外は一例もない²⁷。

5. ハ行音の音注漢字の分類

以上、中国の諸資料を見てきた。どの資料においても当時の日本語のハ行音を表すに当たって、ハ行音に近い中国語の音節を利用しようとしたことが推測されるが、中国語側の事情や、一定した写音法によらないなどの理由で、必ずしも日本語のハ行子音と同じ調音位置の子音を持つ漢字で音注しているわけではない。中国資料の音注漢字の特徴をまとめると、大きく3類に分けることができる。

第一類 軽唇音[f]を有するもの(「非」「法」など)

第二類 重唇音[p][pʰ]を有するもの(「波」「坡」など)

第三類 子音が[h][h̥]で、介音[u]あるいは円唇母音[y][o]などを有するもの(「花」「虚」など)

ハ行子音の音価の移行を反映するものとして注目されてきた第三類については、喉音の[h] ([h̥])だけでなく、介音[u]あるいは円唇母音[o]など、すなわちその円唇性にも注意しなければならない。その円唇性と相俟って子音[h] ([h̥])は聴覚上、日本語のハ行子音[ɸ]に近い音に聞こえる。

6. 『捷解新語』に見えるハ行子音

朝鮮資料の『捷解新語』1676刊は日本語音韻史の資料として、これまで多くの研究がなされてきた²⁸。『捷解新語』の写音法は、上述した中国資料における第三類の音注漢字の特徴と類似しているところがあるように見える。すなわち、五つのハ行音の中で、ハ、ヒ、へとフ、ホとは非円唇母音を持つか、円唇母音を持つかで調音上区別され、朝鮮語の実際の音構造に基づいて、それぞれハ行子音に近いハングル表記で写されたのではないかということである。

『捷解新語』におけるハ行音は次のように表記される。

ハ화 ヒ피 フ후 ヘ퍼 ホ호

ヒ、ヘについてはㅍ[pʰ]で表記されていて問題とならない。問題はハ、フ、ホに対して、ㅎ[h]が用いられていることである。ㅎは確かにハ行子音の音価の移行を思わせるような表記である。しかし、フの子音は現代日本語において[ɸ]のままであるのに、ここにㅎで写音されているのは極めて不審である。それゆえ、ㅎは単にハ行子音[h]を写したとするだけでは、納得できる説明にならない。

ハについては、화がハ行子音の音価[ɸ]を反映していると安田章1980に指摘されており、筆者もそれに賛成する。つまりハに対して하[ha]を用いず、화[hoa]を用いたのはハが唇音的であることを物語っていると解釈できるのである。화は朝鮮漢字音の合口字を写すのにも使われていた（例えば「花」화）。朝鮮漢字音のハングル表記と同様に、ハ[ɸa]を表すのに円唇的な호[ho]と非円唇母音のㅏ[a]を利用したと考えられるのである。

非円唇母音を持つハに対して、フ、ホは円唇母音[u]、[o]を持つ音節であり、直接[ɸ][f]を表わす文字を持たないハングルは、ㅎ[h]と円唇母音의[u]、ㅓ[o]を以て表さざるを得なかったことは上で述べた中国資料と同じである。

要するに、『捷解新語』のヒ、ヘのハングル表記は5.の第二類、ハ、フ、ホのハングル表記は5.の第三類に類似する写音法によるものであると言えよう。そうであるとすれば、フの子音をなぜㅎで表すかも説明がつくようになり、『捷解新語』のハングル表記からハ行子音の音価が移行していたとは言えないであろう。

7. おわりに

以上『日本国考略』を中心に室町時代のハ行子音について考察を試みた。『日本国考略』において今までハ行子音の音価が移行したと思われてきた音注は、当時の中国語の音節構造の制約や誤刻などの理由で、論拠としてはほとんど成立しないことが分かった。他の中国資料を見ても、『日本国考略』と同様の写し方をしており、使用された音注漢字は概ね3類に分けることができる。

そのうち第三類は子音[h][ɦ]を用いるが、介音[u]あるいは円唇母音[o]などとの組み合わせによってハ行子音[ɸ]を写すというものであった。さらに、朝鮮資料の『捷解新語』でハ行子音の音価の移行と思われたハングル表記は上述の第三類と同様である。

諸資料を合わせて考察した結果、ハ行子音の音価の移行を反映するものとして注目されてきた、5.の第三類に属するものは、実は母音の円唇性と相俟って子音[h][ɦ]が聴覚上ハ行子音[ɸ]に近い音に聞こえることを利用しているのである。従って、16世紀におけるハ行子音に[ɸ]>[h]の移行はまだ起こっておらず、なお[ɸ]のままであったと言うことができよう。

【注】

¹ ハ行音の中にフのみが[ɸ]>[h]の変化が起こらず、現代でも一般的に[ɸw]であることは言うまでもない。便宜上、ここではハ行子音の音価の移行という場合は、フを除いたハ

行子音のことを「ハ行子音」と呼ぶ。また、現代日本語のヒの子音は[ç]であり、その音価の移行は[ϕ]>[ç]である。

² 奥村三雄 1974:126、上野善道 1989（「音韻総覧」『日本方言大辞典 下巻』小学館）。

³ 感動詞においては、例えば Ha（ハ）、Hà（ハア）のように h で表すことがある。

⁴ 大塚高信 1957:3-4。

⁵ 豊島正之 1984:151。

⁶ 橋本進吉 1966:112、馬淵和夫 1994:29。

⁷ 有坂秀世 1938。ただし、当時の長崎ではまだ[f]であった。

⁸ ただし、ハ行音の唇音性を保とうとしても、実際にはそれを保ったまま発音されていたわけではない（坂本清恵 2002:11）。

⁹ 松本宙「ハ行音・バ行音・パ行音」『国語学研究事典』1977:237。橋本 1966:112 によれば、『和字正濫鈔』1693 には「は・まは共に唇音ながら、はは唇の内に触て軽く、まは唇の外に触て重し」とあるのは 17 世紀末にもハ行子音がまだ[ϕ]であったように考えられるが、著者の契沖は主に大阪に居たため、大阪あたりの発音を反映しているという。

¹⁰ 「は」は「伊呂波」では、「別作十三字類」では「はば」を함바で写している。「ほ」は「伊呂波」では、「別作十三字類」では「程」を흔도で写している。前の音節に鼻音口、ㄴを加えることによって、次の濁音音節の入り渡り鼻音を写そうとしているものと考えられる。「ハ」と「ホ」はそれぞれ하、호と考えても差し支えない。『捷解新語』も同じである。

¹¹ 『捷解新語』には原刊本のほか、18 世紀にできた改修本、重刊改修本、文釈の諸本があり、ハ行音に対する写音法もそれぞれ異なる。奥村和子 1991 によれば、諸本におけるハ行音の写音によってハ行子音の音価の移行が起こっているように見えるという。18 世紀にはハ行子音の音価の移行が起こっていると考えられるので、ここで扱うのは 17 世紀にできた原刊本のみである。

¹² 森田武 1957、奥村和子 1991。

¹³ 大友 1963 には『続説郭』本が「即」であるとあるが、筆者が確認したところ『続説郭』本では「郎」となっている。

¹⁴ 東洋文庫本ではヒに「丟」（第 321、322、332 号）と「去」（第 302 号）で音注される項目がある。「丟」は『篇海』では丁羞切（『康熙字典』による）、『音節』では tiu[tiu] とある。「去」は呉方言字書である『字学指南』、『並音連音字学集要』では丘舉切、また丘據切、『便覧』では k'yü とある。いずれもヒに当たる音注とは考えにくい。「丟」、「去」は「非」の誤刻である可能性が高い。ただし、「丟」は[tiu]のほか、「彪」[piu]の異体字でもあり（『近代漢語大詞典』2008 中華書局）、パーカー 1884:145 によれば 19 世紀の寧波でも実際に[piu]と読まれていたという。そうならば、ヒに近い音ではあるが、「非」のほうがふさわしい音と思われるので、誤刻としておく。

¹⁵ 音注は「熏加」であるが、シに当たる一字が脱落したか。

¹⁶ 寧波西洋人資料ではこの 3 字を hyiüŋ と写しており、曉母の二三四等字が口蓋化して、[çiyŋ]となっている可能性があるが、『初学』から 19 世紀前半の寧波で口蓋化が起こ

っていない。もちろんこの口蓋化は『日本国考略』当時においても起こっていない。

¹⁷ 寧波西洋人資料では *hyü* と写しており、[cy] であった可能性がある。『日本国考略』当時においてはまだ口蓋化が起こらず、[hy] のような音価の可能性が高いであろう。

¹⁸ 許宝華他 1997:180、湯珍珠他 1997:118。

¹⁹ 高志佩 1991 によれば、「拿」の発音に[no]と[na]がある。

²⁰ 大友信一・木村晟 1968、福島邦道 1993 による。

²¹ 明代北方方言の再構音については葉宝奎 2001 を参考にした。

²² 大友 1963 による。

²³ この二個所に載せられた日本語は地名を中心としたものであり、同一の地名にも異なる音注漢字が用いられていることから、同一人物によるものかどうかという疑問は残る。

²⁴ 高志佩他 1991。

²⁵ 「伯耆」、「博多津」の 2 例は『日本図纂』からの転載である。

²⁶ 具体例は京都大学文学部国語学国文学研究室 1961 に詳しい。数字は使われた回数を示す。

²⁷ 『日本風土記』には「火 熏 (ヒ)」、「丙 熏那也 (ヒノエ)」、「丁 熏那多 (ヒノト)」、「光 熏革里 (ヒカリ)」の例がある。鼻音韻尾を持つ「熏」が濁音以外の音の前にも使われるところは『日本国考略』と異なる。ただし、前 3 例は《五行》と《十干》の類にあり、「熏那也 (ヒノエ)」と「熏那多 (ヒノト)」の「熏」は後接のノの子音が強く聞こえた、すなわち[*ϕino*]が[*ϕinno*]と聞こえた可能性がある。それから類推で「火」にも「熏」を当てたかと思われる。このようなものには「金 革 (カ)」、「庚 革那也 (カノエ)」、「辛 革那他 (カノト)」の例が挙げられる。ただ「光 熏革里 (ヒカリ)」についてはよく分らない。

²⁸ 亀井 1955、大友 1957、森田武 1957、武井睦雄 1960、安田章 1980、奥村和子 1991 など。

【資料】：『日本国考略』寄語校訂一覧（ハ行）

2	日	虚路（ヒル）	220	肚	登頼（ハラ）
9	雪	□計伏六（□キフル）	223	齒	法（ハ）
11	落雨	挨迷付魯（アメフル）	239	筆	粉地（フデ）
13	早	登耀（ハヤウ）	244	泥銅扇	法古黄旗（ハクアウギ）
15	午	非路（ヒル）	246	船	浮泥（フネ）
26	日暮	非故路路（ヒクルル）	248	針	快利（△リ） 法利（ハリ）
36	火	非（ヒ）	249	等子	登介俚（ハカリ）
39	東	熏加□（ヒガ□）	250	箒	花鷄（ハウキ）
55	百姓	別姑常（ヒヤクシャウ）	251	小箱	法哥（ハコ）
60	母	登登（ハハ）	252	硯箱	孫助利法哥（スズリハコ）
115	拐	科水非計（コシヒキ）	263	筋	法水（ハシ）
117	要	坡水水（ホシシ）	270	梯	課水飛計（コシヒキ）
143	快來	登下何耶俚（ハヤウオヤレ） 法古（ハク）	280	被	伏思麻（フスマ）
147	久不見	倭非怕水（オヒ△シ）	285	老酒	福祿晒箕（フルサケ）
154	羞愧	番助皆水水（ハヅカシシ）	302	檜	非那鷄（ヒノキ）
160	快去	法古□計（ハク□ケ）	321	一	非多子（ヒトツ） 非徵咄多（ヒ△△△）
161	走	法古（ハク）	323	二	扶達子（フタツ） 非咄多（ヒタツ）
181	殺	瞎咄即（△△△）	332	十一	多多非達子（トオトヒトツ）
189	恠	登頼旦多（ハラタツ）	334	百	法古（ヒヤク）
193	肚飢	勳大路水（ヒダルシ）	343	小	登葩（ホソイ）
198	請人	家那捩多（カノヒト）			
212	鼻	登奈（ハナ）			
218	鬚	薰計（ヒゲ）			

第3節 ツ・ヅの破擦音化と/u/の異音

1. はじめに

文献資料による音韻史的研究は、歴史上に起こった音韻変化に対して、微細にわたる音声学的分析方法を取ることには限界があるが、音韻論的な問題を解釈するにも「一般音声学」的な理論に従わなければならない。「一般音声学」的な理論でも解釈できない場合には、個別言語における個別的な事情があるか、あるいは「一般音声学」的な理論に不十分な点があるか、などの理由をさらに考えるべきである。例えば本節で考察する、室町時代に起こったツ・ヅにおける破擦音化の場合は、文献資料の考察によってその発生時期や発生過程を論証することはできるが、母音に対する従来の認識によってその音韻変化の原因を解明することは難しい。

そもそも広く使われている IPA でいう基本母音は舌面で調音するものばかりであり、舌尖の調音関与については十分に考慮されているとは言い難い。しかし、舌尖が調音に関与する母音、いわゆる舌尖母音は中国語の諸方言にも観察され、中国語の音韻史の事情を説明するのに欠かせないものである。この節では先学の論述や、文献資料の考察を通し、中国語音声学韻学でいう舌尖母音[t]がス・ズ・ツの母音/u/の異音であることを論じる。さらにその舌尖の調音関与という特徴が日本語音韻史上のツ・ヅの破擦音化や、現代日本語の母音の無声化を引き起こす要因であると考えられる。

2. ツ・ヅの破擦音化の問題点

室町時代における「四つ仮名」混同の先行条件としては、チ・ヂ・ツ・ヅの破擦音化が問題にされる。つまり破裂音であったチ・ヂ・ツ・ヅの子音[t][d]が破擦音[ts][dz]となり、シ・ジ・ス・ズの[s][z]に近づいたことが、「四つ仮名」混同のきっかけとなったというのである。チ・ヂの破擦音化については、[t][d]が[i]の影響を受け、口蓋化を起したと解釈するのが通説である¹。前舌狭母音[i]（または[j]）の影響による歯茎破裂音[t][d]の口蓋化は多くの言語に観察される一般的な音声変化である。例えば、中古中国語（知母[tʃ-]>[tʃj-]、澄母[dʒ-]>[dʒj-]）、近世朝鮮語（「知」디[tʰi]>지[tʰji]）、近代英語（Christian[-tj-]>[-tʃj-]）などが挙げられる。

現代日本語の/u/は東日本を中心に多くの場合、非円唇母音[u]である。実際には IPA でいう第 16 番の基本母音[u]よりも前寄りかつ広めの母音であり²、母音の中でもっとも中央に寄る母音である（精密表記では[u̠-]）。ただし、ス・ズ・ツの場合には、その母音がさらに前寄りとなり、いわゆる「中舌化」が生じ、これまで簡略表記で[ü][i]で記されてきた。その違いは例えば、「吸う」[süu]に聞かれる二つの母音の差にあらわれている³。

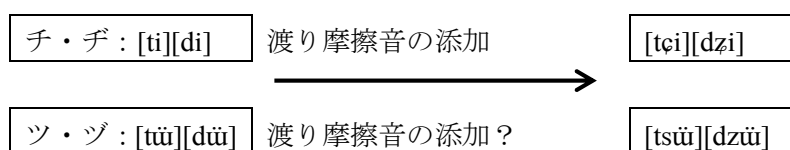
仮にこの中舌化した[ü]がツ・ヅの破擦音化よりも以前に存在したとすれば、それがツ・ヅの破擦音化のきっかけになったと説明することも可能である⁴。奥舌母音[u]より中舌化した[ü]のほうが歯茎破裂音[t][d]の調音位置に近くて摩擦音が発生しやすくなり、[t][d]の破擦音化を引き起こしえたということである。

しかし、[ü]の調音器官は中舌面のため、歯茎音[s][z]よりは後部歯茎音[ʃ][ʒ]のほうがさらに[ü]に近い。[ü]による破擦音化であれば、[ʃ][ʒ]のほうが[s][z]より添加されやすいの

ではないか。一方、単に破擦音化の条件を狭母音に絞るとしても、その理由については明らかにされていない。近代朝鮮語では音節[tɪ][tʰi][tɪ]は日本語と同様に破擦音化して[tɕi][tɕʰi][tɕi]に変化を遂げたが、音節[tu][tʰu][tu]は現代に至っても破擦音化しない。中国語でも音節[tu][tʰu][du]が破擦音化することはない。また、母音の前後位置から考えても、前舌母音[e]を持つテ・デが破擦音化しないのに、ツ・ヅが破擦音化するのはやはり不可解である。

要するに、チ・ヂの破擦音化は[i]の調音位置に相当する渡り音[ç][ʒ]が添加されたのに対し、ツ・ヅの破擦音化は[ü]の調音位置に相当しない渡り音[s][z]が添加されたという、調音音声学的に解釈しにくい問題が認められるのである（図1）。

【図1】



3. 音声記号[ɿ]について

3.1. 中国語音声音韻学における[ɿ]

[ɿ]とは現行 IPA に収録されていない、もっぱら中国語音声音韻学に用いられる母音の音声記号である⁵。[ɿ]という母音は中国の諸方言によく確認されるものであり、音声学的にはもちろん、音韻論的にもɿは宋・元代（北方方言）から成立し、以下に例示するように、現代方言では音節主音として、/i/とミニマルペアを成している。

呉方言（蘇州）： 思[sɿ] ≠ 西[sɿ] 詞[zɿ] ≠ 齊[zɿ]

客家方言（梅県）： 思[sɿ] ≠ 西[sɿ] 詞[tsʰɿ] ≠ 齊[tsʰi]_{文読}

（『漢語方音字彙』2003による）

3.2. [ɿ]とカールグレン

中国語学で[ɿ]を使用し始めたのは、近代的な中国音韻学の創始者と呼ばれるカールグレンである。その著書『中国音韻学研究』（*Études sur la phonologie chinoise*）では、舌尖が調音に関与する母音を**舌尖母音**、舌尖が調音に関与しない母音、すなわちほぼ現行の IPA に収録される母音を**舌面母音**と名付けて大別した。前者についてカールグレンは

舌尖母音はヨーロッパで珍しいが、中国の言語においては発達している。その一種は舌尖と歯茎前部との母音である。発音方法としては子音 z を発音する際に舌と歯茎との隙間を広げ、口腔の摩擦を減らすということで容易に発せられる。（原著：294、訳本：197）

と述べ、さらにそれを調音位置（歯茎前部と歯茎後部）と円唇性（円唇と非円唇）によって四つの母音に分類した（表1）。その後、『中国音韻学研究』の中国語版の出版により、

これらの音声記号は中国語学に定着し、広く使用されるようになった。

【表 1】

舌尖母音	非円唇	円唇
歯茎前部	ɿ	ʉ
歯茎後部	ʅ	ɥ

ところで、カールグレンは母音[ɿ]が中国語だけでなく日本語にもあると、次のように述べている。

ɿは舌尖と歯茎前部との母音で、高く緊張し、唇は開き、あるいは広く張る。この母音は官話や揚州、呉語、粵語、汕頭（恐らく）⁶、日本にある。（原著：295、訳本：197）

さらに

日本語の音節 tsɿ は「tsu」と写されている。旧式の英語の綴り方（例えばヘボンの綴り方）も現在普通に使用されている新式のローマ字会の綴り方もそのように綴る。このローマ字綴りは英語の風味を帯びている。「tsu」という綴り方は先に批判したウェード式⁷に由来したものである。音声学者のエドワーズさえも日本語の「mu」の母音と「tsu」の母音が異なることに気付かなかったのは不審である。パーカーはこの二つの日本語の音節を正確に写している。彼は自分なりの綴り「mu, tsz」を用いた。（原著：296、訳本：198）

とある。引用箇所は本来はカールグレンが主に中国語の舌尖母音の音声記号に関して、ウェード式ローマ字の不適切を指摘したところであるが、日本語のツも（ス・ズも同様）舌尖母音[ɿ]を持つと観察した彼は、ヘボンやエドワーズのローマ字綴りを批判し、パーカーの表記⁸を評価した。パーカーの表記では[ɿ]を z と写している。それは母音[ɿ]の調音が[z]に近いからである。

3.3. ス・ズ・ツの母音の舌尖性について

過去ス・ズ・ツの母音について論じた先行研究は多いが、その舌尖の調音に言及したものは少ない。ここでは、舌尖性に言及したものを取り上げたい。

まず佐久間鼎 1929 が「[s]と[ü]との調音域や仕方に相似たものがある」⁹と述べて子音と母音の近似性を指摘した。次に有坂秀世 1936 が、中国語の母音[ɿ]はス・ズ・ツの母音に比べ、舌面が前寄り緊張しており、摩擦も強いと指摘した。服部四郎 1951 もそれに近い指摘をしている。両氏の指摘はス・ズ・ツの母音と中国語の母音[ɿ]との差に対する厳密な記述であるが、その差を IPA で表記することは難しいであろう。

服部はさらに

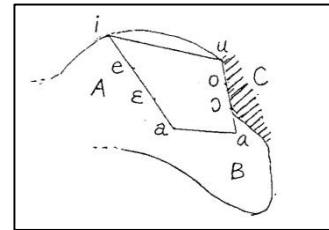
東京方言などの[sü]（ス）、[dzü]（ズ）、[tsü]（ツ）の母音[ü]の舌の形は[s]のそれに近いが、舌端と歯茎との間の狭めは[s]のより広い(β34^e)。声を伴った呼気が送られてくるときは著しい摩擦音を生じないが、「息」が送られてくると（即ち[ü̥]の場合）

[s]に似た鈍い噪音を生ずる。(1951:97/1984:80-81)

と述べた。ここでは服部がイエスペルセンの非字母的記号¹⁰で書いた「β34^{fe}」に注目したい。このβは調音器官が舌尖、34は狭めの度合いが3~4、feは調音位置が歯と歯茎の中間で歯茎に近い部分を示す。この非字母的記号において、摩擦音を形成する狭めは1と2であり(例:ドイツ語[s] β1^{fe})、母音を形成する狭めは3~8である(例:ドイツ語[u] γ3^d)。従って、服部のこの記号はス・ズ・ツの母音が子音[s]と同様な口構えの調音であり、狭めが[s]よりも広く、母音の範囲に入るということになる。これはまさにカールグレンのいう舌尖母音[ɺ]にはかならない。

次にX線撮影により日本語の各音節を観察する上村幸雄・高田正治 1990もある。それによれば、音節ス・ズ・ツは、子音に続いて母音を発するとき、舌尖が歯茎に向かってもち上がったまま、母音の調音に関与しているが、それは他のウ段の音節と異なるところである。それゆえ、上村・高田は音節ス・ズ・ツを[sɺ][dzɺ][tsɺ]と表記した。

また、上村 1992は「舌の最高点が第1から第4までの基本母音の前に来る母音が実際に存在する」と、舌尖の調音関与がある「A領域」の母音という概念を提唱した¹¹(図2)。



【図2】(上村 1992:44)

なお、舌尖が調音に関与する母音は宮古方言においても観察されている。この母音は、標準語のイ段と音節ス・ズ・ツに対応するところに現れる。少数ではあるが、先行研究には、崎山理 1963と上村 2000が、それを[ɺ]で表記している。さらに[ɺ]

は摩擦音[s][z]の他に破裂音[b][k]などにも音節主音として現れ(例:多良間「海老」[ibɺ]、「来る」[kɺ])、また単独で音節を作ることもあるという(例:多良間「飯」[ɺ])¹²。

以上の諸研究から、一般的に「中舌母音」と呼ばれるス・ズ・ツの母音は、実は中国語学でいう母音[ɺ]と近似し、舌尖の調音関与のある母音であることを認めるべきである。このような母音は標準語だけでなく、宮古方言にも存在することが報告されており(上村 1992によれば秋田方言にも)、今後の研究が期待される。

3.4. IPAによる舌尖母音の表記

カールグレンの記述からも分かるように、[ɺ]は[z]の摩擦を減らし、舌尖と歯茎の隙間を広げるように発音する。この調音特徴から、それを[i̥]、[s̥u]のようなIPAで表わした先行研究¹³もある。また成節的な[z]で表わすこともできるかと思われるが、しかし、これらのIPA記号には表記上の不便、舌尖性を表せないこと、摩擦性が強く感じられることなど様々な難点がある。また、IPAによって他の舌尖母音[ɺ̥][ɺ̥̥][ɺ̥̥̥]を表記するのもさらに困難であるため、中国語学においては[ɺ̥][ɺ̥̥][ɺ̥̥̥]という音声記号を使用し続けている。

一方14世紀中国の韻書『中原音韻』では、[ɺ]は一韻目(支思韻)として立てられ、現代中国語でも[ɺ]は音節主音としてかなり発達しており、音節[pɺ][mɺ][tɺ][lɺ]を持つ方言(安徽方言(績溪、蕪湖)、山西方言)の存在も報告されている¹⁴(この点において、上に述べた宮古方言と同じである)。それゆえ、音韻論的な処理の面から見ても、[ɺ]は中国語学では必要な母音記号である。

日本語学においては、従来の[ɺ̥]([i̥])を使ってきたが、上の諸先学の研究から確認で

きたように、ス・ズ・ツにおいて舌尖と歯茎でつくった狭めが、奥舌と軟口蓋のそれより、ずっと狭いことが分かる。「舌と口蓋との最狭点」という母音の分類基準から、ス・ズ・ツの母音を[ɯ]で表わすのは決して適切なことではない。[ɿ]という記号の使用によって、この母音の調音に対する認識を変えることは、外国人に対する日本語教育にとっても、重大な意味を持つのである。

3.5. IPA における接近音と母音の配置

次に舌が調音に関与する IPA 記号を見たい。表 2 は IPA (2005) における同じ調音位置の摩擦音、接近音、狭母音を示したものである。

【表 2】(舌が調音に関与するものだけを載せる。() は円唇を指す)

	歯音	歯茎音	後部歯茎音	そり舌音	硬口蓋音	軟口蓋音
有声摩擦音	ð	z	ʒ	ʒ	ʃ	ʒ
接近音 ¹⁵	ɹ			ɻ	j (ɥ)	ɰ (w)
狭母音					i (y)	u (u)

表 2 の配置が不均等であることは見て取れる。周知の通り、接近音[j ɥ ɰ w]は半母音とも言われ、その狭めがさらに狭くなれば、それぞれの摩擦音[j ʒ] (円唇のものは円唇記号を付ける) になり、狭めが広くなれば、狭母音[i y u u]になる。この位置での接近音は子音と母音の性格をともに持っているわけである。それに対して、接近音[ɹ ɻ]は半母音とは言わない。対応する狭母音が IPA に収録されていないのが一つの理由と考えられる。しかし、そのような母音は上述のように調音が可能であり、中国の諸方言にも実在している。従って、舌尖母音[ɹ ɻ] (歯茎) と[ɻ ɻ] (そり舌) で IPA のその空欄を埋めることに何の不合理的もない。

4. 日本語の無声化と母音[ɿ]

日本語における母音の無声化現象はアクセントや音環境、母音の狭めなどの条件が関わることがよく知られている。ここでは、狭母音に起こりやすい理由について一つの可能性を提示したい。

無声化が起こりやすい音節¹⁶を見ると、シ・チ・ヒ・キ・クの子音と母音は調音位置が一致しており、ス・ツの子音と母音は調音位置が離れていることに気づく。

子音、母音 (硬口蓋) : シ [çi] > [ç̥i]、チ [tçi] > [tç̥i]、ヒ [çi] > [ç̥i]、キ [kʰi] > [k̥ʰi]
([ci] > [c̥i])

子音、母音 (軟口蓋) : ク [ku] > [k̥u]

子音 (歯茎)、母音 (軟口蓋) : ス [sü] > [s̥ü]、ツ [tsü] > [ts̥ü]

こうした音節の無声化が一種の同化現象 (声の同化¹⁷) であると考えれば、子音と狭母音の調音位置の一致、すなわち子音と狭母音の舌構えの近似は同化作用が発動しやすい条件であると考えられる。

ス・ツの場合も、実はそのような条件が満たされることによって、無声化が引き起こされたのではないと思われる。異音[h]の発生により、音節の子音と母音が同位置の調音となり、舌構えが近似する音同士となる。それによって聴覚的にも近似する音感が生じ、母音の弁別的機能が子音に移ることも容易に起こり、母音の無声化や脱落が生じやすくなる、ということである。これを、狭母音が広母音より無声化しやすい理由と考えると、ア段、エ段、オ段の音節では子音と母音との調音、音感が近似しないために、無声化が比較的発生しにくいと解釈することができる¹⁸。

子音、母音（歯茎）： ス[suu]>[sɰ]>[sʰ]([ʃ])、ツ[tsuu]>[tsɰ]>[tsʰ]([tʃ])

5. 諸資料の考察

5.1. 西洋人のローマ字綴り

ここでは近代の西洋人が母音[h]をどのように聞き、どのように書き表わしたかを考察したい。上述のように、カールグレンはヘボン式綴りのtsuを批判した。それは恐らく、カールグレンの見た『和英語林集成』が再版以降のものであったからであろう。手稿、初版の表記は再版以降の版本と異なるものである。表3は『和英語林集成』の各版におけるス・ズ・ツ・ヅのローマ字綴り¹⁹、及びヘボンに影響を与えたとされるリギンズや、ブラウンの綴り²⁰をまとめたものである。

【表3】（括弧内は異表記）

	ス	ズ	ツ	ヅ	他のウ段音	
リギンズ『英日日常語句集』 1860	su(s)	zu	tsu(ts)	dzu	-u	
ブラウン『会話日本語』1863	sz(s')	dz	tsz(ts')	dz	-u	
ヘボン『和 英語林集 成』	手稿（年代不明）	sz(s' s)	dz(zz)	ts(ts' tsz tz)	dz	-u
	初版 1867	sz	dz	tsz	dz	-u
	再版 1872	su	zu	tsu	dzu	-u

ブラウンのローマ字綴りはuを表記しない。それについてブラウンは

sz は、s と z を間を置かずに結合しただけである。tsz はこれら三文字を結合したにすぎない。sz、tsz はどちらも最後の z の後には母音がない。z の音が必ず音節の終わりに来るのである。これが、少なくとも江戸と神奈川の発音である。（加藤・倉島 1998:337）

と述べた。「z の後に母音がない」というのは[h]に対する認識がないためであろう。

母音のない綴りは、単に母音の無声化または脱落とされている²¹。手稿ではシとチにそれぞれ shi (sh sh') と chi (ch ch') の綴りを使っている。sh、sh'、ch、ch' は母音 i の無声化または脱落を反映する綴りと考えられる。しかし、ス・ツにおいては母音 u が一切表記されていない。これをもって母音 u がいつも必ず無声化または脱落していたとは考えにく

い。しかも、有声子音のズの場合は母音の無声化や脱落が起こらないにもかかわらず、母音 u が表記されない。こうしたブラウンとヘボン（手稿・初版）の綴りはスなどの母音が [z] に近似する [ɹ] であることを物語っているのではない。

他の 19 世紀に成立した資料をいくつか見てみたい（表 4）。

【表 4】（括弧内は異表記）

	ス	ズ	ツ	ヅ	他のウ段音
メドハースト『英和・和英語彙』1830	soo(s')	zoo(z')	tsoo(ts')	dsoo(ds')	-oo
オールコット『日常日本語対話集』1863	sou(s)	zou	tzou(tz')	dzou(dz dz')	-ou
ロニー『日本語教程入門』1872	su(sũ)	zu(zũ)	tsu(tsũ)	dzu(dzũ)	-u
ジャイルズ『華英辞書』1892 ²²	sz(su)	dz	tsz	dz	-u

まず、メドハーストの音節表には濁音ズ・ヅが zoo、dsoo とされているが、本文には z'、ds' と書かれることも多い。これに対して、ジ、チの綴りは zi、dsi に一定しており²³、母音が省略されない。オールコットとジャイルズの綴りも同様であり、ブラウンの著書と共通する。

『英和・和英語彙』：ノコラズ nokoraz'、センズ senz'、ミヅ midz'、シタウヅ si-ta oodz'

『日常日本語対話集』：マヅ madz、オメヅラシク omedz'rachic

『華英辞書』：酢 sz、頭 dz、術 dju tsz

また、ロニーは日本語の母音が時に短くなることを指摘し、そこで「字母 ts, dz, s, z の後に来る u は常に短くなる」²⁴と注釈している。「u は常に短くなる」という記述は上に述べたことと同様に、母音の無声化や脱落よりは母音 [ɹ] の反映であると理解したほうがよいであろう。

ただし、日本語教科書や辞書の編纂者達は宣教師、外交官などの知識人ばかりである。彼らは教材を編纂する際、仮名と音声表記の対応に規則性を求めていたと考えられる。それとは異なる資料と言え、いわゆるピジン日本語資料、Exercises in the Yokohama Dialect 1879 が挙げられる。この資料においてはローマ字綴りは一定せず、ただ外国人に分かりやすく、すぐ使えるという目的で作られたようである。例えば、Watarkshee (ワタクシ)、Oh my (オマエ)、Ohio (オハヨウ) のようなものがあがっている。そこでのス・ズ・ツのローマ字綴りを見てみれば

Arimas (アリマs)、Skoshe (スコシ)、Meeds (ミz)、Moods cashey (ムzカシイ)、Stoats (ヒトz)、Coots (クz)、Kinsatz (キンサz)

のように、例外なくすべて s, z で終わっている。それに対してシ、ジ、チの綴りはまちまちであり、母音 [ɹ] を表わすものと表わさないものがある。

Watarkshee (ワタクシ)、Watarkoosh' (ワタクシ)、Shiroy (シロイ)、Kashy (カシ)、Hanash (ハナシ)、Cadgee (カジ)、Onadge (オナジ)、Coachy (コッチ)

以上の諸資料は西洋人が実際のス・ズ・ツの発音を写したものと見なすことができる。しかし、『和英語林集成』再版以降のもののように、su、zu、tsu、dzu の綴り方を採った

のは規範意識に基づき、五十音図のような整然とした体系を求めたことによると考えられる。

一方、近代中国語における母音[ɿ]については、それを書き表わすローマ字綴りは多様であったが²⁵、その中で z を用いるものも少なくない。そのほかに 20 世紀前後に作られた表音文字、王照の「官話字母」や民国政府の「注音字母」では、音節[tsɿ]、[ts'ɿ]、[sɿ]を子音字母 ([ts][ts'][s]) だけで表し、母音字母は使用していない²⁶ (表 5)。こうした綴りや字母は、母音[ɿ]と子音[z][s]とが近似していることを物語っており、ここに日本語のローマ字綴りと同様な特徴が見られるのである。

【表 5】中国語の[ɿ]の表記例

19 世紀	資料	母音[ɿ]の字例とその表記
官話	S.W.Williams1874	資 tsz'、此 ts'z'、思 sz'
	官話字母 1900／注音字母 1918	資マ／ㄐ、此干／ㄑ、思ㄙ／ㄌ
粵方言	S.W.Williams1842	資 tsz'、此 ts'z'、思 sz'
	J.D.Ball1888	資 tsz、此 ts'z、思 sz
呉方言	J.Edkins1868 (上海)	辞 dzz、資 tsz、思 sz、時 zz
	H.V.V.Rankin1868 (寧波)	辞 dz、資 ts、思 s、時 z

5.2. 中国語関係資料

次に日本語のス・ズ・ツの母音が中国人の耳にどう聞こえたかについて、それを反映する資料を考察する。

明治期の中国人向けの日本語教科書を見ると、入門段階で仮名の発音を北京語音で当てて教授するものの多いことが分かる。例えば『東語初階』1902、『東語真伝』1903、『東語完璧』1906、『日語新辞林』1906、『東語自得指掌』1907、『東語会話大全』1907などがそれである。ここでは、ウ段音に多く母音[u]の漢字を用いているが、ス・ズ・ツについては母音[ɿ]の漢字を当てることが多い。これはス・ズ・ツの母音が常に他のウ段音と異なり、母音[ɿ]で現れることを意味する。具体例は次の通り (ズ、ヅを母音[u]の漢字で当てることもあるが、数は少ない。それを下線で示す)。

[u]： ウ (屋)、ク (古)、ヌ (奴)、フ (夫)、ム (母)、ル (嚙)、ズ (租)、ヅ (柱)
 [ɿ](ㄙ)： ス (斯司)、ズ・ヅ (茲治)、ツ (資子次此)、

なお、同時期日本人向けの中国語教科書でも、母音[ɿ]を持つ漢字の発音は日本語のス・ズ・ツで表わしている。『初歩支那語独修書』1905、『北京官話万物声音』1906、『支那破音辞典』1932 がそれである。例えば、『初歩支那語独修書』では母音[u]を持つ「蘇」をスウ、「祖」をツーウで表わし、母音[ɿ]の「私」をス、「子」をツーで表わしている。

一方、日本語を写音した呉方言の中国資料にも同様な傾向が見られる (斜体は母音[u])。

『吾妻鏡補』1815：ス (思斯)、ズ (士)、ツ (之子)
 『東語入門』1895：ス (司)、ズ (是)、ツ (之)、ツウ (左[-u])、ヅ (特是) 反切²⁷

6. [ɲ]の成立とツ・ヅの破擦音化

次に[ɲ]の成立とツ・ヅの破擦音化との関係を考えてみる。ただし、その関係を明確に反映する資料はほとんどない。朝鮮資料『倭語類解』、『改修捷解新語』では、ス・ツを非円唇の字母ㅍ[su], ㅈ[tɕu]で写音したが、これらはツ・ヅの破擦音化が起こった後17世紀に成立したため、これによって破擦音化との関係を論じることは困難である（高山知明2009）。一方、鎌倉期に伝来した唐音では「椅子」、「様子」、「火榻子」のように母音[ɲ]の漢字をス、ツで写すことが多く、ス・ツの母音が[ɲ]であったことを反映しているが、そこには当時のサ行子音の問題や、唐音の地域、時期などの問題もある。

タ・ダ行の破擦音化が観察される資料としては、『日本国考略』と『日本館訳語』のあることが大友1962、1963によって広く知られている。ここでは両書と、さらにそれより一時期前の『書史会要』におけるス・ズ・ツ・ヅの音注漢字を改めて考察する。これらを整理した結果を表6に示す。

【表6】²⁸（漢字音注の右下に施された数字は使用頻度を示す）

	書史会要	日本考略（一部）	日本館訳語 ²⁹
ス	疎[su]	宿 ₄ 速 ₂ [soʔ]、思 ₃ [sɲ]、数 ₁ [su]	司 ₂₀ 寺 ₁ [sɲ]、索 ₂ 唆 ₂ [suo]、宿 ₁ [su]、孫 ₃ [suən]
ズ	徂[dzu]	助 ₃ [dzu]、子 ₁ [tsɲ]	司 ₇ [sɲ]
ツ	土[t'u]	子 ₁₃ [tsɲ]、多 ₄ [to]、禿 ₂ [t'əʔ] ³⁰ 、祖 ₁ [tsu]	都 ₁₃ 読 ₄ [tu]、足 ₃ 祖 ₁ [tsu]、ツウ度 ₁ [tu]
ヅ	屠[du]	東 ₃ [doŋ]、藤 ₁ [dəŋ]、凸 ₁ [dəʔ]、助 ₁ [dzu]	足 ₉ [tsu]、都 ₆ [tu]

表6から、母音[ɲ]とツ・ヅの破擦音化を反映しているのは『日本国考略』と『日本館訳語』であることが分かる（表6波線）³¹。ツ・ヅが破擦音化する16世紀前半において、ス・ズの母音は[ɲ]であったと考えられるので、ツ・ヅにも破擦音化する前に[tɲ][dɲ]という異音が発生していたと推測する。ただし呉方言、北方方言ともに音節[tɲ]と[dɲ]が欠如しており、仮に日本語に音節[tɲ]と[dɲ]があったとしても、それを直接に写すことは困難であったと思われる。しかし、『日本国考略』には母音[ə]を用いる例が見られる（表6下線）。「都」[tu]、「図」[du]のような音節でなく、「禿」[t'əʔ]、「藤」[dəŋ]、「凸」[dəʔ]を用いたのは、寧波の人にとって[ɲ]は[ə]に近似する音に聞こえたからであろう。

そうであるとすれば、異音[ɲ]はツ・ヅの破擦音化の要因（先行条件）であったと考えられる。16世紀前半、音節ツ・ヅには子音[t][d]の順行同化によって、母音[u]に異音[ɲ]が発生し、その調音位置が子音と一致するようになった。このような状況の下、[t][d]は[ɲ]に渡る際、破裂の呼気で舌尖と歯茎の間に渡りの摩擦音が起こり、ついに摩擦音[s][z]が添加されるようになった。さらに音変化が進むと、母音の無声化また脱落に至るのである³²（表7参照）。

【表7】

[i]による[ç][z]の添加（>無声化/脱落）	[ɲ]による[s][z]の添加（>無声化/脱落）
[ti][di] > [tçi][dçi] (> [tçi][dçi]/[tç̥][dç̥])	[tu][du] > [tɲ][dɲ] > [tsɲ][dzɲ] (> [ts̺ɲ][dz̺ɲ]/[ts̺̥][dz̺̥])

表7の子音の破擦音化と母音の無声化を相関的に見れば、ともに母音の果たす弁別的機能の子音に移そうとすることと見なすことができる。継続の不可能である破裂音[t][d]の場合は、継続音である摩擦音[c][z][s][z]の添加によって、母音の弁別的機能の転移を遂げたということである。しかし、この転移は破裂音以外の子音には起こらない。同じ舌尖調音であるヌ、ルの子音[n][r]には、破裂音ほど呼気（口腔内圧）が強くないため、舌を下ろす瞬間に渡り摩擦音の添加はなされないのである³³。

7. まとめ

この節では、カールグレンをはじめとする諸先学の成果を踏まえ、現代日本語におけるス・ズ・ツの母音が異音として舌尖母音[ɲ]をもつことを改めて確認した。また文献資料を通し、異音[ɲ]が中国語のそれに近似すること、そしてその発生は16世紀前半にまで遡れることを明らかにした。ただし、[ɲ]はもっぱら中国語学の音声記号として用いられ、欧米の諸言語であまり観察されないためか、IPAとしてはまだ登録されておらず、日本語学においてもこの記号を認めた先行研究は極めて少ない。

しかし、日本語の狭母音の無声化や脱落は、子音と母音との調音位置の一致、すなわち子音と母音の舌構えの近似という条件下に発生する現象と考えることができる。そう考えるには異音[ɲ]の介在を認める必要がある。さらに日本語音韻史におけるツ・ヅの破擦音化の問題において、異音[ɲ]の発生はその要因として考えられるものである。

[ɲ]という記号の使用については、音韻史や音声学における問題の処理や解釈に有効なだけでなく、外国人向けの日本語教育においても必要であると思われる。もちろん、従来の[ɯ]を使用することでス・ズ・ツはウ段の印象が強く感じられるが、[ɯ]より前寄りの狭中舌母音という印象も間違えて伝わるのである。一般的にシ、チ、キ、ヒなどの音価を[ci] ([ʃi])、[tci] ([tʃi])、[ki]、[çi]と書くのは、日本語の発音を正確に理解するためのことであろう。それと同様、ス・ズ・ツの母音が中舌でなく、舌尖での調音という認識を伝えるために、[ɲ]という記号の使用を検討すべきである。

【注】

¹ 高山知明 2009、高山倫明 2012 などに詳しい。

² 服部四郎 1951:162/1984:131-132、福盛貴弘 2010:204-205。

³ 佐久間鼎 1929:92。

⁴ 高山知明 2009:212。

⁵ Pullum, G. K. and Ladusaw, W. A. 2003 には収録されている。

⁶ カールグレンは中国の諸方言や日本語、ベトナム語など、33種の言語に対して調査を行った。その中の9種は19世紀以来の資料に基づいて音声を再構したものであるが、日本語を含む他の24種はそれぞれの母語話者、つまりインフォーマントから直接に発音を聴取したという。ここの汕頭は前者であるため、「恐らく」と示された。訳文の括弧は

筆者による。

⁷ トーマス・ウェード『語言自邇集』1867のローマ字表記。

⁸ ジャイルズの『華英辞書』(表4参照)における日本語漢字音の表記は、パーカーらが担当した。

⁹ 原文:225には「スのような音節」とあるが、ス、ズ、ツのことを指すのであろう。

¹⁰ イェスペルセンの非字母的記号に関しては、服部1951:77、また『言語学大辞典 第6巻』:1103に詳しい。

¹¹ 上村1992に対して、岡田1993:90-91は「A領域の母音は舌の最高点は母音四辺形の前方向に出るが聴覚的には後方に退くと解される。つまり舌をいかに操っても聴覚的に[e]などと表記するに値する母音は得られないということのようである」と指摘した。しかし、聴覚的にどう聞こえるかは話者の意識にもよる。舌尖母音が日本人には/u/と聞こえ、欧米の人には/z/のように聞こえる。中国の西安方言では母音[ɿ]と[ʉ]をその母音体系に持つので、[ɿ]と[ʉ]に対して区別することは当然である。アメリカ英語の[ɹ] (dinner)のようなものでは、この調音が舌尖を硬口蓋に向かって持ち上げることによって、音色は[a]と異なってくる。表記に基づく発音(-r)なので、舌尖の関与が認められる。ス、ズ、ツの母音も舌尖の関与があれば、舌尖の関与がない中舌母音との音色の違いはもちろんあるはずである。しかし、ウ段音であるという意識があるため気付かれないのである。

ところで、最近[ɿ]が音響分析により「母音位置図」(F1とF2からなるグラフ)において[i]と[u]の間にあると観察されている(北京語:王萍他2010、琉球方言:大野眞男他2012)。しかし、王2010は「母音位置図」が舌尖の位置を反映しないと指摘した。そもそも音響分析による「母音位置図」は、母音の調音位置とは厳密に対応していない。それを証拠として調音位置を解釈することはできない。

¹² ただし、宮古方言のこの母音には常に舌尖の摩擦音[s][z]が伴うため、諸先行研究の中では、成節的子音と見なすか、中舌母音あるいは舌尖母音と見なすかで意見が分かれ、記号[ɿ]を使用するものは少ない(かりまたしげひさ1986に詳しい)。最近ではこの母音を奥舌面及び舌端の二か所による二重調音と推測した青井隼人2012もある。しかし、その母音が常に摩擦音[s][z]を伴うという事情から、「中舌母音」と位置付けることは不適切であると思われる。なぜならば、「中舌母音」は摩擦音[s][z]と共起する必然性がないからである。

¹³ 国際音声学会1999、張群顕1992。

¹⁴ 趙元任等1940(カールグレン『中国音韻学研究』「音標対照及説明」、趙日新2003、韓沛玲2009)。

¹⁵ IPAに唇歯接近音[v]もあるが、唇歯音は舌の調音がないために、ここでは論じない。

¹⁶ フ、ピ、プは子音が唇音であるため、ここでは記述しないが、実際の子音の調音にはすでに舌の関与が見られる(上村、高田1990)。フ、ピ、プの子音が唇と舌による二重調音であると考えてもよい。

¹⁷ 竹林滋1996:102。

¹⁸ ス・ツの母音が無声化するのではなく、直接に脱落するのではないかという疑問も

出てくるが、しかし、そうすれば、なぜサ・セ・ソの母音に脱落することが少ないかという問題を説明することができなくなる。

¹⁹ 木村一・鈴木進 2013 参照。

²⁰ 杉本つとむ 1999、木村・鈴木 2013 参照。

²¹ 宮島達夫 1961:42、加藤・倉島 1998:434-436。

²² 漢字の見出しに中国語方言音及び日本語漢字音のローマ字綴りが表記されている。ローマ字綴りの部分は E.H.Parker と H.B.M.Consul が担当したという。前述、カールグレンが指摘したパーカー (E.H.Parker) の表記である。

²³ ギを zi と写すこともある (金子弘 1999)。

²⁴ 原文：38 「u est généralement bref à la suite des lettres **ts, dz, s et z.**」。

²⁵ カールグレン 1915-26 原著：297、訳本：199 に詳しい。

²⁶ 例えば、注音字母では「租」[tsu]はㄗㄨである。ㄗはほとんどの場合、子音[ts]だけを表わす。

²⁷ 呉方言では「特」は濁音[d]、「是」は母音[ɿ]である。「特是」という反切はヅが[dɿ]という発音であることを表わしている。しかし、資料の時代から考えて破擦音化しない[dɿ]であるというのは不審である。

²⁸ 前述のように、三書はそれぞれ所拠方言が異なり、『書史会要』は呉方言 (松江)、『日本館訳語』は北方方言、『日本国考略』呉方言 (寧波) である。『書史会要』、『日本館訳語』の再構音はそれぞれ魯国堯 1988、葉宝奎 2001 を参考にした。

²⁹ 『日本館訳語』の音注漢字、及び使用頻度は大友 1963:313-317 による。

³⁰ 徐 1983 では下線で示された音節の母音を[e]とした。しかし、『音節』では「入声と ng の前に来る e は、短くなり、ä、o に似ている」との記述があり、[e]より奥寄りの母音と思われる。現代寧波方言ではこれらの音節の母音は[ə]であるので、ここではそれを[ə]と直した。

³¹ 『書史会要』が記録した日本語は「伊呂波」歌のみである。母音[ɿ]が反映されていないが、それだけで実際に異音[ɿ]が存在しなかったとは言えない。

³² 京都と東京における無声化の頻度の差や、また京都の母音 u が関東に比べ円唇性が強いことが言われている (佐久間 1929、杉藤美代子 1969 など)。この節で考察した資料にも恐らく地域の問題があると思われる。例えば『日本国考略』に反映されたアクセントが京阪式アクセントである可能性が木津祐子 1993 に指摘されている (第 5 節で述べる)。ただし狭母音が無声化しやすいというのは、程度の差こそあれ京都と東京ともに共通することである。また、京都の母音 u が比較的円唇であるとしても、IPA の基本母音[u]に等しいものであるわけではなく、ス・ズ・ツの場合にさらに緩むことは東京と同様であると思われる。筆者の観察によれば、京都のス・ズ・ツの母音は、非円唇の[ɿ]に対して円唇の[ɥ]であると見ることができる。そう考えれば、舌尖母音[ɥ]がツ・ヅの破擦音化のきっかけとなることは非円唇の[ɿ]と同じように解釈することができる。

³³ なお、ヌ>ン (例：ナサヌ>ナサン) のような母音の脱落は、継続音である[n]が母音の弁別的機能を担うことと見なすこともできる。しかし、ヌとンの混乱を避けるため、

音韻変化にまでは至らず、個別的变化に留まったと考えられる。またルは、19世紀の西洋資料では語末の場合よく-rのみで写されていることも興味深い。例えばメドハースト 1830には「ノル」nor'、「モレル」morer'（語中の場合もある。例えば「クルマ」Kfoor'-ma）、オールコック 1863には「ナル」nar'、「ソロウタル」sorōtar'などの例が見られる。

第4節 オ段長音の開合の音価と統合

1. はじめに

室町末期においてオ段長音の開合の別があることはキリシタン資料、謡曲伝書、及び仮名遣書などにより認められる。その統合過程は橋本進吉 1928 によって開音 : au > ao > ɔ : > ɔ :、合音 : ou > oo > ɔ : と解釈されている。しかし、キリシタン資料のローマ字表記が表記である以上は、一定の写音法則に従ったとも考えられ、実際の音価との間には距離があると思われる。謡曲伝書、仮名遣書は記述による音声描写で、それに対する解釈も先学の間で意見が分かれている。

明代中国資料の中には『日本国考略』など、所拠言語が呉方言である資料がある。呉方言、例えば寧波方言は ɔ と o を持つ音韻体系を有し、さらに 19 世紀以前には ao も存在していた。こうした ɔ、o、ao の音韻対立をもつ言語の資料は、日本語の開合を分析するうえに実に貴重である。この節では中国資料を通して、アウ・オウなどの連母音が長音化する順序や、いわゆるオ段長音の開合の別、その音価及び統合の過程を考察する。

2. 先行研究

周知の通り、ロドリゲス『日本大文典』、イエズス会『日葡辞書』などのキリシタン資料ではオ段長音のなかで、アウ・アオなどの連母音に由来するものを ɔ、オオ・オウなどの連母音に由来するものを ô と表記している。仮名遣書ではそれらを「ひろがる」「すばる」と呼び、それぞれいわゆる開音と合音とに対応する。

音変化の過程については、開音が au > ao > ɔ :、合音が ou > oo > ɔ : という変化を経て、それから開音と合音がさらに一つの ɔ : に統合した、という橋本説が現在ほぼ通説になっている。

しかし、これに反対する意見もある。川上夔 1980 では「その前もあとも五母音で安定していた日本語がその一時期だけ六母音であったとは、ほとんど考えられないことである」と指摘し、開音の音価を [ɔ:]¹、合音の音価を [ou] とし、開合の別を長母音と二重母音との対立と推定した。

豊島正之 1984 は、謡曲伝書や仮名遣書を精査して、開合の音変化の過程を次のように推定した。

開音 : au → *ao² → oo = oo
合音 : ou = ou → oo

川上と豊島の指摘通り、通説となっている橋本説の音価の再構には疑問点がある。しかし、川上説と豊島説にも、以下に述べるように音声学的に説明しにくい点があり、更なる検討を要する。

一方、浜田敦 1955 は早くから中国資料の考察を行っているが、『日本国考略』などの呉方言資料について、所拠言語との対照研究には不十分なところもある。大友信一 1963 の研究は『日本国考略』『日本風土記』『日本一鑑』などの多くの資料にわたって展開されており、大きな成果を収めた。そこでは以下のように開合の混同の時期を推定している。

「お」段長音開合については、従来キリシタン資料を基礎として、「お」段長音開音と「お」段長音合音とは、殆んど混同していないという事であったが、必ずしも、この事を裏付ける結果が得られたわけではなく、逆に、『日本国考略』当時から、すなわち一五〇〇年頃から次第に混同の方向に向っていたのではないかと推測される。しかし、大むねは区別があり、キリシタン資料との差は、程度の差という事になる(大友 1963:708)

大友の研究も、橋本説に従いながら、中国資料における開合の混同そのものに着眼している点、従来の多くの研究と異なるものではない。

福島邦道 1993 では『日本国考略』の著者がオ段長音の開合について「十分な把握をしていなかった」、「厳密に δ と $\hat{\delta}$ をよく識別して、音訳漢字をえらんでいたかどうか疑わしい」(:253) と述べるように、中国資料に対して不信を示している。『日本国考略』の著者の母語に対して十分な把握をしていないために、このような不信を抱くことになったのであろう。 α 、 o 、 ao の三つの韻母を持つ寧波方言を母語とする『日本国考略』の著者は、開音と合音を意識的に識別する必要もなく、自然に聞き分けられたはずである。それにキリシタン資料や他の資料と異なり、『日本国考略』では一つひとつの音節に当たる音注漢字が一定していない。すなわち固定した写音法にとらわれず、聞いたままの日本語音を写している。『日本国考略』が写音資料として貴重なところは、まさにこの点にある。

3. 中国資料の考察

上に述べたように、オ段長音は開音が[α]、合音が[o]、そして合音の母音がオ段短音と同じであるとされている。開合の問題を解決するには、オ段短音が音韻体系にあることを前提として考えなければならない。以下では、中国資料に現れるオ段長音の開合音およびオ段短音の音注漢字を考察する。ここでは特に呉方言資料の『日本国考略』『日本図纂』『日本風土記』、及び北方方言の『日本館訳語』を使用する(同時期の中国資料には『日本一鑑』もあるが、固定した写音法に従ったものであり、開合音の混同を忠実に反映していないので、考察対象から外すことにした)。これらの中国資料に見られる開合に関わる語を、キリシタン資料と照らし合わせ、先行研究による解説を検討する。さらに韻書や寧波西洋人資料などの中国側の資料で再構された呉方言音、北方方言音に基づいて、開音と合音の音価を推定する。

アウ連母音やオウ連母音が長音化し、いわゆるオ段長音になってから、開音と合音というものがはじめて成立する。連母音が長音化を起こす前には、開音でも合音でもない。もちろん、開音あるいは合音と呼ぶべきでもない。ただし、以下の考察からも分かるように、中国資料が反映した連母音の中には、すでに長音化しているものと、していないものがある。それゆえ、ここでは論述の便宜上、長音化していないものも開音または合音と呼ぶことにする。

3.1. 『日本国考略』

『日本国考略』の音注漢字を中古音の分類によって下にまとめる(音価は19世紀の寧波方言再構音、数字は用例数、二重下線は混同らしいもの、下線は誤刻、またはその他の

理由があるかと疑わせるものを示す)。

《開音》

- 效撰 [ao]報 1 (バウ) / 老 1 (ラウ) / 倒 1 (タウ)
[iao]刁 1 吊 1 (チャウ) / 効 1 耀 1 (ヤウ)
宕撰 [ɔŋ]剛 1 (カウ)
[uɔŋ]黃 3 (アウ) / 王 1 (ワウ)
[ioŋ]常 1 (シャウ)
假撰 [uɔ]花 1 (ハウ)
[yɔ]下 1 (ヤウ)
果撰 [o]和 1 賀 1 (アウ) / 哥 4 (カウ) / 多 1 (タウ) / 羅 1 (ラウ)
通撰 [oŋ]松 1 (サウ)

《合音》《オ段短音》

- 果撰 [o]阿 13 何 12 河 5 倭 4 (オ) / 何 1 倭 1 (オオ) / 哥 8 个 7 科 3 課 1 (コ)
/ 哥 3 柯 1 科 1 个 1 (ゴ) / 哥 1 (コウ) / 梭 3 鎖 1 (ソ) / 梭 1 (ソウ) /
多 15 惰 1 (ト) / 陀 4 (ド) / 大 1 (ドウ) ³ / 多 3 (トオ) 那 3 糯 2 奈 1
(ノ) / 坡 1 (ホ) / 婆 1 (ボ) / 羅 2 (ロ)
遇撰 [u]烏 2 (オ) / 烏 3 (オオ) / 古 2 姑 1 (コ) / 姑 1 (ゴ) / 所 1 踈 1 蘇 1
(ソ) / 奴 4 (ノ) / 奴 1 (ノウ) / 暮 1 (モ) / 路 2 盧 1 (ロ)
通撰 [oŋ]翁 1 (オオ) / 空 3 公 1 (コ)
[oʔ]木 4 (モ) / 祿 2 (ロ)
流撰 [iu]由 1 (ヨウ)
山撰 [un]漫 3 滿 1 (モ)
[un]寬 1 (コ)
[aʔ]達 1 (ト) / 達 1 (ド) / 發 1 (ホ)
[oʔ]掇 2 (ト)
[əʔ]末 4 (モ)
[yiʔ]月 1 (ヨ)
效撰 [iao]妙 1 (ニョウ) / 姚 1 (ヨウ) / 邀 1 (ヨウ)
假撰 [ɔ]沙 1 (ソ) / 拏 1 (ノ) / 麻 1 (モ)
江撰・宕撰 [oŋ]昂 1 (ノ)
[ioʔ]学 1 (ヨッ)

3.1.1. 效撰・宕撰の音注漢字

效撰、宕撰の字は合音より開音に用いられている。寧波西洋人資料により、效撰、宕撰の韻母の音価はそれぞれ[ao]、[ɔŋ]などと再構することができる。『日本国考略』では效撰、宕撰の一等字 (i 介音のないもの) は開音の直音に、三四等字 (i 介音のあるもの) は開拗長音に当てられている。現代中国方言においては效撰は二重母音で現れることが多く、宕撰は多く主母音が後舌広母音で現れる。例えば、以下の通り。

效撰：「報」北方方言[pau]（北京）、粵方言[pou]（広州）、客家方言[pau]（梅県）

宕撰：「黄」北方方言[xuan]（北京）、粵方言[wɔŋ]（広州）、客家方言[fɔŋ]（梅県）

一方、開合の別がすでに失われた 19 世紀には、呉江（現在蘇州市）の人である翁広平が撰した『吾妻鏡補』1815 や玉燕の『東語入門』1884 という呉方言による中国資料がある。そこでは、オ段長音を果撰と假撰の字のみで表わし、效撰の字（拗音の音注を除く）を使わない点において『日本国考略』などの 16 世紀の資料と異なる。考えられる理由は、效撰が二重母音であったから、すでに合音と統合した開合音に相応しくないものとなっていたことが挙げられる。これは、呉方言の效撰が 19 世紀以前に二重母音であったことの根拠ともなる。

こうして 16 世紀の寧波方言における效撰、宕撰の主母音はそれぞれ二重母音と広母音であり、19 世紀のそれとさほどの相違はないと考えられる。かえって、效撰と宕撰の字が開音に当てられていたことはその傍証にもなる。従って、效撰と宕撰の字は開音に相応しい音注であると言えるのである。

效撰と宕撰の両方の字が当てられていることから、開音の音価は[au]なのか、[ɔ]なのかという問題が出てくる。二重母音[ao]である效撰の字が用いられることは開音が[au]であったことを思わせるが⁴、単母音[ɔ]を持つ宕撰の字の使用は必ずしも開音が[ɔ]であったことの根拠にはならない。例えば、

232 盒子 剛白哥（カウバコ）、241 扇 黄旗（アウギ）

などの例では「剛」「黄」のいずれも濁音の前に置かれている。それは濁音の前にある入り渡り鼻音を写すために用いられたのである。一方、キリシタン資料では、濁音の前の ɔ、ô と on との間に交替現象があると報告されている（森田武 1993:186-187）。濁音の前の連母音が長音化しやすかった可能性も否定できない。

jongue（^{ジャウ}上下 f. 245/11）、vonzon（^{ワウ}王孫 f. 259/1）

3.1.2. 拗音優先

直長音の開合と並行して、拗長音の開音が[iau]であったとすれば、合音は[iou]であったと考えるのが自然である。しかし效撰三等の字[iao]は開音のみならず、合音にも用いられている。これについて大友 1963 は「開合音よりは（直）拗音に留意した結果の音注と考えるべき」と指摘した。開合の別より直拗の違いの方が中国人にとって顕著な音声特徴であったということである。そのため、拗長音の音注に[i]介音を持つ效撰三等の字が優先的に用いられたというのである。ところが、寧波方言では合音に相応しい音節[iou]がなく、合音の拗音を写すのに效撰三等の字[iao]、および流撰三等の字[iu]を使わざるを得なかったのである。このことは 19 世紀の寧波方言の音韻体系からも証明できる。19 世紀の寧波方言において、介音[i]を持つ音節[iao]（效撰）、[iu]（流撰）、[ioʔ]（江宕撰入声）はあるが、[iou]は存在しない。それゆえ、效撰三等の字が開合の両方に使用されるのは寧波方言側の事情によることであり、日本語側の開合の混同とは無関係である。

【表 1】

寧波方言		16c 前半の日本語
效撰[iao]	→ ↘	開音[iau]
×[iou]		合音[iou]
流撰[iu]	↗	

3.1.3. サ行とワ行の子音優先

53 皇帝 天王家里 (テンワウ△△)

55 百姓 別姑堂 (ヒャクシャウ)

86 和尚 烏堂 (オシャウ)

上に挙げた 55 と 86 においては、当該音節の後に濁音が現われないにも関わらず宕撰の字を使っている。「常」の使用はおそらくサ行子音に配慮した結果であると思われる。以前に述べたことがあるが、サ行音のシ、シャ、シュ、ショの子音は[ç] (または[ʃ]) であり、開音シャウは[çiau]である。しかし、19 世紀の寧波では、效撰に音節[siao]はあったが、[çiao]や[jiao]は存在しなかった。そのため、宕撰の「常」[ʒiɔŋ]を代用した可能性がある。

53 の「王」はその後の文字が読めないという事情もあるが、寧波方言には效撰が音節[uao]を持たず、ワ行のワウ[wau]を写すために宕撰の[uoŋ]を代用した可能性も考えられる。

3.1.4. 假撰の音注漢字

250 「箒 花鶏 (ハウキ)」のハウを写すのに假撰二等合口の「花」を利用した理由については、前章ですでに検討したように、ハ行子音が両唇摩擦音[ɸ]であったということに求められ、両唇性の子音を写すということが優先された例と考えられる。

假撰匣母の「下」は 143 「快來 発下何耶哩 (ハヤウオヤレ)」という項目にある。浜田 1951、大友 1963 は「発下」をハヤウと解説しているが、「下」をヤウに読むことについては特に説明していない。そのことについて一言補足すると、寧波西洋人資料によれば、「下」は音節[ɸyɔ]であり、現代寧波方言においても[ɸio]または[ɸyo]⁶と読まれて、介音[y]の有無が文読と白読の違いになっている。16 世紀当時においても文読音と白読音が併存していたであろう。ほかに両読されている、同じ假撰二等の字としては、例えば「家」が挙げられる (趙 1928、高志佩他 1991)。

以上のことから、「下」はその文読音[ɸyɔ]によりヤウに当てられたということになる。二重母音[iao]の字、例えば「遙」を使用せずに、「下」を使用したということは、「早う」が[iɔ]であったことを反映していると考えられる。

【表 2】

假撰二等	文読	白読
下	[ɸyɔ]	[ɸio]
家	[tɕyɔ] ⁶	[kɔ]

3.1.5. 果撰の音注漢字

寧波西洋人資料において果撰の韻母は[o]であった。『日本国考略』では合音やオ段短音に当てられる字のうち、最も多いもので、合音に相応しい音注漢字と言える。合音の音価

は長音[o:]であるか連母音[ou]であるかという問題については、当時の寧波方言に[ou]という音節がなかったと推測されるため、どちらとも簡単に決めることはできない。しかし果撰の字は短音のオにもっとも多く使われており、また『日本風土記』では[ou]を写す際に二字音注を使うことがあるから、ここに一字音注で合音を写しているということは、合音が長音であったと考えた方が合理的である。それについては以下に述べるところがある。

混同については次の項に述べることにするが、以下の4例は混同例から除外すべきかもしれない。

- 264 香 宣哥 (センカウ)
- 265 沉香 沉哥 (ゼンカウ)
- 266 麝香 射哥 (ジャカウ)
- 267 木香 木哥 (モッカウ)

通し番号が連なっていることから分かるように、この4項目は並列されているものである。類推で「香」カウを「哥」であらわすように統一した可能性が考えられるが、合音に使うべき「哥」をカウに用いたことは開合が混同された可能性を示しているかと思われる。

『日葡辞書』では「香」はすべて開音 cōと表記されている。cōと表記するのは1例(香百芷 Cōbiacuxi)のみであり、誤植の可能性を排除できない。

他の中国資料に照らし合わせると、『日本館訳語』では「香(カウ)」の音注に「稿」を用いている(例えば「麝香 世牙稿(ジャカウ)」。所拠方言が北方方言という点で写音体系は『日本国考略』と異なるが、下にも述べるように、「稿」の音価はおそらく[kau]であったろうから、連母音[au]を写したものと思われる。

一方、『日本国考略』を参考にして、その一部の寄語を転載した『日本風土記』では、この4項目をすべて「香料」という類に収めている。「松香」「丁香」などの新項目を増補してはいるものの、これら4項目の順序は『日本国考略』と同じである。そこにおいてカウの音注漢字が直され、「哥」から「高」になっているところに注目したい。

- 香 高 (カウ)
- 沉香 沉高 (ゼンカウ)
- 麝香 射高 (ジャカウ)
- 木香 木高 (モッカウ)

同じ呉方言による写音資料のため、効撰の「高」は二重母音[ao]であったと考えてよいであろう。「高」はカウ[kau]に適切な音注漢字である。面白いのは字形上、「高」と「哥」とはかなり近似しているものであり、「哥」は「高」の誤刻であった可能性がある⁷。

3.1.6. 開合の混同

ここでは混同と思われるものについて検討する。まず開音が期待されるところに合音の音注漢字が使われる例を挙げる。

- 174 老実説話 買多溢多 (マッタウ△△)
- 177 買 加和 (カワウ)
- 187 換 皆賀 (カワウ)

192 咲 歪羅 (ワラウ・ワラウ)

355 不是 松田乃係 (サウデナイ)

174 の「全う (マッタウ)」は『日葡辞書』でも「Mattô マットウ (全う)」のように合音としており、偶然の一致ではなかろう。他の4項目も漢語でなく、和語、とくに動詞の意志形であり、しかも使用頻度の高い語であるところに共通点がある。これらは早い段階に合音になった可能性があると考えられる。

次は、短音[o]が期待される場所に[c]の漢字を用いた例である。

290 醬 弥沙 (ミソ)

253 鋸 撃剛撃利 (ノコギリ)

271 衣服 乞麻俚 (キモ△)

277 手巾 達昂⁸个 (タノゴ□)

3.1.7. まとめ

『日本国考略』が反映した開音の多くは效撰、合音(短音)はもっぱら果撰の字を使う傾向が見られる。後接音節が濁音であることや、ハ行子音[ɸ]、サ行子音[ç]への配慮があるため、開音には宕撰や假撰の字も使われるが、最優先される音注ではない。従って開音の基本音価は[au]であったと推測される。ただし、開音には長音化したものや、合音に統合したものもある。[au][c][o]が共存する様相を呈している。合音とオ段短音では基本的に[o]であったが、短音は[c]の音注漢字で写されることもある。

このような状況から言えることは、アウ連母音、オウ連母音が長音化し、いわゆる開音[c:]と合音[o:]になってから、初めて統合が起こるというのではなく、アウ連母音の一部が長音化を起こしながら、同時に合音への統合も始まっていたということであろう。したがって[au]>[c:]>[o:]という橋本説に従うとしても、[c:]>[o:]という段階は短かく、[c:]と[o:]の対立が不安定であったことが推測される。

合音に統合した開音の例からみると、使用頻度の高い和語や、動詞意志形のものであり、これらは漢語より早く統合を起こしたのではないかと思われる。

3.2. 『日本図纂』『日本風土記』

この項では同じく呉方言の資料、『日本図纂』と『日本風土記』を調べる。『日本図纂』では記録された日本語の大半が『日本国考略』から転載したものである。『日本風土記』では語彙を大量に増補したが、『日本国考略』と『日本図纂』から転載したものもある。しかし、寧波方言のように/o/、/ɔ/、/ao/の音韻対立を持つ方言は呉方言の全域においても広く見られる。『日本図纂』と『日本風土記』の所拠言語が呉方言であれば、寧波方言との間にさほどの相違はないと想定してよいであろう。しかも、以下の考察により、両書の音注漢字の使用特徴が『日本国考略』に近いことも分かったので、ここではとりあえず両書の音注漢字を寧波方言の音価で示すことにする。

3.2.1. 『日本図纂』(大友 1963 : 367-383 参照)

《開音》

效撰 [ao]島 2 (タウ) / 飄 1 (ヒャウ)

假撰 [uɔ]話 1 (アウ) / 花 1 (ハウ) / 話 1 (アオ)
 宕撰 [ɔŋ]康 1 (カウ)
 [uɔŋ]王 1 (ワウ)
 果撰 [o]哥 2 (ガウ) / 那 1 (ナオ)

《合音》《オ段短音》

果撰 [o]倭 1⁹阿 1 (オオ) / 多 1 (トオ) / 倭 2 (オオ) / 哥 1 (コオ) / 哥 1 (ゴオ)
 遇撰 [u]烏 1 (オオ)

3.2.2. 『日本風土記』(大友 1963 : 552-558、京大 1961 : 索引、参照)。

《開音》(-は二字音注を示す)

效撰 [ao]高 11 稿 1 (カウ) / 傲 1 (ガウ) / 曹 3 (ザウ) / 曹 1 (サオ) / 刀 3
 滔 2 倒 1 掏 1 (タウ) / 陶 1 (ダウ) / 毛 1 (マウ) / 袍 5¹⁰ (バウ)
 [iao]交 1 (キヤウ) / 少 3 小 2 紹 2 硝 1 交 1¹¹ (シャウ) / 饒 1 召 1 (ジャウ)
 / 兆 1 紹 1 (ヂャウ) / 飄 1 瓢 1 (ビャウ) / 苗 1 描 1 (ミャウ) / 要 1 (ヤウ)
 宕撰 [ɔŋ]唐 1 (タウ)
 [uɔŋ]黄 3 (アウ)
 梗撰 [iŋ]正 1 (シャウ)
 [uɔʔ]画 1 (ワウ)
 假撰 [uɔ]華-戸 1 瓦 1 (ワウ) / 化 1 (ハウ)
 咸撰 [aʔ]法-戸 1 (ハウ)
 山撰 [əʔ]活-戸 1 (ワウ)
 果撰 [o]婆 4 (バウ) / 火 1 河 1 (ハウ) / 俄 1 娥 1 (ガウ)

《合音》《オ段短音》¹²

果撰 [o]倭 1 (オ) / 和 32 何 15 河 6 (オ) / 和 6 (オオ) / 哥 16 箇 15 科 6 過 2
 課 1 果 1 柯 1 (コ) / 俄 14 我 5 娥 3 哦 2 蛾 3 娥 1 (ゴ) / 過 1 (コウ) / 過
 3 過-屋 1 (コオ) / 梭 1 (ソ) / 多 67 陀 2 (ト) / 陀 3 (ド) / 多-和 1 多 1
 (トウ) / 那 89 奈 1 糯 5 捺 2¹³ (ノ) / 那 1 (ノウ) / 貨 1 (ホ) / 婆 2 (ポ)
 / 貨 1 和 1 (ホウ) / 磨 1 (モ) / 羅 3 樂 1¹⁴ (ロ)
 [y]靴 1 (ヘウ)
 遇撰 [u]古 2 姑 1 酷 1 (コ) / 姑 1 吾 1 (ゴ) / 所 5¹⁵ 酥 2 疏 1 (ソ) / 所 2 (ゾ)
 / 都 1 (トウ) / 奴 6 (ノ) / 蒲 4 (ボウ) / 路 1 盧 1 (ロ) / 龍-戸 1 (ロウ)
 / 烏 1 (オオ)
 通撰 [oŋ]翁 6 (オ) / 空 4 公 2 弓 1 (コ) / 公 1 (ゴ) / 宿 6 聳 1 (ソ) / 從 1 (ゾ)
 / 東 2 (ト) / 同 1 (ドウ) / 蒙 1 (モ) / 隴 1 (ロ)
 [oʔ]屋 1 (オ) / 谷 10 (コ) / 秃 10 独 8 (ト) / 独 1 (ド) / 秃 1 (トウ)

	／伏 5 幅 1 (ホ)／撲 1 (ボ)／木 36 目 4 (モ)／欲 1 (ヨ)／六 15 縁 3 (ロ)
流撰	[œ]頭 2 (ト)／頭 2 (ド)
臻撰	[kwəʔ]骨 2 (コ) [fəʔ]勿 1 (ホ)
曾撰	[əŋ]能 2 (ノ)／默 1 (モ)
梗撰	[əʔ]得 1 (ト)／白 2 箔 1 (ボ) [hyoŋ]兄 1 (セウ)
山撰	[əʔ]末 3 (モ)
效撰	[ao]造 1 (ゾウ) [iao]紹 2 (ジョウ)／小 2 (セウ)／堯 1 (ネウ)／梟 1 (ヘウ)／搖 11 效 3 要 1 (ヨ)／搖 1 (ヨウ)
宕撰	[uəŋ]黃 1 (オ) [ioŋ]昂 1 (ノ) [ɔʔ]各 3 (コ)／ <u>莫 1 膜 1</u> (モ)
假撰	[ɔ]麻 1 (モ)

3.2.3. 開合の混同

3.2.3.1. 混同か、他の理由によるか

『日本風土記』の次の例は、開音が期待される場所に合音の漢字音注が現れるものである。ただし、読み方が複数あって、一概に混同と見なすことはできないものである。

①河 1：波菜 河蓮奈 (ハウレンナ) > (ホウレンナ)

『日本国語大辞典』(以下『日国』)では「菠薐草」にハウレンサウとホウレンサウの二つの読みがあがっている。後者には「ほうれん(菠薐)は唐宋音で、ネパールの地名」とされている。『漢字源』では「ホウレンは、唐宋音ホリンのなまったもの」とある。これを見る限りは「ハウ」という読みの由来にはまだ不明瞭なところがある。

そもそも漢字表記で「法蓮草」と書かれることもある。「法」は、その呉音ホフが仏教関係の語、漢音ハフが法律関係の語に用いられる傾向があったとされている。したがってここで合音に読まれたとしても、それは全く不思議なことではない。

②造 1：荷包 風造 (フウゾウ) > (フザウ?)

大友 1963、京大 1961 ともフウゾウと読む。『日国』では「ふぞう：沖縄で布製の女持タバコ入れ、南九州で財布、巾着(きんちやく)をいう」としている。また、方言によってフウゾウと読むところもあるが、音注漢字の「風」は後の濁音のために使われている。中国語の「荷包」の意味は財布や巾着で日本語と同じである。

フゾウはどういう語であったかが分からないので、ゾウが開音なのか、合音なのかは判断できない。「造」[ao]で当てられたことは開音の可能性もあるのではないと思われる。

3.2.3.2. 混同らしいもの

開音が期待される場所を合音で記録する箇所には次のものがある。

- 火 1: 確 火羅骨 (ハウラク) > (ホウロク)
 婆 4: 大舅 牛婆阿尼 (ニョウバウアニ)
 小舅 牛婆何多多 (ニョウバウオトト)
 大 (女近)¹⁶ 牛婆阿尼搖密 (ニョウバウアニヨメ)、
 小 (女近) 牛婆何多多搖密 (ニョウバウオトトヨメ)
 蛾 1: 涼鞋 恭蛾 (コンガウ)
 俄 1: 女鞋 公俄 (コンガウ)¹⁷

この7項目は合音に使うべき漢字「火」「婆」「俄」「蛾」が開音に当てられている。「確」の項目について大友はハウラク、京大 1961 はハウロクと読んでいる。『日国』では「炮烙・焙烙」の項目に「ハウラク」と「ハウロク」の二つの読みが記載されている。後者には「素焼の平たい土鍋」とある。項目の「確」はその意味に解されるであろう。音注漢字「羅」[lo]もラよりロに相応しい音であるから、「ハウロク」を写していると判断してよい。問題は音注漢字の「火」[ho]が開音ハウに使われるところであるが、『日葡辞書』では「Fôrocu (ホウロク) 土鍋」のように合音としており、『日本風土記』の写音と合致するので、合音に統合したように思われる。

「ニョウバウ」の「バウ」に「婆」を用いることについては、下に述べる『日本館訳語』の「妻 弱波 (ニョウバウ)」が、合音によく使う「波」[o]を「バウ」に用いるのと同じである。キリシタン資料の『天草版平家物語』でも、「女房」は nhōbō と nhōbō の両方に綴られている (亀井 1962)。以上の2例が他資料でも合音になるのは偶然なこととは考えにくく、早く合音になったのではないと思われる。

ところで、「婆」「俄」「蛾」の三字は濁音の音節であることに注意しなければならない。『日葡辞書』では on→ō・ô, ô・ô→on の交替が見られるという (森田武 1993)。例:

Bonuocu (茅屋) バウオク>ボンオク

濁音音節の開音は、ほかより早く合音に統合したことが考えられる。

3.3. まとめ

3.3.1. 共通特徴

以上、呉方言の資料『日本国考略』『日本図纂』『日本風土記』の写音において共通の特徴が見られた。

- 1、開音の多くは效撰の字[ao]で写されている。
- 2、中国語側の事情で效撰の字は拗長音の開音にも、拗長音の合音にも使われている。
- 3、假撰[o]の字で当てられる例もある (例:「瓦」[uo] (ワウ)) が、これは子音に配慮した音注で、必ずしも開音[o:]であったとは言えない。しかし、「下」[yo] (ヤウ)、「話」[uo] (アウ) の例もある。
- 4、濁音や鼻音が後接すると宕撰[ɔŋ]の字が使われる。
- 5、合音は果撰[o]をもっぱら使っている。短音も基本的に[o]であるが、假撰[o]、宕撰[ɔŋ]を使う幾つかの例もある。

3.3.2. 開音の音価

全体において開音は效撰の字[ao]で写されることが多いので、基本的に[au]であることが推測できる。假撰の字[o]で写される箇所は多くないけれども、そのあることは開音が[o:]で実現されていたことを物語っている。

また宕撰の字[ɔŋ]で写されるところがあるのは、後接する濁音の入り渡り鼻音や鼻音子音を表わすためである（例：粉 唐那紫之（タウノツチ）¹⁸）と考えられるが、濁音や鼻音の前の開音はより早く長音化した可能性もある。

3.3.3. 合音の音価

合音について、まず『日本風土記』では、『日本国考略』に見られない写音法、すなわち二字音注で写すところに注意したい。

開音：皇帝 華-戸（ワウ）¹⁹、道士 法-戸里（ハウリ）、硫黄 依活-戸（イハウ）
合音：氷 過屋里（コオリ）²⁰、十 多和（トヲ）、籠 龍戸（ロウ）²¹

開音に二字音注を用いるのはワ行、ハ行のところのみである。效撰[au]には[wau][fau]の音節が欠如しているためであろう。これは開音の音価が基本的に[au]であったことを意味する。

これに対して、合音の二字音注には特に条件を見出すことはできない。中に「十」は当時 2 音節であったことが知られており（例えば『日葡辞書』では「Touo トヲ（十）」とある）、二字音注で問題ない。この3例以外には同じ音環境においても果撰[o]の字によって一字で写すことが圧倒的に多い。『日本風土記』が写した合音にはすでに長音化したものが多かったのではないかと思われる。

開音が連母音で反映されることと合わせて考えると、合音の長音化（[ou]>[o:]）が開音の長音化（[au]>[a:]）より先に起こったことになる。これは川上、豊島の結論と相違するが、後に述べることにする。

3.3.4. 短音の音価

短音の音価が[o]であることは、果撰の字が圧倒的に多く用いられていることから分かる。ただし、以上の呉方言の資料において、例は多くないが、短音[o]に対して假撰[o]の字を用いたものがある。開合の混同の問題においてオ段短音は重要視されず、開音とも合音とも、これについて論じられることは多くなかった。しかし短音を切り離して開合の問題を考えることは決して適切ではない。

音声的な面から言えば、一般的に/o/と/ɔ/の対立がない言語における[o]は、対立のある言語の[o]より広めであり、厳密に表記すれば[o]である。そのために、呉方言を話す人の耳には、時に短音が広い[o]に聞こえるわけである。短音が厳密な[o]でなく、時に[o]としても聞かれるということは、当時のオ段長音に[o:]と[o:]の両形態があったとしても、弁別関係にあるとは言い難いであろう。

3.3.5. その他：ア行開音の頭子音

キリシタン資料ではア行開音を Vö(uö)、合音を Vô(uô)としている。室町時代のオが[wo]であったことは周知のことで、連母音オオ・オウが長音化し、[wo:]として実現していた

とするのは音声学的にも説明しやすいことである。しかし、ア行の場合、アウ・アオが長音化し、[wɔ:]として実現するのは何かの理由がなければ考えにくい。

呉方言の資料にはア行開音は多くないが、次の例では皆 u 介音のある音注漢字が選ばれている。

[uɔŋ] : 扇 黄旗 (アウギ)

[uɔ] : 陸奥 話収 (アウシュウ)、青方 話哈嗒 (アオカタ)

呉方言においては[uɔ]と[o], [uɔŋ]と[oŋ]の対立がある(ただし、果摂では[uo]がなく、[o]のみである)。以上の3例はア行開音に頭子音[w]が存在していたことを物語っている。まさにキリシタン資料の表記 Vö(uö)を裏付けることになる。

そうなると、ア行開音が[o:]ではなく[wɔ:]として実現する理由を考えなければならない。筆者は[o:]と[o:]とが弁別的な音素でなかったからこそ、そのようなことが起こったのではないかと考える。

もし開音が音素として成立していたとしたら、ア行開音は音声変化に基づく特徴を持ちながら、合音との区別を保つので、合音の音声に近づく必要などなかったはずである。しかも[w]はア行開音の長音化する中で余剰的なものである。それに対して、もし開合の対立がなかったとしたら、開音[o:]は合音[wo:]とともに一つの音素/o/と意識され、そこで合音の音声形態に引かれ、[wɔ:]のように発音されるようになることもあり得るのではないか。要するに、これは開合が弁別的対立ではなかったということの一つの根拠になりうる。

3.4. 『日本館訳語』

『日本館訳語』の所拠言語、すなわち北方方言は[o]を持たないので、呉方言の資料に比べて、開音の様相を明らかにするのは難しいが、大友 1963、福島 1993 の指摘の通り、『日本国考略』や『日本風土記』より高い比率で開合を書き分けているのがこの資料の特徴である。次には、大友 1963 と京大 1964 をもとに、開合の音注をまとめ、改めて検討したい。

《開音》²²

蕭豪韻 [au]稿 9 (カウ) / 刀 1 (タウ) / 毛 2 (マウ) / 老 3 (ラウ) / 敖 1 (ワウ)
/ 道 2 (ダウ) / 糟 2 (ザウ) / 酪 1 (ラウ) / 各 2 (カウ)²³
[ieu]約 1 (アウ) / 交 2 (キャウ) / 燒 2 (シャウ) / 照 2 (チャウ) / 苗 1
妙 1 (ミャウ) / 遼 1 少 1 蘓 1²⁴ (ジャウ) / 漂 2 (ビャウ)
家麻韻 [a]答 1 (タウ)²⁵
[ua]哇 1 (ワウ)
歌戈韻 [o]阿-翁 3 (アウ)
[uo]羅 1 (ラウ) / 倭 1 (ワウ) / 波 2 (バウ)

《合音》

歌戈韻 [o]驚 3 (ゴ) / 各 11 (コ) / 各 4 (ゴ)
[uo]倭 7 (オ) / 倭 10 (オオ) / 唆 10 (ソ) / 它 4 (ト) / 它 3 (トオ) /
那 91 (ノ) / 波 5 活 2 (ホ) 賀 1 / 活 1 (ホッ) / 羅 6 (ロ)

魚模韻	[u]吾 8 (オ) / 宿 1 司 1 孫 1 (ソ) / 著 1 (チョ) / 都 20 (ト) / 都 1 (トウ) / 都 3 (ド) / 谷 11 (コ) / 読 1 (ト) / 福 3 (ホ) / 木 9 (モ) / 木 1 (モッ) / 禄 2 (ロ)
東鐘韻	[uŋ]農 2 (ノ) [iuŋ]容 2 (ヨ)
真文韻	[uən]文 2 (オ) / 捫 3 門 1 (モ)
尤侯韻	[iəu]牛 1 (ノウ)
蕭豪韻	[au]刀 1 (ト) / 島 1 (ト) [ieu]交 1 (キョウ) / 交 1 (ケウ) / 少 2 (シヨ) / 燒 3 (セウ) / 漂 1 (ヘウ)
家麻韻	[a]納 1 (ノ)

『中原音韻』(元)、『韻略易通』(明)では、中古音の效撰が「蕭豪韻」という韻目に収められ、その音価は[au] (一二等)、[ieu] (三四等)と再構されている。現代北京語でも宵豪韻が[au] (一二等)と[iəu] (三四等)であるから、北方方言における蕭豪韻の音価は大きな変化を起こさず、二重母音の形態を維持していることが分かる。

『日本館訳語』でオ段開音に蕭豪韻の字が使用されるのは、それが二重母音[au]であったことを意味する。もし開音の長音化が生じていたならば、蕭豪韻より戈何韻 ([o][uo])の字を使うはずであろう。

一方、戈何韻の字はオ段短音及び合音に使われている。オ段短音と合音はそれぞれ[o]、[o:]とすべきである。ただし、魚模韻の字を短音に使用することも少なくない。この点は呉方言の資料にも共通しているところである。日本語においてオ段とウ段の母音交替がかなり激しかったことを反映していると思われる。

ちなみにワウ[wau]の写音に、家麻韻合口の「哇」[ua]を使用したのは蕭豪韻に[uau]という音節がなかったためである。

3.4.1. 拗長音

拗長音についても上述の資料と同じ写音特徴が見られる。つまり、開合を問わず、蕭豪韻の三四等の字が当てられている。例えば

花椒 山燒 (サンセウ) 正月 燒哇的 (シャウグッチ)

3.4.2. その他

① 「老」

『艱難 非老世』『貧人 非老世那非多』という項目がある。大友 1963 はそれぞれ「ヒドシ」「ヒドシノヒト」、京大 1964 と福島 1993 は「ヒラウシ」「ヒラウシノヒト」と解説した。大友の解説には「老」の子音の問題や、母音の問題も生じてしまう。『日葡辞書』には「Firō : 疲れ……また、比喩。貧しくて以前に持っていた家財や道具類もなくした人のことを言う。」、また「Firōjin : 貧しくて家財道具などをなくした人」とある。『日国』には「疲労 : 貧しくなること。また、貧乏なこと」、『時代別国語大辞典 室町時代編』には「疲労人 : 貧しいひと」とある。京大と福島の案に従うべきであろう。「老」はラウに相応しいものである。

② 「阿-翁」

アウを「阿-翁」で当てる1例がある。「阿」は歌戈韻で、主母音は[o]であったが、現代北京語では[x] (阿房宮)、[a] (阿童木) と両読されている。明代においても文語的には[o]、口語的には[a]と発音されたと推測される。ここは二字[a][uŋ]でアウを写したもので、特に開合に問題があるとは思われない。

② 「羅」

「羅」は口に当てることが多いが、「客人 馬羅都世 (マラウドシ)」では「ラウ」に当てている。『日葡辞書』では Marōto と開音にしている。しかし『日国』では「客」にマラウドと並んでマロドの語形も見られる。ここで「羅」が用いられたのは、マロドを写音したためであろうか。そうであれば、開合の問題にはならない。

④ 「倭」

「鳳凰 夫倭 (ホウワウ)」のワウは開音である。ここは蕭豪韻に音節[uau]がないため、歌戈韻の音節[uo]を使ったと思われる。ワ行子音の写音を優先した例である。

⑤ 「刀」

「豆腐 刀夫 (タウフ)」のタウに「刀」[au]を当てた例が一つある。「豆」の呉音はズ、漢音はトウで、「豆腐」のトウは正しくは合音のはずである。大友はこれについて「納得できない」と述べる。だが、『日葡辞書』に Tōfu、Yutōfu があり、『文明本節用集』にも「豆腐タウフ」とある。「豆腐」は開音に発音されていたことが分かる。森田 1993 は「豆腐」が「唐布」ともされていたことを述べて、開音に記されたことの理由とした。この「刀夫」もタウフにふさわしい音注である。

全体を見渡すと、『日本館訳語』に開合の混同と見られる例はわずかであり、ある程度の写音規則に従う傾向が窺える。混同例には次のものがある。

斗 島 (ト)

妻 弱波 (ニョウバウ)

師伝 世農波 (シノバウ)

ニョウバウについては、バウに蕭豪韻の字が期待されるが、歌戈韻の「波」を用いるのが問題である。『日本風土記』や『天草版平家物語』でも「女房」は合音で記録されていることもあり、上述のように開音の濁音は早くが合音に統合されたのであろう。従って、シノバウが合音で現れることも理解できる。ただし、「斗」については分らない。

4. 音声学的検討と音韻論的解釈

4.1. 開音の音韻的価値について

朝鮮資料では、『伊呂波』1492 においてはまだアウ連母音とオオ・オウ連母音がはっきり区別されていたが、『捷解新語』1676 においてはその区別を失っていると言われる (浜

田 1955)。中国資料では 16 世紀半ばまで開合の別は基本的に保たれていたが、中には混同と見られるものもあること、前述の通りである。

キリシタン資料、謡曲伝書からすれば、開音と合音の対立を音韻論的に考えることもできるが、開音と合音の長音化から混同までの時期を 16 世紀後半から 17 世紀前半までと考えれば、わずかに百年間であり、音韻変化としては速いものであろう。

川上は「[o]と[c]の差がやや微妙すぎて、聞きわけ、言いわけのりに困難が大きすぎる。五母音で安定していた日本語が、一時期だけ六母音であったことは考えられない」と述べ、開音を[o:]、合音を[ou]とした。豊島の再構も同様である。その根拠として、ロドリゲス『日本大文典』の『『ひろがる』δは恰も oo と二字で書いてあるかのように発音する……『すばる』δは大体に ou と書いてあるかのように発音するのであって』という記述があげられている。

[o]と[c]の差が微妙であることは日本語話者自身確かにそう感じるであろう。しかし、例えば呉方言でも[o]と[c]を区別しており、その区別を有する言語は決して少ないとは言えない。けれども、五母音で安定した日本語が、短い間に六母音になって、それからまた五母音に戻るということは確かに疑問に思われる。

現代日本の諸方言の中で、開合の別が残る方言と言え、次のものがよく知られている（上野善道 1989 参考）。

【表 3】

	開音	合音
鳥取県	[a:]	[o:]
九州地方	[o:]	[u:]
新潟県	[c:]	[o:]

長音化を伴い、鳥取方言では開音[au]が母音[a:]に、九州方言では合音[ou]が母音[u:]に統合されていることが見て取れる。この二地域において開合の別はあるものの、その音韻的価値は五母音の音韻体系に帰着している、ということが言えよう。

新潟方言においては開合の音価がそれぞれ[c:] [o:]となっている。それは橋本説を裏付けるようにも見られる。豊島はその理由を新潟方言の七母音の音韻体系にあるとした。新潟方言は/a i u e ε o ɔ/という七母音の音韻体系を有している（ただし、[i]は子音と結合することが多く、[u]と[o]、[i]と[e]の母音交替も激しい事情があるといわれる）。[au] > [c:]、[ou] > [o:]という音変化の実現は円唇後母音/o/ /ɔ/に対して非円唇前母音/e/ /ε/が音韻体系内にあることに基づく。つまり、/ɔ/の形成には/e/という対称的音素の存在が大前提となっているというのである。これについて筆者も豊島の見解に従う。

類型論的にみると、/ε/と/ɔ/の対立及び併存は多くの言語に見られる。しかし、管見の限りには/e/がなく、/ɔ/のみある言語はない²⁶。/ɔ/の生起と定着は/e/に依存しているようである。新潟の西の地域において、/ε/がなければ/ɔ/もないという²⁷。それゆえ、/ε/を持たないかつての日本語に/ɔ/が成立していたとは考えにくい。新潟方言における[au] > [c:]という音変化は新潟方言自身の母音体系に基づくもので、五母音しか持たない、日本語の他の方言に通じる音変化法則ではない。

4.2. 開合の統合過程

一方、川上、豊島の再構音にも問題があることを言わなければならない。[au]が合音[ou]より先に融合して[o:]となることである。忘れていけないのは合音になる連母音の中にはオウのほか、オオもあることである。オオが[o:]にならず、アウが先に[o:]になることは考えにくい。例えば、「十日（トヲカ）」[tookɑ]（[towokɑ]）と「桃花（タウカ）」[to:ka]²⁸のように、開合を使い分けていた時代があったことになってしまう。

また、開音の長音化が合音のそれに先行することは弁別的素性の面からも説明しにくい点がある。それはすなわち、[a]は非円唇・広口、[u]は円唇・狭口という弁別的素性をそれぞれ持つ母音である。円唇性と開口度において[a]と[u]とは近似的母音同士ではない。それに対して、[o]は円唇・狭口の素性を持つ母音で、[u]とは比較的近似する母音同士である。近似的母音同士[ou]または同じ母音[oo]の連続では融合が起こらず、近似的でない母音同士の連続で先に融合が起こるとするのは合理的とは言えない。標準語においても、エイ連母音は長音化してエー（いわゆるエ段長音）と発音されることは自然であるが、アイ連母音は長音化することは多くない。日本諸方言の様子を眺めれば、エイという母音連続は[eɪ]や[i:]で発音される地域もあるが、[e:]と長音化して発音される地域が圧倒的に多い。アイ母音連続ではまちまちで、[ai][a:][æ:][e:][e:]のようにバリエーションを持っている。それは[a]と[i]の弁別的素性に相違が顕著であったからである。以上を要するに、アイ連母音よりは、エイ連母音のほうが長音化して[e:]になりやすいということである。それと同じ原理で、円唇の場合でも、アウ連母音よりオウ連母音のほうが長音化して[o:]になりやすかったということになる。

【表 4】

	現代
非円唇・狭口＋非円唇・狭口	エイ > エー
非円唇・広口＋非円唇・狭口	アイ = アイ（エー）
	室町末期
円唇・狭口＋円唇・狭口	オウ = オウ ?
非円唇・広口＋円唇・狭口	アウ > オー ?

中国資料では、16 世紀前半から後半にかけて、オ段の開合が区別され、アウ連母音が基本的に[au]、オウ連母音が先に長音化を起こして[o:]であったことを反映している。こうした音変化は音声学的にも説明しやすい。一方、16 世紀のアウ連母音の中には、すでに長音化したものもあって、その音価は[o:]または[o:]であった。アウ連母音は[au] > [o:] > [o:]の順に音変化を起こしていたとみることができるが、いわゆる開音[o:]と合音[o:]との別は音声的であり、開音と合音を音韻的対立と見なすべきではない。

5. おわりに

以上、中国資料を利用してオ段長音の開合の考察を試みた。16 世紀前半においてオ段長音の開合は、大体区別されていたことを再確認し、開合の音価と音変化の過程に対して

検討を行った。その結果、橋本説の通りにアウ連母音は[au] > [ɔ:] > [o:]との変化を経たが、オウ連母音の長音化がそれに先行して、[ou] > [o:]のように進行したと推定した。

アウ連母音の長音化は濁音音節を含む語や、使用頻度の高い和語において先に起こる可能性がある。ところが、五母音しかない日本語の母音体系内（新潟方言を除く）において、[ɔ:]は短期間に音声的に現われても、音韻的位置を占めることはとうていできず、すぐに[o:]に帰着することになったであろう。いわゆる開合の別というのはあくまでも過渡的音声現象にすぎない。それを図示すれば以下のようなものである。

開音：[au] (/au/) = [au] (/au/) > [ɔ:] [o:] (/oo/)

合音：[ou] (/ou/) > [o:] (/oo/) = [o:] (/oo/)

【注】

¹ ただし川上は開音が音声上[ɔ:]である可能性も排除できないとした。

² ao という段階を証明する根拠がないため、豊島は*をつけた。

³ 「大」は多音字であり、中古音でも蟹摂と果摂に属している。『彙解』に「BIG, do 大」があり、現在の寧波でも[do]と発音する場合があるので、ここのドウに当たる「大」は蟹摂でなく、果摂と見なすべきである。

⁴ 效摂が[ao]であるから、開音も[ao]であるということにはならない。19世紀の寧波には[ao]しかなかったので、開音が[au]であるとしても、效摂の字を使うしかない。ここでは、開音の仮名遣い通りに[au]と推定する。

⁵ 19世紀から現代にかけて假摂の主母音は[ɔ] > [o]という変化を起こした。

⁶ 現在ではさらに新しい文読[tɕia]もできている。

⁷ 『日本風土記』ではタカイという字が「高」または「高」のような形をしている。一方、ウタの字は「哥」または「哥」のような形をしていて誤刻されたものと思われる。

⁸ 「昂」は疑母[ng-]であり、ノに当てることには疑問がある。

⁹ 「倭」は「逢東 倭子介（オオツカ）」に用いられている。鳥取県東伯郡琴浦町にある地名である。

¹⁰ 大友 1963:558 では「ぼう」の項に「袍3」とし、「ぼう」の項に「袍1」とする。京大 1961 では「パウ」に「袍4」としており、大友の解説と異なる。具体例は「宮娥 国袍（クパウ）」、「教書人 識奴袍（シノパウ）」、「師父 識奴袍（シノパウ）」、「和尚 袍士（パウズ）」、「棒 袍子葉（パウツエ）」であるが、大友は「棒」の「パウツエ」を「ボウツエ」とする。しかし、「棒」は漢音がパウであり、『文明本節用集』にもパウとある。「袍」はすべて開音のパウとすべきと思われる。

¹¹ 「交」は「少」の誤刻か。

¹² 大友は「白絲 失類一多（シロイイト）」、「銀匠 失類楷尼才古（シロイカネサイク）」などの「類」をロと解説し、オ段短音と見なしている。京大 1961 では「類」を「ロイ」と解説する。次の項目「城 失六（シロ）」、「後 吾失六（ウシロ）」では、ロに「六」を当てるし、さらに「白 失類（シロイ）」とあるように、ロイに「類」を当てている。止

撰蟹撮合口ではi韻尾が残っていたと考えられるから、「類」は「ロイ」の音注と見るのが妥当である。従ってここでは「類」をオ段短音の音注と見なさない。

また、大友は「緑豆 阿回買密 (アオアメ)」と読むが、京大1961は「アオイアメ」と解説する。次の項目「風正 回天那革熱 (オイテノカゼ)」、「排草 尼回骨篩 (ニオイクサ)」にあるように、「回」も「類」と同様にi韻尾を持つもので、オイと解説すべきである。従って「回」をオ段短音の音注とは見なさない。

また、大友が訛りとする音注 (:552-558 丸のついた箇所) は誤刻などの可能性が高いので、ここでは扱わない。

¹³ 「捺」は山撰であるが、ここではおそらく「奈」への類推からそれと同音になっていたであろう。

¹⁴ 「楽」は「娼妓 紹楽 (ジャウロ)」にある。大友はラウと読むが、『日国』に「女郎 ジョウロ、ジョロがある。ここでは、入声音の「楽」を使っていることから、短音のロを写したものとする。

¹⁵ 「所」は中古音に遇撰に属するものであるが、現代中国の諸方言では果撰の発音で読まれることが多い。

¹⁶ (女近) とはおそらく深撰 (m 韻尾) の「矧」の異体字であろう。母方のおじの妻のことである。呉方言では臻撰 (n 韻尾) と深撰が合流している。臻撰に属する「近」を借りて、「(女近)」という字を作ったのではないかと思われる。

¹⁷ コンガウ (金剛) は「金剛草履」の略である。

¹⁸ 『日国』に「唐の土：炭酸鉛を水で煮沸したり、硫酸鉛や塩化鉛を炭酸ナトリウムの水溶液で煮沸したりして得られる白色粉末。鉛白。ヒドロキシ炭酸鉛」とある。

¹⁹ 『日本風土記』の原本では「華弓」とあるが、「弓」は「戸」の誤刻であろう。

²⁰ ただし、「冰糖 過立索刀 (コオリサタウ)」ではコオを「過」の一字で写している。

²¹ 『日葡辞書』に「Rô ロウ (籠) 牢獄」とある。

²² 『中原音韻』『韻略易通』『合併字学集韻』を参考資料とするが、韻目は『中原音韻』に従う。再構音は趙1984、葉2001、耿1992、佐藤2002を参考にした。

²³ 「酪」「各」などの宕撰入声字は宵豪韻に属すると同時に歌戈韻にも属し、当時においても現代北京語と同様に、文白異読の現象があった。ここでは「酪」「各」が開音に当てられることから、宵豪韻に読まれたと推測する。

²⁴ 「和尚 吾蘇 (ワショウ)」にある。静嘉堂本では「蕪」(「蘇」の異体字)、稲葉本とロンドン本では「蘇」としている。いずれにせよ、「蘇」をシャウに当てるのは不審である。静嘉堂本の「蕪」は恐らく「蕪」(宵豪韻[au])の誤植でジャウを写したのではないかと思われる。

²⁵ 「塔 答 (タウ)」にある。「答」は多くタに当てられ、タに相応しいものである。タウに当てるのは何かの誤りであるように思われる。

²⁶ ただし、/ɔ/がなく、/ɛ/がある言語はある。東北方言においてアイ連母音が[e:]、エイ連母音が[e:]となるのもその一例であろう。

²⁷ 剣持隼一郎1983:248。

²⁸ 『日葡辞書』では「十日 Tôca」と「桃花 Tôca」としている。

第5節 『日本国考略』に見られる寄語のアクセント

1. はじめに

日本語音韻史の研究において、外国資料による研究は重要な役割を果たしてきた。ただし、それぞれの言語は独自の特徴を有し、日本語の音韻体系と外国語のそれとはもちろん異なるものである。外国人が母語を使って日本語を表わそうとすると、うまく表わしきれないところも多い。

また外国資料による分節音素のレベルの研究が進んでいる一方、アクセントについての音韻史的な研究はあまり行われていない。例えば明代の中国資料について音韻史的研究は数多くあるのに対して、その頃の中国語の声調と日本語のアクセントとの対照的研究は管見の限り、長田夏樹 1965、木津裕子 1994 のみである。この節では先行研究の研究方法を参考にし、近代の寧波資料を利用し、19 世紀寧波方言の声調体系の再構を試みた。そしてさらに日本語アクセントの類別語彙によって寄語の音注漢字を分析し、アクセントの類別語彙と寧波方言の声調体系の対応を見出し、『日本国考略』の写音に見られるアクセントの関与とそこに反映したアクセントの地域性について考察を行う。

2. 中国資料によるアクセントの研究の可能性

中国語は典型的な声調言語として知られており、声調の抑揚が意味弁別に大きく関与している。外国資料の写音による日本語アクセントの研究をすれば、キリシタン資料や朝鮮資料よりも、中国資料のほうがアクセントを反映しているのではないかと思われる。はじめに、声調の少ない現代北京語を例として、その可能性を考えてみよう。

仮に現代日本語の「ママ」(HL)を現代北京語で表記するとしたら、「媽馬」[ma⁵⁵ma²¹⁴]のような声調の漢字と順序で表わすことになるであろう。音の抑揚に敏感とも言える中国人が日本語を聞いた時に、アクセントに対してある程度の認識ができ、可能な限りそれに合わせて中国語の声調を選別し、表現するはずである。逆に「ママ」(HL)というアクセントに対して、声調の抑揚を無視し、「馬媽」[ma²¹⁴ma⁵⁵]のような順序で表わすことはないのではないかと思われる。

ただし、四声を有する北京語は、各音節において四声を揃えているわけではない。例えば現代北京語の[mu]という音節では、声母[m-]が中古音の明母であるため、その平声は現代北京語で第二声[mu³⁵] (例：模)、上声は第三声[mu²¹⁴] (例：母)、去声は第四声[mu⁵¹] (例：暮)となる。しかし第一声[mu⁵⁵]は存在しない。仮に現代日本語の「ムリ」(HL)を現代北京語で表わすとすれば、H を写すには第一声[mu⁵⁵]の代わりに第四声[mu⁵¹]、例えば「暮里」[mu⁵¹li²¹⁴]のような音注で写すはずであろう。「母里」[mu²¹⁴⁻³⁵li²¹⁴]¹や「模里」[mu³⁵li²¹⁴]のような音注は中国語話者にとって不自然に感じられるものなのである。

現代北京語と同様、16 世紀の日本語を記録した明代の中国人が日本語を写音する際、当時の日本語のアクセントに対し、声調の組み合わせの自然さを求めて音注漢字を選別した可能性は高い。アクセントに適しない声調を用いるのは、当時の中国人にとっても不自然さが生じてしまうと考えられるからである。

3. 寧波方言の声調

3.1. 20 世紀の単字調

現代中国の多くの方言において、いわゆる中古音の全濁音の無声化に伴い、従来の四声が次第に大きな変化を起こした。呉方言は有声音を保つ数少ない方言の一つであるが、それにもかかわらず声調の変化は起こっている。呉方言に属する寧波方言の声調を見ると、中古音の四声は陰陽に分かれる。中国語学における陰と陽とは、声調の分類で、中古音の全清音と次清音からなる声調は陰調、全濁音と次濁音からなる声調は陽調と呼ばれる。

全清・次清	陰調
全濁・次濁	陽調

20 世紀の寧波方言の声調に関する研究としては、趙元任 1928、傅国通 1985、湯珍珠 1990、錢乃榮 1992 が挙げられる。ここではまず、これらの研究に記録された単字の声調、すなわち単字調とその調値を見てみよう。

【表 1】20 世紀寧波方言の単字調

調値 (趙元任 1928 ² /傅国通 1985/湯珍珠 1990/錢乃榮 1992 ³)			
陰平 331/53/53/52	陰上 545/445/34/325	陰去 33/44/44/44	陰入 5/5/5/5
陽平 ² 44 ² /233/22/255	陽上 112/213/13/113	陽去 112 ⁴ /13/113	陽入 23/2/12/23 ⁵

表記法や記録者による差もあるが、陰調はほぼ全体的に陽調より高い声調であることは見て取れる。

3.2. 19 世紀の単字調

19 世紀の寧波方言の単字調はどうだったのか。それは現在の寧波及び周辺地域の方言の声調や、19 世紀西洋人の記述を基にして、ある程度の再構ができると考えられる。

3.2.1. 寧波周辺地域の単字調

寧波周辺地域の単字調は次の表 2 に示すとおりである。(余姚市、奉化市、象山县は現在寧波市の管轄下にある。舟山市、岱山县は寧波の東部に位置する島であり、過去において寧波の管轄下にあった時期もある。右の図を参照⁶⁾)



図 1 寧波周辺地域 (1:5,000,000)

【表 2】寧波周辺地域の単字調⁷

	陰平	陽平	陰上	陽上	陰去	陽去	陰入	陽入
舟山	53	22	35	24	44	13	5	<u>12</u>
岱山	53	*223	433	*223	44	13	5	<u>12</u>
余姚	324	231	435	*113	44 ⁸	*113	5	<u>23</u>
象山	533	232	*53	*53	334	213	5	<u>23</u>
奉化	44	23	324	213	53	31	5	<u>2</u>

表 2 から分かるように、寧波周辺地域の声調は類似しており、それらに共通する特徴としては次の 3 点が挙げられる。

- 1、全体的に陰調が陽調より高い。
- 2、寧波で合流した陽上と陽去は、区別している地域が多い。
- 3、陽平、陽上、陽去は近似した調値で、低い声調である。

古い寧波方言は陽上が陽去と合流せず、陰陽別で八声を有しており、陰調が陽調より高いということが明らかである。

3.2.2. 西洋人による記述

19 世紀に西洋人が寧波方言の声調について言及した貴重な資料が残っている。モリソン 1876、パーカー 1884、モレンドルフ 1901 がそれである。

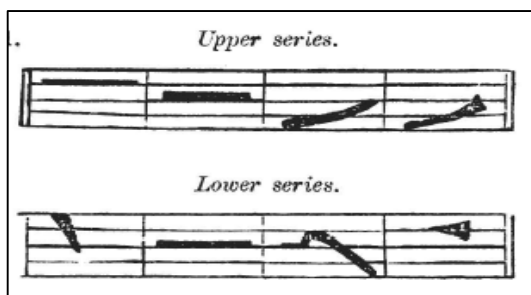
モリソンの貢献については後述する。モレンドルフが声調に関して述べたところはわずかであるが、「四つの声調（平上去入）においても高と低に分かれている」という記述を残している。19 世紀末の寧波においても、やはり八声のあったことが窺える⁹。

パーカーはイギリスの外交官且つ有名な漢学家で、彼の研究は中国の諸方言にまで及んでいる。パーカー 1884 には、他の中国語方言の声調と比較して寧波方言における八つの声調に関して述べたところがある。以下ではその記述の詳細を挙げ、それによって 19 世紀寧波の声調の分析と調値の再構を試みる。

3.2.2.1. 平声

陽平は温州と福州のそれと似ている。陰平は北京もしくは広東のそれとよく似ているが、(陽平と陰平は) 少し異なる。これ以上の区別は難しい(後略)¹⁰。

陽平については、まず温州と福州のそれを参考にしなければならない。19 世紀の温州の陽平は Montgomery 1893 によれば、331 である¹¹。福州の陽平は Baldwin 1871 では楽譜によって 53 のように描かれている(図 2 参照、図の右は再構調値¹²)。温州と福州における陽平の調値は異なるものであるが、下降調というところは共通している。現代寧波周辺における陽平の調値の多くは 2 と 3 の位にある。従って、当時の寧波の陽平を 32 と再構しておく。



陰平 44 陰上 33 陰去 13 陰入 13
陽平 53 陽上 33 陽去 41 陽入 4

図 2 福州の声調 (Baldwin 1871)

寧波の陰平については、19 世紀の北京語の声調を直接に反映した資料は知られていないため、広東語資料である Jones 1921 を参考にする (図 3 参照、図の右は現代広東語の調値との対応例)。Jones によれば広東語の陰平には 53 と 55 の二つがある。寧波周辺地域に見られる陰平は下降調のものが多く (表 2 参照)、しかも広東語の 53 と同様になるところも多いため、当時の陰平の調値を 53 と再構する。



1st Tone (陰平/上陰入 : 55,53/5)
2nd Tone (陰上 : 24)
3rd Tone (陰去/下陰入 : 33/3)
4th Tone (陽平 : 11,21)
5th Tone (陽上 : 23)
6th Tone (陽去/陽入 : 22/2)

図 3 広東語の声調 (Jones 1912)

3.2.2.2. 上声

寧波方言の声調は、理論上は八声であるが、実際には六声である。陽上・陽去の区別は完全になくなり (例えば『馬』と『罵』)、陰上と陰去の区別も、全くなくなったというわけではないが、事実上は消えてしまっている (例えば『点』と『店]) …… 陰上、陽上は広東語のそれと極めてよく似ているが、寧波の陰去・陽去は、実際に聞くかぎり陰上・陽上と区別できない (後略)¹³。

従って、現代寧波における陽上と陽去の合流はすでに 19 世紀末にも見られ、陰上と陰去の調値に近似していたことが分かる。

19 世紀の広東語の声調は現代広東語とほぼ同様で、陰上は 24、陽上は 23 のような調値であったであろう (図 3 参照)。寧波方言の陰上、陽上は広東語のそれと極めて似ていることから、陰上を 24、陽上を 23 と推定して差し支えないと思われる。

3.2.2.3. 去声

二つの陽声（陽上、陽去）は区別がない。ただし、陰去についてはもう少し説明をしたい。陰去は陰上と区別することができる。ゆっくりと気をつけて発音する場合、確かに広東語のそれと似ている¹⁴。

陽上と陽去は区別がつかないとされているが、寧波周辺地域で区別しているところから、またモレンドルフ 1901 の記述からも、陽上と陽去は近似するものの、異なる声調であった。少なくとも 19 世紀以前には区別があったと考えたほうが妥当であろう。すでに推定した陽上 23 を基に、陽去を 13 と推定しておく。

陰去について広東語の陰去は 33 であるが、現在寧波及びその周辺地域では 44 となるところが多い。33 と 44 のわずかの差であるから、Parker にとっては非常に似た声調に聞こえたのかもしれない。いまここでは陰去を 44 としておく。

3.2.2.4. 入声

陰入は広東語のそれとよく似ている。また、福州と客家の陽入とも似ている……陽入は他のどこの方言の声調とも似ていないが、しかし、すべての声調の中で、福州の陰入にもっとも近いと言える¹⁵。

福州の陽入と広東の陰入は上の図 2、図 3 によれば、5 であることが見てとれる。客家語の陽入についてはパーカー 1880 に「(客家の) 陽入は広東語の陰入と陰平と似ており、また (客家の) 陰去にも似ている¹⁶」とあるように、やはり広東の陰入を参照した記述が見られる。従って、寧波の陰入を 5 に再構して差し支えないと考える。

陽入はどこの方言にも似ていないとの記述から、よく比べられる広東語のような低平調 2 の調値であるとは考え難い。福州の陰入 13 に比較的近いとのことであるから、現在寧波周辺地域に見られる 12 や 23 のような上昇の幅が少ない調値であったと考えられる。

3.2.3. 単字調の再構

こうして、寧波周辺地域の方言とパーカーの記述によって、19 世紀の寧波方言における声調の再構を以下のようにまとめる。

【表 3】 19 世紀寧波方言の声調体系とその調値¹⁷

陰平 53	陰上 24	陰去 44	陰入 5
陽平 32	陽上 23	陽去 13	陽入 12 (23)

3.3. 連読変調

声調言語において、個々の声調が前後の音的環境により本来の声調を失って他の声調に変化することを「調連声」と呼ぶ¹⁸。中国語学においては「連読変調」と呼ぶことが多いため、ここでも「連読変調」と呼ぶことにする。

呉方言は連読変調が比較的発達している方言である。その中でも、寧波方言は二音節以上の語において、必ず連読変調が起り、その調値も複雑な様相を呈している。表 4 は汪

平 1990 によって寧波の連読変調の代表的な調値を示したものである¹⁹ (括弧内は代表的調値のほかによく聞かれる調値)。さらに汪平 1990 の調値を H、M、L、R、F (高、中、低、昇、降) で捉えなおし、具体的な調値を音韻論的に解釈することも可能である。

【表 4】現代寧波方言の連読変調

前字 \ 後字	陰平	陽平	陰上	陽上	陰去	陽去	陰入	陽入
陰平	33 53(33 55)	MF(MH)					33 5	MH
陽平	22 53(22 44)	LF(LH)					22 5	LH
陰上	53 22	FL					53 2	FL
陽上	24 33(24 22)	RM(RL)					24 3(24 2)	RM(RL)
陰去	55 33	HM					55 3	HM
陽去	22 55(22 53)	LH(LF)					22 5	LH
陰入	5 22(5 33)	HL(HM)					5 2(5 3)	HL(HM)
陽入	2 35(2 44)	LR(LH)					2 5	LH

陰平を除き、二音節の連読変調は前字の陰陽の別によってその調値の高低が決まるといことが分かる。すなわち、陰調で始まる語は必ず高く始まり (陰平は中間から上る)、陽調で始まる語は必ず低く始まるという法則がある。これに対して、後字になる音節は基本的に陰陽を問わず、前字に応じて調値が変化する。しかも陰調、陽調とも同じ調値となる。

3.3.1. モリソン 1876 に見られる連読変調

モリソンが編集した『彙解』では、寧波方言の語彙や短文をローマ字で記録しており、さらに高い音節に「ˊ」を振ることによって声調を写している。これによって二音節以上の語や短文の連読変調を窺うことができる。この本は 19 世紀寧波方言の連読変調を知ることのできる貴重な資料である。

例： 医生 i-sangˊ 今年 kying-nyinˊ 幼年 iuˊ-nyin

八つの声調それぞれの組み合わせで、理論上二音節語は計 64 種の連読変調の型があると考えられる。筆者はこの資料から、各型に 20 数語、計 1400 語余り抽出し、連読変調の型を考察した。本書に「ˊ」が付いた音節を H で、「ˊ」が付いていない音節を X で示せば、HX と XH という二種の分類がモリソン 1876 によって可能にある。考察の結果は、同単字調の組み合わせによる連読変調の型には、HX と XH のいずれかに偏ってあらわれ、傾向が顕著に見られるものと、そのような傾向が顕著でないものがある、ということである。得られた連読変調の型を表 5 に示す (具体例については別の機会に報告したい)。漢字の声調は中古音 (広韻などの韻書を参考) を基にして推測したもので、厳密にはそれぞれを清平、清上、清去、清入、濁平、濁上、濁去、濁入と呼ぶべきである。すなわち、現代寧波では濁上が濁去に合流し、両者とも陽去と呼ばれる。ただし、汪も指摘したように、単字調の濁上が濁去に合流しても、連読変調においては濁上で始まるものと濁去で始まるものとは区別されている。そのため、便宜上それぞれを陰平、陰上、陰去、陰入、陽平、陽上、陽去、陽入と呼ぶことにする。

表 5 には、傾向が顕著な連読変調の型を示す。例外が 10% までの場合は誤植の可能性

が考えられるために、例外の連読変調の型を表示しない(例えば 20 語の中、HX が 19 語、XH が 1 語の場合、HX のみを示す)。傾向が顕著でなく、例外語数が 11%~40%を占める場合は () 内にその連読変調の型を示す(例えば 20 語の中、HX が 16 語、XH が 4 語の場合、HX (XH) で示す)。そして例外語数が 41%~50%を占める場合は「/」の後にその連読変調の型を示す(例えば 20 語の中、HX が 11 語、XH が 9 語の場合、HX/XH で示す)。

【表 5】

後字 前字	陰平	陽平	陰上	陽上	陰去	陽去	陰入	陽入
陰平	XH						XH	
陽平	XH						XH	
陰上	HX(XH)				HX		HX(XH)	
陽上	HX(XH)						HX(XH)	
陰去	HX(XH)						HX(XH)	
陽去	XH(HX)		XH		XH(HX)		XH	
陰入	HX/XH			HX(XH)			HX(XH)	
陽入	XH						XH	

陰平、陽平、陽入及び陽去で始まる二音節語においては声調が一定しているように見える。しかし、他の声調で始まる二音節語においてはある程度の例外が見られる。特に陰入で始まる二音節語では例外語数が多い。

陽上で始まる語の例外についてはおそらく陽去との合流によって陽去と混同したものがあると考えられる。陰入で始まる二音節語の例外には「一」で始まる語(主に「一+助数詞」)が目立つ。これは複合語の成分間の関係から意味的な関与によって(例えば「数詞+助数詞」、「動詞+目的語」)、特殊な連読変調が生じるという現象(「語法変調」、「窄用式連読変調」と呼ばれている)で解釈すべきであろう。南部の呉方言でも「一+助数詞」の語が特殊な声調を持っていることが報告されている²⁰。複合語のこの特殊な連読変調は陰入だけでなく、全体にも及んでいるはずなので、例外的な音調が存在することのひとつの理由と考えられる。しかし、本稿の研究対象である『日本国考略』における寄語の音注では、複合語となるものはなく、特殊な連読変調は現れない。

例外を除き、表 5 を表 4 と照らし合わせてみると、19 世紀の寧波の連読変調は現代のそれと完全に一致していることが分かる。さらにモリソンの表記(表 5)を具体化すると次の表 6 のようになる(たとえば、表 4 では MH や MF、LF、LH で、表 5 では XH の場合、表 4 の調値のほうが具体的であるから、MH や MF、LF、LH にする。*は表 5 に例外がある個所を示す)。

【表 6】

後字 前字	陰平	陽平	陰上	陽上	陰去	陽去	陰入	陽入
陰平	MF(MH)						MH	
陽平	LF(LH)						LH	
陰上	FL*				FL		FL*	
陽上	RM(RL)*						RM(RL)*	
陰去	HM*						HM*	
陽去	LH(LF)*	LH(LF)			LH(LF)*	LH(LF)	LH	
陰入	HL(HM)*						HL(HM)*	
陽入	LR(LH)						LH	

4. 声調とアクセントの対応

所扱言語が寧波方言である『日本国考略』の記録した寄語に、19世紀寧波方言の声調と日本語のアクセントとの対応は見られるであろうか。

木津 1994 は、当時の寧波方言において連読変調が起こっていた可能性を指摘している。そうであれば、日本語のアクセントは寧波方言の声調と比べ、種類が少ないため、連読変調の具体的な調値まで厳密に把握する必要はない。

次には、以上で再構した一音節語の単字調、二音節語の連読変調の調値(ローマ字表記)によって日本語アクセントとの対応を考察する。日本語アクセントについては、『日本語アクセント史総合資料(資料篇・研究篇)』を参照した。

4.1. 寧波方言の制限

分析を行う前に寧波方言側の事情を確認しなければならない。上記のように呉方言において全清と次清音は陰調、全濁と次濁音は陽調となっている。つまり単字調の場合、全清と次清音は高く、全濁と次濁音は低くなるのである。連読変調の場合も、前字が全清または次清音であれば、連読変調は高く始まり、全濁音または次濁音であれば、連読変調は低く始まるのである。

『日本国考略』は日本語のマ、ナ、ラ行音を次濁音である明、泥、来母字で写している。マ、ナ、ラ行音が語頭に現れる場合、その子音は一次的要素となり、二次的要素であるアクセントより、写音への関与度が高い。そのため、声調の低い明、泥、来母字が選ばれることは当然であり、アクセントを反映しているとは考えにくい。それゆえ、マ、ナ、ラ行音、すなわち音注漢字が明、泥、来母で始まる語を考察対象から外す必要がある。

『日本国考略』における全濁字と日本語の濁音の対応に関しては前節で論じたことである。そこでは全濁字と濁音の対応率が低いという結果が得られた。それは16世紀の日本語の清濁の音韻的区別が有声無声でなく、入り渡り鼻音の有無であったからであろう。したがって日本語の濁音を表わす全濁字で始まる語(漢語)はアクセントを反映する可能性があると考えられる。それゆえ、ここでは全濁字も考察対象とする。ただし、音声学的には入り渡り鼻音を持つ当時の濁音は有声音として現れる可能性も高いので、まったく写音に関与していないというわけではない。

4.2. 資料による分析

ここでは単字調及び二音節語の連読変調の再構により、一拍語と二拍語を分析する。本節末尾に掲げる資料は日本語アクセントの類別と、単字調と二音節語の連読変調とを対照したものである²¹。

4.2.1. 一拍語

一拍語は主に漢字一字で写されており、連読変調は発生しないため、音注漢字の単字調を参考にする。表7はアクセントの類別語彙による単字調の分布を示したものである。

【表7】

アクセント (中世後期の京都)	単字調 (19世紀の寧波)
体1 (H)	陰入 (5)
体3 (R)	陰平 (53)、陰入 (5)、陽平 (32)、陽去 (13)
体4 (H)	陰入 (5)

体言第一、四類 (H) に陰入 (5) の字を使っているのは、アクセントと単字調の対応があるように見える。2例のうち、とくに音注の「泄 (セ)」(資料の一拍224番参照)は、上の再構のように陰入が高平であり、さらに高平の声調は陰入しかないことを意味する²²。

体言第三類 (R) には陽上 (23) と陽去 (13) がもっとも相応しいものである。しかし陽調は全濁字であるので、それを日本語の清音を表わすのに用いることには不都合なところもある。それを回避するために陰調の字を選んだ可能性が考えられる。以下に述べる二拍語にも同じようなことが観察される。

また、寄語の写音は音注漢字の意味の関与もある。例えば225「眼 眉 (メ)」²³ではアクセント R を写すのに陽上や陽去の字 (例「美」「寐」) でなく、陽平の「眉」であったのは記憶上の便宜のためであろう。このような音注例は本書に少なからず見られる。

4.2.1.1. 二拍語

二拍語は一般に二文字で写されている。一文字で二拍語を表わすものはわずかであるが、次の3例がある。

【表8】

体4 (LH)	眉 売 (マイ (ユ?))	陽去 13
体 (HL)	十 多 (トオ)	陰平 53
形2 (LH)	無 乃 (ナイ)	陽上 23

この3例は京阪式アクセントと対応しているように見える。

次に二音節語の連読変調と二拍語のアクセントの対応について見てみたい。前字と後字それぞれの声調とアクセント類別語彙の対応は表9に示す通りである。

表9ではアクセントの語類及びその中世後期の京都におけるアクセント型と、音注漢字の前字と後字及びそれぞれの声調、例数、百分比²⁴を示している。例数が少ない体言第四、五類および動詞では百分比を示さない。上に述べたように明、泥、来母字が前字となる場

合、アクセントと対応しないため、それらを考察対象から外した（資料に網掛けした語）
25。

【表 9】

二拍語	前字		後字	
体言第一類 HH	陰平 6 (33%)	陽平 2 (11%)	陰平 5 (41%)	陽平 2 (17%)
	陰上 1 (6%)	陽上 0	陰上 2 (17%)	陽上 0
	陰去 3 (17%)	陽去 0	陰去 2 (17%)	陽去 1 (8%)
	陰入 6 (33%)	陽入 0	陰入 0	陽入 0
第二類 HL	陰平 7 (100%)	陽平 0	陰平 0	陽平 0
	陰上 0	陽上 0	陰上 3 (60%)	陽上 0
	陰去 0	陽去 0	陰去 1 (20%)	陽去 1 (20%)
	陰入 0	陽入 0	陰入 0	陽入 0
第三類 HL	陰平 10 (45%)	陽平 3 (14%)	陰平 3 (23%)	陽平 4 (30%)
	陰上 1 (5%)	陽上 0	陰上 1 (8%)	陽上 0
	陰去 3 (14%)	陽去 0	陰去 4 (30%)	陽去 0
	陰入 5 (23%)	陽入 0	陰入 1 (8%)	陽入 0
第四類 LH	陰平 2	陽平 3	陰平 1	陽平 0
	陰上 1	陽上 0	陰上 2	陽上 0
	陰去 0	陽去 0	陰去 0	陽去 0
	陰入 3	陽入 0	陰入 1	陽入 0
第五類 LF	陰平 1	陽平 0	陰平 2	陽平 1
	陰上 0	陽上 0	陰上 0	陽上 0
	陰去 0	陽去 0	陰去 0	陽去 0
	陰入 0	陽入 0	陰入 0	陽入 0
動詞第一類 終止連体 HH	陰平 3	陽平 0	陰平 1	陽平 1
	陰上 0	陽上 0	陰上 0	陽上 0
	陰去 0	陽去 0	陰去 0	陽去 1
	陰入 0	陽入 0	陰入 0	陽入 0
第二類 終止連体 LH	陰平 1	陽平 2	陰平 0	陽平 0
	陰上 0	陽上 0	陰上 3	陽上 0
	陰去 0	陽去 0	陰去 0	陽去 0
	陰入 0	陽入 1	陰入 0	陽入 0

表 9 から次のようなことが考えられる。

① 16 世紀の寧波における連読変調

体言第一、二、三類及び動詞第一類の前字は陰調の使用が多く、特に陰平と陰入の数が著しい。それに対して、後字は陰調の使用も多いが、しかし一つの声調に偏るような傾向は見出されない。これは木津の指摘の通り、当時の寧波方言において連読変調が起こっていることを裏付ける。つまり、現代の寧波方言における連読変調と同様、前字の声調は一定しているが、後字の声調は前字によって変化する。そのため、前字には陰平と陰入の字が選ばれ、後字はそのような傾向が見られないわけである。

② 体言の第一、二、三類と動詞第一類

早稲田語類によれば、体言の第一類（中世後期京都、以下同様）は HH、第二、三類は HL、動詞第一類終止連体形は HH である。これらを 19 世紀の寧波方言の連読変調（表 6）

と合わせてみると、次のような対応が見られる。

中世後期京都	19世紀寧波
HH ・ HL	MF (MH) ・ HL (HM)

陰平で始まる連読変調が M で始まり、第一拍の H とは合わないように見える。19 世紀の寧波では陰平の単字調が下降調 53 であり、それ以前には連読変調が起こる場合も前字となる陰平が下降調 53 のような声調であった可能性がある。つまり連読変調の調値は 53- → 33- という変化を経たかもしれない。だとすれば、陰平で始まる連読変調 (53-) で体言第一類 HH、第二、三類 HL および動詞第一類 HH の第一拍を表わすことも可能となる。

ただし、下降調の陰平は第一拍にもっとも相応しいものとは言えない。それと比べ、陰入の調値が 5 で、第一拍には相応しいものである。大友信一 1963 では『日本国考略』における入声音の使用を疑問としているが、アクセント H を表わすのはその一つの理由ではなかったかと思われる。だが、短い入声音は一拍の長さを表わしきれない不自然なところもある。

これを要するに、体言第一、二、三類および動詞第一類の第一拍に陰平と陰入の字が用いられたことはこれらの第一拍が H であることを反映しているということである。陰平と陰入はともに H に近い声調であるが、いずれも日本語の H の音節を表わすのに完璧な音節ではないため、両方の字が用いられているのである。

③ 体言第四類と動詞第二類

体言第五類には分析可能な例は一例しかないため、分析は困難である。体言第四類と動詞第二類は中世アクセントが LH である。この二類にも陰平と陰入の使用が見られるが、陽平の字の割合が体言第一、二、三類や動詞第一類より上回っていることも分かる。そもそも日本語の「濁音が語頭に現れない」という事情により、全濁の陽調字が語頭に使われることは少ないと考えられる。一方、例えば

「立 達子 (タツ)」 「殺 其奴 (キル)」²⁶

のように全濁字である「達」「其」が用いられた例は、第一拍 L を写そうとする意識があったように思われる。当時の日本語における清濁の対立は有声子音の入り渡り鼻音の有無であり、「達」「其」のような全濁字を用いただけで、日本語の濁音とは聞こえが異なるので、このような音注も許されたのであろう。

④ 寄語が反映したアクセント

以上の分析が成立するならば、『日本国考略』に見られる体言第一、二、三類の第一拍が H であったことが分かる。現代日本語においてこの条件を満足するのは京都、大阪、高知などの京阪式アクセントの地域である。したがって寄語は京阪式アクセント、及びこれらの地域の方言を反映している可能性がある。

5. おわりに

本稿は『日本国考略』に見える寧波方言の声調と日本語のアクセントについての初歩的な研究である。先行研究とは異なり、19世紀の寧波資料を利用し、寧波方言の声調を再構することから始めて、陰平・陰入の漢字と、体言第一、二、三類と動詞第一類の第一拍との間に顕著な対応を見出した。それによって寧波方言における連読変調が19世紀はもちろん、16世紀においてもすでに起こっていた可能性を改めて確認した。さらに音注漢字に入声字を使用することや、清音に対して全濁字を使用することにも、アクセントの関与があることが分かった。また、体言の第一、二、三類が高く始まることから、当時の京阪式アクセントを寄語の音注漢字が反映している可能性を提示した。

【注】

¹ 北京語では二音節語の二字とも第三声 214 である場合、前の音節が第二声 35 に変わる。後述の連読変調というものである。

² 趙元任 1928 が記録した声調は数字譜で写したものである。しかしそれは現在一般に使われる五度表記とは比較しにくいものだったので、劉民鋼 2010 が趙の数字譜表記を五度表記に変換した。ここでは、劉 2010 に従う。ただし、趙の用いた上付きの数字の意味については、趙 1928 に説明がなく、劉 2010 でもそれに言及していない。声調の聞こえが弱いところを示すものであろうか。

³ 錢乃榮 1992 が記録したのは高年層によるものである。

⁴ 傅国通 1985 は、濁去（陽去）の調値を濁平（陽平）、濁上（陽上）に同じとしている。

⁵ 単数字および下線は入声を指す。

⁶ 図は「天地図（中国国家測繪信息局監修）」

[<http://www.tianditu.cn/map/index.html>]2013.10.18 アクセスによる。

⁷ 各地域の声調の調値は以下の先行文献による。舟山：方松熹 1993、岱山：方松熹 1996、余姚：錢乃榮 1992、象山：黄曉東 2008、奉化：王淼 趙則玲 2009。「*」は声調の合流を示している。

⁸ 陰去は 52 ともあるが、それは若年層による調値であると記されている（錢乃榮 1992）。従って、52 は新しい声調の可能性があるので、表に掲載しない。

⁹ 徐通鏞 1985。

¹⁰ 原文：The lower even tone is however the same as in Wenchow and Foochow. The upper even tone is almost the same as at either Peking or at Canton, but these two slightly differ from each other. Distinction can go no further. (Parker 1884:148. () は筆者による)。原文の「lower」「upper」を「下」「上」（例えば下平、上平のように）と訳したほうが適切であるかもしれないが、理解しやすさと本論文との整合性を保つために、それらを「陽」「陰」と訳すことにした。

¹¹ 鄭張尚芳 2008。

¹² Baldwin 1871 は福州の声調を二枚の図で写している。音声的に声調の細かい変化（例えば入り渡り段階の声調の変化）まで写すものは本稿の内容に影響しないと考えられるの

で、ここでは割愛する。

¹³ 原文 : The tones of Ningpo are, in theory, eight, but, in practice, six. The distinction between the 下上 and 下去(e.g. as in the words 馬 and 罵), has absolutely disappeared. The distinction between the 上上 and 上去(e.g. as in the words 點 and 店) though not absolutely gone, has vanished to all intents and purposes…… The lower and upper rising tones are to all intents precisely the same as those of Canton: but the lower and upper departing tones are, in Ningpo, practically indistinguishable from the lower and upper rising tones. (Parker 1884: 147-148)。

¹⁴ 原文 : The two lower tones are absolutely indistinguishable, but the upper departing tone requires more explanation. It is distinguishable from the upper rising tone, and, when slowly and carefully uttered, precisely resembles the upper departing tone of Canton. (Parker 1884: 148)。

¹⁵ 原文 : The upper entering tone is precisely the same as that of Canton, and the same as the lower entering tone of Foochow and Hakka…… The lower entering tone precisely resembles no other tone in any of the dialects named, but perhaps the upper entering tone of Foochow is the nearest, and at all events, near enough to be called the same for present purposes. (Parker 1884: 148-149)

¹⁶ 原文 : The 下入 of the Hakkas is pronounced like the 上入 or 上平 of the Cantonese, or like the 上去 of the Hakkas, [後略] (Parker 1880:208)。

¹⁷ 寧波方言の古声調に関する先行研究には丁邦新 1984 がある。丁による再構の調値は陰平 55 陰上 35 陰去 42 陰入 5 陽平 22 陽上 13 陽去 21 陽入 2 である。ただし、丁のいう「古声調の時代」は特定されていない。

¹⁸ 『言語学大辞典』1996「調連声」の項。

¹⁹ 湯珍珠 1990 と汪平 1990 とは同じ音声テープによる研究であるにも関わらず、両氏による声調調値の記述が異なる。汪の論文は湯 1990 の半年後に発表され、湯を参考した上で作成したもので、より詳細な分析を行っているので、ここでは、汪の調値に従うことにした。ただし、汪が挙げた、二音節語それぞれにおける代表的な調値以外にも、多くの例外的な声調が聞かれる。また、汪は二音節目の入声と舒声(平、上、去声)を同じ調値で示している。表 4 では筆者が入声を分けて示した。

²⁰ 曹志耘 2002。

²¹ 早稲田語類と金田一語類に付されている印は、そのまま本稿でも使用する。

²² ハの音注漢字「法」の使用はハ行子音の問題にも関わるので、必ずしもアクセントを反映するわけではない。

²³ 一字は衍字か。

²⁴ 百分比は前字、後字それぞれについて、各声調の漢字の比率を示したものである。

²⁵ 『日本語アクセント史総合資料』に語類が示されない語は計算に入れない。

²⁶ 泥母の「奴」でルを写したのは、[l]と[n]の混同を反映している。このような混同例は他にいくつかある。

【資料】								
早稲田語類	金田一語類	番号	項目	音注	解説	聲調	単字調 (表3) 連読変調 (表6)	アクセント 古代・中世・近現代
一拍								
体1	X	224	身	泄	セ	陰入	5	H・H・H
体3	3	36	火	非	ヒ	陰平	53	L・R・R
体3	3	214	手	鉄	テ	陰入	5	L・R・R
体3	3	225	眼	眉眉	メ△	陽平△	32	L・R・R
体3	3	306	菜	柰	ナ	陽去	13	L・R・R
体4	かX	223	齒	法	ハ	陰入	5	R・H・H
二拍								
体1	1	301	杉	松計	スギ	陰平 陰去	MH(MF)	HH・HH・HH
体1	1	5	風	加前	カゼ	陰平 陽平	MH(MF)	HH・HH・HH
体1	1	317	蟹	措泥	カニ	陰平 陽平	MH(MF)	HH・HH・HH
体1	1	92	你	梭俚	ソレ	陰平 陽上	MH(MF)	HH・HH・HH
体1	1	157	獨樂	哥壳	コマ	陰平 陽去	MH(MF)	HH・HH・HH
体1	1	218	鬚	薰計	ヒゲ	陰平 陰去	MH(MF)	HH・HH・HH
体1	1	239	筆	粉地	フデ	陰上 陽去	FL	HH・HH・HH
体1	1	282	酒	晒箕	サケ	陰去 陰平	HM*	HH・HH・HH
体1	1	65	姊	亞尼	アネ	陰去 陽平	HM*	HH・HH・HH
体1	1	255	碟	晒頼	サラ	陰去 陽去	HM*	HH・HH・HH
体1	1	251	小箱	法哥	ハコ	陰入 陰平	HL(HM)*	HH・HH・HH
体1	か	X1.2	前行	殺鷄	サキ	陰入 陰平	HL(HM)*	HH・HH・HH
体1	1	211	口	骨止	クチ	陰入 陰上	HL(HM)*	HH・HH・HH
体1	1	212	鼻	發柰	ハナ	陰入 陽去	HL(HM)*	HH・HH・HH
体1	1	222	爪	卒謎	ツメ	陰入 陽去	HL(HM)*	HH・HH・HH
体1	1	8	霧	吉利	キリ	陰入 陽去	HL(HM)*	HH・HH・HH
体1	1	32	水	明東	ミツ	陽平 陰平	LF(LH)	HH・HH・HH
体1	1	310	牛	胡水	ウシ	陽平 陰上	LF(LH)	HH・HH・HH
体1	1	316	魚	遊河	イオ	陽平 陽平	LF(LH)	HH・HH・HH
体1	1	41	西	義西	ニシ	陽去 陰平	HM*	HH・HH・HH
体1	1	295	穀	暮米	モミ	陽去 陽上	HM*	HH・HH・HH
体2	2	34	石	依水	イシ	陰平 陰上	MH(MF)	HL・HL・HL
体2	2	233	磨刀石	依水	イシ	陰平 陰上	MH(MF)	HL・HL・HL
体2	2	9	雪	攸計 ⁽ⁱ⁾	ユキ	陰平 陰去	MH(MF)	HL・HL・HL
体2	2	2	日	虛路	ヒル	陰平 陽去	MH(MF)	HL・HL・HL
体2	2	15	午	非路	ヒル	陰平 陽去	MH(MF)	HL・HL・HL
体2	2	165	唱	嘔大	ウタ	陰平 陽去	MH(MF)	HL・HL・HL
体2	2	236	紙	措袂	カミ	陰平 陽去	MH(MF)	HL・HL・HL
体2		324	三	密子	ミツ	陽入 陰上	LR(LH)	HL・HL・HL
体3	3	215	足	挨身	アシ	陰平 陰平	MH(MF)	LL・HL・HL
体3	3	275	錦	歪帶	ワタ	陰平 陰去	MH(MF)	LL・HL・HL
体3	3	22	明日	挨速	アス	陰平 陰入	MH	LL・HL・HL
体3	3	59	父	阿爺	オヤ	陰平 陽平	MH(MF)	LL・HL・HL
体3	3	240	墨	踈煤	スミ	陰平 陽平	MH(MF)	LL・HL・HL
体3	3	219	髮	楷謎	カミ	陰平 陽平	MH(MF)	LL・HL・HL
体3	3	243	鑰匙	坑其	カギ	陰平 陽平	MH(MF)	LL・HL・HL
体3	3	315	馬	烏馬	ウマ	陰平 陽上	MH(MF)	LL・HL・HL
体3	△	3△	珠	他壳	タマ	陰平 陽去	MH(MF)	LL・HL・HL
体3	3	291	米	科媚科媚	コメコメ	陰平 陽去	MH(MF)	LL・HL・HL
体3	×	312	猪	豕豕	シシ	陰上 陰上	FL*	LL・HL・HL
体3	3	311	狗	意奴	イヌ	陰去 陽平	HM*	LL・HL・HL
体3	3	10	霜	碎滿	シモ	陰去 陽上	HM*	LL・HL・HL
体3	×	298	肉	恕恕	シシ	陰去 陰去	HM*	LL・HL・HL
体3	3	272	靴	骨都	クツ	陰入 陰平	HL(HM)*	LL・HL・HL
体3	3	3	月	禿計	ツキ	陰入 陰去	HL(HM)*	LL・HL・HL
体3	3	30	地	禿智	ツチ	陰入 陰去	HL(HM)*	LL・HL・HL
体3	3	289	塩	失河	シオ	陰入 陽平	HL(HM)*	LL・HL・HL
体3	3	220	肚	發頼	ハラ	陰入 陽去	HL(HM)*	LL・HL・HL

体3	3	31	山	羊売	ヤマ	陽平	陽去	LF(LH)	LL・HL・HL
体3	3	221	指	尤皮	ユビ	陽平	陽平	LF(LH)	LL・HL・HL
体3	3	210	耳	眉眉	ミミ	陽平	陽平	LF(LH)	LL・HL・HL
体3	3	231	弓	油米	ユミ	陽平	陽上	LF(LH)	LL・HL・HL
体3△	3△	297	萱	磨米	マメ	陽平	陽上	LF(LH)	LL・HL・HL
体4	4	33	海	烏彌	ウミ	陰平	陽平	MH(MF)	LH・LH・LH
体4	4	307	瓜	烏里	ウリ	陰平	陽上	MH(MF)	LH・LH・LH
体4	4	296	羹	水路	シル	陰上	陽去	FL	LH・LH・LH
体4	4	263	筋	法水	ハシ	陰入	陰上	HL(HM)*	LH・LH・LH
体4か		60	母	発発	ハハ	陰入	陰入	HL(HM)*	LH・LH・LH
体4	4	248	針	法利	ハリ	陰入	陽去	HL(HM)*	LH・LH・LH
体4	4	290	醬	彌沙	ミソ	陽平	陰平	LF(LH)	LH・LH・LH
体4	4	303	松	埋止	マツ	陽平	陰上	LF(LH)	LH・LH・LH
体4	4	48	錢	前移	ゼニ	陽平	陽平	LF(LH)	LH・LH・LH
体4	4	246	船	浮泥	フネ	陽平	陽平	LF(LH)	LH・LH・LH
体4	4	276	襖衫	迷奴	ミノ	陽平	陽平	LF(LH)	LH・LH・LH
体4	X4.5	14	夜	搖落	ヨル	陽平	陽入	LF(LH)	LH・LH・LH
体4	5	213	眉	売	マイ	陽去		l3	LH・LH・LH
体5	5	7	雨	挨迷	アメ	陰平	陽平	MH(MF)	LF・LF・LF
体5	5	247	鑊	難皮	ナベ	陽平	陽平	LF(LH)	LF・LF・LF
体5	5	83	女婿	木哥	ムコ	陽入	陰平	LR(LH)	LF・LF・LF
体5	5	82	姐夫	木哥迷	ムコ△	陽入	陰平	LR(LH)	LF・LF・LF
体	5*	61	兄	挨尼	アニ	陰平	陽平	MH(MF)	LF・LF・LF
体	3*	98	外甥	萌哥	マゴ	陽平	陰平	LF(LH)	LL・HL・HL
体	補3	334	百	法古	ヒヤク	陰入	陰上	HL(HM)*	HL
体	補	138	不在	論速	ルス	陽去	陰入	LH	HL
体		331	十	多	トオ	陰平		53	HL/HH
体		118	不要	依也	イヤ	陰平	陽上	MH/MF	HH/HL
体		286	飯	蜜黍	メシ	陽入	陰上	LH	HL
動1	1	187	換	皆賀	カウ	陰平	陽去	MH(MF)	HL・HH・HH
動1	1	171	売	烏路	ウル	陰平	陽去	MH(MF)	HL・HH・HH
動1	1	177	買	加和	カウ	陰平	陽平	MH(MF)	HL・HH・HH
動1	1	185	哭	乃古	ナク	陽上	陰上	RM(RL)*	HL・HH・HH
動2	2	337	有	挨路	アル	陰平	陽去	MH(MF)	LF・LH・LH
動2	2	119	立	達子	タツ	陽入	陰上	LR(LH)	LF・LH・LH
動2	2	186	打	胡子	ウツ	陽平	陰上	LF(LH)	LF・LH・LH
動2	2	120	等待	埋祖	マツ	陽平	陰上	LF(LH)	LF・LH・LH
動2	2	126	看	迷路	ミル	陽平	陽去	LF(LH)	LF・LH・LH
動2	2	181	殺	其奴	キル	陽平	陽平	LF(LH)	LF・LH・LH
動		155	飲	那慕	ノム	陽去	陽去	LH(LF)	LF/LH
形		338	無	乃	ナイ	陽上		23	LH
副		361	未	慢大	マダ	陽去	陽去	LH(LF)	LH/HL

×：東京語で対応の例外をなす語。

△：京都語で対応の例外をなす語。(寄語解説における△は衍字を表わす)

*：平安朝の文献でまだ例証されていない語。

～か：類別にやや疑問を残すとき、及び院政期以前に確例を得られないにも関わらず、鎌倉期などの資料から類別を推定できる語。

X：類別を確定できないもの。可能性のある類別番号と併記。

補：金田一春彦「味噌よりは新しく茶よりは古い—アクセントから見た日本祖語と字音語—」(『月刊言語』1980.4)に付された「諸方言字音語アクセント対照表」所載の諸語。

【注】

(i) 9「雪」の「攸」は『広韻』では以母で、後に陽平になるはずである。しかし同音の「悠」は現在多くの方言においても陰平となっている。『洪武正韻』1375では「悠」、「攸」を影母にしているため、陰平である。『中州音韻』1503-1508では「攸」

が影母と以母の両方に現われている。さらにモレンドルフ 1901 もそれらを陰調と記録しているので、ここでは陰平とする。

終章

1. はじめに

もともと母語しか知らない者が異言語を学ぼうとする際、はじめて言語というものに気づき、目覚めることも多いであろう。言語学は、異言語を学ぶ人によって、その言語が学習され、記録されることに始まり、現在のような伝統を持つ専門的な学問に発展してきた。言語史の資料として、外国人の手により編纂された言語の学習書が大きな研究価値を持つことは、以上のような経緯を考えれば当然のことである。朝鮮人による日本語学習書にせよ、西洋人による日本語辞書や宣教関係書にせよ、また本論文で考察した中国人の日本語学習書にせよ、日本語音韻の研究上、資料的価値の高いものである。

ローマ字、すなわち表音文字で書かれたキリシタン資料は 16 世紀末の日本語音韻体系を知るための好資料である。しかしそれ以前、16 世紀初の音韻体系を知るには、明代の中国資料を利用するほかはない。過去、中国資料に関する先行研究は数多くあった。それに対して本論文は、近年の中国語の音韻研究、方言研究の成果を踏まえ、近代の中国方言資料を積極的に使用する。そのようにして資料の所拠言語を考察した上で、日本語音韻史上の 16 世紀における幾つかの大きな問題、例えば濁音に伴う鼻音、タ・ダ行における破擦音化、才段長音開合の混同、ハ行子音の移行などについて考察した。

2. 中国資料としての『日本国考略』

中国資料は朝鮮資料、キリシタン資料またロシア資料などと並んで、「外国資料」と呼ばれている。しかし、同じ外国資料とはいえ、写音の媒体が漢字であるという点において、他資料の表音文字とは本質的に異なるところがある。また、特に音韻研究のためには、音注漢字が準拠する中国の方言、すなわち所拠言語を、まず明らかにしなければならない。本論文では多くの中国資料について、その音注漢字に見られる特徴から、所拠言語を同定し、確認を行った。そして中国語学の方言分類（七大方言）の基準により、中国資料を北方方言に準拠するものと呉方言に準拠するものとの二種に分けた。例えば、呉方言の資料には、全濁字の保持や、匣母の弱化、日母と疑母の混同などが観察され、北方方言の資料には、全濁字の消失、疑母と影母の混同、微母の半母音化などが観察される。

ところで、所拠言語が粵方言とも言われる『日本一鑑』について考察したところ、実はその方言が徽州方言であった可能性が高い。『日本国考略』をはじめとする中国資料に関する先行研究をまとめてある点も今後の研究に役立つであろう。

『日本国考略』は 16 世紀の中国資料の中では、その成立時期や所拠言語を確認できる最も早期の資料である。その写音は一つの仮名に複数の音注漢字を当てており、一定の写音規則によらないことが他の中国資料に比べて音韻資料としての価値が高いところである。これらは本論文において『日本国考略』を中心的な研究対象とした理由である。

その成立背景から言えば、16 世紀の明政府にとって倭寇の侵害が大きな治安問題であり、防衛上の理由から、明政府は海禁政策の施行とともに、日本を含む外国に対して勘合貿易を行っていた。そうした中 1523 年、大内氏と細川氏により『日本国考略』の編纂理由となる寧波の乱が起きた。

編纂者の薛俊は寧波府定海県の人である。寧波の乱の直後に定海県知事鄭余慶の令を受け、わずかの時間で『日本国考略』の編纂を完成させた。本書に収録された日本語の数は365語で、『日本館訳語』や『日本風土記』ほどには多くないが、それを転載した後世の書物が十数冊もある。本論文は、初版を失った『日本国考略』の寄語を校訂するため、これらの書物の間にある継承関係を明確にした。

『日本国考略』の所拠言語については呉方言であると判断されるが、呉方言の使用地域は広く、下位方言が複数存在していて方言間の音韻的差異も大きい。それゆえ、所拠言語をさらに狭い範囲に限定して、下位方言の同定が必要になる。編纂者の出身地によれば、『日本国考略』の所拠言語は寧波方言の可能性が高いが、それだけでは十分な根拠とならない。

寧波方言が所属する甬江方言には幾つの特徴がある。まず第一は、效・流・咸・深・山・臻・宕（知組）・曾の諸撰における知章組の字が細音字であり、同韻の精見組の字と合流している。この特徴は『日本国考略』にも見られる。例えば、289「塩 収河（シオ）」を見ると、呉方言の多くでは「収」の主母音が広母音あるいは半広母音であるので、イ段のシには相応しくない音である。その点、寧波方言のそれは[cy]であり、シに当てることが可能である。第二は後部歯茎音が音注漢字に見られ、それが19世紀の寧波西洋人資料のローマ字に対応していること。第三は『日本国考略』でルに泥母字「奴」を、又に来母字「路」を当てていること。この合口細音における鼻音と流音の混同は現在寧波周辺地域に保持されているが、他の呉方言には見られないこと。第四は「環」という字をワ行に当てていること。多くの呉方言においては「環」が[g]で現れるが、[h]で現れるのは寧波を含む、少数の南部の地域である。以上の四つの理由により、『日本国考略』の所拠言語は寧波方言であることが明確になる。また、寧波方言の音韻特徴から、先行研究による寄語の解説案を改めて検討した。

3. 所拠言語である寧波方言

中国資料による日本語音韻の研究のためには、寧波方言の音韻史を把握する必要がある。現在唯一利用できる資料は19世紀の西洋人が残した幾つかのローマ字資料である。それによって19世紀寧波方言の音韻体系を再構することは、日本語音韻の研究の基礎的研究でもある。再構したその音韻体系を見ると、果撰と遇撰の母音はそれぞれ[o][u]であり、現代においてもそれらは混同されていない。従って、寄語に見られるオ段とウ段の乱れは母音交替である可能性も十分ある。しかし一方、イ段とエ段の音注漢字の乱れは寧波方言の側の問題であり、寧波方言にそれに近い韻母に[-i]一つしかないことに起因する。

もちろん『日本国考略』により16世紀の寧波方言の姿を窺うこともできる。例えば、日本語のシ・セ及びその濁音を写す音注漢字には同じ類の声母のものが高い使用率を示しており、サ・ス・ソ及びその濁音を写す音注漢字とは異なる。この類のものは19世紀寧波西洋人資料にshなどと表記され、sなどの子音と区別されていた。それは後部歯茎音[j]と再構することができる。これを要するに、『日本国考略』に反映したシ・セの子音は『日葡辞書』でxで表わされた子音と合致し、そのことから逆に、16世紀の寧波に後部歯茎音が存在したことを証明することもできる。

4. 日本語音韻史におけるいくつかの問題

中世以前の濁音に鼻音性があったことはよく知られている。ただし、朝鮮資料や、キリシタン資料からその音価を説明することは難しい。中国資料でも所拠言語がはっきりしていない場合には、その問題を解くことは困難である。本論文では寧波方言の再構音をもとに濁音の前の音節にあたる漢字を調べてみた。その結果ガ行音の前には必ず[ŋ]韻尾の漢字が使われていることが明らかになった。寧波方言には疑母[ŋ]と群母[g]があるにもかかわらず、それらの漢字がガ行音に使用されないことから、ガ行音に伴う鼻音は入り渡り鼻音[m̥]であることが言えるのである。ダ行・ザ行・バ行においても同じようなことが観察されるため、それぞれに入り渡り鼻音[m̥]、[m̥]のあったことが推定される。

またハ行子音の移行[ɸ] > [h]が起こっていたように思わせる例が 16 世紀の中国資料と 17 世紀の朝鮮資料に見られる。そのため、ハ行子音の移行はこの時期においてすでに起こっていたとみる先行研究もある。しかし、中国資料の音注にある誤刻を排除すれば（例えば、357「要緊 馬多拿（マツナ）」の「拿」を「合手」と誤る）、すべての中国資料に現れるハ行子音にあたる漢字は①軽唇音[tʰ]、②重唇音[p][pʰ]、③[h][ɦ]+円唇母音、という三つの場合に限られている。移行と思わせる例は③のパタンによって写音されており、これは聴覚的に[ɸ]に近く聞こえるものである。さらにこのことは中国資料だけでなく、朝鮮資料にも共通する。すなわち、『捷解新語』ではㅎ[h]と円唇母音의[u]やㅓ[o]を以てフ・ホを写しているのである。この写し方はフ・ホの子音が[ɸ]であったことを意味する。したがって、これまで問題にされてきたハ行子音の移行の時期についての疑問は解決される。

さらに室町時代に起こったタ・ダ行の破擦音化の問題については、従来、チ・ヂの破擦音化は[i]の調音位置に相当する渡り音[tʃ][dʒ]が添加されたとするのに対し、ツ・ヅの破擦音化は[ɰ]の調音位置に相当しない渡り音[sʃ][zʒ]が添加されたと説明され、調音音声学的に理解しにくいものであった。しかし、それについても、中国語学において用いられる舌尖母音[ɰ]を導入することで適確に解釈することができるようになるのである。[ɰ]は舌尖の関与する母音で、IPA には登録されていないが、日本語のス・ズ・ツの母音がそれだと指摘する先行研究、例えばカールグレン 1915 や上村幸雄・高田正治 1990 などがある。室町時代においてもツ・ヅが[tʃ]と[dʒ]で実現していたことが、『日本国考略』『日本館訳語』から推測される。そうであるとすれば、母音の調音位置が子音と一致することにより、摩擦音[sʃ][zʒ]が添加されやすくなると説明できる。さらに、母音[ɰ]の介在は日本語の狭母音の無声化や脱落を説明する上にも有効であると思われ、[ɰ]という母音及びその記号の承認は必要なことである。

この時代におけるもう一つの音韻変化は、オ段長音の開合が混同したことである。オ段長音に開合の別があることはキリシタン資料、謡曲伝書及び仮名遣書などにより認められている。その音韻変化の過程についてはすでに先行研究で一応の説明がなされているが、中国資料はまだ検証の余地を残している。筆者は『日本国考略』と『日本館訳語』の音注漢字の音価から、開合の対立が音声的な対立に止まり、音韻上の対立にまで至っていなかったという結論を得た。中国資料に見られるように、アウ連母音は長音化を起し、[ɑ:]として実現されていたが、音韻上[o:]と対立せずに、一部の常用語彙や動詞意志形において早く[o:]へ合流したと考える。このことは五母音体系を持つ日本語にとってより自然な

音声現象であろう。また連母音の長音化の順序については、先行研究の言うようにアウ・アオが先にオーとなってから、オウ・オオがオーと変化するのではなく、それとは逆にオウ・オオにおける長音化がアウ・アオのそれより先に起こったことを、中国資料の考察や音変化の一般的理論から解釈した。

ほかに、韻律の問題についても考察した。それは声調言語を母語とする中国人が日本語を写音する際に、アクセントも自然に認識するのではないかということにはじまる。ただし、中国語音韻史においても声調調値の問題はかなりの難問である。ここでは寧波方言の声調の再構にあたって、単字調と二音節語の連続変調を考察してみた。単字調についてはパーカー1884の記述に基づいて、西洋人が記録した温州・福州・広東・北京などの単字調により調値の復元を試み、二音節語の連続変調については、モリソンの辞書に記録された二音節語を1400語抽出し、そこに記録された声調の高低変化を調べることにした。それによって19世紀の単字調の体系と二音節語の連続変調を知ることができた。それとの対応を見ていくと、『日本国考略』の記録した日本語の一・二拍語に京阪式アクセントが反映していること、また音注漢字に入声字が使用されていることや清音に対して全濁字が使用されていることにも、アクセントの関与していることが分かってきた。

5. 終りに

最後に日本語音韻史上における中国資料の位置付けについて考えてみたい。

中国資料は外国資料の中で唯一、非表音文字によって日本語を写音したものである。従って音注漢字の音声を究明することはこの研究において避けて通れない問題であり、問題解決の突破口でもあると思われる。資料の欠如などの理由で16世紀寧波方言の音韻体系をすべて明らかにすることはできないが、ここでは現存の方言資料により、少しでもその時代に近い音韻状態に近づくことを目指した。そのようにして分かってきた所抛方言の音韻状態に基づいて分析と考察を行ったところ、日本語音韻史上のいくつかの問題に他の外国資料からは分からなかった発見があり、また先行研究の所説とは異なる解釈を提示することができた。

当然ながら中国語、または寧波方言の音韻・音声は、韓国語やポルトガル語のそれと異なっている。とくに声調を持つのが中国語の特徴であるから、音注漢字の声調とアクセントとの対応に注目するのは当然である。また寧波方言は疑母[ŋ]と群母[g]を持つので、考察を重ねるとガ行音の鼻音的要素が[ŋ]であることを証明できる。また、寧波方言の韻母には[ao][ɔ][o]があるので、開合の統合を分析するのに都合がよかった。これらは、中国資料が日本語音韻史の資料として極めて重要であることを示している。また16世紀前半に成立したという点においても研究上の価値が高い。

また、本論文は、中国語音声音韻学の成果を踏まえて、日本語音韻の諸問題に新たな解釈を与えようとしたものである。日本語のス・ズ・ツの母音が中国語の[ɿ]であると述べた先行研究があるが、母音[ɿ]はIPAの体系外にあり、あまり関心を呼ばなかったのではないと思われる。しかし20世紀初頭を振り返ると、当時における日本の中国語学習書や中国の日本語学習書では、ス・ズ・ツの母音と中国語の[ɿ]とを同一の母音として教えていた。20世紀半ばの有坂秀世、服部四郎も、その近似性について言及している。つまり20世紀前半、日中両言語の言語教育においてはこれらの母音の近似性に対する認識は一般的

であったろう。しかし現在ではそれについての議論さえ少ない。この音声認識が衰退した原因は、20 世紀以来の IPA 記号の普及及びヨーロッパの諸言語を中心とした音声学の発展にあると思われる。中国資料による日本語音韻の研究は、音韻史上の問題を解決するだけでなく、その音声学的方法の導入という点においても再び注目されてよいものであろう。

以上、本論文によって、16 世紀前半における日本語音韻の輪郭と特徴、及び今まで不明であった箇所が明らかになれば、当初の目的はほぼ達せられたと言えよう。

【参考文献】

- 青井隼人 2012 「宮古多良間方言における『中舌母音』の音声的解釈」『言語研究』142
- 赤松祐子 1988 『『日本風土記』の基礎音系』『国語国文』57(12)
- 秋永一枝他 1997 『日本語アクセント史総合資料 索引篇』東京堂出版
———1998 『日本語アクセント史総合資料 研究篇』東京堂出版
- 秋山謙蔵 1933 「明代に於ける支那人の日本語研究」『国語と国文学』10(1)
- 浅井恵倫 1940 「校本日本訳語」『安藤教授還暦祝賀記念論文集』三省堂
- 有坂秀世 1936 「国語の「ス」の母音と支那語の「四」の母音」『音声学協会会報』40
(有坂秀世 1989 所収)
- 1938 「江戸時代中頃に於けるハの頭音について」『国語と国文学』15(10) (有坂秀世 1957 所収)
- 1950 「書史会要の『いろは』音注について」『言語研究』16 (有坂秀世 1957 所収)
- 1957 『国語音韻史の研究』増補新版、三省堂
- 著、有坂愛彦・慶谷寿信編 1989 『有坂秀世言語学国語学著述拾遺』三省堂
- 伊波普猷 1932 「『日本館訳語』を紹介す」『方言』2(9) (伊波普猷 1934 所収)
- 1934 『南島方言史攷』 楽浪書院
- 今泉忠義 1968 『日葡辞書の研究 音韻』桜風社
- 今西春秋 1936.8-1938.4 「日本図纂中の日本寄語」『東洋史研究』2-4
- 上村幸雄 1992 「ワークショップ：新しい IPA による日本語標記について」『音声学協会会報』201
- 2000 「琉球語音声学の概説」『音声研究』4(1)
- 上村幸雄、高田正治 1990 『日本語の母音、子音、音節』(国立国語研究所報告 100)
- 上野善道 1989 「音韻総覧」『日本方言大辞典 下巻』小学館
- 袁家驊 2001 『漢語方言概要』第二版語文出版社
- 遠藤光暁 2011 「主要著作および『長田夏樹論述集』紹介と書評」『長田夏樹先生追悼集』好文出版
- 大島正二 1972 「『琵琶記』の用韻に反映した元末呉方言—その音韻体系の一端について—」『東洋学報』54 (4)、
- 大塚光信 1982 「開合音—キリシタン版の表記をめぐって—」『文学』50(1)
- 大友信一 1957 「『捷解新語』による国語音の研究」『文化』21(4)
- 1959 「『日本図纂』『籌海図篇』の諸本とその成立事情」『日本歴史』132
- 1962 「『四つ仮名』混同の音声事情」『国語学研究』2
- 1963 『室町時代の国語音声の研究』至文堂
- 大友信一・木村晟 1968 『日本館譯語 本文と索引』洛文社
- 1972 『東語入門 本文と索引』汲古書院
- 1974 『日本一鑑 本文と索引』笠間書院
- 1982 『日本一鑑〔名彙〕本文と索引』笠間書院

- 1982 『吾妻鏡補所載 海外奇談国語解 本文と索引』汲古書院
- 大野眞男他 2000 「南琉球方言の中舌母音の音声実質」『音声研究』4(1)
- 汪平 1990 「寧波方言連調的探討」『語言研究』No.2
- 王萍他 2010 「元音的三維空間」『当代語言学』(3) (石鋒 2012 所収)
- 王森 趙則玲 2009 「奉化方言同音字彙」『台州学院学報』Vol.31 No.2
- 岡田秀穂 1993 「JIPA (国際音声学協会機関誌) 掲載の日本語記述の出来るまで」『音声学会会報』204
- 小川環樹 1947 「書史会要に見える『いろは』の漢字対音について」『国語国文』16(5) (小川環樹 1977 所収)
- 1977 『中国語学研究』創文社
- 沖森卓也 2010 『はじめて読む日本語の歴史』べし出版
- 奥村和子 1991 「ハ行子音の音価と表記: 朝鮮資料『捷解新語』を中心に」『文献探究』27
- 奥村三雄 1974 「第二章 古代の音韻」『音韻史・文字史』(講座国語史 2) 中田祝夫編、大修館
- カールグレン 1915-26 *Études sur la phonologie chinoise, Archives d'études orientales.* (趙元任 他訳 1940 『中国音韻学研究』商務印書館)
- 加藤知己・倉島節尚 1998 『幕末の日本語研究 S.R.ブラウン会話日本語: 複製と翻訳 研究』三省堂
- 2000 『幕末の日本語研究 W.H.メドハースト英和・和英語彙: 複製と研究・索引』三省堂
- 加藤正信 1967 「方言の実態と共通語化の問題点: 新潟」『東部方言』(方言学講座 2) 東京堂
- 金子弘 1999 「リギンズのローマ字転写法と三つ仮名表記」『日本語日本文学』9
- 金子和正 1958 「籌海重編の紹介」『ビブリア』12
- 神山孝夫 2012 『ロシア語音声概説』研究社
- 亀井孝 1955 「室町時代末期の ϕ に関するおぼえがき」『国語研究』3 (亀井孝 1984 所収)
- 1962 「『オ段の開合』の混乱をめぐる一報告」『国語国文』31(6) (亀井孝 1984 所収)
- 1963 「『オ段の開合』の混乱をめぐる一報告補訂」『国語国文』32(5) (亀井孝 1984 所収)
- 1984 『日本語のすがたところ (一)』(亀井孝論文集 3) 吉川広文館
- 亀井孝他 1996 『言語学大辞典 第6巻 術語編』三省堂
- かりまたしげひさ 1986 「宮古方言の『中舌母音』をめぐる」『沖縄文化』66
- 川上蓁 1980 「アプからオーまで」『国学院雑誌』81(7)
- 韓沛玲 2009 「山西方言中非常態舌尖元音韻母」『語言研究』8(4)
- 神戸輝夫 2000 「鄭舜功著『日本一鑑』について (正): 「桴海図経」と「絶島新編」」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』22(1)
- 2000 「鄭舜功著『日本一鑑』について (続): 「窮河話海」」『大分大学教育福

祉科学部研究紀要』22(1)

- 木津祐子 1994 『『日本寄語』所反映の明代吳語声調』『中国境内語言暨語言学』第二輯、中央研究院歷史語言研究所出版品編輯委員會編
- 木村晟・李俊生 1973 『『東語入門』略注』『駒澤大學外国語部研究紀要』2
- 木村一・鈴木進 2013 『J.C.へボン和英語林集成手稿 翻字・索引・解題』三省堂
- 許宝華・陶寰 1997 『上海方言詞典』(現代漢語方言大詞典 分卷)江蘇教育出版社
- 京都大学文学部国語学国文学研究室 1958 『捷解新語 本文索引解題』京都大学国文学会
- 1961 『日本風土記：全浙兵制考』京都大学国文学会
- 1965 『日本寄語の研究』京都大学国文学会
- 1968 『纂輯日本訳語』京都大学国文学会
- 剣持隼一郎 1983 「新潟県の方言」『中部地方の方言』(講座方言学 6) 国書刊行会
- 胡方 2001 「試論百年来寧波方言声母系統演變」『語言研究』(3)
- 黄曉東 2008 「浙江象山県爵溪“所里話”音系」『吳語研究 第四輯』上海教育出版社
- 黄曉東 2011 「浙江臨海方言音系」『方言』(1)中国社会科学院語言研究所
- 高志佩他 1991 「寧波方言同音字彙」『寧波大学学报 (人文科学版)』4(1)
- 耿振生 1992 『明清等韻学通論』語文出版社
- 國際音声学会編、竹林滋・神山孝夫訳 2010 『國際音声記号ガイドブック』大修館
- コリヤード著、大塚高信訳 1632 『コリヤード日本文典』風間書房
- 坂井健一 1970 「日本館訳語と日本一鑑にみられる近世方音の研究」漢学研究 7
- 1971 『明代日本語資料集成』汲古書院
- 坂井健一 木村晟 1975 『日本風土記・日本寄語・日本館訳語・琉球館訳語・朝鮮館訳語・日本一鑑 寄語対照手冊』近世中国における日本語研究会
- 坂本清恵 2002 「近代語の発音」『国語と国文学』79(11)
- 坂本清恵他 1998 『『早稲田語類』『金田一語類』対象資料』アクセント史資料研究会
- 崎山理 1963 「琉球宮古諸島方言比較音韻論」『国語学』54
- 佐久間鼎 1929 『日本音声学』京文社
- 佐藤昭 2002 『中国語語音史』白帝社
- 佐藤喜代治 1973 『国語史 下』桜風社
- 篠崎久躬 1997 『長崎方言の歴史的研究』長崎文献社
- 周祖謨 1966 「射字法與音韻」『間学集 下』中華書局
- シュテファン カイザー 2005 「Exercises in the Yokohama Dialect と横浜ダイアレクト」『日本語の研究』1(1)
- 蔣垂東 1994 『『日本館訳語』の「漢製和語」について』『森野宗明教授退官記念論集：言語・文学・国語教育』森野宗明教授退官記念論集編集委員会編、三省堂
- 1996a 『『日本館訳語』の基礎音系：疑母、微母とゼロ声母の關係を中心に』『国語学』184
- 1996b 「ロンドン大学本『日本館訳語』の識語をめぐって」『筑波日本語研究』

- 1997 『日本館訳語』の「エ」をめぐる『筑波日本語研究』2
- 1998 「ロンドン大学本『日本館訳語』に見る独自の用字法をめぐる『筑波日本語研究』3
- 1999 『日本館訳語』と近世北方音：声類篇『駿河台大学論叢』18
- 2000 『日本館訳語』と近世北方音：韻類篇『文教大学文学部紀要』14(1)
- 2001 『皇明馭倭録』の『寄語略』について『文教大学文学部紀要』15(1)
- 2010 『南村輟耕録』所載「射字法」から見た『書史会要』の「いろは」音注『古典語研究の焦点』月本雅幸他編、武蔵野書院
- 徐通鏘 1989 「変異中的時間と語言研究」『中国語文』(2) (徐通鏘 1993 所収)
- 1990 「百年來寧波音系の演變」『語言学論叢』16 (徐通鏘 1993 所収)
- 1993 『徐通鏘自選集』河南教育出版社
- 鋤田智彦 2013 『満文三国志』二本における漢字音表記の差異について『水門：言葉と歴史』22
- 杉藤美代子 1969 「東京大阪における無声母音について」『音声の研究』14
- 杉本つとむ 1999 『西洋人の日本語研究』(杉本つとむ著作集 10) 八坂書房
- 石汝傑 2011 「艾約瑟『上海方言語法』同音字表」『熊本学園大学 文学・言語学論集』18(1)
- 石鋒 2012 『語音平面実験録』北京語言大学出版社
- 錢曾怡 2010 『漢語官話方言研究』齊魯書社
- 錢乃榮 1992 『当代吳語研究』上海教育出版社
- 2003 『上海語言發展史』上海人民出版社
- 曹志耘 2002 『南部吳語語音研究』商務印書館
- 曹志耘他 2000 『吳語處衢方言的研究』(『中国語学研究 開篇』単刊 12) 好文出版
- 高松義雄訳 1969 『エドワーズ 日本語の音声学的研究』恒星社厚生閣
- 高山知明 2009 「タ行ダ行破擦音化の音韻論的特質」『金沢大学国語国文』34
- 高山倫明 1998 「翁広平『吾妻鏡補』所載日本語史資料試解(一)」『文学研究』95
- 1999 「翁広平『吾妻鏡補』所載日本語史資料試解(二)」『文学研究』96
- 2000 「翁広平『吾妻鏡補』所載日本語史資料試解(三)」『文学研究』97
- 2001 「翁広平『吾妻鏡補』所載日本語史資料試解(四)」『文学研究』98
- 2012 『日本語音韻史の研究』ひつじ書房
- 武井睦雄 1960 「朝鮮板『伊呂波』に於ける『ほ』の仮名について」『国語学』40
- 竹林滋 1996 『英語音声学』研究社
- 田中健夫 1953 「籌海図編の成立」『日本歴史』57
- 2012 『倭寇と勘合貿易』増補版、筑摩書房
- 趙蔭堂 1984 『中原音韻研究』新文豊出版公司
- 張群頤 1995 「北京話『知』『資』二韻國際音標写法商榷」『香港漢語語言学研究論文集』香港語言学学会
- 張竹梅 2007 『「中州音韻」研究』中華書局
- 趙元任 1928 『現代吳語的研究』清華学校研究院(科学出版社 1956 年版による)
- 陳曉 2013 「清朝の北京語の尖音団音について」『中国文学研究』39

- 鄭張尚芳 2008 『温州方言志』 中華書局
- 丁鋒 1995 『琉漢對音與明代官話音研究』 中國社會科學出版社
- 2000 『『書史會要』所記日語假名歌對音反映的十四世紀吳語音韻』『中國音韻學研究會第十一屆學術研討會論文集』 香港文化教育出版有限公司
- 2001 『『同文備考』音系』 中國書店
- 2004a 『『The Ningpo Syllabary』所附百年前吳語紹興方言羅馬字音』『熊本學園大學文學・言語學論集』 10(2)/11(1)
- 2004b 『『日本考略・寄語略』反映的十六世紀吳語音韻』『海外事情研究』 32(1)
- 2005 『『遊歷日本図経・方言』の日漢對音に見える吳、四川、北京三方言の音声』『熊本學園大學文學・言語學論集』 12(2)
- 2008 『日漢琉球對音與明清官話音研究』 中華書局
- 丁邦新 1984 「吳語聲調之研究」『歷史語言研究所集刊』 No.55
- 2003 『一百年前的蘇州話』 上海教育出版社
- 湯珍珠他 1990 「寧波方言（老派）的單字調和兩字組變調」『語言研究』 No.1
- 1997 『寧波方言詞典』（現代漢語方言大詞典 分卷）江蘇教育出版社
- 藤堂明保 1959 「吳音と漢音」『日本中國學會報』 11（藤堂明保 1993 所収）
- 1960 「ki-と tsi-の混同は 18 世紀に始まる」『中國語學』 1（藤堂明保 1993 所収）
- 1966 「北方話音系的演變」『中國語學』 7
- 1980 『中國語音韻論：その歷史的研究』 光生館
- 1993 『藤堂明保中國語學論集』 汲古書院
- 豐島正之 1984 『『開合』に就て』『國語學』 136
- 外山映次 1974 「近代の音韻」『音韻史・文字史』（講座國語史 2）大修館
- 中野美代子 1960 「日本寄語による十六世紀定海音系の推定」『東方學報』 28
- 日本イエズス會編、土井忠生他訳 1980 『邦訳日葡辭書』 岩波書店
- 日本音聲學會 1976 『音聲學大辭典』 三修社
- 長田夏樹 1965 『『日本風土記』における日本語のアクセント表記について』『久重福三郎・坂本一郎先生還曆記念中國研究』（長田夏樹 2000 所収）
- 2000 『長田夏樹論述集（上）』 ナカニシヤ出版
- 橋本進吉 1928 「吉利支丹教義の研究」『東洋文庫論叢 9』（『キリシタン教義の研究』 岩波書店 1961 所収）
- 1950 『國語音韻の研究』 岩波書店
- 1966 『國語音韻史』 岩波書店
- 服部四郎 1951 『音聲學』 岩波書店（新版 1984）
- 浜田敦 1940 「國語を記載せる明代支那文献」『國語國文』 10(7)（浜田敦 1986 所収）
- 1951 「日本寄語解讀試案」『人文研究』 2(1)（京都大學文學部國語學國文學研究 1965 所収）
- 1952 「撥音と濁音との相關性の問題」『國語國文』 21(3)（浜田敦 1984 所収）。
- 1952 「弘治五年朝鮮板『伊呂波』諺文對音攷：國語史の立場から」『國語國文』 21(10)（浜田敦 1970 所収）

- 1955 「国語音韻体系における長音の位置」『国語学』32（浜田敦 1983 所収）
- 1956 「日本風土記山歌註解」『京都大学文学部五十周年記念論文集』（浜田敦 1986 所収）
- 1962 「外国資料」『国語国文』35(6)（浜田敦 1970 所収）
- 1967 「シナ資料」『纂輯日本訳語』（浜田敦 1986 所収）
- 1970 『朝鮮資料による日本語研究』岩波書店
- 1983 『朝鮮資料による日本語研究 続』臨川書店
- 1984 『日本語の史的研究』臨川書店
- 1986 『国語史の諸問題』和泉書院
- 肥爪周二 2007 「ハ行音・バ行音・パ行音」『日本語学研究事典』飛田良文編、明治書院
- 平田直子 2005 『『古今韻表新編』的音系』『呉語研究』3
- 平田昌司 1998 『徽州方言研究』（中国語学研究 開篇 単刊 9）好文出版
- 武安隆・熊達雲 1998 『中国人の日本研究史』（東アジアのなかの日本歴史 12）六興出版
- 福島邦道 1959 『『日本寄語』語解』『国語学』36
- 1979 「音韻資料としての日本風土記」『日中語文交渉史論叢：渡辺三男博士古稀記念』渡辺三男博士古稀記念論文集刊行会編、桜楓社
- 1993 『日本館訳語攷』笠間書院
- 福盛貴弘 2010 『基礎からの日本語音声学』東京堂
- 傅国通他 1985 『浙江呉語分区』浙江省語言学会編委会、浙江省教育庁方言研究室
- 古屋昭弘 1982 『『度曲須知』に見る明末の呉方言』『人文学報』156
- 1984 「説唱詞話『花關索傳』と明代の方言』『中国文学研究』10
- 1986 「明刊説唱詞話 12 種と呉語』『中国文学研究』12
- 方松熹 1993 『舟山方言研究』社会科学文献出版社
- 方松熹 1996 「岱山方言研究（一）」『舟山師專学報（社会科学版）』
- 馬之濤 2012 『『日本考略』に見るガ行音について』『早稲田日本語研究』21
- 2013a 『『書史会要』與『日本考略』中所見呉方言的舌葉音』『黄典誠教授百年誕辰紀念文集』葉宝奎・李無未編、廈門大学出版社
- 2013b 『『日本考略』に見られる寄語のアクセント』『論集』9
- 馬之濤・屠潔群 2013 「訳註『寧波土話初学』（一）」『中国語学論集 開篇』32
- 2014 「訳註『寧波土話初学』（二）」『中国語学論集 開篇』33
- 松本宙 1977 「ハ行音・バ行音・パ行音」『国語学研究事典』佐藤喜代治編、明治書院
- 松本丁俊・丁鋒 1997 『『日本館譯語』中日対音考釈』『論集』45 駒澤大学
- 1998 『『日本風土記・語音』中日対音考釈』『論集』47 駒澤大学
- 馬淵和夫 1994 『五十音図の話』大修館書店
- 丸山徹 1981 「中世日本語のサ行子音：ロドリゲスの記述をめぐって』『国語学』124
- 宮島達夫 1961 「母音の無声化はいつからあったか』『国語学』45
- 森田武 1957 「捷解新語解題』『捷解新語 本文索引解題』京都大学国文学会
- 1993 『日葡辞書提要』清文堂

- 安田章 1980a 『朝鮮資料と中世国語』 武蔵野書院
 ——1980b 「中国資料の背景」『国語国文』 49(9)
 ——1993 「外国資料の陥穽」『国語国文』 62(8) (安田章 1996 所収)
 ——1996 『国語史の中世』 三省堂
 游汝傑 1997 「古文獻所見吳語的鼻音韻尾和塞音韻尾」『橋本萬太郎紀念中国語学論集』 内山書店 (游汝傑 1999 所収)。
 ——1999 『游汝傑自選集』 广西師範大学出版社
 ——2002 『西洋伝教士漢語方言学著作書目考述』 黑龍江教育出版社
 楊威 2011 「從遺忘到真實：英国漢学家庄延齡研究」 福建師範大学修士論文
 葉宝奎 2001 『明清官話音系』 廈門大学出版社
 李俊生 1979 「日本一鑑寄語語音考」『渡邊三男博士古稀記念日中語文交渉史論叢』 桜楓社
 李基文著、藤本幸夫訳 1975 『韓国語の歴史』 大修館
 劉民綱 2010 「趙元任『現代吳語的研究』所記聲調的轉写」『吳語研究第五輯』 上海教育出版社
 林慶勳 1992 「試論『日本館訳語』的韻母对音」『高雄師大學報』 3
 ——1993 「試論『日本館訳語』的声母对音」『高雄師大學報』 4
 ——1996 「『日本館訳語』的柳崖音注」『声韻論叢』 5
 魯国堯 1988 「『南村輟耕録』與元代吳方言」『中国語言学報』 3 (魯国堯 1994 所収)
 魯国堯 1994 『魯国堯自選集』 河南教育出版社
 ロドリゲス著、土井忠生訳註 1955 『日本大文典』 三省堂
 渡邊三男 1943 『訳註日本考』 大東出版社 (『新修訳註日本考』 新修版、新典社 1985)
 ——1955 「明末の日本紹介書『日本一鑑』について」『駒澤大学研究紀要』 13
 ——1960 「華夷譯語および日本館譯語について」『駒澤大学文学部研究紀要』 18
 ——1961 「華夷譯語および日本館譯語について (承前)」『駒澤大学文学部研究紀要』 19
 ——1962 「吾妻鏡補所引の日本語彙：校本『海外奇談国語解』」駒澤大学文学部研究紀要 20
 渡邊三男他 1975 『遊歴日本図経 本文と索引』 笠間書院
 ——1984 『日本風土記 本文と索引』 小林印刷出版部
 Edkins, J. 1882 A Chinese and Japanese Vocabulary of the Fifteenth Century, with Notes, Chiefly of Pronunciation, *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, X.
 Jones, Daniel. & Woo, Kwing Tong. 1912 *A Cantonese Phonetic Reader*, London:University Of London Press
 Parker, E. H. 1880 Syllabary Of The Hakka Language Or Dialect, *China Review*, 8(4), Shanghai: Kelly & Walsh
 ——1884 The Ningpo Dialect. *China Review*, 13(3), Shanghai: Kelly & Walsh
 Satow, E. M. 1882 Notes on Dr.Edkins' Paper A Chinese-Japanese Vocabulary of the Fifteenth Century. *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, X.

【資料文献】

- 市川清流編 1878、佐伯富校正 1976 『雅俗漢語訳解』 同朋舎出版部
- 井上翠 1907 『東語会話大成』 国文堂
- 王宥電 1540 『同文備考』 (〈四庫全書存目叢書・經部〉 第 0189 冊、齊魯書社 1997)
- 王鶴鳴 2008 『中国家譜総目』 上海図書館
- 王士騏 1596 『皇明馭倭録』 明万曆刻本、中国基本古籍庫 v7.0
- 王照 1900 『官話合声字母』 (『官話字母読物 八種』 〈拼音文字史料叢書〉 文字改革出版社 1957 参考)
- 王鳴鶴 1599 『登壇必究』 万曆二十七年刻本 (〈中国兵書集成〉 解放军出版社・遼沈書社 1987 影印)
- 何愈・張時徹 1563 『定海縣志』 重修本 (〈天一閣藏明代方志選刊続編〉 29、上海書店 1990)
- 郭光復 1597 『倭情考略』 首都図書館藏旧鈔本 (〈四庫全書存目叢書・子部〉 第 0031 冊、齊魯書社 1995)
- 紀昀 1781 『四庫全書総目提要』 (全国漢籍データベースを使用)
- 仇廷模 1727 序 『古今韻表新編』 (〈罕見韻書叢編〉 長城 (香港) 文化出版公司 1995 所収)
- 許少峰 2008 『近代漢語大詞典』 中華書局
- 朱光家 1601 『字学指南』 (〈四庫全書存目叢書・經部〉 第 0192 冊、齊魯書社 1997)
- 周希哲・張時徹 1560 『寧波府志』 早稲田図書館蔵本
- 小学館国語辞典編集部 1989 『日本方言大辞典』 小学館
- 2006 『日本国語大辞典』 第二版、小学館 (ジャパンナレッジ : <http://japanknowledge.com/>参照)
- 新智社 1906 『東語完璧』
- 慎懋賞、明万曆 『四夷広記』 (〈玄覽堂叢書続集〉 国立中央図書館編 1985、正中書局)
- 薛俊 1530 『重刊日本考略』 (東洋文庫所蔵)
- 『重刊日本考略』 朝鮮本写本 (早稲田大学図書館所蔵)
- 『日本国考略』 重刊本写本、江戸中期? (東大史料編纂所蔵 No.4345-1)
- 『日本国考略』 重刊本写本、内閣文庫重刊寫本影印本 1974 (東大史料編纂所蔵 No.6145-5)
- 『日本国考略』 北京図書館藏明藍格鈔国朝典故本 1542 (〈四庫全書存目叢書・史部〉 第 0255 冊、齊魯書社 1997)
- 『日本国考略』 (〈国朝典故〉 鄧士龍編 1542、許大齡・王天有校正 1993、北京大学出版社)
- 『日本考略』 (〈得月簃叢書〉 榮譽編、清道光、〈叢書集成初編〉 商務印書館 1935-1937)
- 石汝傑・宮田一郎 2005 『明清吳語詞典』 上海辭書出版社
- 曹秉仁他 1731 『寧波府志』 乾隆六年補刊本 (〈中国方志叢書〉 成文出版社 1983-1989)
- 泰東同文局 1902 『東語初階』 国光社
- 1903 『東語真伝』 国光社

- 中国語学研究会 1969 『中国語学新辞典』 光生館
- 張元善・徐孝 1607 『合併字学集韻』（〈罕見韻書叢編〉 長城（香港）文化出版公司 1995 所収）
- 朝鮮総督府 1977 『朝鮮人名辞書』 第一書房
- 趙日新 2003 『績溪方言辞典』（現代漢語方言大詞典・分卷）李栄主編、江蘇教育出版社
- 鄭若曾 1561 『日本凶纂』（〈鄭開陽雜著〉 浙江巡撫採進本影印本、鄭起泓編、陶風樓 1932）
- 鄭若曾著、鄧鐘重輯 1594 『籌海重編』（〈四庫全書存目叢書・史部〉 第 0227 册、齊魯書社 1997）
- 鄭若曾著、李致忠點校 2007 『籌海図編』 中華書局
- 東京文求堂 1907 『東語自得指掌』 国光社
- 東条操 1951 『全国方言辞典』 東京堂
- 1954 『分類方言辞典：標準語引』 東京堂
- 陶宗儀 1376 『書史会要』 武進陶氏逸園景刊明洪武本（上海書店 1984 影印）
- 陶珽 1646 『説郭統』（〈異称日本伝〉 松下見林編、崇文軒 1693）
- 『説郭統』（〈説郭三種〉 明刻本影印本、上海古籍出版社 1988）
- 藤堂明保他 2007 『漢字源』 第四版、学研教育出版
- 中田祝夫 1974 『印度本節用集古本四種研究並びに総合索引』 勉誠出版
- 1979 『文明本節用集研究並びに索引 索引篇』 改訂新版、勉誠社
- 1979 『文明本節用集研究並びに索引 影印篇』 改訂新版、勉誠社
- 2009 『古本節用集六種研究並びに総合索引』 改訂新版、勉誠出版
- 日清語学会 1906 『日語新辞林』 高山房
- 波多野太郎 1964 『中国方志所録方言彙編 第二編』 『横浜市立大学紀要』 150
- 1965 『中国方志所録方言彙編 第三編』 『横浜市立大学紀要』 154
- 1968 『中国方志所録方言彙編 第六編』 『横浜市立大学紀要』 182
- 1969 『中国方志所録方言彙編 第七編』 『横浜市立大学紀要』 189
- 范濂 1602 『倭国事略』 国立中央図書館蔵明万曆 30 年浙江官刊本、（〈兩浙海防類考續編 三〉 劉兆祐編 1987、台湾学生書局影印）
- 平山輝男他 1994 『現代日本語方言大辞典』 明治書院
- 北京大学中国語言文学系語言学教研室 2003 『漢語方音字彙』 第二版重排版、語文出版社
- 茅元儀 1621 『武備志』 天啓初刻本（〈中国兵書集成〉 解放軍出版社・遼沈書社出版 1987、また〈続修四庫全書〉 上海古籍出版社 1995-2002）
- 1621 『武備志』 蓮溪草堂本
- 茅元儀著、鵜飼石斎訓點 1792 『武備志』 賭春堂
- 前田富祺 2005 『日本語源大辞典』 小学館
- 俞樾 1879 『鎮海県志』（〈中国方志叢書〉 183 成文出版社 1970-1989 所収）
- 蘭茂 1442 『韻略易通』（〈罕見韻書叢編〉 長城（香港）文化出版公司 1995 所収）
- 著者未詳 1492 『伊呂波』 弘治五年、香川大学図書館神原文庫蔵
- <http://www.lib.kagawa-u.ac.jp/www/kicho/iroha/iroha.html>[2013-2-1]

- 著者未詳 1574 『併音連声字学集要』(〈四庫全書存目叢書·經部〉第 0209 册、齊魯書社 1997)
- Alcock, R. 1863 *Familiar dialogues in Japanese with English & French Translations*, Paris-London: Benjamin Duprat-Trübner
- Atkinson, H. (Bishop of Homoco)1879 *Exercises in the Yokohama Dialect*, Yokohama: Japan Gazette Office
- Baldwin, C.O. 1871 *A Manual of the Foochow Dialect 榕腔初学撮要*, Foochow: Methodist Episcopal Mission Press
- Ball, J. D.1888 *The Cantonese Made Easy Vocabulary*, Hongkong: Kelly & Walsh
- Brown, S. R. 1863 *Colloquial Japanese* Shanghai: Tresbyterian Mission Press.
- Edkins, J. 1868 *A grammar of colloquial Chinese as exhibited in the Shanghai dialect*, Shanghai: Presbyterian Mission Press
- Giles, H. A. 1892 *A Chinese-English Dictionary*, London: Bernard Quaritch
- Liggins, J. 1867 *Familiar Phrases in English and Romanized Japanese*, New York: Hurd and Houghton
- Medhurst, W. H. 1830 *An English and Japanese and Japanese and English vocabulary*, Batavia: Lithography
- Morrison, W. T 1876 *An Anglo-Chinese Vocabulary of the Ningpo Dialect 字語彙解*, Shanghai: American Presbyterian Mission Press.
- Möllendorff, P. G. 1901 *The Ningpo Syllabary*, Shanghai:American Presbyterian Mission Press
 ———— 1910 *Ningpo Colloquial Handbook 寧波方言便覽*, Shanghai: American Presbyterian Mission Press
- Pullum, G. K. and Ladusaw, W. A. 著、土田滋他訳 2003 『世界音声記号辞典』三省堂
- Taylor, J. H 1868 *Ah-lah kyiu-cü Yiæ-su Kyi-toh-go Sing Iah Shü*, Leng Teng: Da-Ing Peng-Koh Teng Wæ-Koh Sing Shü Gong-We
- Rankin, H. V. V 1868 *Nying-po T'u-wô Ts'u-'oh 寧波土話初学*, Zong-hæ: Me-wô Shü-kwun
- Rosny, Léon de. 1872 *Introduction au Cours de Japonais*. Paris: Maisonneuve et Cie
- Williams, S. W. 1856 *A Tonic Dictionary of the Chinese Language in the Canton Dialect 英華分韻撮要*, Canton: Office of the Chinese Repository
 ———— 1874 *A syllabic dictionary of the Chinese language 漢英韻府*, Shanghai: American Presbyterian mission press
- Wylie, A. 著、倪文君訳 『1867 年以前来華基督教伝教士列伝及著作目録』 2011 広西師範大学出版社 (原著 *Memorials of Protestant Missionaries to the Chinese: Giving a List of their Publications and Obituary Notices of the Deceased*, Shanghae: American Presbyterian Mission Press)

【本論文と既発表論文との関係】

序章 (書き下ろし)

第1章 中国資料による日本語音韻の研究

第1節 中国資料について (書き下ろし)

第2節 研究史 (書き下ろし)

第2章 『日本国考略』について

第1節 『日本国考略』の成立 (修士論文の内容をもとに加筆修正)

第2節 諸本 (修士論文の内容をもとに加筆修正)

第3章 寄語の解説

第1節 『日本国考略』の所拠言語 (書き下ろし)

第2節 寄語の解説 (修士論文の内容をもとに加筆修正)

第4章 寧波方言の音韻

第1節 寧波方言の音韻体系 (書き下ろし)

第2節 『書史会要』と『日本国考略』に観察される呉方言の後部歯茎音 (『書史会要』與『日本考略』中所見呉方言的舌葉音『黄典誠教授百年誕辰紀念文集』葉寶葵 李無未編 (中国) 2013 廈門大学出版社 ; (中国音韻学会機関誌『中国音韻学暨黄典誠學術思想國際學術檢討會論文集』廈門大学中文系・中国音韻学会編、廈門大学出版社 2104 所収))

第3節 寧波方言の子音推移について (書き下ろし)

第5章 室町時代における日本語の音韻

第1節 濁音の鼻音的要素 (『日本考略』に見るガ行音について『早稲田日本語研究』21、2012 ; 口頭発表「『日本考略』に見るハ行音・バ行音について」2012年9月8日拡大アクセント史資料研究会)

第2節 ハ行音の音価 (「中国資料に見える室町時代のハ行子音音価の再検討—『日本国考略』を中心に—」『国語国文』83、2014 ; 口頭発表「『日本考略』に見るハ行音・バ行音について」2012年9月8日拡大アクセント史資料研究会)

第3節 ツ・ヅの破擦音化と/u/の異音 (口頭発表「ツ・ヅの破擦音化と u の異音—中国語音声音韻学の視点からの解釈—」2014年5月18日日本語学会)

第4節 オ段長音の開合の音価と統合 (書き下ろし)

第5節 『日本国考略』に見られる寄語のアクセント (『日本考略』に見られる寄語のアクセント』『論集』IX、2013年12月15日アクセント史資料研究会)

終章 (書き下ろし)

【資料】

〔仮名と音注漢字の対照〕

凡例：

- 1) 漢字の音価は基本的に 19 世紀寧波方言の音韻体系による。漢字に複数の読みがある場合にはもう一つ音価を*で示す。
- 2) 見出し字の次の数字は使用回数である。
- 3) 括弧で囲んだ数字は音注漢字の掲載される箇所を通し番号である。
- 4) 下線で示す見出し字は複数の仮名に当ててるものである。

ア：		262;307;315)
[a]	挨 15 (7;11;17;20;22;28;29;61;128; 150;215;261;292;337;352)	[fiu] 胡 3 (88;186;310)
[ɔ]	亞 6 (22;23;65;175;203;204)	[vu] 無 2 (171;341)
[ɔŋ]	鶯 1 (50)	[œy] 嘔 1 (165)
		[uəŋ] 溫 1 (353)
		[ŋu] 吾 1 (44)
アウ：		
[fiŋ]	黃 3 (241;242;244)	オ・オウ：
[fiɔ]	和 1 (177)	[o] 阿 14 (25;27;29;59;63;68;70;73;76; 93;129;139;156;288)
	賀 1 (187)	<u>倭</u> 6 (78;146;147;149;196;269)
イ：		[fiɔ] 何 13 (137;137;140;142;143;147;15 6;167;260;337;342;360;360)
[iʔ]	一 7 (64;112;148;151;166;207;208)	河 5 (289;289;316;344;344)
[i]	依 6 (34;34;118;130;233;234)	[u] <u>烏</u> 5 (54;56;86;133;293)
	意 2 (311;326)	[oŋ] 翁 1 (57)
	伊 1 (137)	
[fi]	<u>移</u> 2 (129;176)	カ：
	奚 1 (70)	[kɔ]
	係 1 (355)	<u>加</u> 10 (5;78;168;177;209;236;254;2 87;342;349) *[k'yo]*[k'a]
	已 1 (122)	家 2 (75;198) *[kyɔ]*[k'a]
	<u>義</u> 1 (68)	[ka]
[fiu]	遊 1 (316)	介 7 (17;106;124;207;229;249;347)
[in]	因 1 (134)	皆 3 (85;154;187) *[k'ie]
		[k'a]
ウ：		<u>措</u> 7 (46;194;219;234;236;261;317) *[k'ie]
[u]	<u>烏</u> 10 (33;108;133;168;171;199;200;	[k'an]
		坑 2 (243;257)

[kaʔ]	隔 3 (256;256;284)	[kʲiʔ]	擊 1 (253)
	愬 2 (152;305)		
	夾 1 (219) *[kʲiaʔ]	ク :	
[kan]	更 1 (50) *[ken]	[ku]	古 9 (49;123;143;160;161;185;244; 334;345)
[kʰaʔ]	客 1 (217)		故 5 (88;26;112;137;207)
ガ :			姑 5 (55;108;140;176;342)
[ka]	揩 4 (45;50;51;242)	[koʔ]	骨 8 (18;91;211;258;258;272;351;3 63)
	皆 1 (257)	[ko]	哥 1 (245)
	解 3 (99;140;314) *[ga]	ケ :	
	擗 1 (208) *[ga]	[kʲi]	計 4 (148;160;202;209)
[kɔ]	加 2 (39;314) *[kʲyɔ]*[kʲia]		箕 4 (282;283;284;285)
[kʰaʔ]	客 1 (226)		鷄 3 (54;56;172)
カイ :		[kʲiʔ]	吉 1 (299)
[kɛ]	盖 1 (102)	ゲ :	
カウ :		[kʲi]	計 1 (218)
[ko]	哥 4 (264;265;266;267)	コ・コウ :	
	个 1 (164)	[ko]	哥 9 (67;82;83;105;122;157;232;25 1;252)
[kɔŋ]	剛 1 (232)		个 7 (179;179;216;216;322;330;33 0)
カン :		[kʰo]	科 3 (115;291;291)
[ken]	干 1 (362)		柯 1 (294)
キ :			課 1 (270)
[kʲi]	計 11 (3;9;9;110;115;133;134;227; 254;270;342)	[kʰoŋ]	空 3 (45;226;242)
	鷄 4 (149;250;260;302)	[kɔŋ]	扛 2 (145;151)
[kʲiʔ]	吉 7 (8;122;139;201;203;204;269)		剛 1 (253)
[gʲi]	其 2 (181;273)	[ku]	古 2 (34;299)
[kʰiʔ]	乞 1 (271)		姑 1 (176)
[gʲiʔ]	傑 1 (24)	[koŋ]	公 1 (76)
ギ :		[kueʔ]	骨 1 (87)
[gʲi]	旗 3 (241;242;244)	[kʰun]	寬 1 (110)
	其 2 (243;319)	ゴ :	
	崎 2 (293;294)	[ko]	哥 3 (98;173;340)
[kʲi]	計 1 (301)		个 1 (277)

[k'o] 科 1 (131)
 可 1 (131)
 [ku] 姑 1 (76)
 [kueʔ] 骨 1 (124)

サ :
 [sa] 晒 9 (172;254;255;256;282;283;284;
 285;287)
 [saʔ] 殺 2 (29;149)
 撒 2 (16;23)
 [sen] 三 2 (19;84)
 [soʔ] 索 2 (245;281)
 [sia] 篩 2 (351;363) *[s]
 [so] 沙 1 (255)

ザ :
 [za] 柴 1 (227)

サウ :
 [zoŋ] 松 1 (355)

シ :
 [ʃy] 水 45 (17;18;19;20;34;34;85;97;99;
 106;107;115;117;117;133;147;147;
 151;154;154;166;167;193;204;208;
 233;234;260;261;262;263;270;273;
 296;304;305;310;344;345;352;353;
 354;360;362;363) *[se]
 戍 2 (28;217)
 恕 2 (298;298)
 黍 2 (286;288)
 霽 1 (227)
 碎 1 (10)
 [ʃiʔ] 矢 11 (22;44;46;97;104;179;184;26
 1;273;289;318)
 [s] 豕 2 (312;312)
 [si] 西 1 (41)
 [siu] 收 1 (289)
 [siŋ] 身 1 (215)
 [siʔ] 惜 1 (184)

[z] 俟 1 (346)

ジ :
 [ʃy] 盡 1 (110)

シウ :
 [siu] 守 2 (71;72)

ジャ :
 [zia] 射 1 (266) *[zie]
 [ziaʔ] 若 1 (49)

シャウ :
 [dʒoŋ] 常 2 (55;86)

シン :
 [siŋ] 身 1 (190)
 新 1 (80)

ス
 [soʔ] 宿 4 (67;69;89;116) *[siu]
 速 2 (22;138)
 [s] 思 3 (124;280;342)
 [su] 疎 3 (138;240;345)
 [səŋ] 孫 2 (235;252)
 [su] 数 1 (194)
 塑 1 (107)
 [siŋ] 沈 1 (309)
 [soŋ] 松 1 (301)
 [ʃy] 碎 1 (107) *[se]
 [tsəŋ] 尊 1 (235)
 [tsəʔ] 卒 1 (353)

ズ :
 [dzu] 助 3 (235;252;320)
 [ts] 子 1 (235)

セ :
 [sie] 泄 1 (224)
 [ʒiʔ] 十 1 (348)

ゼ :

[dzin] 前 2 (5;48)

[ʒyn] 善 1 (52)

セン :

[sin] 鮮 1 (281)

[ʃyn] 宣 1 (264)

ソ :

[so] 梭 4 (92;94;128;129)

鎖 1 (339)

所 1 (163)

[səŋ] 孫 2 (175;208)

[su] 踈 1 (146)

蘇 1 (158)

[sɔ] 沙 1 (290)

ソイ :

[sia] 篩 1 (343) *[s]

タ :

[taŋ] 打 8 (28;152;179;184;201;202;226;
228)

[daʔ] 達 7 (78;119;164;164;196;277;323)

[da] 大 4 (139;179;299;348)

[tɛ] 歹 2 (122;124)

帶 2 (183;275)

[tɛn] 旦 2 (22;189)

咀 1 (181;323)

(車亘) 1 (166)

[t'a] 他 2 (47;106)

[təʔ] 荅 1 (94)

ダ :

[da] 大 7 (81;81;190;193;358;358;361)

ダイ :

[da] 大 2 (53;54)

タウ :

[do] 大 1 (165)

[tao] 倒 1 (75)

[to] 多 1 (174)

チ :

[tiʔ] 的 2 (196;347)

[tsi] 止 1 (211)

智 1 (30)

[ti] 帝 1 (81)

ヂ :

[tsi] 姊 2 (203;204)

[dʒy] 治 1 (73)

[ʒy] 知 1 (57)

チウ :

[tʃoŋ] 中 1 (49)

チャ :

[t'iaʔ] 貼 1 (269)

チャウ :

[tiao] 弔 1 (101)

刁 1 (86)

ヂョ :

[tʃiŋ] 掇 1 (111)

ヂン :

[dzin] 沉 1 (265)

ツ :

[ts] 子 13 (119;186;321;323;324;325;326;
326;327;328;329;330;332)

止 1 (303)

[tu] 多 4 (189;323;326;357)

都 2 (112;272)

[t'əʔ] 秃 2 (3;30)

脱 1 (229)

[tsəʔ] 卒 2 (222;352)
 [toʔ] 掇 1 (20)
 [tso] 做 1 (325)
 [tsu] 祖 1 (120)

ツ：
 [toŋ] 東 3 (32;51;283)
 [dsu] 助 1 (154)
 [dəŋ] 藤 1 (254)
 [dəʔ] 凸 1 (147)

テ：
 [təʔ] 得 3 (122;195;195)
 [ti] 低 2 (122;123)
 [tiʔ] 的 2 (140;142)
 [di] 地 1 (140)
 [din] 田 1 (23)
 [t'in] 天 1 (182)
 [t'iʔ] 鉄 1 (214)

デ：
 [di] 地 1 (239)
 [din] 田 1 (355)

テン：
 [t'in] 天 1 (53)

ト・トウ：
 [to] 多 17 (25;63;63;64;71;72;87;108;124;198;313;321;331;332;332;340;346)
 [toʔ] 掇 2 (151;313)
 [daʔ] 達 1 (332)
 [do] 惰 1 (89)
 [tao] 道 1 (81)

ド：
 [do] 陀 4 (136;140;142;176)
 大 1 (230)
 [daʔ] 達 1 (121)

トイ：
 [te] 堆 1 (25)

ナ：
 [nɛ] 乃 13 (131;173;185;204;226;287;309;328;328;330;345;355)
 奈 5 (88;131;212;228;306)
 [nen] 難 4 (99;247;326;326)
 [nen] 南 1 (40)
 [no] 拿 1 (357)

ナイ：
 [nɛ] 奈 2 (341;342)
 乃 1 (338)

ニ：
 [ni] 泥 3 (313;313;317)
 尼 3 (52;61;62)
 義 1 (41)
 [fi] 移 1 (48)

ニョウ：
 [miao] 妙 1 (100)

ニン：
 [niŋ] 人 1 (116) *[ʒiŋ]

ヌ：
 [loʔ] 六 1 (89)
 陸 1 (116)
 [lu] 路 1 (184)
 [nu] 奴 1 (311)

ネ：
 [ni] 泥 5 (45;46;51;242;246)
 尼 2 (50;65)
 [miŋ] 眠 1 (320)

ノ・ノウ：

[nu]	奴 5 (24;93;276;279;279)	[vu]	付 1 (11)
[no]	那 3 (155;198;302)		扶 1 (323)
	糯 1 (299)		浮 1 (246) *[vœy]
[nɛ]	奈 1 (76)	[vuʔ]	伏 2 (9;280)
	乃 1 (330)	[fəŋ]	粉 1 (239)
[nɔ]	拏 1 (253)	[fuʔ]	福 1 (285)
[nəʔ]	納 1 (152)		
[ŋɔŋ]	昂 1 (277)	ブ :	
ハ :		[bu]	蒲 3 (128;145;292)
[faʔ]	法 9 (143;160;161;223;244;248;251; 252;263)		歩 2 (151;175)
	登 8 (13;60;60;143;189;212;220;24 9)	[bəʔ]	孛 2 (19;84)
[ba]	牌 1 (362)	[baʔ]	鉞 1 (356)
[bao]	報 1 (100)	べ :	
[baʔ]	白 1 (232)	[bi]	皮 1 (247)
[fɛn]	番 1 (154)	[biʔ]	鼻 1 (79)
[hwɔ]	花 1 (250)	ホ :	
ヒ :		[faʔ]	発 1 (343)
[fi]	非 10 (15;26;36;115;147;302;321;3 21;323;332)	[p'ɔ]	坡 1 (117)
	飛 1 (270)	ボ :	
	(土匪) 1 (198)	[bo]	婆 1 (304)
[h'ɣŋ]	勳 1 (193)	マ :	
	薰 1 (218)	[ma]	埋 6 (87;120;130;133;202;258;303)
	熏 1 (39)		*[mɛ]
[h'ɣ]	虚 1 (2)		買 4 (174;195;195;230) *[mɛ]
ビ :			売 4 (31;31;47;157) *[mɛ]
[bi]	皮 2 (221;309)	[mɔ]	麻 2 (258;280)
[biʔ]	鼻 1 (89)		馬 2 (315;357)
[pe]	彼 1 (134)	[mɛn]	漫 2 (358;358)
ヒャ			慢 1 (361)
[biʔ]	別 1 (55)		蛮 1 (133)
[faʔ]	法 1 (334)	[mo]	磨 1 (297)
フ :		[mɔŋ]	萌 1 (98) *[mɔŋ]
		マイ :	
		[ma]	売 3 (156;199;213) *[mɛ]

マン :

[mɛn] 慢 1 (336)

ミ :

[mi] 迷 6 (40;126;219;236;276;349)

米 6 (40;1231;295;295;318;320)

眉 4 (97;97;210;210) *[me]

彌 3 (33;257;290)

謎 1 (219)

袂 1 (236) *[me]

煤 1 (240) *[me]

[min] 明 4 (32;51;283;340)

[mi?] 覓 1 (126)

密 1 (324)

ム :

[mo?] 莫 2 (67;69)

木 2 (82;83)

[moŋ] 蒙 2 (293;294)

[mu] 慕 1 (155)

[mɔŋ] 門 1 (150)

メ :

[mi] 眉 5 (91;97;97;131;225) *[me]

媚 2 (291;291) *[me]

迷 2 (7;11)

米 2 (54;297)

謎 1 (222)

[min] 面 2 (147;304)

眠 1 (69)

[mi?] 蜜 2 (286;288)

密 1 (90)

[miu] 謬 1 (72)

[ni] 尼 1 (62)

メン :

[min] 棉 2 (278;279)

面 1 (173)

[min] 恨 1 (131)

モ :

[mɔ?] 末 4 (10;122;123;152)

沒 1 (64)

[mo?] 木 3 (122;267;278)

莫 1 (124)

[mɛn] 慢 2 (140;142)

漫 1 (136)

[mɔŋ] 門 2 (81;81)

[mɔ] 麻 1 (271)

[mun] 滿 1 (10)

[mu] 暮 1 (295)

ヤ :

[fian] 羊 8 (31;107;121;130;133;140;319;356)

[fia] 耶 8 (27;29;31;107;137;139;142;143) *[fie]

爺 3 (59;133;140) *[fie]

也 2 (118;194) *[fie]

野 2 (54;56) *[fie]

[fyo] 牙 1 (348) *[ŋɔ]

ヤウ :

[fiao] 效 1 (329)

耀 1 (13)

[fyo] 下 1 (143) *[fo]

ユ :

[fiu] 尤 3 (150;167;221)

油 1 (231)

有 1 (163)

[iu] 攸 1 (9)

[y] 於 1 (123)

ヨ :

[fiao] 搖 4 (14;16;145;325)

姚 2 (97;151)

[fiu] 尤 1 (62)

由 1 (341)

[fyo?] 月 1 (97)

[ɸyoʔ] 学 1 (325) *[[ɸoʔ]	[loʔ] 落 1 (14) *[[loʔ]
	[nu] 奴 1 (181)
ヨウ :	ルイ :
[ɸiao] 姚 1 (339)	[le] 雷 1 (80)
[iao] 邀 1 (183)	
ラ :	レ :
[la] 頼 11 (91;184;189;207;217;220;255; 255;258;258;292)	[li] 俚 10 (27;28;29;92;122;139;140;14 2;143;179)
[laʔ] 辣 5 (18;147;284;305;318)	礼 3 (131;173;313)
[lian] 量 1 (124)	里 2 (273;273)
[lon] 郎 1 (84)	利 1 (93)
[loʔ] 落 1 (256) *[[loʔ]	
[lon] 論 1 (133)	ロ :
ラウ :	[lu] 路 2 (158;216)
[lo] 羅 2 (136;192)	盧 1 (339)
[lao] 老 1 (86)	[lo] 羅 2 (111;151)
	[loʔ] 禄 2 (46;261)
ラン :	[loʔ] 落 1 (145) *[[loʔ]
[len] 爛 1 (79)	[la] 頼 1 (354)
リ :	ワ :
[li] 利 10 (8;153;156;202;245;248;248; 252;253;322)	[hua] 歪 7 (79;85;104;192;227;275;354)
俚 5 (124;152;235;249;288)	[uaʔ] 掄 1 (313)
里 4 (16;307;356;356)	[uɔ] 倭 1 (75)
礼 2 (168;200)	[ɸua] 華 1 (102)
[liʔ] カ 2 (105;235)	[ɸuen] 環 1 (313)
[loʔ] 掙 1 (129)	ワウ :
ル :	[ɸuɔŋ] 王 1 (53)
[lu] 路 20 (2;15;26;26;121;126;129;137; 146;146;163;167;171;193;230;234; 296;337;337;351)	ワン :
魯 3 (11;104;199)	[uen] 灣 1 (269)
虜 1 (137)	
[loʔ] 六 2 (9;171)	
禄 1 (285)	
[lon] 論 2 (138;262)	

〔寄語解説と諸本の対照〕

凡例：

1) 資料は東洋文庫本を底本とし、他の各本における寄語を対照するものである。各本において、底本と異なる箇所を下線を引き、掠れて識別できない箇所を「×」で、掠れて識別できる箇所を「？」で示す。『得月簞叢書』本における「□」は原本にあるものである。

2) 「項目」は「寄語略」の中国語の見出しである。基本的に東洋文庫本による。

3) 「寄語校訂」と「解説案」は第3章第2節による。

3) 『国朝典故』本は、『国朝典故』点校本（1993）と『四庫存目叢書』所収の北京図書館蔵明藍格鈔本の寄語とを比較して、校訂したものである。

	項目	寄語訂正	解説案	東洋文庫本	国朝典故	日本図纂	籌海圖編	内閣文庫本	早大本	続説邪	得月蓂叢書
	【天文類】										
1	天	天帝	△△	天帝	天帝	天帝	天帝	天帝	天帝	天帝	天帝
2	日	虚路	ヒル	虚路	虚路	虚露	虚露	虚路	虚路	虚路	虚落
3	月	秃計	ツキ	秃計	秃計	秃計	秃計	秃計	秃計	秃計	秃計
4	星	付泥	△△	付泥	付泥	付泥	付泥	付泥	付泥	付泥	付泥
5	風	有朱/加前	△△/カゼ	有朱/加前	××	有朱/加前	有朱加前	有朱/加前	有宋/加前	有朱/加前	□□
6	雲	朽岡	△△	朽岡	朽岡	因木	因木	朽岡	朽岡	朽岡	□
7	雨	挨迷	アメ	挨迷	挨__	挨迷	挨迷	挨迷	挨迷	挨迷	挨迷
8	霧	吉利	キリ	吉利	吉利	吉利	吉利	吉利	吉利	吉利	吉利
9	雪	□計伏六/攸計	□キフル/ユキ	計伏六/攸計	計伏六片計	計伏六/攸計	計伏六攸計	計伏女/攸計	計伏女/攸計	計伏六/攸計	計伏六片計
10	霜	名末/碎滿	△モ/シモ	名末/(石羊) 満	多未碎滿	名末/壁滿	名末壁滿	名末/壁滿	名末/壁滿	名末/壁滿	__未壁滿
11	落雨	挨迷付魯	アメ/フル	挨迷付魯	挨迷仕魯	挨迷/付魯	挨迷付魯	挨迷付魯	挨迷付魯	挨迷付魯	挨迷仕魯
12	雷	付路	△△	付路	仕洛			付路			付落
	【時令類】										
13	早	來運掇掇/發耀	△△△△/ハヤウ	來運掇掇/發耀	來運掇發跳錢	來運掇/掇發耀	來運掇掇發耀	來運掇掇/發耀	來運掇掇/發耀	來運掇掇/發耀	來運掇掇發耀
14	夜	搖落	ヨル	搖落	搖落	搖落	搖落	搖落	搖落	搖落	搖落
15	午	非路	ヒル	非路	非路	非路	非路	非路	非路	非路	非路
16	晚	搖撒里	ヨウサリ	搖撒田五	搖撒田五	搖撒/田午	搖撒田午	搖撒田五	搖撒田五	搖撒田五	搖撒田伍
17	明	挨介水	アカシ	挨介水	挨介水	挨介/水	挨介水	挨介水	挨介水	挨介水	挨介水
18	暗	骨辣水	クラシ	骨辣水	骨辣水	骨辣/水	骨辣水	骨辣水	骨辣水	骨辣水	骨辨水
19	冷	三孛水	サブシ	三孛水	三孛水	三孛/水	三孛水	三字水	三孛水	三孛水	三孛水
20	煖	挨掇水	アツシ	挨掇水	挨掇水	挨掇/水	挨掇水	挨掇水	挨掇水	挨掇水	挨掇水
21	今日	詐以呼雞声/介喬	注釈/△△	詐以呼雞声/介喬	詐以呼雞声介喬	詐以呼雞/聲介喬	詐以呼雞聲介喬	詐以呼雞声/介喬	詐以呼雞聲/介喬	詐以呼雞声/介喬	詩以呼_____
22	明日	挨速/亞失旦	アス/アシタ	挨速/亞夫旦	挨速粟天旦	挨迷亞/失旦	挨迷亞失旦	挨迷/亞夫旦	挨速/亞×且	挨迷/亞失旦	挨米粟/天旦
23	後日	亞撒田	アサッテ	亞撒里	亞撒里	亞撒/里	亞撒里	亞撒里	亞撒里	亞撒里	亞撒里

	項目	寄語訂正	解説案	東洋文庫本	国朝典故	日本図纂	籌海圖編	内閣文庫本	早大本	続説邪	得月簞叢書
24	昨日	傑奴	キノウ	傑奴	傑妙	傑奴	傑奴	傑奴	傑奴	傑奴	傑妙
25	前日	阿多堆	オトトイ	阿多堆	阿多堆	阿多/堆	阿多堆	阿多堆	阿多堆	阿多堆	阿 <u>堆多</u>
26	日暮	非故路路	ヒクルル	非故路路	非故路路	非故/路路	非故路路	非故路路	非故路路	非故/路路	非故路路
27	今日來	个阿耶俚	△オヤレ	个阿耶俚	个阿耶俚	个阿/耶俚	个阿耶俚	个阿耶俚	个阿 <u>那</u> 俚	个阿耶俚	个阿耶俚
28	明日來	挨戊打□□俚	アシタ□□レ	挨戊打俚	挨戊打俚	挨戊/打俚	挨戊/打俚	挨戊打俚	挨戊打俚	挨戊打俚	挨戊打俚
29	後日來	挨殺核阿耶俚	アサ△オヤレ	挨殺核阿耶俚	挨殺核阿耶俚	挨殺核/阿耶俚	挨殺核/阿耶俚	挨殺挨阿耶俚	挨殺核阿耶俚	挨殺核/阿耶俚	挨殺核阿 <u>那</u> 俚
	【地理類】										
30	地	大様/禿智	△△/ツチ	大様/禿智	大様禿智	大様/禿智	大様禿智	大様/禿智	大様/禿智	大様/禿智	大様禿智
31	山	羊賣/耶賣	ヤマ/ヤマ	羊賣/耶賣	羊賣耶賣	羊賣/耶賣	羊賣耶賣	羊賣/耶賣	羊賣/耶賣	羊賣/耶賣	羊賣 <u>那</u> 賣
32	水	明東	ミヅ	明東	明東	明東	明東	明東	明東	明東	朝東
33	海	烏彌	ウミ	烏彌	烏彌	烏彌	烏彌	烏彌	烏彌	烏彌	烏彌
34	石	依水/依水古	イシ/イシコ	依水/在木古	依 <u>石</u> /在 <u>古</u> 木	依水在/木古	依水在木古	依水/在木古	依水/在木古	依水/在木古	依水在木古
35	沙	阿吉大水	△△△△	阿吉大水	何吉大水	何吉/大水	何吉大水	阿吉大水	阿 <u>古</u> 大水	阿 <u>古</u> /大水	何吉大水
36	火	非	ヒ	非	非	非	非	非	非	非	非
37	郷	羊埋俚	△△△	羊埋俚	羊埋俚	羊埋/俚	羊埋俚	羊埋俚	羊埋俚	羊埋俚	羊埋俚
38	江	打各計	△△△	打各計	打各計	打各/計	打各計	打各計	打各計	打各計	打各計
	【方向類】										
39	東	熏加□	ヒガ□	熏加	熏加	熏加	熏加	熏加	熏加	熏加	熏加
40	南	迷南米	ミナミ	迷南來	迷南來	迷南/來	迷南來	迷南 <u>米</u>	迷南 <u>米</u>	迷南來	迷南來
41	西	義西	ニシ	義西	義西	義西	義西	義西	義西	義西	義西
42	北	尤兀俚	△△△	尤兀俚	尤兀俚	<u>兀木</u>	尤兀俚	尤兀俚	尤兀俚	尤 <u> </u>	尤兀俚
43	前	日皆門利婆	△△△△△	日皆門利婆	日皆門利婆	日皆門/利婆	日皆門利婆	日 <u>背</u> 門利婆	日背門利婆	日皆門利婆	日皆門利婆
44	後	吾失利	ウシ△	吾失利	吾失利	吾失/利	吾失利	吾失利	吾失利	吾失利	吾失利
	【珍寶類】										
45	金	空措泥	コガネ	空措泥	空措泥	空措/泥	空措 <u>尼</u>	空措泥	空措泥	空措泥	空措泥
46	銀	失祿措泥	シロカネ	失祿措泥	失祿措泥	失祿/措泥	失祿措 <u>尼</u>	失祿措泥	失祿措泥	失祿措泥	失祿措泥
47	珠	他賣	タマ	他賣	他賣	他賣	他賣	拖賣	他賣	他賣	他賣

	項目	寄語訂正	解説案	東洋文庫本	国朝典故	日本図纂	籌海圖編	内閣文庫本	早大本	統説邪	得月叢書
48	錢	前移	ゼニ	前移	前移	前移	前移	前移	前移	前移	前移
49	黄銅	中若古	チウジャク	中若左	中若左	中若/佐	中若佐	中若左	中若左	中若左	中若左
50	紅銅	鶯更措尼	アカガネ	鶯更措尼	鶯更措泥	鶯更/措尼	鶯更措泥	鶯更措尼	鶯更措泥	鶯更/措尼	英更措尼
51	水銀	明東措泥	ミヅガネ	明東措泥	明東措泥	明東/措尼	明東措泥	明東措泥	明東措泥	明東/措泥	東明措__
52	好銅錢	姚礼善尼	△△ゼニ	姚礼善尼	姚禮/善尼	挑禮/善尼	挑禮善尼	姚礼善尼	姚禮善尼	姚__/善__	窻俚善尼
	【人物類】										
53	皇帝	大利/天王家里	ダイリ/テンノウ△△	大利/天三家里	大利天王家里	大利天/王家里	大利天王家里	大利/天三家里	大利/天三家里	大利/天王家里	大利天王家里
54	官	大米/烏野雞	ダイメイ/オオヤケ	大米/烏野雞	大米/烏野鷄	大米烏/野雞	大米烏野雞	大米/烏野雞	大米/烏野鷄	大米/烏野雞	大米烏野雞
55	百姓	別姑常	ヒヤクシャウ	別姑常	別姑常	別姑/常	別姑常	別姑棠	別姑棠	別××	別姑常
56	大官	大大烏野雞	△△オオヤケ	大大烏野雞	大大烏野鷄××	大大烏/野雞	大大烏野雞	大大烏野雞	大大烏野鷄	大大烏野雞	大大烏野鷄
57	公	翁知	オオヂ	翁知	翁知	翁知	翁知	翁知	翁知	翁知	翁知
58	婆	猶蒲/翁妃	△△/△△	猶蒲/翁妃	猶蒲/翁妃	猶婆/翁妃	猶婆翁妃	猶蒲/翁妃	猶董/翁妃	猶蒲/翁妃	猶婆翁妃
59	父	阿爺	オヤ	阿爺	阿爺	阿爺	阿爺	發發	阿爺	阿爺	阿爺
60	母	發發	ハハ	發發	發發	發發	發發	發發	發發	發發	發發
61	兄	挨尼	アニ	挨尼	挨尼	挨尼	挨尼	挨尼	挨尼	挨尼	挨尼
62	嫂	阿尼尤尼	アニヨ△	阿尼尤尼	阿尼尤姑	阿尼/尤尼	阿尼尤尼	阿尼尤尼	阿尼尤尼	阿尼尤尼	阿尼尤尼
63	弟	阿多多	オトト	阿多多	阿多多	阿多/多	阿多多	阿多多	阿多多	阿多多	阿多多
64	妹	亞尼多/一沒多	△△△/イモト	亞尼多/一沒多	亞尼多一沒多	亞尼多/一沒多	亞尼多一沒多	亞尼多/一沒多	亞尼多/一沒多	亞尼多/一沒多	西尼多一沒多
65	姊	亞尼	アネ	亞尼	亞尼	亞尼	亞尼	亞尼	亞尼	亞尼	亞尼
66	孀	完多	△△	完多	見多	完多	完多	完多	完多	完多	完多
67	子	莫宿哥	ムスコ	莫宿哥	莫宿哥	莫宿/哥	莫宿哥	莫宿哥	莫宿哥	莫宿哥	莫宿哥
68	姪	阿義	オイ	阿義	何義	阿義	阿義	阿義	阿義	阿義	阿儀
69	女	莫宿眠	ムスメ	莫宿眠	莫宿眠	莫宿/眼	莫宿眼	莫宿眠	莫宿眠	莫宿眠	莫宿眠
70	孫	阿奚/胡來	オイ/△△	阿奚/胡來	阿奚/胡來	阿奚/何來	阿奚何來	阿奚/胡來	阿奚/胡來	阿奚/胡來	阿奚/胡來

	項目	寄語訂正	解説案	東洋文庫本	国朝典故	日本図纂	籌海圖編	内閣文庫本	早大本	続説邪	得月籙叢書
71	丈人	守多	シウト	子多	子多	子多	子多	子多	子多	子多	子多
72	丈母	守多謬	シウトメ	子多謬	子多謬	子多/謬	子多謬	子多謬	子多謬	子多謬	子多謬
73	叔	阿治/王前老官	オヂ/△△△△	阿治/王前老官	何治/王前老官	阿治王/老老前	阿治王官老前	阿治/王前老官	阿治/王前老官	阿治/王前老官	何治/生前老官
74	丈夫	壽山	△△	壽山	壽山	壽山	壽山	壽山	壽山	壽山	壽山
75	婦人	倭家倒	ワカタウ	倭家倒	倭家倒	倭家倒	倭家倒	倭家倒	倭家倒	倭家倒	倭家倒
76	男子	阿奈公姑	オノコゴ	阿奈公姑	阿奈公姑	阿奈公姑	阿奈公姑	阿奈公姑	阿奈公姑	阿奈/公姑	阿奈公姑
77	老	禿古要个	△△△△	禿古要个	禿古要个	禿古/要个	禿古要个	禿古要个	禿古要个	禿古要个	禿古要个
78	後生	倭加達	オカタ	倭加達	倭加達	倭家達	倭家達	倭加達	倭加達	倭家×	倭家達
79	孩	歪爛鼻	ワランベ	歪爛鼻	歪爛鼻	歪鼻	歪鼻	歪爛鼻	歪爛鼻	歪×	歪爛鼻
80	親眷	新雷	シンルイ	新雷	新雷	新雷	新雷	新雷	新雷	新雷	新雷
81	朋友	道門大聖/瀾門大帝	トモダ△/△モダチ	道門大聖/瀾門大帝	道門大聖閻門大帝	道門大聖/瀾門大帝	道門大聖瀾門大帝	道門大聖/瀾門大帝	道門大聖/瀾門大帝	道門大聖/瀾門大帝	道門大聖閻門大帝
82	姐夫	木哥迷	ムコ△	木哥迷	木哥迷	丕哥/迷	丕哥迷	木哥迷	丕哥迷	丕哥迷	木哥迷
83	女婿	木哥	ムコ	木哥	木哥	米哥	米哥	木哥	木哥	米哥	木哥
84	僕	三字郎□	サブラ□	三字郎	三字郎	二三/字郎	三三字郎	三字郎	三字郎	三字郎	三字郎
85	小廝	歪皆水	ワカシ	歪皆水	歪皆水	歪皆/水	歪皆水	歪皆水	歪皆水	歪×	歪皆水
86	和尚	刁老/烏常	チャウラウ/オシャウ	刁老/烏索	互老烏索	才老/烏索	才老烏索	一老/烏索	一老/烏索	才老/烏索	刁老/烏索
87	老實人	埋骨多	マコト	埋骨多	埋骨多	埋骨/多	埋骨多	埋骨多	埋骨多	埋骨/多	埋骨多
88	艱難人	胡奈故人/間閻人	ウナクニン/△△	胡奈故人/間閻人	胡奈故人間閻人	胡奈故人/間閻人	胡奈故人間閻人	胡奈故人/間閻人	胡奈故人/間閻人	胡奈故人/門閻人	胡奈故人間閻人
89	強盜	六宿鼻惰	ヌスビト	六宿鼻隨	六宿鼻隨	六宿/鼻隨	六宿鼻隨	六宿鼻隨	六宿鼻隨	六宿鼻隨	六宿鼻隨
90	獨眼人	密皎/關鴻	△△/△△	密皎/關鴻?	密皎/關鳴	密皎/關鴻	密皎關鴻	密皎/關鴻	密皎/關鴻	密皎/關鴻	密約關儘
91	瞎子	眉骨賴	メクラ	眉骨賴	眉骨賴	眉骨/賴	眉骨賴	眉骨類	眉骨賴	眉骨賴	眉骨賴
92	你	撫哥了/梭俚	△△/ソレ	撫哥了/梭俚	撫哥子/梭里	撫哥了/梭俚	撫哥了梭俚	和哥了/梭俚	撫哥了/梭俚	×××	無哥子梭里
93	我	阿埋俚/阿奴利	△△△/オノレ	阿埋俚/阿奴利	何埋俚阿奴利	何埋俚/阿奴利	何埋俚阿奴利	阿埋俚/阿奴利	阿埋俚/阿奴利	×埋俚/××利	何埋俚阿奴利

	項目	寄語訂正	解説案	東洋文庫本	国朝典故	日本図纂	籌海圖編	内閣文庫本	早大本	続説邪	得月叢書
94	誰人	荅梭	タソ	荅梭	荅挨	搭梭	搭梭(我前)	荅挨	荅挨	荅梭	荅挨
95	徒弟	加食難	△△△	加食難	加食難	加食/難	加食難	加食難	加食難	加食難	加食難
96	財主妻	斗烏賣	△△△	斗烏賣	斗烏賣	斗烏/賣	斗烏賣	斗烏賣	斗烏賣	×××	妻斗烏賣
97	生得好	眉眉月失/眉 眉姚水	ミメヨシ/ミメ ヨシ	眉眉月失/眉 眉姚水	眉眉月失眉眉 眉姚水	眉眉月失/眉 眉姚水	眉眉月失眉眉 眉姚水	眉眉月失/眉 眉姚水	眉眉月失/眉 眉姚水	眉眉月失/眉 眉姚水	眉眉月失眉眉 罇水
98	外甥	萌哥	マゴ	萌哥	胡哥	萌/哥	萌/哥	萌哥	萌哥	萌哥	萌/哥
99	長子	難解水	ナガシ	難解水	鞋解水	難解/水	難解水	難解水	難解水	難解水	難解水
100	媳婦	嫌妙報	△ニョウパウ	嫌妙報	嫌妙報	嫌妙/報	嫌妙報	嫌妙報	嫌妙報	嫌妙報	嫌妙報
101	長	吊	チャウ	吊	弔	弔	弔	吊	吊	吊	弔
102	年少	華盖	ワカイ	華盖	華盖	華盖	華盖	華盖	華盖	華盖	華盖
103	主人	床杲孕	△△△	床杲孕	床果孕	床杲/杲	床杲杲	床杲孕	床杲孕	床杲×	床果孕
104	生得醜	歪魯失	ワルシ	魯歪失	魯歪失	魯歪/失	魯歪失	魯不正失	魯歪失	魯歪/失	魯歪失
105	聰明	力哥	リコウ	力哥	刀哥	力哥	力哥	力哥	力哥	力哥	尸哥
106	貴	他介水	タカシ	他介水	他介水	他介/水	他介水	他介水	他介水	他介水	他介水
107	賤	耶塑/羊碎水	ヤスウ/ヤスシ	那朔/羊碎水	那塑/羊碎水	那塑/羊壁	那塑羊壁	那朔/羊碎水	(尹)塑/羊 碎水	那朔/羊碎水	那塑/羊碎水
108	富	烏多姑	ウトク	烏多姑	烏多姑	烏多/哥	烏多哥	烏多姑	烏多姑	烏多姑	多烏姑
109	貧	肥東旦	△△△	肥東旦	肥東旦	腮東/旦	腮東旦	肥速旦	肥速旦	肥東旦	肥東旦
110	乞丐	寬需計	コジキ	寬需計	寬需計	寬需/計	寬需計	寬需計	寬需計	寬需計	寬需計
111	好淫	梭羅	△△	梭羅	梭羅	梭羅	梭羅	梭羅	梭羅	梭羅	梭羅
112	年紀	一故都	イクツ	一故都	一故都	一故都	一故多	一故都	一故都	一故都	一故都
113	麻子	莫入	△△	莫入	莫入	莫入/骨水	莫入骨水	莫入骨水	莫入骨水	莫入/骨水	莫入
114	村	孫	△	孫	孫	孫	孫	孫	孫	孫	孫□
115	拐	科水非計	コシヒキ	科水非計	科水非計	科水/非計	科水非計	科水非計	科水非計	科水非計	科水非計
116	賊	陸宿人	ヌスニン	陸宿人	陸宿人	六宿/人	陸宿人	陸宿人	陸宿人	陸宿人	
	【人事類】										
117	要	坡水水	ホシシ	坡水水	坡水水	坡水/水	坡水水	坡水水	坡水水	坡水水	坡水水
118	不要	依也	イヤ	依也	依他	依也	依也	依也	依他	依也	依也

	項目	寄語訂正	解説案	東洋文庫本	国朝典故	日本図纂	籌海圖編	内閣文庫本	早大本	続説邪	得月叢書
119	立	達子	タツ	達子	達子	達子	達子	建子	達子	達子	達子
120	等待	埋祖	マツ	埋祖	埋祖	埋祖	埋祖	埋祖	埋祖	埋祖	埋祖
121	眠	羊達路/烏將率	ヤドル/△△△	羊達路/烏將率	羊達路烏將率	羊達路/烏將率	羊達路烏將率	羊達路/烏將率	羊達路/烏將率	羊達路/烏將率	羊達路烏將軍
122	拿來	木低吉歹俚/未得哥已	モツテキタレ/モツテコイ	木低吉歹俚/未得哥已	不底吉万埋未得哥已	未低吉反俚/未得哥已	未低吉反俚未得哥已	未低言仄俚/未得哥已	未低吉反俚/未得哥已	未低吉反俚/未得哥已	不低吉互俚未得哥已
123	拿去	未低於古	モツテユク	未低於古	未抵於古	未底/於古	未底於古	未低於古	未低於古	未低/於古	未抵於古
124	亂説	思量骨多/莫話介歹俚	スラゴト/モ△ガタリ	思量骨多/莫話介歹俚	思量骨多草話介歹俚	思量骨多莫/話介反俚	思量骨多莫話介反俚	思量骨多/莫話介友俚	思量骨多/莫話介反俚	思量骨多/莫話介歹俚	思量骨多莫説介歹__
125	相擾	括計/括盆	△△/△△	括計/括盆	括計/恬盆	括計括盆	括計括盆	括計/括盆	括計/括盆	括計/括盆	括計括盆
126	看	覓見/迷路	ミ△/ミル	覓見/迷路	覓見迷路	覓見迷路	覓見迷路	覓見/迷路	覓見/迷路	覓見/迷路	覓見迷路
127	不送	何理解/邵賣	△△△/△△	何理解/邵賣	何俚解邵賣	何理解/邵賣	何俚解邵賣	何俚解/邵賣	何俚解/邵賣	何俚解/邵賣	何俚解邵賣
128	嬉	挨梭蒲	アソブ	挨核蒲	挨核蒲	挨核/蒲	挨核蒲	挨核蒲	挨核蒲	挨核蒲	挨核蒲
129	坐	移路/阿捋梭	イル/オリソウ	移路/阿捋梭	移路阿將梭	移路阿/將梭	移路阿將梭	移路/阿將梭	移路/阿將梭	移路/阿將梭	移路阿將梭
130	病	羊埋依子	ヤマイ△	羊埋依子	羊埋依子	羊埋/依子	羊埋依子	羊埋依子	羊埋依子	羊埋依王	羊迷依子
131	挹	科眉乃/可恨奈礼	ゴメンナ/ゴメンナレ	科眉乃可/恨奈礼	科眉乃可/抵奈礼			科眉乃可/民奈禮	科眉乃可/民奈禮	科眉乃可/民奈禮	科眉乃可/民奈里
132	罵	寬彼計乃俚/話鸞褪皮	△△△△△/△△△	寬彼計乃俚/話鸞褪皮	寬彼計乃俚話鸞褪皮	寬彼計乃俚/話鸞褪皮	寬彼計乃俚話鸞褪皮	寬彼計乃俚/話鸞褪皮	寬彼計乃俚/話鸞褪皮	寬彼計乃俚/話鸞褪皮	寬彼計乃俚話鸞褪皮
133	罨	烏論羊埋水/烏爺蠻計	△△△△△/オヤマキ	烏論羊埋水/烏爺蠻計	烏語羊埋水烏爺蠻計	烏論羊埋水/烏蠻爺__計	烏論羊埋水烏蠻爺__計	烏論羊埋水/烏爺蠻計	烏論羊埋水/烏爺蠻計	烏論羊埋水/烏爺蠻計	烏論羊埋水烏耶蠻計
134	𪗇	因彼計	イビキ	因彼計	因彼計	因彼計	因彼計	回彼計	因彼計	因彼計	因彼計
135	睡	蜜路	△△	蜜路	蜜路	蜜路	蜜路	蜜路	蜜路	蜜路	密密路
136	去	漫陀羅/獺俚旦多	モドラウ/△△△△	漫陀羅/獺俚旦多	漫陀羅賴俚里旦多	漫陀羅獺/俚旦多	漫陀羅獺俚旦多	漫陀羅/獺俚旦多?	漫陀羅/獺俚旦多	漫陀羅/獺俚旦多	漫陀羅獺里旦多
137	在	何故伊虜/何耶路	オクイル/オヤル	何故伊虜/何耶路	阿奴伊虜阿耶路	何故伊魯/何耶路	何故伊魯何耶路	阿放伊虜/阿印路	阿故伊虜/阿耶路	何故伊虜/何耶路	何故伊魯何耶路
138	不在	論速/持疎	ルス/△ス	論速/持疎	論迷特疎	論速持疎	論速持疎	論遠/持疎	論速/持疎	論速/持疎	論迷持疎

	項目	寄語訂正	解説案	東洋文庫本	国朝典故	日本図纂	籌海圖編	内閣文庫本	早大本	続説邪	得月蓂叢書
139	來	阿耶俚/吉大□	オヤレ/キタ□	阿耶俚/吉大	阿耶俚吉大	何耶俚/吉人	何耶俚吉人	阿耶俚/吉大	阿耶俚/吉大	阿耶俚/吉大	阿耶俚吉大
140	便來	羊解地何爺俚/慢陀的□姑	ヤガテオヤレ/モドツテ□ク	羊解地何爺俚/慢陀的姑	羊解_____慢陀的如	羊佯地何爺/俚慢陀的如	羊佯地何爺俚/慢陀的如	羊解地阿爺俚/慢陀的姑	羊解地阿爺俚/慢陀的姑	羊佯地何爺俚/慢陀的姑	羊解_____慢陀的如
141	便去	密路	△△	密路	密路	密路	密路	密路	密路	密路	密路
142	回來	慢陀的何耶俚	モドツテオヤレ	慢慢的何/耶俚	慢慢的何耶俚	慢慢的/耶俚	慢慢的耶俚	慢慢的阿/耶俚	慢慢的阿/耶俚	慢慢的_/耶俚	慢慢的何耶俚
143	快來	發下何耶俚/法古	ハヤウオヤレ/ハク	發下何耶俚/法古	發下何耶俚法古	法下何耶/俚法古	發下何耶俚法古	發下阿耶俚/法古	發下阿耶俚/法古	發下何耶俚/法古	發下何耶俚發古
144	送與我	面皮	△△	面皮	面皮	面皮	面皮	面皮	面皮	面皮	面皮
145	愛惜	搖路扛蒲	ヨロコブ	搖路扛蒲	搖路扛蒲	搖落/扛滿	搖落扛滿	搖路扛蒲	搖路扛蒲	搖路扛蒲	搖路扛蒲
146	怕	倭疎路路	オソルル	倭(足東)路路	倭疎路路	倭疏/路路	倭疏路路	我疎路路	我疎路路	倭疎/路路	倭疎路路
147	久不見	倭非怕水/何面凸辣水	オヒ△シ/オメヅラシ	倭非怕水/何面凸辣水	倭非怕水何面亞辣水			倭非怕水/阿面凸辣水	倭非怕水/阿面凸辣水	倭非×水/何面凸辣水	倭非怕水河面亞辣水
148	出去	一一計	×イケ	一一計	一一計	一一/計	一一計	二計	二計	一一計	□□
149	前行	殺鷄倭	サキヲ	殺鷄	殺鷄	殺鷄/倭	殺鷄倭	殺鷄(禾委)	殺鷄倭	殺鷄倭	殺鷄
150	後行	挨尤門	アユム	挨龍門	挨龍門	挨龍/門	挨龍門	挨龍門	挨龍門	挨龍門	挨龍門
151	喜	一掇水/姚羅扛步	イトシ/ヨロコブ	一掇水/姚羅扛步	一掇水姚羅扛步	一啜水眺/羅扛步	一啜水眺羅扛步	一移水/姚羅扛步	一掇水/姚羅扛步	一掇水/××扛步	一掇水窰羅扛步
152	說話	未納惹打俚	モノカタリ	未納惹打俚	來納切心打俚	未納惹/打俚	未納惹打俚	未納惹打俚	未納惹打俚	未納惹/打俚	未納惹打俚
153	怠慢	難利是/罵山好	△△△△△△	難利是/罵山好	難利是罵山好	難利骨多/罵山奴	難利骨多罵山奴	難利骨多/罵山奴	(莫佳)利骨多/罵山奴	難利骨多/罵山奴	難利是罵山好
154	羞愧	番助皆水水	ハヅカシシ	番即山水水	番即山水水	番助山水水	番助山水水	番助山水水	番助皆水水	番助山水水	番即山水水
155	飲	那慕	ノム	那慕	那慕	那慕	那慕	那慕	那慕	那慕	
156	吃	何賣利	オマイリ	何賣利	何賣利	何賣/利	何賣利	阿賣利	阿賣利	何賣利	
157	獨樂	哥賣	コマ	哥賣	哥賣	哥賣	哥賣	哥賣	哥賣	哥賣	哥賣
158	安排	蘇路	ソロ	蘇路	蘇×	蘇路	蘇路	蘇路	蘇路	蘇路	排蘇_

	項目	寄語訂正	解説案	東洋文庫本	国朝典故	日本図纂	籌海圖編	内閣文庫本	早大本	統說邪	得月叢書
159	不來	未旦盧賣矢	△△△△△	未旦盧賣矢	天旦盧賣矢	未旦盧/賣矢	未旦盧賣矢	未旦盧賣大	未旦盧賣大	未旦盧/賣矢	
160	快去	法古□計	ハク□ケ	法古計	适古計	法古/計	法古計	注古計	法古計	法古計	适古計
161	走	法古	ハク	法古	法古	法古	法古	法古	法古	法古	法古
162	借	脛路/各夾	△△/△△	脛路/各夾	脛路各夾	脛路/各夾	脛路各夾	脛路/各夾	脛路/各夾	脛路/各夾	脛路各夾
163	添	所有路路	ソユル△	所有路路	所有路路	所有/路路	所有路路	所有路路	所有路路	所有路路	所有路路
164	打人	生亞達達个	△△タタカウ	生亞達達个	生亞達達个	生亞達/達个	生亞達達个	生亞達達个	生亞達達个	生亞達達个	生亞達達人
165	唱	嘔大	ウタウ	嘔大	嘔大	嘔天	嘔天	嘔大	嘔大	嘔天	嘔__
166	痛	一(車亘)水	イタシ	一(車亘)水	一(車亘)水	一(車亘)水	一(車亘)水	一顛木	一(車亘)水	一(車亘)水	一(車亘)水
167	教	何水尤路	オシユル	何水尤路	何水尤路	何水尤路	何水尤路	何水龍路	何水尤路	何水尤路	何水尤路
168	買賣	烏礼加□	ウリカ□	烏礼加	烏禮加	烏禮/加	烏禮加	烏禮加	烏禮加	烏禮加	烏禮加
169	不吃了	禁哥	△△	禁哥	禁哥	禁哥	禁哥	禁哥	禁哥	禁哥	禁哥
170	多吃酒	阿賢鼻旦	△△△△	阿賢鼻旦	阿賢鼻__	何賢鼻旦	何賢鼻旦	阿賣鼻且	阿賢鼻旦	阿賢/鼻旦	阿賢鼻__
171	賣	烏路/無六	ウル/ウル	為路/無大	為路/無大	烏路/無六	烏路無六	烏路/無六	烏路/無六	烏路/無六	為路/無大
172	吃酒	麻黑晒鷄	△△サケ	麻黑晒鷄	府黑晒鷄	麻黑/殺鷄	麻黑殺鷄	麻黑晒鷄	麻黑晒鷄	麻黑晒鷄	府黑晒鷄
173	莫恠	哥面乃礼	ゴメンナレ	哥面乃礼	哥面乃__	哥面/乃禮	哥面乃禮	哥面乃礼	哥面乃禮	哥面/乃禮	哥面乃__
174	老實說話	買多溢多	マッタウ△△	買多溢多	買多益多	買多/溢多	買多溢多	買多溢多	買多溢多	買多溢多	買多溢多
175	遊	亞孫步	アソブ	四孫步	四孫步	西孫/步	西孫步	亞孫步	亞孫步	西孫步	四孫步
176	那里去	陀姑移姑	ドコイク	陀姑移姑	陀姑移姑	陀姑/移姑	陀姑移姑	陀姑移姑	陀姑移姑	陀姑/移姑	陀姑移姑
177	買	加和	カアウ	加和	加和	加利	加利	加和	加和	加和	加里
178	行路	約益磨滅	△△△△	約益××	約_____	的益/磨滅	的益磨滅	的益磨滅	的益磨滅	的益/磨滅	約_____
179	曉得	个个俚打失大	ココレータシツ タ	个个俚打失大	个个俚打失大	个个俚/打去 火	个个俚打去火	个个俚打失大	个个俚打失大	个个俚/打夫 ×	个个俚打失火
180	多吃了	前行哥	△△△	前行哥	前行哥	前行/哥	前行哥	前行哥	前行哥	前行哥	前行哥
181	殺	其奴/瞎咀即	キル/△△△	其奴/瞎咀郎	其奴瞎咀即	其奴瞎/咀郎	其奴瞎咀郎	其奴/瞎咀郎	其奴/瞎咀郎	其奴×/瞎咀 郎	其奴瞎咀__
182	害	天	テ	天	天	天	天	天	天	天	添
183	醉	邀帶	ヨウタ	等帶	等帶	邀帶	邀帶	邀帶	邀帶	邀帶	等帶
184	不曉得	措賴路/不失 打	シラヌ/△シツ タ	措賴路/不失 打	措賴路不失打	措賴路/不失 打	措賴路不失打	措賴路/不失 打	措賴路/不失 打	措賴路/不失 打	措賴路不失打

	項目	寄語訂正	解説案	東洋文庫本	国朝典故	日本図纂	籌海圖編	内閣文庫本	早大本	続説邪	得月叢書
234	砂石	措路依水	カルイシ	措路依水	措路依水	措路/依水	措路依水	措路依水	措路依水	措路/依水	措路依水
235	硯	孫助俚/尊子力	スズリ/スズリ	孫助俚/尊力子	那俚 力子	孫助俚/尊力子	孫助俚尊力子	孫助俚/尊力子	孫助俚/尊力?子	孫助俚/尊力子	那俚 力子
236	紙	措袂/加迷	カミ/カミ	措袂/加迷	措髮加迷	措袂加迷	措袂加迷	措袂/加迷	措袂? /加迷	措袂/加迷	措髮加眉
237	厚紙	沃速水	△△△	沃速水	沃速水	沃速水	沃速水	沃速水	沃速水	沃速水	沒速火
238	薄紙	沃蠻子	△△△	沃蠻子	沃蠻子	沃蠻子	沃蠻子	沃蠻子	沃蠻子	沃蠻子	沒蠻子
239	筆	粉地	フデ	粉地	粉地	粉地	粉地	粉地	粉地	粉地	粉地
240	墨	踈煤	スミ	踈煤	踈煤	疏煤	疏煤	踈煤	踈煤	踈煤	疏煤
241	扇	黃旗	アウギ	黃旗	黃旗	黃旗	黃旗	黃旗	黃旗	黃旗	黃旗
242	泥金扇	空措泥黃旗	コガネアウギ	空措泥黃旗	空指尼黃旗	空措泥/黃旗	空措泥黃旗	空措泥黃旗	空(牛皆)泥黃旗	空措泥/黃旗	空指泥黃旗
243	鑰匙	坑其	カギ	坑其	坑其	坑其	坑其	坑其	坑其	坑其	坑其
244	泥銅扇	法古黃旗	ハクアウギ	法古黃旗	法古黃旗	法古/黃旗	法古黃旗	法古黃旗	法古黃旗	法古/黃旗	法古黃旗
245	鎖	哥索利	クサリ	哥利/素	哥利素	哥利/素	哥利素	哥利/素	哥利/素	哥利/素	哥利素
246	船	浮泥	フネ	浮泥	浮泥	浮泥	浮泥	浮泥	浮泥	浮泥	浮泥
247	鑊	難皮	ナベ	難皮	難皮	難皮	難皮	難皮	難皮	難皮	難皮
248	針	快利/法利	△リ/ハリ	快利/法利	快利法利	快利/法利	快利法利	快利/法利	快利/法利	快利/法利	快利怯利
249	等子	發介俚	ハカリ	發介俚	發介俚	發介/俚	發介俚	發介俚	發介俚	發介俚	發介俚
250	簞	花鷄	ハウキ	花鷄	花鷄	花鷄	花鷄	花鷄	花鷄	花鷄	花鷄
251	小箱	法哥	ハコ	法哥	法哥	法哥	法哥	法哥	法哥	法哥	法哥
252	硯箱	孫助利法哥	スズリハコ	孫助利法哥	孫助利法哥	孫助利/發哥	孫助利發哥	孫助利法哥	孫助利法哥	孫助利法哥	孫助利法哥
253	鋸	拏剛擊利	ノコギリ	拏剛擊利	拏剛擊利	拿剛/繫利	拿剛繫利	拏剛擊利	拏剛擊利	拏剛擊利	拿剛繫利
254	酒盞	晒加藤計	サカヅキ	晒加藤計	曬加藤計	晒加/藤計	晒加藤計	晒加藤計	晒加藤計	晒加/藤計	曬加藤計
255	碟	晒賴/沙賴	サラ/サラ	晒賴/沙賴	曬賴沙賴	曬賴/沙賴	曬賴沙賴	晒賴/沙賴	晒賴/沙賴	晒賴/沙賴	曬賴沙賴
256	傘	隔落隔晒	カラカサ	隔落隔晒	隔落隔曬	隔落/隔曬	隔落隔曬	隔落隔晒	隔? 落隔? 晒	隔落隔晒	隔落隔曬
257	鏡	坑皆彌	カガミ	坑皆彌	坑皆彌	坑皆彌	坑皆彌	坑皆彌	坑皆彌	坑皆彌	坑皆珍
258	枕	麻骨賴/埋骨賴	マクラ/マクラ	麻骨賴/埋骨賴	麻骨賴埋骨賴	麻骨賴/埋骨賴	麻骨賴埋骨賴	麻骨賴/埋骨賴	麻骨賴/埋骨賴	麻骨賴/埋骨賴	麻骨賴埋骨賴

	項目	寄語訂正	解説案	東洋文庫本	国朝典故	日本図纂	籌海圖編	内閣文庫本	早大本	続説邪	得月叢書
259	蓆	不奴	△△	不奴	不奴	不奴	不奴	不奴	不奴	不奴	不奴
260	盤	何水鷄	オシキ	何水鷄	何水雞	何水/雞	何水雞	阿水雞	阿水雞	何水鷄	何水雞
261	銀硃	失祿挨措水	シロアカシ	失祿挨措水	失祿挨措水	失祿挨/措水	失祿挨措水	失祿挨措水	失祿挨措水	失祿挨/措水	失路挨措水
262	漆	烏論水	ウルシ	烏論水	烏論水	烏論/水	烏論/水	烏論水	烏論水	烏論水	烏論水
263	筋(筋)	法水	ハシ	法水	法水	法水	法水	法水	法水	法水	法水
264	香	宣哥	センカウ	宣哥	宣哥			宣哥	宣哥	××	宣哥
265	沉香	沉哥	デンカウ	沉哥	沉哥	沉哥	沉哥	沈哥	沉哥	沉哥	沈哥
266	麝香	射哥	ジャカウ	射哥	射哥	射哥	射哥	射哥	射哥	射哥	射哥
267	木香	木哥	モッカウ	木哥	水哥	木哥	木哥	木哥	木哥	木哥	水哥
268	酒瓶	哭筭昆皮	△△△△	哭筭昆皮	哭筭昆皮	哭筭/昆皮	哭筭昆皮	哭筭昆皮	哭筭昆皮	哭筭/昆皮	哭筭湿皮
269	碗	倭吉貼灣	オオキイチャワ ン	倭吉貼灣	倭吉貼灣	倭吉/貼灣	倭吉/貼灣	倭吉貼彎	倭吉貼灣	倭吉貼灣	倭吉貼灣
270	梯	課水飛計	コシヒキ	課水飛計	課水飛計	課水/飛計	課水飛計	課水飛計	課水飛計	課水飛計	課水非計
	【衣服類】										
271	衣服	乞麻俚	キモ△	乞麻俚	乞麻里	乞麻俚	乞麻俚	乞麻俚	乞麻俚	乞麻俚	乞麻里
272	靴	骨都	クツ	骨都	晝都	骨都	骨都	骨都	骨都	骨都	盖都
273	鞋	水托里/失其里	シ△レ/シキレ	水托俚/失其里	水托俚/失其里	水托俚/失其里	水托俚失其里	水托俚/失其里	水托俚/失其里	水托俚/失其里	水托俚失其里
274	箬帽	搖婆俚	△△△	搖婆俚	搖婆俚	搖婆/俚	搖婆俚	搖婆俚	搖婆俚	搖婆俚	搖婆俚
275	錦	歪帶	ワタ	歪帶	歪帶	歪帶	歪帶	歪帶	歪帶	歪帶	歪帶
276	羶衫	迷奴	ミノ	迷奴	迷奴	迷奴	迷奴	迷奴	迷奴	迷奴	迷奴
277	手巾	達昂个□	タノゴ□	達昂个	達昂个	達昂/个	達昂个	達昂个	達昂个	達昂个	達昂个
278	綿布	木綿	モメン	木綿	木綿	木綿	木綿	木綿	木綿	木×	木綿
279	夏布	奴奴綿	ノノメン	奴奴綿	奴奴綿	奴奴綿	奴奴綿	奴奴綿	奴奴綿	奴奴綿	奴奴綿
280	被	伏思麻	フスマ	伏思麻	壯思麻	伏思麻	伏思麻	伏思麻	伏思麻	伏思麻	伏思麻
	【飲食類】										
281	茶	鮮素	センサ	鮮素	詐素	鮮素	鮮素	鮮素	鮮素	鮮素	鮭素
282	酒	晒箕	サケ	晒箕	曬箕	曬箕	曬箕	晒箕	晒箕	晒箕	曬箕

	項目	寄語訂正	解説案	東洋文庫本	国朝典故	日本図纂	籌海圖編	内閣文庫本	早大本	続説邪	得月蓂叢書
283	白酒	明東晒箕	ミヅサケ	明東晒箕	明東曬箕	明東/曬箕	明東曬箕	明東晒箕	明東晒箕	門東/晒箕	明東曬箕
284	焼酒	隔辣晒箕	カラサケ	隔辣晒箕	隔辣曬箕	隔辣/曬箕	隔辣曬箕	隔辣晒箕	隔辣晒箕	隔辣/晒箕	隔辣曬箕
285	老酒	福祿晒箕	フルサケ	福祿晒箕	福祿曬箕	福祿/曬箕	福祿曬箕	福祿晒箕	福祿晒箕	福祿/晒箕	復陸曬箕
286	飯	蜜黍	メシ	蜜黍	蜜黍	蜜黍	蜜黍	蜜黍	蜜黍	蜜黍	蜜水
287	飲酒	晒加乃	サカナ	晒加乃	曬加乃	晒加/乃	晒加乃	晒加乃	晒加乃	晒加乃	晒加乃
288	吃飯	蜜黍阿羅俚	メシオ△リ	蜜黍阿羅俚	蜜黍何羅俚	蜜黍/阿羅__	蜜黍阿羅__	蜜黍阿羅俚	蜜黍阿羅俚	蜜××/羅俚	蜜黍何羅俚
289	塩	失河/收河	シオ/シオ	失河/收河	失河/收河	失河/收河	失河收河	失河/收河	失河/收河	失河/收河	失河收河
290	醬	弥沙	ミソ	弥沙	彌沙	彌沙	彌沙	弥沙	弥沙	弥沙	彌沙
291	米	科媚科媚	コメコメ	科媚科媚	科眉科眉	科眉/科眉	科眉科眉	科媚科媚	科媚科媚	科媚科媚	科媚科媚
292	油	挨蒲頼	アブラ	挨蒲頼	挨菴頼	挨蒲/頼	挨蒲頼	挨蒲頼	挨蒲頼	挨蒲頼	挨蒲頼
293	大麥	烏蒙崎	オオムギ	烏蒙崎	烏蒙崎	烏蒙/崎	烏蒙崎	烏蒙崎	烏蒙崎	烏蒙崎	烏蒙查
294	小麥	柯蒙崎	コムギ	柯蒙崎	柯蒙崎	柯蒙/崎	柯蒙崎	柯蒙崎	柯蒙崎	柯蒙崎	柯蒙查
295	穀	暮米/倭米	モミ/△ミ	暮米/倭米	暮米倭米	暮米/俚米	暮米倭米	暮米/倭米	暮米/倭米	暮米/倭米	暮米倭米
296	羹	水路	シル	水路	水路	水路	水路	水路	水路	水路	水路
297	荳	磨米	マメ	磨米	磨米	磨米	磨米	磨米	磨米	磨米	磨米
298	肉	恕恕	シシ	恕恕	恕恕	恕恕	恕恕	恕恕	恕恕	恕恕	恕恕
299	笋乾	大吉糯古	タケノコ	大吉糯古	大吉糯古	大吉/糯古	大吉糯古	大吉糯古	大吉糯古	大吉/糯古	__吉__古
300	醬瓜	可羅米糯	△△△△	可羅米糯	可羅米糯	可羅/米糯	可羅米糯	哥羅米糯	哥羅米糯	可羅/米糯	可羅米麩
	【花木類】										
301	杉	松計	スギ	松計	松計	松計	松計	松計	松計	松計	松計
302	檜	非那鷄	ヒノキ	去那雞	去那雞	去那/鷄	去那鷄	去那雞	去那雞	去那雞	去那鷄
303	松	埋止	マツ	埋止	埋止	埋止	埋止	埋止	埋止	埋止	埋止
304	梅子	面婆水	メボシ	面婆水	面婆水	面婆/水	面婆水	面婆子	面婆子	面婆水	面婆×
305	芥	愬辣水	カラシ	愬辣水	忽辣水	愬辣/水	愬辣水	愬辣水	愬辣水	愬辣水	忽辣水
306	菜	奈	ナ	奈	奈	奈	奈	奈	奈	奈	奈
307	瓜	烏里	ウリ	烏埋	烏里	烏埋	烏埋	烏埋	烏埋	烏埋	烏埋
308	麻	莫入骨水	△△△△	莫入骨水	莫入骨水	莫入/骨水	莫入骨水	莫又骨水	莫入骨水	莫入骨水	莫入骨水
309	茄子	乃沈皮	ナスビ	乃沈皮	乃泥×	乃沈/皮	乃沈皮	乃沈皮	乃沈皮	乃沈皮	乃洗皮

	項目	寄語訂正	解説案	東洋文庫本	国朝典故	日本図纂	籌海圖編	内閣文庫本	早大本	続説郭	得月蓂叢書
	【鳥獸類】										
310	牛	胡水	ウシ	胡水	胡水	胡水	胡水	胡水	胡水	胡水	胡水
311	狗	意奴	イヌ	意奴	意奴	意奴	意奴	意奴	意奴	意奴	意奴
312	猪	豕豕	シシ	豕豕	豕豕	豕豕	豕豕	豕豕	豕豕	豕豕	豕豕
313	雞	泥掇掇地/泥環多礼	ニワト△/ニワトリ	抓泥掇地/泥環多礼	抓泥掇地/泥还多礼	抓泥掇地/泥環多禮	抓泥掇地泥環多禮	抓泥掇地/泥環多禮	抓泥掇地/泥環多禮	抓泥掇地/泥環多禮	抓泥掇地泥環多俚
314	鵝	解/加	ガ/ガ	解/加	解加	解加	解加	解/加	解/加	解/加	解加
315	馬	烏馬	ウマ	烏馬	烏馬	烏馬	烏馬	烏馬	烏馬	烏馬	烏馬
316	魚	遊河	イオ	遊河	遊河	游河	游河	遊河	遊河	遊河	游和
317	蟹	揩泥	カニ	揩泥	揩泥	揩泥	揩泥	揩泥	揩泥	揩泥	指泥
318	蝨	失辣米	シラミ	失辣水	失辣水	失辣/水	失辣水	失辣水	失辣水	失辣水	失辣水
319	羊	羊其	ヤギ	羊其	羊其	羊其	羊其	羊其	羊其	羊其	揚其
320	鼠	眠助米	ネズミ	眠助米	服助來	眠助/米	眠助米	眠助米	眠助米	眠助米	服助來
	【数目類】										
321	一	非多子/非微咀多	ヒトツ/△△△△	丢多子/丢微咀多	丢多子丢微咀多	丢多子丢/微咀多	丢多子丢微咀多	丢多子/丢微咀多	丢多子/丢微咀多	丢多子/丢微咀多	丢多子丢微咀多
322	一箇	个利	コリ	个利	个利	个利	个利	个利	个利	个利	个利
323	二	扶達子/非咀多	フタツ/ヒタツ	扶達子/丢咀多	扶達子丢咀多	扶達子/丢咀多	扶達子丢咀多	扶達子/丢咀多	扶達子/丢咀多	扶達子/丢咀多	扶延子丢咀多
324	三	密子/倏咀多	ミツツ/△△△	密子/倏咀多	密子倏咀多	密子倏/咀多	密子倏咀多	密子/倏咀多	密子/倏? 咀多	密子/倏咀多	密子倏咀多
325	四	學子/摇摇做	ヨツツ/△ヨツ	學子/摇摇做	學子摇摇	學子摇/摇摇做	學子摇摇做	學子/摇摇做	學子/摇摇做	學子/摇摇做	學子摇摇做
326	五	意子子/难难多	イツツ/ナナツ	意子子/难难多	簞子子難難多	意子子/難難多	意子子難難多	意子子/难难多	意子子/难难多	意子子/难难多	簞子子難難多
327	六	後子	△ツ	後子	後子	後子	後子	後子	後子	後子	後子
328	七	乃乃子	ナナツ	乃乃子	乃乃子	乃乃子	乃乃子	乃乃子	乃乃子	乃乃子	乃乃子
329	八	效子	ヤウツ	效子	效子	效子	效子	效子	效子	×子	效子
330	九	个个乃子	ココノツ	个个乃子	个个乃子	个个/乃子	个个乃子	个个乃子	个个乃子	个个乃子	个个乃子

	項目	寄語訂正	解説案	東洋文庫本	国朝典故	日本図纂	籌海圖編	内閣文庫本	早大本	続説邪	得月蓂叢書
331	十	多	トオ	多	多	多	多	多	多	多	多
332	十一	多多非達子	トオトヒトツ	多多丟達子	多多丟達子	多多丟/達子	多多丟達子	多多去達子	多多丟達子	××/××	多多丟達子
333	五十	大	△	大	丈	大	大	大	大	大	大
334	百	法古	ヒヤク	法古	法古	法古	法古	法去	法古	法古	法古
335	千	借/一贯	△/△△	借/一贯	借一贯	借一贯	借一贯	借/一贯	借/一贯	借/一贯	借一贯
336	萬	慢亦	マン△	慢亦	慢亦	慢亦	慢亦	慢亦	慢亦	××	漫亦
	【通用類】										
337	有	挨路/何路	アル/オル	挨路/何路	挨路何路	挨路/迷路	挨路迷路	挨路/阿路	挨路/阿路	挨路/何路	挨路河路
338	無	乃	ナイ	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃
339	好	高高的/姚鎖盧	ココチ/ヨウソ ロ	高高的/姚鎖盧	高高的姚鎖盧	高高的/姚鎖盧	高高的姚鎖盧	高高的/姓鎖盧	高高的/姓鎖盧	高高的/姚鎖盧	高高的姚鎖奴
340	極好	明哥多	ミゴト	明哥多	明查多	明哥多	明哥多	明哥多	明哥多	明××	明查多
341	不好	由無奈	ヨウナイ	由無奈	由無奈	由無/乃	由無乃	由無奈	由無奈	由無奈	由無奈
342	大	加小思姑奈/ 何計	カ△スクナイ/ オオキ	加小思姑奈/ 何計	加小細姑奈何 計	加小思姑/ 計	加小思姑奈何 計	加小思姑奈/ 何計	加小思姑奈/ 何計	加小思姑/奈 何計	加小思姑奈何 計
343	小	發篩	ホソイ	發篩	發篩	發篩	發篩	發篩	發篩	發篩	發篩
344	多	△△/河河水	△△/オオン	快都/河河水	(上夾)都河二 水	快都河/河水	快都河/河水	快都/河河水	快都/河河水	快都/河河水	快都水河水
345	少	踈古乃水	スクナシ	踈古乃水	×古乃水	素古/乃水	素古乃水	踈古乃水	踈古乃水	踈古乃水	踈古乃水
346	遠	多俟	トオン	多俟	多俟	多挨	多俟	多俟	多俟	多俟	多挨
347	近	的介	チカイ	的个	的个	的个	的个	的个	的个	的个	的个
348	瘦	牙十大	ヤセタ	牙十大	牙十丈	牙十/大	牙十大	牙十大	牙十大	牙十大	牙十六
349	短	迷□加□	ミ□カ□	迷加	迷加	迷加	迷加	迷加	迷加	迷加	迷加
350	細相	快大	△△	快大	快大	快大	快大	快大	快大	快大	相快文
351	朽	骨篩路	クサル	骨篩路	骨篩路	骨篩/路	骨篩路	骨篩路	骨篩路	骨篩路	骨篩路
352	厚	挨卒水	アツシ	挨卒水	挨卒水	挨卒/水	挨卒水	挨卒水	挨卒水	挨卒水	挨卒水
353	薄	温卒水	ウスシ	温卒水	温卒水	温卒/水	温卒水	温卒水	温卒水	温卒水	温卒水
354	歪貨	不高/歪頼水	△△/ワロシ	不高/歪頼水	不高歪頼水	不高歪/頼水	不高歪頼水	不高/歪頼水	不高/歪頼水	不高/歪頼水	不高歪頼水

	項目	寄語訂正	解説案	東洋文庫本	国朝典故	日本図纂	籌海圖編	内閣文庫本	早大本	続説郭	得月蓂叢書
355	不是	松田乃係	サウデナイ	松田乃係	松田乃係	松田/乃係	松田乃係	松田乃係	松田乃係	松田/乃係	松田乃係
356	破	羊鉞里里	ヤブルル	羊鉞里里	羊鉞里__	羊鉞/里里	羊鉞里里	羊鉞里里	羊鉞里里	羊鉞/里里	羊鉞里里
357	要紧	馬多拿	マツナ	馬多合手	馬多合手	馬多/合子	馬多合子	馬多合手	馬多合手	馬多/合子	為多合乎
358	緩	漫大漫大	マダマダ	漫大漫大	漫大漫大	慢大/慢大	慢大慢大	漫大漫大	漫大漫大	漫大漫大	慢大____
359	無用	設計	△△	設計	設計	設計	設計	設計	設計	設計	設計
360	多有	何何水	オオシ	何何水	向何水	何何/水	何何水	何何水	何何水	何何×	向河水
361	未	慢大	マダ	慢大	漫大	慢大	慢大	慢大	慢大	慢大	大慢
362	香	干牌水	カンバシ	干牌水	千牌水	干牌/水	干牌水	干牌水	干牌水	干牌水	千牌水
363	臭	骨篩水	クサシ	骨篩水	骨篩水	骨篩/水	骨篩水	骨篩水	骨篩水	骨篩水	骨篩水

